

STOCKHOLM



鉄鎖の次王の恋

written by hikali

1. バーラルの戦い（前編）

——イオは女の子なのに泣かないから、つよい子だね？

そうやってあたしをあっという間に口説いたその青年は、自分をヴァンダル族の次王だと名乗って無防備な背中をみせ、泣きはらして放心していたあたしの腕をひいて連れまわし、帯剣を許して側近として扱うようになる。

——あたしに？ できる？ かな。

——できなければ、いつでもやめろ、イオ。無理強いはしない、追い出しもしない、好きなだけいつまでもそこにいればいい。

放り投げるように言う。

その剣を、宙に投げた短剣を受けとると、ちのりのにおいでずしりとした。

それがこの青年との馴初め。

あたしはその短剣を抜き、背に突き刺すようにして、広い背中を追いかけるようになる。あたしが文字を書けると知ると次王は嬉々として、すぐさま高価な筆記具を揃えて与え、自分の言葉をそっくりそのまま記録させようとした。

——おれが王になるならばその言葉を、ジャングルは知らなければならない。

蛮族の王にしては珍しく、読み書きに通じている次王は物知りで、あたしを腹心で学友であるかのように扱って、議論を好んで吹っ掛けた。

勇猛というよりは狂気にちかい部族を率いるこの青年を、ボルニアの諸族長たちは族名をつけずに、単に次王と呼ぶ。

ヴァンダルの戦士たちの王。

凄惨な抗争を乗り越えて、ボルニア全土の兵団を率いる次の王と諸族の長たちが青年を認めるのは、怒り狂ったヴァンダル族を敵にしてまで、ほかの王を立てようとする者がいないからにすぎない。青年のほんとうの価値を知るのはごく僅かな側近たちに限られ、側近たちのあいだの信奉に近いものさえも、次王への忠誠と呼んでよいのか、ほんとはそんなことは誰にも分からないのだ。

あたしを含めて直属の精鋭たちの間にヴァンダル族の者はわずかしかなく、実際のところ次王の号令に、あの狂気の部族が従うかは定かじゃない。それでも側近たちと、あの思いあがったお利口なるくでなしは、自分たちが動けば世界は容易に降伏すると信じきっていた。

「イオ、エストの騎竜兵団の動きはどうか。斥候からの伝文はまだか」

顔を上げ、その広い背をみる。大声で叫ぶ。

「そろそろ、来る頃かと」

疾走する大型獣脚竜の鞍から腰を浮かせ、右手を空に掲げると、短い赤毛が風になびく。上空に視線を向けると、寒空の低い雨雲の間に翼竜たちの姿がちらと見えた。

北方の豊かな湖水に抱かれるエストは、ジャングルの蛮族であるボルニアの兵と竜には、すこしさむい。それでも血塗られた牙に飲み込まれた弱小国——水郷ザブンテからの行軍は迅速かつ長距離とあって、疾走に躍動する竜の背は湯気をあげていた。

（竜が息をあげるなんて）

はっとは荒い鼻息にイオはびくりとする。

たしかに次王が騎乗する竜は、特別に優れた竜というわけではない。

そもそも戦闘的で凶暴な肉食獣脚竜は、戦場毎の消耗と損傷が激しいし、とくにボルニアの兵団は竜を消耗品のように乗り捨てられることで知られる。

ボルニアを巨大な侵略国家にのしあげた『鉄鎖操竜法』は、初歩者の騎乗を容易にすることに特徴があ

り、慣れない竜と騎竜兵であっても、騎乗者の意のままに竜を操るのに適しているからだ。狂戦士たちの王ともなれば、騎乗する竜の頭や二頭の損傷など気にも止めないだろうし、次王の気性からしても竜の扱いが荒いことぐらいは、容易に想像できる。

竜を乗り捨てることは日常。

それでも代わりに用意される竜はどれも大きく、若いものが選ばれ、それは鉄鎖兵団の竜の中では優れた部類に入るはずだった。

「イオ、どう思う？ アイギスの連中は籠城か、それとも会戦か。その……、」

「聖楯騎竜兵団」

この青年は覚えようとしなないものをまったく覚えなない。

あたしは態のよいメモ紙か、覚え書きだ。

「籠城戦はやっかいです、湖都アイギスまでの間によく知られた大城塞があるのです、籠もるならそこでしょう。それにアイギスは湖上の群島からなる、難攻不落の要害で、エストの重装騎士団は諦めが悪いんです」

次王は不機嫌に鼻を鳴らし、傲慢な鋭い視線でイオを射抜いた。

「ならば、会戦にしよう。アイギスまでの間に一戦したい。完膚なきまでに叩きのめす。いいな、それで（会戦にしよう、って……？）

質問を投げかける間もなく、次王は頑強な背中を見せる。

「全軍ただちに全速前進、第2軍は全騎われに続け、少しも遅れるな！ イオ、聞こえたか！ 信号弾だ！

青色三発、軍旗を掲げよ！ 王旗をはためかせろ！」

「ま、まだ、斥候からの連絡が……」

「イオ、二度も言わずな、信号弾をあげろ！」

すぐさま甲高い笛の音が鳴り響き、次王の周囲で紅い軍旗が翻る。

有翼の大型獣脚竜を象ったヴァンダルの旗で、王旗というからにはそれは「率いる第2軍」を指す旗ではなく、「率いる王」を指す旗なのだろう。あたしは迅速に動く側近たちに急かされるように、信号弾の筒をにび色の空へと向け、青色を込めた。

（青色三発?! 全速襲歩の合図じゃない?!）

襲歩命令は、いわば突撃命令である。

敵陣を急襲するならともかく、対陣もする前から下す命令ではない。そもそもエストの騎士団が堅固な城塞に籠もれば、襲撃戦速の襲歩はほとんど意味がないし、ザブンテを蹂躪した次王の第2軍の名はアイギスにも轟いているはずだった。

それでもためらいは感じなかつた。

あたしにはその青年がどうなろうと根本的には興味はなかつたし、ヴァンダルの次王がエスト攻略に失敗すれば、お役ご免とばかりに次の次王が立てられるだけだから。

（王にふさわしいと証明したい?）

失敗したければ失敗すればいい。

次王の命令は単純明快で誤解のしようがない。

その意図がどうであれ、配下の騎竜兵たちに実行不可能な難解な命令をしている訳ではないし、その結果がどうなったとしても、そのすべての責は王が負い、配下の兵が咎められることはない。

発火すると、三発が空に昇る。

後戻りがまったくできなくなる。

（襲歩突撃……、こんなばかげた、）

イオは周囲を見渡して、あらゆる部族からやってきた精鋭たちが、それに従っていることに驚きをもつ。大地を地鳴りさせる大型獣脚竜の一斉突撃は、確かに迫力は満点で、急襲は確かにアイギスの重装兵団の不意を突く。あわてて言う。

「数が、ついてきている者はわずかです！」

次王は振り返ってふっと笑った。

「貴公は、ザブンテの渡河作戦には帯同していなかったのだな。かの国のスカイ河防衛線を破った戦いだ」

「え？ ええ、まあ。帯剣も許されていませんでしたし、」

「スカイ河の作戦は成功した。それでも信じられないというのだな？」

（き、貴公？）

「いえ、めっそももない」

「イオ、説明が欲しければいくらでもしよう。王のことはいくらでも伝えられるべきだ。イオは王のことは書き記すことができる。それも戦場でだ。イオの文字は王命だ。おれはそんな軍令ではなく、歴史を書いてほしいのだ、わかるか、イオ」

脂汗がにじむ。

「そ。それほどの力は、わたしにはありません……」

次王は怖い眼でにらんだ。

「おまえを決してバカにするな、イオ。それは許さん。おれが選んだ。何の不满がある？ 世界を制することができると思えば、おれたちはジャングルの肥やしとなるんだ、イオ。いのちを預ける相手を簡単に選ぶと思うか？」

「いえ」

これから起こるバーラルの会戦は確かに著名で、のちにボルニアの次王という化け物じみた戦上手がこの世に存在していることを、誰もが思い知ることになる。

スカイの渡河戦が前哨戦ならば、アイギス攻防は誰の目にも明らかな証明。

信じられなかったことが誤謬だということであれば、いくらでも謗りを受けよう。

シドを率いた死神リニーの砲兵兵団との大決戦をことごとく打ち破る鮮やかな手並みを、死神が「化け物」と称する鉄鎖の次王の腕前を、まさかこのとき、この目で見ることになるとは、信じることはできなかったのだ。

それを誤謬というのだろうか？

アイギスの攻防戦において、ボルニアの次代の王はヴァンダルの青年に決した。

数週間に及ぶ長い長い戦いの結末が、ヴァンダルの狂気で化粧した新生ボルニアの誕生だった。

古代の英知を脈々と受け継ぐエストを掌握したことで、ボルニアは南の産業交易強国シドと戦うだけの資格を得たのであるが、そのシドを率いる死神リニーでさえ、この次王との戦いは避けるようになる。

シドが弱いわけでも、国内がまとまらなかったわけでもない。

それどころかボルニアに飲まれた国々の残存兵力を結集し、鼓舞し、シド建国の女王の再来とたたえられる天才的な傑物が、全指揮権を掌握していたのである。シドにとって致命的な、絶大なカリスマを有する戦上手がボルニアに誕生したのは、だれも想定していなかった奇跡だ。

鉄鎖の次王と生涯呼ばれることになるこの青年は、とても楽しそうに、鼻歌まじりに、古代語の戦術書を読んだ。そこには砲兵の戦術が書いてあったし、リニーが知識で先に行くのを防いでいたし、むしろ次王がシドを率いた方が強かったのではと思う。

この鬼神を中心に新生ボルニアは誕生し、そして度量の広い次王の配下を目指して、ボルニア全土の諸部族から癖のありすぎる傑物が集結する。

それはエストを絶望の底に叩き落とすことになるが、次王がもっとも欲しかったところか恋をしていた、エストのアテナイス姫でさえ、ジャングルから湧き上がってくる人材の数々に絶望したのだ。

アイギス攻防戦はそういうものだった。

だれもがボルニアの真の力を発見し、震えあがった戦いだったのだ。

北方の湖都周辺にしては珍しく雷鳴が響く。

驟雨になると分かっていたのではあるが、次王は意にも介せず聞く。

「150騎はついてきているか？ それだけあれば十分だ。エスト兵は何千騎あるか」

「2000騎はあるかと」

心配事があれば、それは伝令で飛ぶ翼竜の翼を湿らせないかという事だったのだが、次王は鼻で笑う。

「ならば攻めよう。わが軍は精強である」

正確には、次王のじょうずであるのだが、それは率いる精鋭軍がなければ達しえぬ上手だった。上空をみると、雲間に斥候の伝文が届き始めていた。それに手を伸ばすようにして、甲高い笛の音を響かせる。群がるように数十の翼竜たちが急降下をはじめ、その足首に結いつけられた伝文を掴み取っていく。

「ベロアは左翼です。山岳を遠ざかっていると」

「ベロア？」

あわてて補足する。

「聖楯の遊撃です」

「韋駄天ベロアか。背後を突くつもりか？ スカイは渡ったか？」

「いえ、まだ」

次王は、顎に手を当て黙考する。

「間に合わんな。足場も悪くなる。こちらの背後もつけないし、後方にも回れない。次！」

次々と急降下する翼竜の伝文を開き、それを大声で次王に伝えていく。そのたびに次王は短い判断を下し、全体の作戦を緻密に立てていく。その手並みには息をのむほどで、読み上げる喉が涸れていくのさえ、遅々として進まない腹立たしいもののように思えた。

全てを読み終えると、次王はひとりごちた。

「勝ったな」

(勝った!?)

2000騎の精鋭兵団さえないものとするよう。息も絶え絶えに首を上げると、不敵な笑みに衝突した。次王は軽く肩をまわし、翼竜とその先にいる斥候たちに感謝のことばを呟く。

「イオ、紫色一発、信号弾を上げよ」

静かな言葉にためらった。

全軍停止。

意図は明らかで、作戦伝達後に一斉突撃が始まる。

「ま、まだ」

「斥候はやってきた。これ以上の何を望む？ 敵の失態か？ 失態に勝ちを重ねるのが正しいのか？ イオ。おれはお目こぼしを貰わないと、勝てないのか？」

「い、いえ」

「ならば撃て。この戦は勝った。これからそれを全軍に伝える」

正確に言えば、次王の狂気じみた全軍襲歩についてきているのは150騎ほどで、その程度では2000騎のエスト兵を破るのは不十分なはずだった。

いくら精鋭と言っても、わずかに150騎。

これがのちの、次王の150将と呼ばれる無敵の近衛兵団の中核になるとは、さすがに分からなかったことに、どのような許しを請うたらいいのだろう。

「紫色発弾！」

反射的に、砲身に信号弾を込め、そこに火をつける。

紫色の煙が空高く昇っていき、次王は竜をとめた。

息を切らした竜たちが次王のちかくに集結し始め、アイギスに背を向け丘の上からそれを見下ろした次王は、くっくと笑った。

「また、おまえたちか、懲りない奴らだ」

次王はするすると竜を降り、大地に立って、集結した者たちをつぶさに見た。

「ヴァンダルのウルギリス。お前はおとりだ。ウルギリス、勘違いするな、おまえは重要で、きわめて危険だ。それで、最も危険な任務をおまえに課す。バーラルの城塞の背後を突くふりをしろ。そして生きて帰れ。それ以外は一切許さん」

「はっ！」

「おまえは3騎だ。ヴァンダルの3騎を連れよ。それ以上は許さん。3騎で200騎を貶めよ。やり方は任す。わかっているはずだ。城塞には200騎は残る。それがお前の相手だ。おびき出せ」

「はっ！」

満足そうに次王は集結しつつある150騎の間を歩き、充分に戦術を練っていく。

「ニジェール！ お前はロゴス族だったな」

「はい」

「では、ヴァンダルの残存を率いて、左翼を任す。遊撃だ。ロゴスの戦士を加えれば20騎にはなるか？」

「おそらく」

「伝令を密に飛ばす。それに従って自在に戦え。おまえが左翼の将だ。スカイを渡河して背後にまわれ」

「はい」

おそらくスカイ渡河戦でそれぞれの将の適性を見抜いているのだろう、次王は事細かにそれぞれの役割を告げ、たった150騎で数千騎のバーラルの野に布陣するであろうエスト兵への対策を命じていく。そして、至上命令は死ぬことは許さないという事だった。

そもそも、騎竜兵同士の戦いというのは、互いに竜を攻めることになるので、騎乗する騎竜兵が死ぬという事は、なかなかありえない。

それを覆すのは、シドの砲兵兵団による狙撃戦術であるのだが、アイギスには砲兵はないし、そもそもその戦術が可能だったのは、死神リニーの砲兵兵団が天才的なライフル使いを主君にしていたからだ。

しかし、それさえも、この次王のもとに完全に破られる。

次王の機動戦術は射程に入る前からの、迅速な突進により、射手の狙いを定める時間を与えない戦術だった。そもそも騎竜兵は竜の背に乗るので、射撃陣を乱せば狙撃される可能性は極めて低くなる。

次王と死神の戦いは、そのような細かな戦術のレベルにもちろんとどまらない。

次王の大転換が、死神を敗者に追い込むのである。

それはまた別の話であるし、今はそれを語るまい。

ボルニアには、ぜいたくすぎるほど充分な王であったと、それだけ話せば十分な気がする。そして、それはアイギス攻防戦で証明される。

2. バーラルの戦い（中編）

長いながい攻防は、驟雨から始まった。

とどろく雷鳴が全軍襲歩の号令となり、まったく効かない視界の中、十分に冷やされた大型獣脚竜たちの一斉突撃が始まる。その先に、アイギスの戦士たちがいるのかさえ分からない。いたとしてもわずか150騎で、数千騎を擁して「諦めることのない鉄壁」と名高いエストの重装騎士団のまっただ中に突っ込むことになる。

目の前に広がるバーラルの野は、左に大スカイ河、右に丘陵地帯を抱えて左右に狭い。

その中で次王がとった戦術は、丘陵への大胆な迂回だった。

（左翼に兵を割り、右翼は自らが率いる。中央は？）

言わなくても中央に兵がないことは明らかなのだが、そこを破られたからと言って損害を受ける兵はない。

寡兵であることを逆手にとった機動戦術。

150騎はすべて遊撃なのだ。

しきりに挑発して、エスト兵の陣に混乱をもたらす。そのための兵。

そこまでは美しい。みごとな奇襲作戦と言えるかもしれない。

対陣の様子を大要塞のエスト兵は見ているはずだし、まさかこの寡兵で突撃を仕掛けてくるとは思えないから、不意はついている。おそらくエストは全軍を野に展開し、万全の布陣で迎え撃つはずだ。もしかしたら、中央に伏兵があると警戒ぐらいはしてくれるかもしれない。

しかし確認するまでもなく、中央に兵はない。

次王の右翼は丘陵にさしかかり、狭い街道を最大戦速で疾走していく。雲よりも早く、快速の伝令の翼よりも速い。さすがに次王の最大戦速に付き従った騎竜兵たち、いや、次王の150将である。雷鳴がバーラルの野を揺らす。

十分な奇襲、背後に回るとはほぼ確実に、中央に分厚い陣があれば教科書通りの包囲殲滅戦が完成する。

しかし包囲に成功しても150騎では、

（間違いなく各個撃破される……、まさか！）

その気付きはあまりにも恐ろしくて、自分はあり得ない希望にすがっているのではないかと疑う。このお利口でろくでなしの戦上手はもしかしたらちゃんと、中央の主力ぐらいは用意しているのではないか。それは突拍子もない思いつきだったし、味方に伏兵がないことは分かっている。

「イオ、信号弾を用意しておけ。青色三発。……その前に、赤色一発だ」

「は、はい」

全軍突撃は既に行っている。青色の前の赤色一発は、

（そ、それは禁忌じゃないか！）

鉄鎖兵団において赤色の信号弾は、王の居場所を全軍に知らせる信号。このたった150騎を率いる鉄鎖の次王はその寡兵の居場所を、対陣する数千騎の重装騎士団に知らせようとしているのだ。

頭がぐるぐるとまわり、正常な判断ができなくなる。

次王は撃つのだろう。

あたしが止めようとしても、自らの携帯する銃を空に向けて撃つだろうし、それに竜の背は躍動をしすぎていて、血塗られた短剣は背には届かない。

王たるものであると、証明したいのは分かる。

（それが、このバーラルで敗戦する結果になってもか！）

ほとんど勝利が不可能であることは分かりきっていた。

敗戦はボルニアを壮絶な混乱に叩き落とし、不毛なジャングルの勢力争いがボルニアをジャングルのみじめな蛮族たちの、内紛だらけの劣等国に貶めるのだ。そんなリスクを誰がとることができるのだろう。

——それが王だ、イオ。

そんな声が聞こえた気がして、はっと顔を上げる。

その突き刺したい背中を凝視して、傲慢な表情にその覚悟ぐらいはできていることを悟る。次王はいつだったかさえ思い出せない過去に言った。

——もしおまえが、おれを王にふさわしくないと思えば、即座に刺せ。

許された帯剣はそのような意味であるし、泣き崩れたあたしを支えていたのは、この王の言葉、いや、次王の言葉だった。

——イオだけに許す。おまえはその剣でおれの背中を刺すためだけに存在する。だから、おれの背中を守れ、ほかの誰にも許可しない。その剣はおれを守り、おれを刺すために存在する。おまえはおれを刺すだけの動機がある。おれを殺せる特権を、おまえは手放したくないはずだ。おまえ以外の刺そうとするやつらを排除しろ。おれは、そういうやつしか信じない。

イオ、わかるか？

それはたしかにあたしの胸には響いたし、この青年がもしかしたら話が分かる奴なのかもしれないと思ったことは確かだ。しかし、この青年をとりまく状況は複雑を極め、なぜこのような特異な人物が、順調に王への階段を登っているのかが、考えれば考えるほどわからなくなってくる。

天才という言葉が許されるのであれば、それに甘んじたくなる。

それよりももっと適切な言葉があることに、後になって気付いた。

おにがみ、鬼神。

化け物と呼ぶ死神リニーの評は適切であるし、北方大陸で無敵を誇ったその縦横無尽ぶりを表す言葉がほかにあるとは、なかなか考えにくい。あらゆるものを蹂躪する天才的な軍事力、壮大な構想力による大転進、ボルニアを大官僚国に仕上げた内政力。

もちろん、ボルニアには次王を支える稀代の天才たちが、群雲のように登場した。

しかしその登場さえ、次王がついた杖の一撃により地面から創造された人々のように感じられて仕方ない。

(この次王は、中央の軍を創造して見せるのだろうか)

そう考えるのは常軌を逸していたし、正確に言えばそれはジャングルより湧き出でてくるのだ。ボルニアには優秀な兵がいる。そしてその軍団は王たるものが、大地を激しく叩けば、魔法のように湧き出てくる。

(おにがみの魔法……)

そんなものは誰も信じていなかったし、いまでさえそれは信じがたい。

しがし、バーラルは驟雨に濡れ、たちどころに足場を悪くしていく。跳ね上がる泥が次王の味方となり、降りしきる豪雨がすべてを隠していた。

——貴公は、ボルニアの強さをなんだと思う。

とうとつに思い出す。

——いえ……。わたしには分かりません。

苦々しい回想、いま思うとその言葉は鉄鎖の次王のすべてを語っていた。

——分からぬか。貴公はボルニアの中枢に席を得て間がない。であれば、分からんことも無理がない。では教えよう、それは無尽蔵であるということだ。ジャングルは見通しがきかず、どのようなものがあるかさえ分からない。しかし、おれは確信している、ボルニアは無尽蔵であると。その者たちを集結させる

ためには、どこからでも見える明らかな輝きが必要だ。ただ必要なのはそれだけなんだ。

それが無謀な勝利だというのであれば、完全に間違っている。

——それに足りないと思えば刺せ、イオ。おまえは、このボルニアの王を選ぶだけの資格を得ているのだ。足りなければ、殺せ。殺してくれ。

それは叫ぶようであり、忠誠を尽くすふりをするには十分な理由だった。

しかし、このろくでなしはとんでもない嘘つきで、それは骨身に沁みて分かっていた。

現王の暗殺を大胆にも試みていたあたしは、この青年に決行直前に手首をつかまれ、屈服させられた。王の暗殺という大罪を前に青年はほとんど無関心で、きれいな手際であつという間に凶器を奪うと、すぐに手を離れた。

——女。度胸だけは認めてやろう。しかし、いま王を殺されると、おれはちょっと困る。ヴァンダルの次王だ、名を覚えてもらおう。ジャングルには無数の次王がいる、その中で抜け出した功績を上げるまで、今の王には生きてほしい。わかるか？

頷くことは困難だったが、繊細でありながら鋭いまなざしが、釘付けにした。

——王は、おれが望むタイミングで死ぬ。おまえがそれを早めたい理由はなんだ？

あたしは涙ながらに、王が父にした仕打ちを訴えた。小賢しい陰謀に絡み取られて死罪に追い詰められ、処刑されたこと。部族は冷遇され、耐え難いまでの侮辱を受け続けたこと。あらゆる例祭が取り上げられ、部族をなし崩し的に解体されたこと。家族と会う事さえ禁じられ、部族は事実上なくなったと。

次王はそれを冷静に聞き、なにかを考えた。

——おまえは、勘違いをしている。それをしたのは現王ではない。

次王はゆっくりと息をする。

——それをしたのは、おれだ。おれがおまえの父を処刑し、部族を解体した。おまえが刺すべき相手はおれで、いますぐでも、その刃でおれを殺してもいい。それぐらいのことをおれはしたし、償えるものであるとは思ってない。

このろくでなしは平気で嘘をつく。

それでもあたしが、何か月にも渡った暗殺計画を放棄するには十分で、次王は肩に手をおいてゆっくりと聞いた。

——名を聞こう。

それからのあたしは、次王の背中を狙う暗殺者兼側近で、父の率いた部族は書の部族として著名であった。だからといって、やすやすと絡み取られたとは思ってはいない。その殺そうとした短剣は今でもわたしの手元にあるし、それを次王の背に突き刺すことについては、非公式にはあるが、許可されている。

次王の息の根を止めるのはあたし。

それを次王は、王たる証明をし続けることで逃れることができる。

「イオ！ 左翼に伝令を飛ばせ！ やつらの動きがやけに鈍い。命じていた渡河の知らせが来ない。伏兵がある。こちらはスカイを渡ったな。ニジェールの快速をみようじゃないか。中央に切り込ませる。河岸を走らせる」

つぎつぎと飛ばされる指令に、あわてて伝令文にペンを走らせる。

雨粒ににじむのも気にせず、カリカリと羊皮紙に刻んでいく。

笛を吹くと、上空に待機していた翼竜が先を争うように降下する。その一つの足首に伝令を結び、翼を叩くと雷雨の空に舞い上がった。

「左翼、飛びました」

「では右翼も飛ばう。指揮をする」

(見せてもらおうじゃないか)

笛を吹いて、右翼の伝令の翼竜を呼ぶ。群がるように翼竜が急降下を開始し、それだけでも次王の居場所は明らかであるように思えた。

(そもそも赤色弾の意味はないのか)

激しい驟雨は世界を隔絶するようで、それでもこのおにがみは、雷さえも自らの味方にするようにしか思えなかった。伝令を密に飛ばすボルニア最強の第2軍と、機動戦を戦ったことのないエストの重装騎士団、それは勝負がつきすぎていた。

ほかに圧倒的な差があるとすれば、数。

次王の機動戦術は少数精鋭の、次王の把握しつくせる数の兵団でなければ機能しない。巧みな戦術で敵陣をかき乱しても、物量に潰される。無敵の遊撃兵団があっても戦場を制圧することは不可能だし、敵兵団の殲滅に必要な中央の軍を調達できなければ、遊撃兵団の意味は皆無となる。

その弱点をことごとくついてきたのはシドの砲兵兵団であり、死闘を繰り広げた死神リニーの指揮下にある敗残のザブンテ兵を主軸とする混成部隊であるが、序盤戦で大敗を喫したりリニーは大反攻を画策し、両雄の対決を避けるようになるのである。

リニーは次王の機動戦を理解し、それを周囲から無力化していく。

それこそボルニアが恐れていた作戦ではあるのであるが、この対決は次王の鬼神ぶりを証明するだけで終わる。

それはいい。

そんな先の話はいい。

アイギス攻防に比べれば、他愛のない話だった気さえする。

驟雨と泥土にまみれたバーラルの野で繰り広げられた一大決戦は、次王に率いられた新生ボルニアの強さを大陸中に思い知らせた戦いになる。それはエストのアテナイス妃を絶望させた強さであるし、エストを呑み込んで初めてボルニアは列強となったのだ。

「叩くぞ、イオ。先鋒が接敵した」

大型獣脚竜の咆哮がいくつも響き、鉄鎖を聖楯に打ちつける壮絶な金属音が響き始める。

ついに始まる。

「さ、左翼は」

「左翼には20騎を持たせた。ヴァンダルとロゴスの騎竜兵だ。ニジュールなら、中央を食い破れる。伏兵も無力化した」

驟雨の中で次王の遊撃兵団は一糸乱れぬ統率を見せ、最大戦速で敵陣を薄い地点を突破していく。あたしは鞍にしがみつきのながら、周囲を駆け抜けていく聖楯の騎竜兵たちを横目に見ていく。次王は大剣を抜き、精鋭と思われるエスト兵と切り結んでいく。竜の躍動する上顎の動きに合わせてタイミングを取り、背丈ほどもある刃を叩きつける。

みると、周囲の騎竜兵たちも同じように、あるものは鉄鎖を投げつけながら、あるものは大弓を射りながら、至近にある騎竜兵を落としていく。

血が、溢れるような血吹雪があたしの顔にかかり、それはしごくおそろしいことのように思い、ただ震えた。

(……地獄だ)

戦場は初めてだった。

次王に従う精鋭はそれをもろともせず、ただ殺戮を繰り返しながら奔り抜けた。

無数の絶叫と、切り結ぶ金属音が聞こえた。

それは永遠に思えたかもしれない。

もしかすると、わずかな時間だったのかもしれない。

降りしきる驟雨の壁が薄まっていき、目の前のエスト兵の陣に切れ目が見えた。

(と、突破した?!)

周囲を見る限り次王の兵団の損傷はわずかで、全軍突撃が開始された時とほとんど変わらない数の遊撃兵が次王の周囲で荒い息をしていた。

しかし、その前に大胆不敵にも一騎の騎竜兵が姿を現す。

「ほう、聖楯の左翼陣を食い破るとは。貴公は鉄鎖の次王と見た。これがボルニア第2軍の精鋭か。なるほど褒めてやる、蛮族の王よ」

次王は鼻で笑う。

「なにがおかしい！ 雨は止む。全貌が見えれば、おぬしらが寡兵であることが誰の眼にも明らかになる。どれだけある？ 1000騎か？ それではエストは破れない！」

次王は歩速を落とし、大剣を鞘に納める。

「名のある将とみた。名を聞こう」

エストの騎士は鼻白み、わずかに震えた。

「聖楯騎竜兵団、一番隊筆頭、エステバン！」

「いい名だ。次王に剣を向けるか。殺戮を命じろというか！」

「おまえは状況が分かっていない。殺戮を命じるのは、こちらの方だ！」

不敵な笑みを浮かべ、次王はベルトに挟んであった短銃を抜いた。

「イオ、青色三発、弾を込めろ！」

次王は短銃を空に向け、小雨になりつつある鈍色の空に向けた。

発弾。

銃声が響き、赤色弾が空高く昇っていく。

「ばかな！」

「イオ、早くしろ！」

最大戦速で信号弾を込め、それを三発空に放つ。

バーラルの野に、大咆哮が響いた。

その声の主の方角をみると、ジャングルから湧いた次王の第2軍の中央の部隊が、襲歩突撃を開始している姿が見えた。

「だ、第2軍？ 本軍がきたの?!」

「ちょっと遅いと思うがな」

次王はすばやく右翼に背後からの挟撃を命じ、さんざんに遊撃兵に攪乱されたエストの陣は乱れつくして、第2軍の一斉突撃に飲まれようとしていた。次王は、遅れて到着する第2軍の到着時刻を正確に読んでいたのだ。

次王は息をのんで叫んだ。

「殺戮しろ！ 皆殺しだ！」

右翼で大音量のラッパが鳴り響く。

「エステバンとやら、また再びどこぞかの戦場で相まみえよう、それまで勝負はお預けだ。ヴァンダルの次王がこの勝負預かった。屈強の兵と、この次王を貶める作戦を携えてくるがいい！」

鉄鎖を打ち鳴らすと、血に飢えた次王の竜が大咆哮をする。

呆然とする重装騎士団をしり目に、遊撃部隊の全軍突撃が始まった。

バーラルの、いやアイギスの勝敗は、事実上、すでに決していた。

3. パーラルの戦い（後編）

次王の機動戦は、確かにアイギスに籠る重装騎士団をおびき出し、会戦のただ一撃により、それを壊滅へと導いた。

戦場には第2軍を構成する色彩豊かな旗がはためき、集結したジャングルの部族が白銀の横列を飲み込み、守備陣は奔流に引き裂かれる麻布のように、武骨な大型獣脚竜の大顎に食い破られていくのだ。

ジャングルからやってきた、誰も見たことのない極彩色の軍旗たち。

それがまるで待ちきれない先祖代々の祭りであるかのように、雨上りの戦場に躍りはじめていた。

めだつのはヴァンダルの軍旗で、歴戦の血飛沫で染まった濃紅の軍旗は、躍動するというよりは新たな血に飢えている。つづく部族はイオにもなじみのある軍旗であったが、イオにはその紫紺の旗の部族が、なぜそれほど兵団を次王の軍に割いているのか、全く見当もつかなかった。

（リュディア族が兵を出してる？）

そもそもリュディア族は商業に通じた部族で、戦で手柄を立てる部族ではない。

ヴァンダルに続くのは、リュディア。そんな声にさえ聞こえてくる異様な光景のなぞはじきに解けるが、目の前に展開するリュディアの紫紺の部族旗の数は、それほどまでに戦場を圧倒して充分だった。

イオの戸惑いをよそに次王は、遊撃部隊をもう既に戦場となっていない丘の上へと布陣させ、部隊の互いの無事をたたえあう。

目下では第2軍が最後のとどめを刺している最中であり、次王はそれを涼しげに眺めつつ、遊撃兵と談笑を重ねている。それは一見不謹慎な態度であるかのように思えたが、遊撃兵たちは既に役目を終えているのである。

次王が丘上に布陣したのをみて、左翼後方でこぼれる敵兵をしとめていた軽黄の旗をはためかせる部族が、隊列を整然とさせて丘へと登ってくる。それに気付いた次王は、気安く労う。

「ご苦労だったな」

「はい、もはや戦況は決まりました。わが部族は本来の仕事に戻ります」

「いそいでくれ、少し遅かったぐらいだ。カウノスの仕事はよく心得ている。時間はない、許せ。貴公たちの仕事にこのアイギス攻防の成否はかかっている」

「は！」

満足そうに頷く次王をみて、カウノスの指揮官は旗下の兵に号令を下しはじめた。

「……いいのですか？」

遠慮気味に聞くと、次王はふっと笑う。

「彼らの役目は兵站だ。水源を確保し、食料を運び、竜の狩場を探す。ここには第2軍の兵が駐屯しなければならなくなった、わかるか？ 第2軍の全兵団が長期間、ここに駐屯することになる。それを収容するだけの宿营地作り、街道整備、本国との補給路の確保、仕事は膨大だ。水源の確保だけでももめるのだ。幸いアイギスは水が豊富だが、いつもこんな戦場ばかりとは限らない」

「はあ……」

次王はこういったことだけは物知りだなどと、とんちんかんな感慨に耽っているうちに、紫紺の大部隊が丘上へ登ってくる。それは見慣れた部族旗で、すぐ近くから懐かしい食事の匂いさえ漂ってくるようだった。

リュディア族は帝国の帳簿を一切合切を管理し、記録の部族であったイオの部族のすぐそばに本拠地を構えていた。イオの幼少時代はリュディア族に間借りをし、同じ書類を管理する部族でありながら、大量の書類が行き来するリュディア族の大組織には、イオはいつでも無邪気に圧倒された。

「イオ？ イオ、か！？ イオじゃないか！」

声をかけるまでもなく、顔なじみの多いリュディア族の隊列から声がかかる。

「生きてたのか！」

「便りぐらい寄越せよ！ 水臭い！」

ひとりが気付くと、それは次々と部族の間に朗報として伝わった。

――イオが生きていた！

それは戸惑いを伴うものではあったが、懐かしさと温かさがどっと押し寄せ、リュディアの書庫に何度も邪魔した記憶が、あたたかなスープの香りとともに湧き上がってくる、それはいつも辛くて、イオの舌にはちょっとつらかったのであるが。

そこにいたのは、リュディアの次王。

ボルニア屈指の勉強家として知られる「兄貴」はいつでもイオに側にいることを許し、イオが他国の言葉を訳そうとするのみで、手伝ってくれたのだ。

「兄貴の秘蔵っ子が、次王さまの側近か。あれほど育て上げようとしていた逸材だからな。しかし次王さま、いくらなんでもぜんぶを持っていきすぎではないですか？」

次王は鼻白んで言う。

「イオはおれの言葉を書く。イオの文字は王の言葉であり、ジャングル全土にいきわたる必要がある。その役目がイオには物足りない？」

それはいつもの言葉であるが、こう聞いてみると次王の言は宣言するようであり、これからボルニアがどう動いていくかのビジョンであり、イオの未来だった。

それを聴いてリュディア族は騒ぐのやめ、しだいにイオの無事を安堵するようなささやきに変わっていく。

「なんだ、やつと縁があったのか？」

次王はふしぎそうに聞く。その「やつ」というのが、リュディアの次王である事に気付くのに時間がかかる。

「はい、近いしい部族でありましたし、リュディアの書庫にかなう書庫はボルニア中どこを探してもありません。ですから小さいころからよくそこに」

「そうか、どちらにしてもあやつとは、義兄弟の盟約を結んでいる。どんなに状況が複雑になっても敵になることはない。安心しろ」

返答に困るとはまさにこのことで、次王の言は想像を超えていて、そもそもリュディア族と戦う羽目になることは困ることなのか？ と考えたのではあるが、なぜか何の根拠もない確信だけが自分を満たしており、そんなバカげたことにはならないという確信があった。

その根拠は何かと聞かれるほどに、イオは背を縮こませるだけで、確証めいたことを何も言うことができず、それがなにであるかを理解することをイオはしばらくの間できなかった。

(義兄弟の盟約を結んでいると、次王は言ってるじゃないか)

それすらいったいどれほどの効力のある約束であるかは分からないし、そもそもリュディア族がヴァンダル族に歯向かったとしても、ろくなことにはならない。

一大官僚部族であるリュディアは武力を確保できる部族と組みやすいだろうし、そもそもリュディア族は覇権など求めていないのだ。

そうこうするうちに、第2軍のほとんどの部族がつぎつぎと次王の謁見を済まし、その後の指示を受ける。丘上には第2軍の部族旗が乱立し、それはさながら第二戦を開始するのに十分な鋭気にみちた軍勢に見えた。

にわかに軍営の兵たちが今もまだ戦われている戦場の一隅を指して騒ぎ始める。

見ると捕虜の扱いの問題なのだろうか、ヴァンダル族の軍勢が見慣れぬ桃色の旗の部族を囲い込んで糾弾を開始していた。

「またあいつら、レト族の連中だ。いつもどんだけもめ事を起こせば満足なんだ？」

レトの名はさまざまな意味で知れている。

いちおうは遠方への冒険的商業活動で名をはせ、隊商の部族と呼ばれている。

しかし、その大胆な伝統的行動の割にその商売は狭くセコイことで著名で、おまえはレトかと罵倒されれば、それは、やり方がこすっからく、頑固でずる賢いことを意味する侮辱になる。

丘上で口々にレト族を揶揄するざわめきは留まる事がなく、次王はそれに背を向け、ヴァンダルの王旗を掲げたまま、少数で丘を下った。それは静かであるが悠然とした歩みで、イオもその竜に騎乗しているのであるが、レトの悪口に興じる第2軍の中を、もめごとの底へと歩いていく。ヴァンダル族とレト族が次王に気付いて、群集の中にその道を開ける。

作られた王の道を歩む姿は、親征の数歩のようであった。

争いはどうやら金の支払いをめぐる争いのようにあり（まあ、レトだし）、ヴァンダル族はなんて恥さらしなと激怒していた。次王が双方の声が聞こえる距離に近づくうちに状況ははっきりとし、次王が歩を進めるたびに、場は冷静になっていった。

「争いの原因はなんだ」

次王が聞くと、ヴァンダルの将が落ち着いた声で話す。

「この恥さらしが、敗残兵に身代金を要求したんです」

次王は頷く。

「み、身代金とは心外な！ 我々は、彼らに「退路への通行料」を要求しただけです。アイギスへの彼らの通路は破壊され、もはや我々が用意した浮き橋しかありません。その通行料を要求して、なんの不都合があるのですか！ それもたいした額ではありません。正当な通行料です」

「それは誇りあるボルニア第2軍のとるべき行動ではない！」

ヴァンダルの兵が激昂するのを、次王は片手をあげて静かに止める。

「第2軍はヴァンダルの軍ではない。レトも大切な一員だ」

なんでも、レト族はアイギスへの退路となる橋をすべて落としたらしい。もちろんそれは敗軍の再集結を防ぐという立派な理由はあるのだが、それとは別に自前の浮橋を用意し、退路を失ったアイギスの兵にその退路を提供する代わりに、通行料を要求していたらしい。

それがヴァンダル族の逆鱗に触れた。

次王はすこし考えて、冷静に言った。

「レト族に軍費から払ってやれ。浮き橋はただじゃない。アイギスの兵はその橋で島へ戻る。無事開放するし、それ以上なにも求めない、それでいいか？」

ヴァンダルの兵たちはぽかんと次王をみる。

「どうした？ 意味が分からなかったか？ 説明が必要か？」

「いえ、……」

ひとりの兵が口ごもる。それからやっとなつばを飲み込み、言葉を継いだ。

「それは、……王命、ですか？ それとも族長の指示ですか？」

次王はあきれて肩を落とす。

「あれだけしつこく王をやってくれと言ってきたのは、お前たちだ。いやいやながら王の仕事をしたら、こんどそれが目障りか？」

側近らしき男が機をみて、次王の周囲に輪を作るヴァンダル兵に告げる。

「王命だ、次王さまの王命が下った！ ヴァンダルの戦士は王に従う！ 隊列を組め！」

号令一下、これまで野次馬の集団のようだったヴァンダル兵は、下っているバーラルの野に一糸乱れぬ統率を見せて数分もたたないうちに攻撃陣形をとり、第2軍本体が戦うまでもなく「群島の湖都」アイギスへと逃げ帰った重装騎兵団に備える。

このようなときのヴァンダル族を見ていると何でも出来るような気がしてくる。

それこそ、世界の征服さえも。

しかし、この特異な部族の有効な範囲は戦場に限られ、その戦場であってさえ味方の部族との小競り合いさえも解消できない。部下からの報告を受け、側近らしき男は頷き、次王に隊列整いました、と力強く告げる。次王が力なく頷くのに、男は助言のように話した。

「次王さま、自ら率いる民に自らを率いるだけの力量を求めるのは、無理というものです。ヴァンダルの民は戦場では申し分ありません、それで充分ではないですか。次王さまと同じ力量を求めないでください。なるほど、次王さまは王になると頷いてから、わずか数週間で次王となる覚悟をおきめになりました。しかし、民には未だに次王さまは同時に、族長なのです。わずかな期間に冷やかな決断をされるようになりました。しかし、次王さまのその変貌が早過ぎて、民には突然に暖かさがなくなり冷酷になったように感じてしまうのです」

次王は黙って頷いて、しばらく考えていたが思いだしたように言う。

「ひとつ頼みがある。それを受け入れれば、貴公の言葉を受け入れるようにしよう」

「は、はあ……」

次王はその男をじろりと睨んだ。

「次王さまはやめろ。次王は敬称をつけるべき立場じゃない。そもそもボルニアの伝統的な次王による王の選抜制度は、各部族で次王を立て、その中で生き残ったたった一人を次の世代の王とする制度だ。ボルニア88部族のすべてに次王があり、残った1人が王になり87人が死ぬ。次王は実質上の死刑囚に与えられる称号で、死刑囚は敬称で呼ぶべきではない、わかるか？」

「お言葉ですが、でしたら貴公はおやめください、よそよそしくて民が戸惑います」

次王はくっくと笑う。

「なら、どうする？ いっそのこと昔のように呼ぶか？ おれはべつにお前によそよそしくしている気はないんだが」

めずらしく次王が肩の息を抜いて笑うのを見て、イオはあぜんとした。

(なにもの？ なんだろう？ 腹心に見えるけど、妙に仲がいいし、肉親だとしたら年格好からして兄弟と考えるのが良さそうだけど、弟？)

「それよりも、さっそく首府から注文が来ています、エストの占領政策について」

「気が早いな。もうアイギス陥落までは予定済みだったか？」

おかしように苦笑する次王に、腹心は神妙に頷く。

「命をかけていないものは、昔から勝手なものです。しかし、本国が言ってきているのはそんなに無茶苦茶なことではありません」

「聞こう、それで本国はなんと？ あのおいぼれはどうしろとっている？」

「エストはそのまま次王の直轄領に。本国は干渉しないので、今の統治機構をいかして半独立の領地として次王が治めること」

次王は鼻で笑う。

「いとも簡単にできるようにいう、それで？」

「次王はすみやかにエストの旧勢力と婚姻関係を結び、その者と協力して、新旧勢力により安定した統治を

せよ、と」

「旧勢力だって？ 今のエストに統治者たる資格を持つものがあるのか？ そんなのがいれば、おれは真っ先に結婚でも婚姻でもしているさ。あのおいぼれはだれと婚姻しろって？」

腹心は息を飲む。

告げられた名は、あまりのもありえない名前で、予想だにしていなかった。

次王にだって、頭の片隅にさえ浮かんでいなかったと思う。

「エストの純潔の女王、アテナイス妃、です」

4. アテナイスとの面会、婚姻の約束

エストという国家ほど、周辺に誤解されている国はない。

古い建造物の多い地域だけに先祖代々の貴族がいるか思えば、複雑な怪奇な経緯をたどる歴史を持つだけに、その格式もある伝統を、理解できる者は少ない。

大陸北辺の大スカイ河下流域にありながら、牧歌的な大デルタ地帯から一線を画す。

高原の台地から一気にくだるフィヨルドの、要塞のごとき河口に漁火のように点在する良港の連なり。その航路の上に、その国は形成されている。

難攻不落のともしびたちはアイギスを筆頭にふしぎな連帯を誇り、エストの歴史と生命を不毛に長引かせてきた。

鉄鎖の次王に引導を渡されるまでの千年近くを、奇妙な伝統のベールの中に包まれて過ごし、そのいびつな奇っ怪さは概して外部に理解されることはない。アイギスの主とされるアテナイス妃でさえ、自分の立ち位置を、数百年近い家柄を守りつづける歴史ある高貴な貴族の娘、とでも言われたらどれほどおどろき、瞳を白黒してしまうであろうか。

目をさました眠りの千年国。

ゆいつ目覚めていたのは、たったひとりの未婚の娘。

そんなアテナイスには、蛮族でありながら隠れ里のような古国の格式などは、まったく考えそうにない次王は気楽で、気が休まる相手だったのかもしれない。

イオはすべてが終わったのちにそんなことをぼんやりと考えるのであるが、エストの命運を決したアイギス攻防の数週間を、走馬灯のように思い出す。その経緯は迷宮のように複雑な筋道をたどり、いったいどれがどのように作用して、あのような結果へと導かれたのかと、考えてしまう。

「兄者は本国の意向に乗り気なんだろ？」

にやにやと笑う実の弟に、次王はめんどくさそうに眉をしかめた。

「その娘には、世界中の面倒がぜんぶオマケでついてくるらしい、と聞く」

「まさか。妙齢の小娘だし、エスト随一の美しさだとも聞くぞ。それほどの面倒がそんなちっぽけな子に押し付けられているなんて、想像も出来ない」

次王は分かっているといとも言いたげ気に、弟をみる。

「だから、タダモノじゃないって言ってるんだ。大勢がだれもかれも勝手に押し付けるのは簡単だし、年をとるほどに大人は恐ろしいほど愚鈍になる。百年もあればなにもかも誰もが麻痺する。だが、だ。だが、アテナイスのサロンには古今東西の文化人たちが集まると聞くし、そのサロンの主としてとても評判がいい。錆びた国のホストがだ、わかるか。この国は化石なのに、潤っているんだ。たいした博識じゃなければその役は勤まらない」

弟は意外そうな顔をする。

丘を下り、布陣を終えた第2軍を尻目に、ヴァンダルの兵たちが兄弟の会話を興味深そうに聞くのを気にもせず、次王は腕を組んで顎をいじった。

「掘り出し物か、厄介者かのどちらかだ」

「なるほど」

「だが、正直もう第2軍に不足を感じることはない。アテナイスひとりが加わって陣営が変わるとも考えにくいし、おれの最近の運はいい。ついてるんだ。拾った娘がなんでもリュディアで鍛えられた秘蔵っ子だったり、何も望んでいないのに、各地の部族が使者を送りつけて来ている。わかるか？ 足りているんだ。それならやっかいごとはよけいに、必要ない」

弟はちらりとイオをみるが、話題は敵になるか味方になるか分からないアテナイス妃であって、すでに

役目を安定的に果たしているイオではない。

「リュディアの次王が欲しがるかもしれない」

義兄弟の名を挙げられて、次王はためらう。

「おれにとられたイオの代わりが欲しいというのか？ 欲しければやるが、本国の意向からはそれることになる、それはいいのか？」

「欲しがると決まったわけじゃない」

まあどうでもいいのだがと飽き飽きと次王は背筋を伸ばし、大きなあくびをする。

それはそうだと弟はあきれののだが、イオにはその弟が見てきたであろう本国のようすを想像してやきもきする。

(このアテナイスの件は、他の次王を通しているのだろうか？ いや、あの老人のことだから、きっと。おそらく無邪気にもまんまとやられているんだ)

「お待ちください！ 副官どの！」

イオの突然のことばに弟と次王は顔を上げ、ぼかんとイオを見る。

「ふ、副官どのって、おれのことか?!」

「リクトル、なんだ、副官は不満か？ なんなら副司令官でも、副王でもいい。そっちの方がいいか？ イオ、こいつはおれの弟、リクトルだ。呼び方は何でもいい、好きに呼べ」

「あ、兄者まで冗談をさ……、イオ、副官は困る。リクトルだ、リクトルでいい」

おかしように顎を揺らす次王を尻目に、リクトルは慫然とする。

「あ、ではリクトルさま、お聞かせください。そのご老人はどのようにエストを統治するように告げたのでしょうか。書簡でしょうか、口頭でしょうか、この件は他の次王に通っている件なのでしょう？ アテナイスの処遇を周囲にどう伝えたのでしょうか？」

目をまたたいて、いぶかしげにイオを見る。

「それが、何か関係があるのか？」

「リクトル、イオはあの老人の陰謀のスペシャリストだ。本国で張り巡らされる陰謀を知り尽くしている、そうだろ？ イオ？ それが前のお前の仕事なんだろう？ おれの護衛だ。おれをあらゆる危険から遠ざける、そうじゃないのか？」

「は、はい。その通りです、えっと、たぶん……」

「というわけだ、リクトル、答えてやれ」

リクトルは腕組みをして考え初める。

「まず、書簡ではない」

(証拠が残っていない)

「確かに口頭だったが、エストの処遇を伝える場ただだけに、重臣が知らないはずはないと……」

「では、じかに話すのは見ていないのですね？」

「そ、そうなる、のか？」

あの老人のお得意のやりかただ。現にリクトルはその意向に「本国の重鎮の総意がある」と思いこんでいるし、この様子では他の次王には寝耳に水の報が、エスト陥落の報と同時に暴虐な次王の仕打ちとして伝わるだろう、特にアテナイスにむりやりな婚姻を要求した、と言う部分が無用に拡大されて。

イオは次王を見る。

「次王さま、急いで書簡をご用意ください。アイギス陥落の報をご自身でなさるのです。特に味方と考えている次王にはできるかぎる丁寧な説明を、疎遠な部族には一報だけになるかも知れませんが」

次王は少しだけ真剣にイオの緊張した表情をながめ、リクトルに肩をすくめて見せた。

「わかった。これは備えだ。老人は何を企んでいる？」

「情報を握っているようなふりをして、勝手な流言を流すのです、非常に危険な状態にあります。ですので、先手を打って次王たちにじかに次王さまから直接報を入れるのです。これで張り巡らされた陰謀を一網打尽に出来ます」

リクトルが状況をつかめずに、イオに聞く。

「なんだ、そんな危険なのか？ なあ兄者、イオをなぜそこまで信用する？ その場にいたわけでもないのに、こんな少しを聞いただけで」

「リクトル、これは絶対に外には言うなよ」

尋常じゃない次王のようすに、リクトルはごくりとつばを飲む。

「イオはかつて、あの老人の陰謀のすべてを調べ尽くしたんだ、過去数年に渡って、恐ろしいほどの執念で。だからイオはあの老人のやり口を知り尽くしている。そして、最後はあの老人を暗殺しようとして、失敗した。それをおれが拾った」

次王はゆっくりとリクトルを見て、静かにいった。

「おれの側近は腕利きの暗殺者なんだ」

このヴァンダルの兄弟はイオからしてみればあまりにも無防備に感じるし、どうやら今回のエストとの停戦交渉にあたり本国からのサポートがあるどころか、泥沼の勢力争いに巻き込まれそうな、危うい情報バランスの上に置かれていたりした。

とくにアテナイスがなにかを企めば、一気に泥沼の状況が完成してしまう。

イオにとっては先に話した情報上の空隙を利用した流言のたぐいは、老人を調べたときに大量にでくわしていたし、それは日常茶飯事なので、あの老人にとっては「単なる呼吸の一部」でしかなく、それはさして注意を払うところではなかった。

しかし、と考えてしまう。

(アテナイス妃との婚姻はどのような意図があるのだろうか？)

イオの脳裏には、老人の知られざるもうひとつの得意技が浮かんでいた。

それは、イオの部族を破壊したやり口で、父を殺し、祖父を自害させ、親族間に決して晴れることのない不和をまき散らした手並みだ。

(あの老人……)

それは陰湿かつ悪魔的とも言えたが、あれほどみごとに目の前で部族が解体されていった、抗えば抗うだけぼろぼろと脆さを見せて崩壊していった部族の姿を、イオは未だに忘れることは出来ない。

そのまだみぬ腐食の手を、老人はヴァンダル族に向けるのではないか、いやすでに向けられていて、アテナイス妃との婚姻の話はその第一手なのではないか、そんな気さえ、イオにはしてきてしまうのだ。

この婚姻話がボルニア全体にとってはそれほど影響がないことは、自信を持って言える。

であるから、流言を使おうしているのだし、それはすでに完膚なきまでに封じたはずだった。そもそもボルニアという蛮族連合は、外の血を入れることにそれほど否定的ではなく、他国の王族を娶ったからといって非難されるものではない。

ボルニアの統治機構は血族の世襲を、国家単位では排除しており、その意味で次王の血族がどうこうという話にはならない。これは単純に世襲となると、特定の部族の支配が続くことになりジャングルの部族間の公平が保てないからであったりする。

しかし、これを部族という単位で考えたらどうなるか？

イオはヴァンダル族の内部事情を知らないのであるが、一般的にボルニアは部族ごとに血族を形成しており、部族間の婚姻でさえ避けられる傾向がある。それが部族を飛び越えて、他国の王族との婚姻となれ

ば、ヴァンダル族内部はどうなるのであろう？

ふいにエスト語の号令がかかって、イオは顔を上げる。

みると、あれほど第2軍にめちゃくちゃにされたアイギスの精鋭騎士団の数人が、血に濡れた鎧を拭いたのか、白銀の表面を太陽にきらめかせて迎えの列を作っていた。

ゆったりとレト族の浮橋を渡ってくる数名の騎士が、なにやら複雑な意匠の紋章を掲げて次王のもとへと騎乗したまま歩み寄る。

「アテナイス妃の旗印です」

「ずいぶん古びているが？」

訝しげに返す次王にリクトルは落ち着いて答える。

「じゃあ、親衛隊といえいいのか？ いまはアテナイス妃を守る精鋭かな」

「なんだ、本人より仕える兵の方がえらいのか」

ぶつぶつと文句を言いあうヴァンダルの二人の若者の前に、うやうやしく礼儀を尽くした壮年の騎士がひざまづく。

「ヴァンダル族の次王でいらっしゃいますね？ アテナイス妃の使いとして参りました」

次王が無言で鷹揚にうなずくと、騎士は立ち上がって一礼する。

「申し上げます。アテナイス妃は貴方さまとの会談を望まれております。アイギスの中心部までお招きします。ぜひお受けください」

まるでさきほどの会戦はなかったかのように述べる騎士に、次王は不機嫌に言う。

「招かれなくても、おれはいつでもその橋を渡ろう。しかし故郷を土足で踏み荒らされるのは誰も好むものではない。それでアイギスは我らに何を捧げる？」

「商船団を。腕利きの船乗りはジャングルには育たないでしょう」

次王は鼻を鳴らすが、その答えを気に入ったのか、よし招かれようと告げる。それを聞いて騎士は立ち上がり、さっと右手を上げた。するとどこに控えていたのか金管楽器を構えた少人数の楽団が立ち上がり、しずかに厳かなテーマの演奏を始めた。

ぎしぎしと揺れる舟橋を楽団が先導して渡り、壮年の騎士に促された次王が、高い肩を並べて続く。その後ろから赤一色のフェルトのコートを羽織った兵士達がゆったりと続く。

「アイギスはごらんのとおり群島に建てられた港です」

言い訳するように言う騎士に次王は頷く。

「8つの主島と無数の小島が、この河口には散らばっています。アイギスの港は」

「湖と聞いた。湖上の群島都市アイギスと」

次王が睨むと、騎士は慌てたように補足した。

「そうそう、湖でもあります。河水と海水が混じっておりまして、アイギスの守りは水竜の兵団です。けっして海竜ではない。水がしょっぱいかそうでないか、それぐらいしか変わりませんが、竜にはこれは一大事、いやはや困ったものです」

「何が困るんだ？」

「いえ、こちらの問題です。守りが水竜となると海まで護衛していくことができません。いくら広く、屈指の良港と言われるアイギスのフィヨルド湖であっても、その守備範囲は限られてしまいます、海にできることが出来ないのです」

次王はすこし顎に手をおき、なるほどと考える。

「それは困るな。せっかく貰っても、アイギスの船団は竜の護衛なしか」

「いえいえ、この北方海でも海竜にのる蛮族はいますし、そのほとんどは日常的にエストの船に雇われてい

ます。その蛮族たちの竜は反対にこの淡水のフィヨルドには入ってこれない。こうして住み分けができるわけです、うまいことに」

次王はおかしそうに微笑し、貴公の言う通りだと苦笑する。

一行は浮橋を渡り終え、比較的大きな島に敷き詰められた石道を進んでいく。

周囲には陸に上げられた小舟と、干された網が所狭しと並べられており、それをみるだけでアイギスにはそれなりの漁獲量があることが分かる。アイギスが難攻不落とされるのは、その淡水湖が水竜で閉ざされているだけでなく、海からも隔絶されそれでいて湖の幸が豊富で、その食料を取り尽くすことが数年かかって困難そうなことに理由があった。

どんな兵団を持ってしてもアイギスを閉ざすことは出来ない。

そんな無言の主張を受け、次王はひそかに微笑する。

やがて楽団に率いられた会談の隊列は、第一の島を渡りきり、その石道の尽きるところに辿り着く。

武骨な石造りの2つの砦塔とそれに挟まれようにある分厚い門。

その先がアイギスの中枢がある主島であることが、城壁の向こうに垣間見れるいくつもの尖塔からも明らかのように思える。しかし、その橋は狭く、また門は大型獣脚竜を通すにはだいぶ小さかった。

「失礼ながら、」

騎士は巨大な門の前で立ち止まり、おもむろに後ろを振り返って、鉄鎖に操られる巨大な獣脚竜たちの姿を見上げる。

次王に続くのは、第2軍を先導した遊撃兵団の隊列。

のちに次王の兵団と怖れられる次王直属の近衛兵団を形成する中核の兵、いや将たち。

「これほど立派な竜と騎竜兵では、この門はくぐれませんし、橋は渡れません。アイギスにはこれほどの竜はおりませんので」

次王は大型獣脚竜の姿を振り返り、そんな凶暴なものがついてきていたとは意外だと白々しい表情をしたのち、号令一下、騎竜兵に竜より降りるように指示をした。アイギスの兵はさきほどから列に並ぶフェルトのコート姿の兵で十分なようで、それとてアテナイスの親衛隊を名乗るのであるから、コートの下では武装しているに違いなかった。

次王の騎竜兵たちはおもいおもいの武装に身をかため、それは出身部族も違うのであるから、装備に統一などありえるはずもなく、アテナイスの兵に比べ質素で、次王が率いていなければ雑兵の集まりに見える。

「すみませんが、ガムラスタンは竜が入るようには出来てませんので」

「狭いのか？」

騎士は鷹揚に頷く。

「アイギス建造時からの土地といわれています。なにせ、この歴史豊かなエストの中でも「旧市街」なので、陸上の竜が闊歩する時代がやってくるなど考えに至るはずもなく……」

「安心しろ、」

まどろこしい騎士の口上を、不敵な笑みで次王は封じて言う。

「ヴァンダルの名が轟いているのは、でかい竜のせいじゃない。気をつけろ、あいつらはおれからみても凶暴だ。ボルニアの兵は騎乗するよりも白兵の方が圧倒的に強い。大型獣脚竜の2騎、3騎は簡単に殺す。なにせ遠征中はこれぐらいしか食える肉はないんでな。我が第2軍では竜など使い捨てだ」

上質な赤コートに連行されるように、次王の無頼者たちはじゃりじゃりと武骨な鎖の音を響かせて、軍靴の鳴る石畳の街路を歩む。

鉄鎖騎竜兵団第2軍の中核を担う、屈指の命知らずたち。

その武勇は、獣脚竜から隔絶されても発揮されるものなのだろうか？

捕虜をつなぐ鎖に似た黒鉄の鉄鎖を、ロープのように、手綱のように、あぶみのように、イオが見る限り勇猛な騎竜兵の日常的として、それを無造作に垂らすのだった。

次王の近衛愚連隊たちは、ことが起こればいつでも身につけた鉄鎖を振り回して騎乗具代わりに、どんな竜にでも飛び乗って精強の近衛兵団と一変する。そんな準備を万端にしてこのつわものたちは、その鉄鎖が自分たちの魂であるかのように、自在に扱っていた。

次王の号令一つで、地の底から創造される騎竜兵。

その強さは騎乗後しか知らないが、無防備な背中をさらけ出す次王の信頼からみれば、言葉どおり「白兵の方が強い」のであろう。

対するアテナイスの親衛隊は、一律に赤のフェルトのコートを着込み、親衛隊であるのだから、そのコートの下にあるのが楽器でない限り、武装している。

おそろいの短剣に、おそろいの鎖帷子に、おそろいの円盾。

規律正しく整った行進を見ていると、古に無敵を誇った古式ゆかしいレギオン（短剣の密集体系戦術）の陣形をすぐさまとるのでないかと思われた。

伝統的に、未だにレギオンで主力を組むのは、南方大陸を占める帝国の皇帝直属軍ぐらいしかない。

古い国というだけで、レギオンで戦うと偏見してしまうのだが、このエストという国にどのような戦術が伝わり、訓練されているかは、イオの知識のおよぶ範囲ではなかった。もっともバーラルの会戦でのエスト軍は、次王の電撃戦の前になす術がなく、戦術もなにもないままにもの数瞬で、数回の雷鳴のうちに木っ端微塵に粉碎されたのであるが。

寒空のなか、フェルトのコートをまとって無表情で、白い息をはいて進む姿は真鍮製の人形のようにさえ見え、それはすこし鼻持ちがわるい気がし、イオにはエスト兵が千年も昔から生きつづけている不死兵のように見えてしかたなかった。

それは生氣に満ちた次王の兵たちを間近に見るうちに、余計にそんな気がしてくるのであった。

アテナイス妃はどうやらこの主島に在する聖堂にて会談を行うつもりのもので、先導役の騎士がそれを恭しく伝える。

伝統ある戦場の使者のつもりか何かなのだらう。

イオは伝令役として騎乗していたとはいえ竜に乗り、血飛沫の底でふるえてのこの世の地獄を垣間見たのちとなつては、何を見ても、そのふわふわした儀礼は、羽毛のように吹けば飛ぶようで、たいせつに布団の一部となってくるまれ、守られている、そのようなものに見えた。もちろん、驟雨がくればたちどころにずぶ濡れになる。

ようやく差すようになった陽光に、景色がほっと息をついて見えた。

アイギスをゆく隊列は、古めかしい街路やら、大きな糸杉並木の広場やら、小さな雪解けの水路やらを渡り、ボルニア第2軍のくびきを受けるといような非常時でなければ、繁華であつたらう通りをすぎる。

高層建築の軒先には、白い可憐な花の鉢植えがちらほらと並び、そこに親衛隊のフェルトの赤と同じ紋章旗が、灰色の寒空を隠すようにはためいていた。

「なんだ、聖堂とはあれか？ ずいぶん小さいじゃないか。こんなところでやるのか？」

空に現れた宗教的シンボルを見上げて、ひどく無造作に言い放つ次王の言葉に、騎士は不意打ちのようにぐらりと揺れ、困ったような愛想笑いを浮かべて、追従し、

「アイギスの守護聖人を祭る聖堂ですから」

といいわけする。次王は振りかぶってあらぬ方向を見上げ、指をさし示す。

「でも、見ろ、あれだ。あっちの方がずいぶん立派だし、守りも堅い。あの城がいい。あそこでやるべきだ」

「や、やるべきだって、エストの伝統を何だと、……い、いえ、あ、あのような場所では護衛にかかる負担

が大きくなってしまいます。それに、あの居城は、姫さまの居城は不可侵でして、エストの統治を定めた、アイギス公の盟約の支配下にあるのです」

次王が指さす方を見ると、おそらく隣の島なのだろう。

フィヨルド河口にある都市らしく断崖絶壁の上に建つ古城だが、十分に立派な古城の、あの強風であろう高台まで登るとして、石段の数を想像するだけでめまいがしてくるのは確かだった。

(あれがアテナイスの城……。ふふ、あの亡霊の兵隊にはぴったりなんだけど)

少年兵だろうか、聖堂前の広場までくると小柄な赤の隊列が現れ、それに混じるように、バーラルの会戦の帰還兵であろうと思われる、みるからに疲れ果て、傷だらけで、血で汚れた一団が、それでも気丈に直立の姿勢を崩すことなく、鳴り響くラッパの主旋律の中にたたずみ、これから行われるおのれの敗戦の結末を決める話し合いに、すこし緊張した面持ちで立ちすくんでいた。

濡れた驟雨後の街路には、商人か、貴族か、裕福な服装の市民が、男が、女が、子供たちが遠巻きにその行列をながめ、次王が騎士に連れられて不遜な表情で歩いていくのを、ちいさなざわめきを持って何重にもなって見物する。市民たちのたあいもないうわさ話が、静かなうねりのなかを主島中へと広がっていく。

やがて聖堂から現れた神職の者が、長いトーガをひきずってゆっくりとうなずくと、背後にひかえていた少年たちの聖歌隊は合唱をはじめ、その寒空に響くきぼうに満ちた歌声のなか、双方の使節は聖堂へと入っていった。

だれひとりとして火を焚かなかつたし、神聖な炎の清めをしようとする者はなかった。もちろん、それが伝統の誇りに埋もれきつた「ここ」のやり方なのかもしれないし、そもそもエストの神様のことをイオはよく知らない。

高い天井は聖歌隊の歌声をたかくたかく響かせ、むかし聞いた鍾乳洞に吹きすさぶ風の声や、ちいさな自身の中に洞窟の振動として吹き込んでくる、荘厳な恐怖を思い起こさせ、それはつめたい空気の中に広く澄んで、周囲に染みる。

合唱の響く聖堂を、騎士と次王を筆頭とする愚連隊とフェルトの死者の縦列は、真紅に染めた豪華な真新しい鮮やかな絨毯の上を進む。織り込まれた繊細な模様は、大陸南方の大商業国シドの、名のある工房の作であると思われ、それだけでもイオをおどろかせて十分だった。

(わあ、ずいぶん金はあるんだな……)

北の果ての過去に取り残された、埃だらけの国家と置いていただけに意外で、イオはひとりごちる。

そうしているうちに騎士が立ち止まってゆっくりと跪き、次王はそれを見て無邪気にも、目の前の女性がどうやらアテナイスらしいと悟ったようだった。

視線を向け、顎をすこしあげて、ぶしつけに品定めをする。

「服ぐらい着るものだな。これは会談のつもりだと聞いた」

無造作に言い放つ次王の言葉に騎士ばかりかイオまでが慌ててしまい、赤面するというわけではないが、どう渡し舟を出してよいのか、真剣に困ってしまう。

次王は追い討ちのように続ける。

「この国はずいぶん裕福なように見えるし、軍装を見るだけでも田舎貴族とは違う充実ぶりだ。それがそれを束ねるアイギスの主とまで言われる貴公が、そのような姿では、諸侯はどのような恰好をしてよいか困るであろうし、示しもつかない。そう思うが、どうだ？」

この青年は王にしては、まじめで素直すぎるのであるが、仕えるイオとしてはその素朴さには心が安らぐのである。

まじめな表情をして次王は諭すが、もちろんアテナイスは会談をするにあたり、失礼な衣装を選んで望んでいるわけではない。イオは慌てる。

「し、失礼ながら、次王さま。そ、そのアテナイス妃のご衣装は絹と申しまして……、南方大陸の帝国で盛んに織られる、軽くて薄い布でして、すぐ破れるもののように見えますが、たいへんに高価なものです」
「そ、そうなのか?!」

どぎまぎとして振り返る次王にイオはうんうんと頷き、わたしも実物ははじめて見ましたがと遠慮がちに返す。その姿を見てアテナイスはやわらかく微笑み、

「ボルニア殿の嫌疑がすこしでも晴れるとよいのですが」

とゆっくりと立ち上がって数歩歩いて次王の側に立ち、そのすそに触れられるようにと、装飾のほとんどないワンピース姿で、上品にすそを少しだけ上げた。イオはその気品あふれる立ち振る舞いにくらくらと、打ちのめされそうになるが、次王は気にした様子もない。

「なるほど、薄いな。これでは風が通ってしまう。アイギスでは寒い」

「絹はずいぶん暖かいものですよ。もし、よろしければボルニア殿も、このアイギスに逗留中は絹服をお試しにお召しになられてはいかがでしょう？ わたくしが無礼を働こうとしたわけではないこと、お確かめいただけますわ」

「そうか、それは申し訳ない、せっかくのご厚意に甘えましょう」

照れ隠しに苦笑いをする次王を包むようにアテナイスは微笑をし、すぐ側にある簡素な椅子に座るように勧めた。それはアテナイスが座っていたベンチと同じもので、おそらく信徒がこの聖堂で祈りを捧げる際に腰かけるものなのだろう。アテナイスや次王のような立場のものが座る座席とは言い難い、堅い背と堅い座席のベンチであるが、言わんとすることは明白であった。

アイギスの主は、市民と同じ席に座り、同じ祈りを捧げ、同じように眠る。

それを次王が宣言したかどうかは定かではないが、その程度のことで市民が従順にしたがうのであれば反対もしないであろう。

そもそも日常の次王は、竜の背に座り、長距離移動中の竜の鞍の上で眠り、すべての決済は口頭で伝え、命令書を書くのは同じく鞍上のイオなのだ。次王にとっての居城とは第2軍の戦列の最前列のことを意味し、そこは血塗られ、豪雨に打たれ、激しく揺れ動く、命がけの、使い捨ての巨竜の上なのだ。

贅沢など考える暇もない。

次王はなんのためらいもなく交渉の席につき、アテナイスのはにかんだ表情の前に、会談であることを思い出してか、姿勢を正した。

次王はおもむろに言葉を始める。

「貴国の主力軍は、さきほどの会戦で総崩れを起こし、もはやこのアイギスを守る兵はない。ボルニアは貴公が貴国の命運を預かっていると考えているが、貴公との約束は貴国との約束と思ってよいのだろうか？

お答え願いたい」

なるほどとアテナイスは小さく頷いて、そうか、と呟いた。

にっこりとわらって白い歯をみせ、アテナイスは小首を傾げた。

「それはずいぶんとおかしな話ですね？ ボルニア殿、いえ、これは正しいお名前ではありませんし、場合によってはあなたの国の王に対して僭越になってしまうかもしれません。あなたさまはまだ正式な王ではありません。ですので、そう呼ぶのはよくありません」

次王はゆかいそうに微笑んだのみで、次の言葉を待つ。

「正確には、ヴァンダル族の次王さま、ですがこのお名前はあなたさまがこの会談に望み、このエストと言う古い国の、命運を語らうにはふさわしい地位にないことを意味します。あなたさまはあなたの約束がボルニアの約束であると証明できますか？」

次王は大きく頷き、

「たしかに貴公のおっしゃるとおりだ。おれは自分の約束を違えないと約すことができても、死なないことまでは約せない。ボルニアの王位争いは熾烈で、まだ緒戦さえ始まってもない。そこでおれが生き残れる保証はなにもない。貴公はおれを交渉相手として認めないと考えるか？」

アテナイスは大きく首をふりかぶって、ゆっくりと息をついて口を開く。

「あなたさまには、あなたさまに相応しい地位が既にあり、わたしはその方としてだったら約束を交わせると思います」

「あなたがエストのわからずやどもは説得して見せると言うのか？」

アテナイスが頷くのを見て、次王は黙った。

「鉄鎖の次王、それがあなたさまの地位です。エストはボルニア王との約より先に、鉄鎖の次王との約を守りましょう。アイギスの胸襟を開いたのは鉄鎖の次王の鮮やかな指揮と、率いる次王の第2軍の精強さなのですから」

がはっはっはっは、大きな笑い声が鳴り響き、それが次王の笑い声だと気づくのに少しの時間がかかった。肩を揺らして大きな呼吸をする次王は愉快そうに、そして大袈裟ともいえる豪胆さで笑う。

「なるほど、鉄鎖の次王か。それがおれの名か。気に入った。ただしひとつだけ条件がある。その条件が飲めない限り、おれはこの鉄鎖の次王の名において約することはできない。それは心に止めておけ」

「聞きましょう」

次王はゆったりとベンチに腰を下ろし、息をして、告げた。

「アテナイス、おれの妻になれ」

次王の言葉が、聖堂中に詰め掛けた「敗者と勝者」の間に染み渡るまでに、少しの時間が必要だった。

誰もが言葉を失い、聖歌隊も楽団も旋律とリズムを忘れたように呆け、フェルトの死兵の隊は微動だにせず、愚連隊からはじゃらりと鉄鎖が鳴った。

リクトルをはじめとするヴァンダル族の主だった者には伝わっているらしく、何も知らないアイギスの市民たちは、祝福してよいのか分からず、困惑顔を互いに見合わせた。

「そ、それは、それを……、あなたさまは正気で仰ってるのですか？」

壮年の騎士が尋ねるのに、次王は訂正する。

「鉄鎖の次王だ、アイギスの市民諸君。いまはその名においての言葉しか信じないと、敬愛するアテナイス妃から告げられた。だからその名の元にアイギス市民に約して言おう。祝福はいらない。賠償金も、領土も、重税も、労苦を伴うありとあらゆる枷を、市民には求めることは一切しない。ずっとこれまでどおりだ。このアイギスも、エストも千年続いた何もかもを変える必要はない。ただひとつだけアイギスの花嫁を、この美しい諸君らの姫君とこの鉄鎖の次王とが、結ばれることを承認して欲しい」

イオからしてみればえらく穏当な、どこで覚えたのかと思うほどのなめらかな口上で、それに聖堂はあぜんとしてぽかんとする。

騎士は慌ててアテナイスの前にひざまづき、

「ひめさま。なにもエストの犠牲になる必要はありません。この国はあなたを差し出しておめおめと生き延びるような真似は、決して」

と言う。それに重臣と思われる人々から同じような言葉が続き、聖堂は騒然とする。

そのほとんどは思いとどまるように忠告するもので、アテナイスを不憫に思って発せられているものだった。

この姫君が背負っているエストの象徴という地位は、おそらく多分に犠牲を強いられるもので、それに忍耐強く耐え忍んでいるたったひとりの娘にたいして、エスト中の貴族連中が、尊敬と忠誠を誓っているのだった。

(これはすごい光景だなあ……)

イオは震えが走って、身震いした。

アテナイスの人望を思い知ったのだ。

そして、イオはのちになってアイギスの歴史と事情を知り、アテナイスがなにひとつの後ろ盾もなしに千年国を渡り歩いていることを知り、真の意味で肝を冷やすのだ。

アテナイスには高貴な血は一滴も流れていない。

なんたってアテナイスはみなしごから選ばれた妃で、アイギスの象徴として千年の孤独を生き抜いてきた、伝統あるアイギスの女王なのだから。

むしろ、アテナイスの威光は、その不憫さに耐え抜いているところにある。

しかし、周囲の心配をよそに、アテナイスはまんざらでもない様子で、あいかわらず考えが読みにくい微笑を浮かべて、薄手のワンピース姿で佇む。次王が困ったような表情をすると、その背を押すようにしぐさでなにかを促した。次王がいぶかしげな視線を向けると、こっくりと頷く。次王は一步を踏み出した。「なるほど、皆の、このアイギス市民の気持ちは分かった。おれはけっしてそれを踏みにじるつもりはないし、慕う気持ちは十分に伝わった、何よりも大切にしよう。だが重要なことをまったく聞いていない。それに気付いた。だから聞く。答えを聞くことを許してほしい」

次王がアテナイスを正面からみつめ、その姿をまるで花嫁姿であるかのように、頭の飾りから靴の先までゆっくりとながめ、つばを飲み込んで意を決した。

「まだ、返事を聞いていない。とても重要な返事だ。貴公はこの次王と婚姻し、これからもこのエストのために尽くすと誓うか？」

いえ、と小さくつぶやき、答える。

「アテナイスです、鉄鎖の次王。あなたは自分の妻を敬称で呼ぶのですか？」

それを聞いて、次王の表情にあかるさが戻り、ゆっくりと息が吐かれ、落ち着いた声で言葉をついだ。

「いや、すまなかった。どうしても信じられなかったのだ。鉄鎖の次王ともあろうものが、可憐な花嫁の言葉にどぎまぎするなどと。それで、ほんとによいのだな？」

アテナイスはこっくりと頷き、市民を振り返って、諭すようにいう。

「エストの聖楯騎竜兵団は鉄鎖の次王の前に壊走し、アイギスは鉄鎖の次王を、城門を開いて迎えるしかありませんでした。エストは鉄鎖の次王の軍門に降りますが、同時に鉄鎖の次王の正妻としてボルニアの中心の一部となるのです。あらゆる誇りを失うことはなく、鉄鎖の次王のもとに交易は栄え、船の寄港が増え、ジャングルは切り開かれ、この世界の果てのエストのひとたちが、北方大陸中に広がるでしょう」

圧倒的な武力を誇る、鉄鎖の次王の庇護の元に。

アテナイスはボルニア＝エスト共同統治国の未来を描いてみせ、しずかに息を吸って、いった。

「たったひとりの花嫁を差し出すことによって。アイギスは誰ひとりも不幸にはしません。わたし以外の誰も、けっして、それは変わりません」

しおらしく黙りこくる、市民の幾人からはすすり泣きが聞こえてきた。

アイギスはアテナイスを侵略者たるジャングルの蛮族に、最も高嶺の花を差し出して、何事もなかったようにこれまでどおりの暮らしをしようと決め込んだように、イオには見え、それはなにか怖いぐらいに決定的に思えてきた。

「お待ちください……、お待ちください！」

気づくとイオは大声で叫んでいた。

身体中が震え、背を這い上がってくる熱病のような寒けは耐えがたく、毒キノコでも食べたかのように足が痙攣し、這いつくばるようになってやっと次王の前にひざまづいた。

「なんだ、イオ。この婚姻に異議を唱えるのか」

「いえ、……あ、いえ、はい。唱えます。反対はしません、賛成もしません」

イオはしどろもどろになって言葉を紡ごうとするが、でてくる意味不明な声はたちまち次王の表情を不機嫌にし、それでも次王はイオのほんとうの言葉を辛抱強く待った。

「次王さま……」

「怒ってはおらん。イオが考えたことをそのまま話せ」

イオはゆっくりと息を吸い、それを吐いた。

「申し訳なく進言します。お気づきください、これはわなです。それも壮大な、このボルニア第2軍を根底から腐らせる悪魔のわなです。いま次王さまは、その入り口に立っておられます。これを賢明にもお避けください」

イオの進言に、アイギスの重鎮たちがわめき始める。

――何を言うか、そもそも婚姻は次王が持ち出したんじゃないか。

――こちらからはなにひとつ要求は出してないぞ、それで何がわなだ！

――アテナイスさまが穢れたことをするはずがない！ それを悪魔のわなとは。

口々に言うのをアテナイスは無言で収めて、イオに向かってやさしい言葉をかける。

「あなたは鉄鎖の次王の側近ですね？ その竜の背に乗り翼竜の伝令をずっと、しきりに飛ばしていました。わたしの城からバーラルはよく見えるのです。遠眼鏡でみるとアイギスのことが、あの戦いのことがよく分かります。あなたは鉄鎖の次王の背に乗っていた」

イオは戸惑いながらも頷く。

「お優しいアテナイスさま……。ほんとうにお優しいお方。わなをしかけているのはもちろん、あなたさまではありません。それどころかこのアイギスの者でさえありません。その主は遠くはなれたジャングルのなか、陰謀うずまく首府にあります」

アテナイスは得心したというように頷き、重臣に目配せをして、確認をする。

「ボルニアははるか南方のジャングルの奥地にある国と聞きます。街道もなく、エストも、ザブンテも、ジャングルを割って大型獣脚竜の精強軍が現れるまで、その存在をまったく知りませんでした。そんな遠方から、その悪魔のわなの手は、このフィヨルドの狭間に抱かれるエスト、アイギスまで届くのですか？」

イオは真剣な表情でアテナイスを見つめた。

「ええ、必ずや届きましょう。ボルニアには怨念渦巻く多種多様な部族がいます」

「イオ！」

次王の叱責が飛ぶが、イオはこの危機を訴えるのに夢中になっていた。

「ですから、用心が必要なのです、アテナイスさま。この地にはその呪いは届かぬなどと思わず……」

「イオ、度が過ぎるぞ！ 言葉を慎め、ボルニア王を侮辱するつもりか！」

次王は帯剣していた剣を鞘ごと掲げ、ひざまづくイオの目の前で、そのままガシンと床に力一杯突き立てた。はっとイオは顔を上げ、真剣極まりない表情の次王に睨みつけられる。

次王は、困ったように息をつき、諭すように話し始める。

それは第2軍の愚連隊やリクトル、次王の陣営を支える本国付の、主にリクトル直属の重臣たちに語りかけるよう。イオはその者たちを代表して、叱責を受けているのだった。

「知っている者もあるが、今回の交渉は王命として下されたものだ。おれは王命のとおり、エストを婚姻により併合する。この戦さは逐一報告する義務を当然に負うし、現時点においては王の直属の司令官として遇されている。たしかに次王の中の誰か、王位継承戦争を生き残ったたったひとりのものが、その王権を継ぐものとされているが、それは現王の死後の話であって、現時点では単なる地方軍司令に過ぎない」

イオが頷くのをゆっくり待って、次王は言葉をついだ。

「どんな者も、特に次王の地位にあるものは、現王を害してはならないし、ましてや殺害してはならない。それはともに次世代の王を担う資格のある、次王同士の競争上の著しい不正として働くからだ。公正な王位継承戦争の勝者のみがボルニア王であるべきなのだ。公正であることによって、その王権の正統性を証明するんだ。わかるか、イオ。それがボルニアだ。おれは、次王は、現王の死ぬ日を決めてはならないのだ。それはどんなに、やつらのやり方が気に入らなくても、たとえ死に至る陰謀を仕掛けられてもだ」

次王はちらともアテナイスを見もしない。

「おれがみんなに顔向けできないやり方で勝者となったら、おれに不満を持つ人間はいつでもおれと同じ悪辣なことをしてもいいことになる。あくらつを将来的に永久的に死ぬまで許可するのと同じだ。そんな泥沼で凄惨な血で血を洗う内紛の人生に我慢ができるか？ おれはいやだ。そんなことにおれの命を使いたくない。短い時間を使いたくない。ボルニアに必要なのはたった一人の王だ。公正で、無類に強く、度量が広く、寛容で柔軟な、そして、どんな誘惑にもなびかない、強い信念を持った、ボルニアとエストの未来だけを考える王だ。もし第2軍がそれ欲しければおれはなろう。アイギスがそれ欲しければおれはなろう」

次王の視線が上がると、固唾を飲んでいたアイギス市民が金縛りをとかれる。

「市民諸君、きみたちは自由だ。ただひとつだけ、市民諸君。アイギスの花嫁をおれにくれ」

市民たちはゆっくりと頷くようになり、次王のそばに寄ったアテナイスがその手を柔らかく握ると、ぱらぱらとした拍手がどこからともなく湧いた。

それは雪解けの地下水が地面に染み出すようにわずかであったが、ささやかにではあるが、ふたりの先行き不透明な門出をあたたく祝福していた。

5. リュディア族とレト族への書簡

第一声を上げたのは、イオだった。

響き始めた歌に聞き惚れ、思わず感嘆の声を上げていた。

「これ！ サウス古歌ですよ！ こんなところに残ってた！」

次王はいぶかしげに振り返り、ぶつぶつと口上を考えてたのをやめて振り返る。

「サウス古歌？」

「伝承歌です！ 聞いてください、これ、サウス語です！ ほら！」

聖堂中に鳴り響くハーモニーに耳を澄ませるが、おそらく次王にはちんぷんかんぷんで頭髪をぐしゃぐしゃに搔いた。

「古語は知らないんだ」

「ええ。わかる方がおかしいんです。帝国にはまだサウス語を話す人たちが残っていて、リュデュアにはよくサウスの書を持ち込むその者たちがいて、彼らは書をサウス語で歌うんです」

「書を歌う？」

いぶかしげな表情をする。

「伝統なんです、サウス人の。あ、えっと、サウスの伝統が残っている地域では、と言う意味ですが、サウス人は書を残さなかった。いえ、サウスの書は残っていますが、それは下賤の者たちがサウス古歌を写したものです。ですが、サウスではそれはもともと歌だった。ここで歌われるように、サウス古歌は議会で、広場で、大学で歌われたのです」

「その、最後のはなんだ？」

イオはあわててことばを探す。大学は大学だ、などと、この聡明な王にいうことの膨大な損失について考えるのは、むしろ楽しかった。

「それは、リュディアの集落のようなものです。兄貴はサウスのそれにあこがれて、そのような集落をつくりました」

「そうか。では、リュディアのあいつが来れば分かるというのか！」

次王のぱっと輝く笑顔がまぶしくて、イオは圧倒されて、小さくうなづく。

「じゃあ、そう書こう、イオ、口上を思いついたぞ、アイギスにはサウスの聖歌が響き、敬虔な信者たちがその教えをいまだに語り継いでいる。おれには呪文にしか思えないが、この古歌のすべてを解き明かすことができるのは、きっとお前だけだ」

イオはやっと紡ぎだされたことばを、あわてて書簡にしたためていく。

うんうんと頷くと、次王は自信を得たのか朗々と、おそらく盟友であろうリュディアの次王へ向けたことばを紡いでいく。

イオと次王は、各部族へ向けた書簡をしたためている。

それが執務室とまでいかないまでも、このような公共の聖堂という空間で、周囲からまったく隔絶されない場所で行われているのは、ひとえにこのエストという国が王という立場の者を持ったことがなかったからだ。

わずかにアテナイスの古城があるにはあるが、次王は頑なにアテナイスの領域を侵食することをよしとせず、イオだけを連れて、まるで戦地を散策するように、あちこちを歩き回っている。

ボルニアの部族と言うものは特定の場所に留まって居住しない。

だからアイギスを放浪する次王はイオにとって馴染みのものだったし、石の壁に囲まれたこの湖上の群島都市で、息苦しい思いをするのはごめんなのは、確かだった。

次王が朗ずることばをつぎつぎと書き留める。

その言葉は簡潔で、吟じたくなるほどに詩情に溢れ、淡々とする中に雄大さがあつた。

節々にはリュディアの次王への熱い友情が感じられる心遣いが散りばめられ、むしろイオはこれほどまでだったのだと思い知った。

兄貴は、どう応えるのだろうか？

あの明晰で、博学で、優しい兄貴は、勇敢で激しい気性の次王とは水と油のように思いさえするが、隣ににこにここと佇み、穏やかな口調で次王の苛烈さをたしなめる姿が目の前に浮かぶ。

(これがボルニアの未来？)

それは壮大な姿だった。

次王とリュディアの次王。

この突出した二人の仲が良いと言うだけで、想像を絶する。

知る限りにおいて天才的な戦上手と、膨大な知識の持ち主。

ぜいたくはつくせばいいものではないが、次王が紡ぎだすことばには雄大な未来が見える。とても近い未来として詠っているのは、このサウスの膨大な財産を活用するのはお前しかいないし、おまえ以外には頼まない、と言う事だった。

次王はボルニアを、「文明復興国家」にするつもりなのだろうか？

北方大陸の諸国や、南方大陸に在する帝国は、こぞって、絶大な文明を誇った古サウスの復興にとっても熱心だ。月に渡ったとされる古サウスの伝承は、いまだに周辺諸国で強烈なインパクトを持っており、その最右翼とされるのは、北方南岸の商業国家シドである。

帝国との交易路で莫大な富を蓄え、その莫大な富をすべてサウス復興につぎ込んでいると聞く。

北方最強の富国シド。

「産業復興」という謎めいたことばが飛びかうのがシドであり、それは金儲けのために機械狂いを、絶対的に推奨しようとする政策に思えた。

鉄鎖に頼るボルニアはどれほど戦えるのだろうか。

リュディアの兄貴があっても、シドに数多いる無数の博学に敵うものなのだろうか。

次王は騎竜兵をもって、シドと戦うのだろうか？

もしそのシドに、最新の兵器を駆使して、最新の戦術で戦う、天才的な指揮官がいたらボルニアは勝てるのか。死神のような天才と戦うのか。

蛮族間では最強、そんなことは分かっている。

たかだか竜しかないボルニアは、というか竜さえも否定しているボルニアは、最新鋭を装備した最強の文明国に勝てるのだろうか。

次王をみると、子供のような笑みを浮かべる。

「なんだ、不満か？」

「いえ、すばらしい……」

けど。

立ち向かう先はもっと強いかもしれない。

「シドへは、南の大国には進軍するのですか？ 北方最大の商業国です」

次王はしばらく考える。

「おまえが決めていい」

これは、次王の悪い冗談だった。しかし、ボルニアは南進を決意するしかなくなり、結局のところシドとの泥沼の大戦争に突き進むのであるが、それはおそろしいくらい先の話だ。

まだ世界には、激動するための時間がたくさんある。

最後のことばを書き留めると、次王は満足げに、よし、と言った。

イオはそれを書簡にし、翼竜の脚に結び付けられるように、油紙に何重にも包み込む。

「飛ばしますよね？」

「よし、飛ばそう。リュディアの部落まで何日だ？ あそこから来るとなると、だいぶかかるなあ」

次王は晴れ晴れと聖堂を後にし、雨上りの広場へと歩いていく。イオはそのあとを必死に追いかけてながら、次に書簡を書き留めるのは、どの部族宛なのだろうと考えていた。

分厚い扉を開いてろうそくから陽光の中に出ると、イオは笛を取り出してその青空高くに吹く。

舞い降りた翼竜にその書簡を託して、未来が飛び立っていくのをぼんやりと眺めた。

「おい！ イオ！ 兄者！ こんなところにいたか！ 探したぞ！」

遠くから声がかかり、イオは精いっぱい笑顔でその声の主を迎える。

「なんだ、リクトル！ 仕事は済んだのか？！」

弾けるように次王がまっさきに飛びつき、リクトルは困ったような表情でイオをみた。

「探したぞ。もっと分かりやすいところにしてくれた方がいい」

それは、もっと殺しやすいところにしてくれと、イオには聞こえるようで、ぶるりと身体が震える。もちろん、リクトルが兄を害したいと思っているとは絶対に思えない。それでもこれほど将来豊かな「ボルニアの未来」が、害されると考えただけでイオは恐ろしくて何も考えられなくなるのだ。

(兄貴なら、この不安を取り除けるのだろうか？)

はるか遠方にあるリュディア族の次王に想いを馳せる。

この次王の弟は、どうも優秀なようで、ボルニア本国との一切のやり取りを担当しているように見える。リクトル付きの重臣は、あんまり見ていないが、たぶんそれに十分な顔ぶれなのだろうし、リクトルの報告からはその家臣団のほころびは見えなかった。

「なんだ、イオ。なんか書いてたのか？」

「いえ、はい。リュディア族に対する書簡を。とてもたくさんあって大変です。あっと、わたしは書き写すだけです」

はははとリクトルは笑う。

「リュディアが秘蔵していた才女だ。さぞかし兄者が気にしているのだろう」

「リクトル！ ことばがすぎるぞ！ イオはそんなことのためにいるんじゃない。話しただろう。護衛だ。老王の姑息な陰謀を粉碎するためにいる。それで今、書簡を書いている。リュディアから奪ったなどと、絶対にいうな。リュディアは盟友だ」

次王の叱責にイオまでびくりとする。

「なんだ、兄者、おれはのけ者か？ リュディアの方があちこちの知識に通じていて、ヴァンダルの田舎者は、役立たずか？」

次王は鼻白む。

「おまえを必要としていなかったことが一度でもあったか？ たった一度でも」

「いや……、ない」

リクトルはしばらくぶりに口を開き、ため息をつく。

「兄者は、大きすぎて、ついていけないんだよ。おれができるのは、本国が何を考えているかを兄者に伝えることだけ。おれにできることなんて、ほとんどない」

「おまえは、第2軍を指揮した」

「兄者がぶっ壊した守備陣を蹂躪しただけだよ。子どもでもできることだ。バーラルで自分が役にたったと思ったことはないさ」

イオはその二人の間に立って、思わず言う。

「副官殿は、十分に第2軍を率いました。このろくでなしの次王が率いたのはたった150騎。しかもそれは全部気心が知れた仲間です。率いれて当たり前なのです。そしてこのろくでなしはあなたに全責務を放り投げて、勝ったと言っているのです」

リクトルはぽかんとし、次王を見て、ことばを投げる。

「リュディアで学べばこう言える、ようになる、のか？」

(違う！ 違う！)

イオは次王と戦った、わずかな時間を膨大に話したかった。

(違う！ 次王はそんな人じゃない！)

ことばがあふれ出るようで、まったく出てこない。どれだけ次王が弟を信用していて、どれだけ任せているか。失われたらどれほどかなしむのか。どれだけほかに託す人がいないのか。

リュディアの兄貴なんて、リクトルの替わりには絶対にならない。

(なんで、分からないんだ！！)

「リクトル、イオの言うとおりのだ。おれは確かにエストの守備陣を崩したかもしれないが、それをしとめたのはお前だ。その功績に対して、礼を言うのを忘れていた。重責を全うしてくれて感謝する。弟だとしても忘れる。決して軽んじているわけじゃない。つい忘れるんだ。このエスト攻略戦の勝者はお前だ」

(これが鉄鎖の次王、……、なんだこいつ……)

イオは心の底からのしびれを感じて、身体中が震えてくる。

アテナイスが呼んだ称号は、たしかにこの若者に合っているようで、それだけでアテナイスの外交感覚のすさまじさが、全身を冷やすようで、冷たいさむけとして、大地の底から這い上がってくる。

(なんで、こんなにアテナイスが怖いんだろ)

それは、後に分かる。

強すぎるものはこわいのだ。

大惨劇が起こる起爆点がアテナイスになる。

世界の十字砲火がアテナイスに集まっている。

ボルニア全土を大混乱に貶めた、王位継承戦争の前哨戦が、このエスト併合から起こるのである。

新しい書状と筆記具を取り出すと広場に風が駆け抜ける。

イオはこの次王のことばを書き記したいと思っていたし、それは間近にやってくる北方大陸の覇者ボルニアの姿を活写しているものになるはずだ。

「次はレト族宛だ。レトの次王に書簡を書く。レトは知っているか？」

イオはあわてて戸惑い、大げさにぶんぶんと首を横に振る。

「レト族はジャングルを征服する交易路の創始者だ。キャラバンの長いながい列をジャングルに張り巡らせ、各地に中継集落を持っている。レト族なしにはボルニアは交易さえままならない。リュディアに書が集まるのは、このレトの交易路をたどってだ。だから、リュディアは絶対にレトを軽んじることはない」

リュディアの部落にレト族のものが訪れることはほとんどなかった。

だから、リュディアにあってもその恩恵を感じることはまったくなかったのだが、なるほど、あの部族は知らないうちにボルニア全土に恩恵をもたらしているらしい。

「レト族は、バーラルの会戦でもかなりの兵力を派遣していましたよね？」

「ああ、めちゃくちゃだ。それで統制がとれていなかった。きっとレトの次王がゴリ押ししたに違いない。あいつだ、あいつらしい」

次王はくっくと笑い、会ってみるといい、あいつは面白い奴だ、と呟く。

「兄者！ 待てよ、レトは頼れない。バーラルでも問題を起こしたじゃないか！ ヴァンダルの戦士と一触即発だった、わすれたのか、兄者」

「だが、リュディアに匹敵する軍を送ったのはレトだ」

次王のことは冷静で、事実を淡々と伝える。リクトルは困ったように何かを考え、それから思い切ったように言った。

「レトは割れている！ レトの次王はレト族をまとめきれていない！ ヴァンダル派と反ヴァンダル派だ。兄者は仲が良いかもしれないが、レト族自体は真っ二つに分裂している！ だからレトは頼れない！ あの次王にレトをまとめるなど不可能だ！」

鉄鎖の次王は笑った。

「その通りだ。あいつはレトをまとめられない。そんなことは分かっている」

「じゃあ！ なんでレトと組むんだよ！ ただでさえ評判が悪いんだ！」

次王はため息をつき、それから空を見上げて考えた。

「おれは、おまえに書簡を書こうとして、実の弟であるリクトルから激しい反対を受けた。リクトルはバーラルの会戦を実質的に終結させたヴァンダル族の指揮官で、きわめて有能である。ときおり本国に向かうので、ほとんどの実務を任せているし、ボルニアの情勢にとっても詳しい。新生ボルニアの副王だ」

イオは、それがレト族の次王に対する書簡の口上だと気付いて、あわてて筆記具を走らせる。

「でも、おれはお前が見せてくれた、東方の産品を忘れることができない。リーズデルの工房が仕上げたという鋼鉄の見事な剣、シャビの職人が作った鎖帷子、その足はアドレルまで伸ばし、みごとな楯を揃えてくれた。それらは第2軍の、ボルニア中の騎竜兵に行き渡り、ボルニアの鉄鎖はお前たちレト族がほとんど調達しているほどだ」

次王は唾をのみ、ことばを紡ぐ。

「だから、ヴァンダルがお前を忌避しても、おれはたったひとりでおまえを擁護する。絹を調達してくれなかったのは残念だが、シドを征服すれば、交易路は開けるだろう。ボルニアはエストを征服したが、エストの商人たちがレトの商売を邪魔することはない。彼らは海の民だ。北方の氷海を乗り越えられるのであれば別だが、リーズデルまで達せられるのは、おまえたちだけだ」

淡々としている。大きな夢だ。

それは大きすぎるが、この王ならば実現可能だとさえ思う。

この王は圧倒的に強く、おそろしく辛抱強い。

「エストの近衛兵団を鍛えなおすつもりだ。しかし、彼らの武装は鋼鉄製でさえなく、きっとその武装を刷新するのにレト族の力が必要だ。馬鹿でっかい商売が待っている。それを実現できるのはお前だけだし、エストを立て直すのに、金に糸目はつけない」

書き終わると、イオはため息をついた。

壮大すぎてついていけない。

この書簡の届け先、レト族の次王はこれについてくるのだろうか。

そしてそれはどんな人物なのだろう。

「次王さま、この書状の相手はどんな方でしょうか？」

「ことばを書き写すのに、それが必要か？」

「いえ、えっと、」

言葉に窮する。

それでも、なにか言葉が湧き上がってくるようで、どういっていいのかわからない中でも、立ち上がる好奇心を止めるすべがまったく思い浮かばない。

次王が気に入る人物だ。

きっとボルニアの既に判明している2人の王に匹敵する人間なのだろう。

次王は言葉に困り、頭をかく。無言で腕を組み、リクトルをちらりと見た。

「交渉の天才だ」

「え、えっと……」

イオが困惑するのに、次王はあきらめたように言う。

「めちゃくちゃな要求を相手に飲ませる人間は嫌われる。だがあいつは恐ろしく冷血だ。どんな手段を使っても、絶対に望む成果を得る。一見すると愛想がいいのだが、確実に成果を取ってくる、天才的な交渉の達人だ」

それこそレトの役割か。

イオはやけに理解して、案外この若者は偏見なく人材を見分けるだけの天賦の才があるのではないかとさえ思った。次王にしても、リュディアの兄貴にしても、リクトルにしても、この新生ボルニアの中樞は、老王の陰湿な陰謀に勝てないのではと、甘すぎるのではないかと思うところがあった。しかし、冷血な王がもうひとりの王だという。

(新生ボルニアは案外堅いのかも知れない)

あれ？ と振り返って、自分が選ばれている事実気付く。

(まさか、あたしも冷血組?!)

リクトルはその書状を手にとって読み、しゅしゅながら頷く。

「飛ばすには、おまえの許可が必要だ、リクトル」

「悪い冗談だ、兄者。おれは何もしてないし、兄者の邪魔をすることがいいこととは思えない」

次王はおもむろにリクトルに近づき、その横顔を思いっきり殴った。

リクトルは不意を突かれてよろめき、鼻血をぬぐう。

「なんだよ！ いきなり！」

次王はもう一撃殴り、みぞおちを蹴飛ばし、地面にたたき伏せた。

震えるリクトルを押さえつけたまま、耳元に話しかける。

「昔はよくケンカしただろう？ こんな風に。おれはおまえがリクトルじゃなくなるんじゃないかと、いつも怖い。おまえがいなくて怖い。だからやり返せ。リクトル、言いたいことがあれば思いっきりおれを殴れ」

次王が放すとリクトルはよろよろと立ち上がり、鼻血をぬぐって睨みつける。

「レトは頼れない！」

「殴ってから言え。それ以外は発言と認めない」

次王が平然と立つと、リクトルは次王を殴った。

よろめきながらも次王はそれを受け、嬉しそうに笑う。

「なにがおかしい！」

「リクトル、おまえがレトの次王よりも下になることはない。永久にだ。だからはっきりと言うんだ。レトの次王よりもおまえの方がはるかに有能だと」

血の唾を吐き、次王を睨む。

「ああ、そうさ！ おれはあんな奴には負けない！ 絶対に負けない！ 兄者を見返してやる！ おれがレト族の次王よりも下だと？ 馬鹿もやすみやすみにいえよ！ 絶対に負けない！ おかしなことを言えばおれが殴りつけてやる！」

イオはその光景をぼかんと眺めた。

次王は重臣たちの対抗意識を煽っている。それは、たぶん、たぶん、いいことなのか？ と考えてしまうのだが、たぶん考えがあつてのことなのだろうと、思う以外にない。

血の海を自ら望んで作るのは、ヴァンダル族らしいと言え、そうなのかもしれないが、それはついていけそうにない考えだった。

次王はイオに視線を向け、冷静に言う。

「おまえは、おれが王にふさわしくないと思えば、その剣でおれの背中を刺せ」

6. 近衛兵団長レイとの衝突

レト族への親書が高く舞い上がると、リクトルはため息をついて、じゃあおれは本国への報告書を書かないといけないから、と駐留軍の天幕へと帰っていく。

その背中を、イオも、次王も眺めていたのだが、次王はふと気づいたように呟く。

「あいつ、いったい何をしに来たのだろうな？」

「え、ああ、さあ？」

実のところリクトルは、イオが右も左もわからず、さぞかし大変だろうと気を利かせ、困っているようだったら手助けしようと思ってきたのであるが、そのような弟の気遣いにもやさしさにも気づかず、次王とその側近は晴れ上がった街路の、湿った街並みを散策する。

ぶつぶつと書簡の文面を推敲し、それを聞いていたイオはその文言が、リュディアとレトに対するものよりも、親しみがないことに気付く。

まるで定型文を推敲しているよう。

それに、ふたりに対する書面には一切の申し開きがなかったが、いま次王が呟いているのはとても端的に簡潔に、第2軍の行動意図と本国との関係を述べており、それが老王の意志である旨を説明していた。

公式文章を書くリュディアの書記のよう。

それは公式な報告書であり、見方によっては弁明をしているようにさえ思えた。

(もしかして、鉄鎖の次王が親愛の情を抱いているのは、あの二人だけ？)

ボルニアには3人の王がいる。

のちにそう語られる幕僚体制が、もう既に完成していたと思うのはイオの勇み足であるのだが、世界と戦うボルニアの中核の絵図はもうすでにできていた。無敵の新生ボルニアの姿は、すでにこの青年がエスト攻略を果たしたときに、ほぼ完成していたのかもしれない。

唯一の不確定要素はアテナイスであるのだが、あの姫君は乱暴なことをするようには見えない。しかし次王がアテナイスを加えることに躊躇していた理由が見える気がする。

わざわざ不確定要素を抱え込むまでもなく、新生ボルニアの体制に自信があった。

それでも、次王は、えっと、たぶん恋をしてしまった。

それがアテナイスの優れた外交感覚に対する恋なのか、ただ単に女性として魅力的であったのかは分からない。

そして実弟であるリクトルも。

リクトルは副王であると、レト族への書簡でも書いたのであるが、これが新生ボルニアの幕僚の間で受け入れられるかは分からない。おなじヴァンダル族だから、実弟であるからえこひいきしているのではないかと、言われることは違いない。

しかし考えれば考えるほど、リクトルほど副王にふさわしい人はいない気がしてくる。

本国関係の諸事務を一手に引き受け、おなじヴァンダル族の戦士たちを率いることができる。

鉄鎖の次王のプレゼンスは、ヴァンダル族の無敵さに依拠している。

あの戦う事しか能のないヴァンダルの族長にして、新生ボルニアを率いる鉄鎖の次王に、これほどの柔軟さと幅広さと全世界的な視野の広さと寛容さがあったという時代があったのだろうか？

ぶつぶつと文面を考える青年を見る。

(アテナイスが言った通り……、鉄鎖の次王か)

そういう意味ではこの婚姻は、次王が見染めたのではなく、アテナイスが見染めた。

なにか、自分がアテナイスの視座に占領されているようで、無性にイオは腹立たしくなった。

(新参者じゃないか)

たしかにアテナイスはイオよりは新参ではあるのだが、そもそもリクトルが気遣ったように、周囲にはイオの方が心配されるほどの新参なのである。

しかし、そもそも、次王はその軍事的中枢を決めるのに、これまでの軍功とか、出身部族にとられることはなく、「だれが全速襲歩についてきたか」だけで決めている。

これはおそろしく公正だ。

扱いやすい人物を選んでいるのではない。どんなに性格に問題があっても、自分の速度についてこれる人物を選ぶ。

いや、選んでさえいない。

鉄鎖の次王の第2軍の中枢は、ついてきたかどうかだけで決められる。いつでもボルニアの諸部族の戦士は、ヴァンダル族に遠慮することなく自分こそ中核だと名乗りを上げることができる。

――それがボルニアだ、イオ。わかるか？

首をぶんと振り、この青年が成し遂げようとしていることを考える。

その横顔を眺めるとほれほれとしてくるようで、それはこの王であれば、ボルニアの醜いうちわ争いを終わらせることができるのではないかとさえ思う。

そもそもこの青年が全人生をかけて否定しているのが、血塗られたうちわ争い。

アテナイスは確かに言った。

ザブンテも、エストも、ボルニアの牙がジャングルから出現するまで、その存在をまったく知らなかったと。

それまで、ボルニアはなかったのだ。

あたしたちは存在しないものとして、知られさえせず、醜い争いに没頭していたのだ。

まさかあのジャングルに人が住んでいたとは、と。

「王、聞いてもいいですか」

青年の真剣なまなざしがイオを向く。

次王は、イオに気付いたように視線を柔らかくし、それからため息をついていう。

「だめだ。王はおれじゃない。おまえは王に聞きたいと言った。おれは王じゃない」

「間違えました！ いえ、間違っていない……、いえ！ 間違いました！」

次王は鼻でおかしそうに笑い、くっくくと、しばらく笑っている。

笑いたいのはこっちだ。

この王は、おかしいぐらいに生真面目で、律儀で、自分の信念を曲げようとしない。

「イオ、なんだ。なにか新しい陰謀でも思いついたか？」

(いえ、まさか)

「おまえは老王の陰謀はさんざんに知り尽くしている。だが、真っ先に行っておくが、おれは老王のやり方は嫌いだ」

「めっそうもない！ 次王さまはあたしに歴史を書いてほしいと仰いませんでしたか？」

次王はすこし考えて、言ったと小さくつぶやく。

「あたしは書きたいのです。鉄鎖の次王の記録を。それは歴史になります。このボルニアを統べるのは鉄鎖の次王です。それを書き残したい」

「それは、おまえの寿命が尽きてもか？」

次王は、イオが常に戦場に帯同していることを心配している。

戦場で生死を分けるのは意志ではなく運だ。

「あたしよりも、心配なのは鉄鎖の次王が道半ばで倒れることです。そこであたしは歴史を書けなくなりま

す。それが心配で……」

次王はふっと鼻で笑う。

「おれの心配よりも、自分の心配をしろ。流れ矢とは、関係ない奴に当たるものだ。そうやって大切な奴を、おれは怖いほど失ってきた。鎧を厚くしろ、イオ。レットが調達してくれる。シドの軽量鎖帷子であれば、あらゆる矢じりは防げる。傷は受けるかもしれないが、死にはしない」

イオはすこし考えたのちにいう。

「リュディアには優れた子たちがいます。あたしは仲が良いですし、育てることは可能です。もしあたしが死んでも、」

次王の怖い表情にぶつかって、ことばが止まる。

「……歴史は書かれます」

罵倒が降ってくる。

「イオ、おまえは、おまえの替わりになる奴がいるというのか！ それは恐ろしい傲慢だな！ おまえの替わりは、おまえにしかできない！ リュディアにはなるほど、優れた才能はあるかも知れない。でもそれがお前に等しいなどと、絶対に思うな！ おれは何人も殺してきた。だれもが掛けがいのない優れた人物だった。そんな奴らが言うんだ。なんでおれを殺したんだって。それはおれの指揮が間違っていたからだ。おれはイオに絶対に許さない。おれを殺すまで絶対に死ぬな！」

この王を取り巻いている呪いに触れた気がして、イオは寒気がして、震える。

(この王は本物だ……)

リクトルが死んだら、この王は再起不能なまでに崩壊するかもしれない。

それは正確に言えばイオをはじめ、リュディア、レットの次王にも言えるのだが、ああ、アテナイスもそうかもしれないが、もしかしたらもっと親密さはない次王の150将の直属部隊の騎竜兵一人ひとりに関しても、そう言えるのかもしれない。

——絶対死ぬな！ 死ぬことは絶対に許さない！

こう叫んだこの青年のことばが脳裏に鳴り響き、そこには嘘偽りはなく、本気で真剣に、一人も死ぬなと思っているのだ。

(これが鉄鎖の次王……)

その凄みに気付いて、骨身の底からがたがたと、得体のしれない震えがきて、どうしていいのか分からなくなった。

無敵の王だ。

一人も殺さない王だ。

これが新生ボルニア、……か。

※

「あの者たちは、リクトルに従わせて本国へ送る」

次王のことばをまじまじと聞き、ぼかんと考える。

「あの者たち」とは、次王の150将と呼ばれるようになる、あのパーラルの決戦を制した次王の無敵の直衛部隊の事を指す。次王の無敵さの源泉であり、エストを征した原動力が誰であったかと問えば、まず筆頭に挙がる部族混成の猛者ぞろいの諸将である。

「しかし、しかし、次王さま！ このアイギスは誰がいったい守るのです？」

「アイギスを守るのは、アイギスの民だ。ボルニアは庇護しなければ飲み込まれる国家をいちいち守ったりはしない。アイギスの守りは堅いし、いちいちよそ者がでしゃばったら誇りが失われるだろう？ おれはエストを最大限尊重する」

それはありていに言って、おまえのことはおまえで何とかしろ、というつきはなしではあるのだが、この王は違うことを考えていた。

「エストはおれが鍛えなおす」

杖を突けば、無敵の次王軍が大地の底から生み出されるというよう。

まるで知らない、忘却された千年国。

そんな迷宮だらけのやっかいな国を、この王は支配せずに、叩き直すという。

(どうやって?)

——おまえは、鉄鎖の次王がどういうやつだか忘れたか?

そもそもイオは、自分がどのようにして次王の優秀な側近兼護衛になったのかを忘れていたのだが、それはイオの想像を超えている部分ではあった。

「おい、探したぞ! 鉄鎖の次王! いや、次王さまか?」

イオが視線を上げると、声の主は武装した、いやたぶん武装しているアテナイスの近衛部隊の装束で、赤いフェルトの制服にアテナイス直属であることを示す紋章が刻まれている。

「どう呼ばばいい? 次王さまよ? こっちは大騒ぎなんだ」

不敵な視線を投げつける青年に、何人かの赤服が付き従っている。

(隊長? もしかしたら、もう少し偉いのかも知れない)

次王はそれを直立不動で受け、抜刀さえせず、いや、エストの民に抜刀なんてありえないか、じっと相手を見定めるように、冷静に見つめ返す。

「好きに呼んでいい。おれに正式な地位はない」

「ああ、じゃあ、アテナイスさまのおっしゃる通りだ。おまえは鉄鎖の次王だ。それで文句があるとは言わせない。アテナイスさまは、おまえには正式な地位があると言った。それが鉄鎖の次王だ。それでいいか?」

「アテナイスが決めたことだ。異存はない」

その声の主はゆったりと歩き、それに影のような赤服が続く。

「城からの言付けがある。あそこは大騒ぎだ。急に婚姻だとか言い出したからな。その準備でさんざんに困り切ってる。おまえのせいだ。言付けはこうだ。婚姻の式の打ち合わせをしたいから、城に参上してくれ、と」

イオは鼻白む。

仮にも征服者である鉄鎖の次王に、諸事があるから来てくれと?

その気配を察して、次王は手のひらを向けて、やめろと腕を伸ばして止める。

「いまは申し訳ないが、公務で忙しい。折を見て伺おう」

「公務?」

「ボルニアは忙しくてな。あちこちからやっかいごとが降ってくる。そのやっかいごとの芽をいちいち発見するのは、こいつなのだがな」

イオの頭をぐしゃぐしゃと掻きまわす。

その光景をその声の主はぼかんと見つめていたのだが、気を取り直して言う。

「もっと、分かりやすい恰好をしてもらいたい! おまえが街路を歩いていると、ただの蛮族にしか見えん! なんだその恰好は、ぼろぼろの服じゃないか! だれもそれでは鉄鎖の次王だとは気付かない!」

「おまえは見つけたし、問題はないだろ」

その男は怒りを沸騰させ、イオを指さして、大声で叫んだ。

「その赤毛が目立つんだ! 従者だぞ! なんで、従者の方が目立って、鉄鎖の次王の方が目立たないん

だ！ いちおうおれたちは、おまえの護衛も任務だと思っている！ このエストも一枚岩ではない！ もう少し守り甲斐のある恰好をしてくれ！」

「なんだ、服を守るのか？ それにイオは従者ではない」

この王は素朴すぎて、それが相手の神経を逆なでしていることに気付かない。

「アテナイスさまは、城から遠眼鏡で、この赤毛を知っていた！ だからおれたちは分かった！ もし、アテナイスさまがそういわなかったら、おれたちはどう気づいたんだ？」

「王冠でもかぶるか？ あれは意味がないので、いやなのだが」

「おまえはこのエストの王のつもりか？」

「いや、ボルニアの王でさえない。ただ、エストの王のつもりだ。おまえは骨が立つな。欲しくて仕方ない。アテナイスはおれのものになった。イオはおれの護衛だ。おまえもそうするか？」

馬鹿にするな、という一声ともに抜刀され、その凶刃が次王に迫る。

キン、という金属音がして、次王はその太刀筋を自ら受け止め、相手の腹に蹴りを入れる。よろめいたところにイオの短剣が迫るが、フェルトの中から飛び出してきた小楯にはじき返される。

(こいつ、すごい)

次王は近寄る赤服を切っ先で牽制し、それから鞘に刀身を収めた。

「罪は一切問わない」

睨みつける男を睨み返し、祝事には参列しようと、他人事のように言う。

「まだやるか？ おれは殺したいとは一切思わない」

「いえ、やりすぎました……」

次王はふっと笑って、赤服の面々の前に立ち、名前を一人一人聞いていく。

それは儀式のようで、それはヴァンダル族流なのかもしれないけれども、いちいち健闘をたたえていく。おまえの動きはよかった、もう少し早く抜けるとよかった、でもこの状況ではどうしようもない等々。

自分を殺すかも知れなかった相手に対してである。

まるで、もう少しうまく動けていれば、おれを殺せたとレクチャーするよう。

この王は素でそう言っているのであるのだが、まるでリクトルにするように、ぽんぽんと肩を軽く叩く。もっと強くなって、おれを殺せと言っているよう。

「レイです。アテナイスさまの近衛兵団長です」

「そうか、レイ。いま思いついた。おまえはこのアイギスの中核だ。それをこのエスト中に思知らせる必要がある。だれかそれにふさわしい敵はいるか？ おれが指揮する。だから勝つ。どれを倒せば、おまえがアイギスの守護者だと思知らせられる？ それは誰だ？」

レイは言葉に詰まり、苦しげに言う。

「海賊退治ですか？ 近衛兵団はそんな任務を負っていません」

「いま、負った。それはおれが決めた。アテナイスの正式な護衛だ、おれは。アテナイスを守るために必要な倒すべき敵はどいつだ」

イオはその論理の展開についていけず、パニックになる。

(これは本国にどう報告したらいいのだろうか？)

もちろん、こんなことは報告する必要はなく、リュディアの風習に浸りつくしているだけあってイオは官僚的なのだが、ただ単に、ひたすらにどうしていいかわからず困るのだ。

「海竜の貴公子」

レイが苦しげに言うのに、次王は満足そうにうなずき、とても冷静によし叩こうと呟く。

「まってください！ 海竜の貴公子ですよ！ 奴らはキュディアの虹翼を呼ぶ！ あの虹翼にエストは勝て

るのですか！」

次王は、レイを見つめて、ぽつりという。

「勝つのはおまえだ。第2軍は一切参加しないし、そもそも中核部隊は本国に戻す」

レイが青ざめていくのを、次王は何の感慨もなく見送った。

せめてこういったらよかったのに。

「おれが指揮するが、何か問題があるか？」

ただ、そのやり取りで、イオは次王がレイをととても気に入ったことが、密かに分かった。

7. ヴァンダル族と近衛兵団の面会、兄貴の登場

レイを駐留軍の天幕に連れていくと、リクトルがぼかんとした表情で迎える。

うつろな表情をする近衛兵たちを天幕に案内し、こいつらを鍛えなければならなかったと、素直な言葉で紹介する。

「鉄鎖躁竜法を教えてほしい」

それは直接的すぎて、刺激が強すぎすぎる。

「まだ、報告書はできていないが」

リクトルの言葉にうなずき、次王はロゴス族の誰だか覚えていない将に、肩を叩く。

「こいつらは未熟だ。兵として鍛えたい。おまえたちの方が、果てしなく上だ。こいつらにおまえたちの流儀を覚えさせたい。鉄鎖の次王の無敵の兵はおまえだ。だから、こいつらにその無敵を覚えさせたい」

次王はその無敵の兵の間を歩きながら、ことばを掛けていく。

この王がこの無敵の直属軍のどれほどの忠誠心を獲得しているのかと考えるのはばからしいのであるが、次王が歩くたびにその軍は絶対的な忠誠を誓い続けた。

死ぬといえば死ぬ。

絶対に死ぬなといえば絶対に死なない。

そしてこの王は、絶対死ぬなとしか言わないのだ。

おれの指揮だと。殺したらそれはぜんぶおれの責任だと。

ボルニアはこの王の指揮のもとに、絶対的に従っている。

それは、この王は不敗だからだ。

一人も殺さないからだ。

「こいつらを鍛え上げる」

リクトルは耳を疑ったが、次王は自信に満ち溢れ、それは既定路線に思えた。

「アイギスの近衛兵は、首都付きの衛兵です。騎竜兵になればエスト全土が防衛範囲になります、そこまで範囲を広げる必要があるのですか？ 本国・ザブンテ・エスト、このように広い範囲を守るのは、第2軍です。この三方面作戦を行えるのは第2軍で、アイギスに方面軍を作る必要は感じられないのですが」

次王は鼻を鳴らし、端的なことを言った。

「こいつらは強くなる」

リクトルはさすがに兄者の遠望に反対する気もする気がなくなり、その圧倒的な軍事的な才能に想いを馳せたかは謎なのなのだが、続いた次王のことばは決定的だった。

「第2軍の中核は、全部本国に送る」

リクトルがはっとする隙さえあたえず、次王はことばを叩き込む。

「再編するのはおまえだ、リクトル。バーラルの遊撃軍を率いるのはおまえだ。あいつらを掌握しろ。ヴァンダルの戦士を率いるのは、おれがいなければおまえだ。ヴァンダル族の族長を代われるのはおまえしかいない。直系はおまえしかいない。おまえがヴァンダルを率いる人間だ」

次王は時間を与えた。

「そのための時間を与える。報告書を届ける時間で、あいつらを掌握しろ。おまえはあいつらとぜんぜん話をしていないだろう。本国に向かう間に、あいつらと話せ。第2軍はおまえの軍だ」

たぶん、このことばをちゃんととらえた人はないだろう。

しかし、この王は適切に自分の死後のことも適切に定義していたし、そもそも無敵の次王なので死なないのであるが、怖いくらいにリスクに敏感であったのである。

今になって思うと、これはリスクの分散であったのだ。

そもそも本人が無敵すぎたために、一切が徒労に終わったのであるが、自分の死後のことも全部考えてあった。あの死神リニーとの無数の大決戦を予定していたとは思えないのではあるが、この王が言うのは、鎧を厚くしろ、くたばるのは絶対に許さないということだった。それはイオにも厳命され、死んだら許さないと強く言われているのだった。

(レト族は鎧を調達してくれるのだろうか?)

それは難しい調達のはずだった。

明らかに敵になる無敵の軍に自国の装備を提供する。こんなことをするのは馬鹿だ。だが、レトを率いるのは鉄鎖の次王が信頼を置く、交渉の天才。ボルニアの3人の王のひとり。どんな手段を使っても、絶対に調達する天才中の天才。それは怖気が走るようで、そんな才能がボルニアにいること自体が信じられなかった。

(レトはやるのだろうか?)

イオは鉄鎖の次王の作り上げている新生ボルニアの姿が信じがたく、自分の知らないところでボルニアが動き始めていることに、恐怖を持った。知らなかった世界は怖い。この王はボルニアを無敵にしてしまう。

次王はレイの肩を軽く叩き、びびるな、と簡単に言う。

「え、あ、ああ、はい」

「おまえらは勘違いをしている。ボルニア軍は強いかもしれないが、その強さのほとんどは鉄鎖操竜法にある。これは簡単に覚えられる。ボルニアは強いのではない。鉄鎖操竜法が強いのだ。どんな初歩者でも無敵の軍隊に変えられる、これが鉄鎖操竜法だ。もちろん第2軍の精鋭は強い。だがおれは、おまえも同じように強いと思っている」

次王はリクトルをちらりと見て、くすりと笑う。

「こいつらは強いぞ。手を抜くな。アイギスの近衛兵をなめるな。おれが見た限り、最強のレギオンだ。白兵戦は最強だ。エストを破ったからと言ってなめるな。聖楯なんて少年兵だ。ほんとうのアイギスの守護者はこいつらだ」

この王の才能というのは、兵を見抜く力にある。

レイが恐縮するのも気にせず、リクトルというか、ボルニアの第2軍の中枢に、こいつらをものにしろと叩き込む。

「アテナイスを守れ。おまえに全部を託す」

それは蹴飛ばすようであり、一切の容赦ないのだが、レイの表情が固まっていくのをイオは間近に見た。

(こいつは強くなる)

そうイオが思えるようになってきたのは、次王のやり方を見続けてきたからで、それはイオが次王の幕僚として成長してきている証左なのだが、無敵のボルニア軍が創造されていく姿を肌で感じる。

――イオ、ボルニアの強さはなんだと思う？ それは無尽蔵であるということだ。

それは違うと、イオは叫びたい。

(この王が率いるから、無尽蔵なんだ！ この王は無敵の軍を創造するんだ！)

それは震えるようであり、叫びたいことだった。

この頃はイオにも信じられないことではあったが、レイの率いるアイギスの近衛兵団はボルニアの鉄鎖操竜法を覚えたあと、そしてあの災厄ののちの大分裂を経て、“さまよえる聖騎士団”として伝説になる。

ボルニア流を覚えた、エスト残党。

使えるべきアテナイスを探して放浪を続ける、無敵の放浪騎士団。

これを獲得するのは、あの死神リニーなのだが、次王はそんな敵を作っても無敵なのである。伝説はいくらでも産むのだ。そんなものはいくらでも簡単に作り出せるというように。

「おい！　ここは次王さまの宿営地だぞ！　何者だ！　名を名乗れ！」

にわかに宿営地が騒ぎ出す。

単騎の騎竜兵が宿営地に騒ぎをもたらす。

「おっと、ごめんよ。急いできたので、伝令が先に届いていなかった。それは謝る」

その声を聴いて、次王は天幕を飛び出し、血相を変えて周囲の護衛に声を叫ぶ。

「失礼をするな！　だれに対して口をきいていると思っているんだ！　ボルニア王だぞ！　おまえらの王だ！　失礼な口をきくな！　丁重にお迎えしろ！」

「おやおや、ずいぶんいいようで」

その声で、イオも気づく。

(兄貴だ！　というか、早すぎる！)

天幕から飛び出してみると、それは懐かしい姿で、穏やかな顔で笑うリュディア族の王が笑っていた。

次王はすたすたと歩き、その稀代の知識の持ち主にくすりと笑いかける。

「よく来てくれた。いちおう書簡は送ったのだが、どうもおまえの好奇心は翼竜より早いらしい。エストの蔵書はおまえのものだ。読みただけ読めばいい。そもそもおれにはどう使っていいのかわからないしな」

リュディアの王は柔らかい笑顔を浮かべ、それが楽しみだったんだと言う。

「アテナイスも、おまえと話したいだろう。あれは頭がよすぎて、おれでは相手が務まらない。ちょうど退屈していたところだろう。ちょうど良いところに来てくれた。ボルニアの田舎ぶりに飽き飽きされていないか心配だったんだ」

「兄者がアイギスに向かったと聞いて、慌てて来たんだ。アイギスの蔵書は有名だからね。向かえば落ちる。そうは思っていたのだけれども、こんなにも早く落ちるとは思わなかった。まったく、兄者の進軍速度を甘く見ていた。どうも、兄者に追いつくためには進軍を決める前に先回りしなければならないらしい」

兄貴はゆっくりと竜の背を降り、それから次王と抱き合っ、お互いの無事をたたえた。

リュディアの次王が来た。

そもそもリュディア族はこのアイギス攻略戦に莫大な軍を送ってはいるのであるのだが、それでもこの天性の軍師がやってきたことは、ヴァンダル族中心の第2軍においても重大なニュースであると、イオには思えるのだった。

ボルニアーの知恵者であるリュディアの兄貴。

それはイオにとっては家族であったし、数えきれないほどの教を学んだ最良の教師だ。次王の補佐として受けていた重責を肩代わりしてくれる絶対の才能であったし、次王は許さないのではあるが、イオの代役だ。

次王はこういう。

リュディアの次王はおまえの代わりには絶対にならない。

イオ、おまえはおまえの仕事をしろ。

正直に言えば、イオは兄貴のそばの炉辺で心安らいで眠りたい。

家族のもとで眠りたい。

あたたかいあの火のそばで、兄貴と話して、何の心配もなくまどろむ睡魔に身を委ねたい。ここはこんなに冷たいのに、兄貴がいると、そこは炉辺になる。ゆっくりと眠って、頭をなでられたい。

兄貴はいつでも変わらない。きっとこのこのアイギスに駆けつけたのだって、サウスの書を莫大に蔵書する大書庫に入れると思ってたまらずやってきたに違いないのだ。兄貴の書に対する執着心は、イオが物心ついたところからまったく変わっていない。

ふたりめの王がやってきた。

そしてそれはイオの兄貴なのだ。

リュディアの次王は旅装を解いて、軽装の荷物を竜の背に預けると、思い出したように次王に聞いた。「そうだ、アテナイスはどうなったんだ？ 何も聞いていないんだ、急いできたから。処刑したのか？ そうだったらもったいない」

次王は困ったように頬を搔いて、書簡には書いたんだがなと、ぼそりと呟く。

「アテナイスは妻として娶り、ともにエストを共同統治しろというのが、老王の命令だ。それに従っている。だから近いうちに婚姻の式を挙げる」

そうかとうなだれたような表情をする兄貴を見て、次王は破顔するが、まぶしいような笑顔に向けて兄貴の背を叩く。

「心配するな、おれはアテナイスを独占したりしない。なあ、知ってるだろう？ アテナイスはこの北方大陸一のサロンの持ち主だ。このアイギスの居城に北方中どころか、南方からだってあれに会いに来るやつらはたくさんいる。世界中の中枢から信頼が厚く、そいつらをもてなしている。おれよりも妻の方が信望が厚い。千年王国の純潔の姫君だ。エストの名がそう簡単に揺らぐと思うか？」

次王は気安く兄貴の背を叩くが、兄貴は困ったような表情を浮かべる。

たぶん、そのやっかいもののアテナイスをどう扱っていいか考え始めて、実は難題であることに気付き始めたのだろう。

「おれが破滅をするとすれば、それはこのサロンを独占しようと目論んだときだ。あれは心底お前のような知恵者と話したいと思っているし、これまでの地位を捨てる気もないだろうし、捨てさせるつもりもない。だからおれは恨まれるような事をするつもりはないし、ひょっとしたらアテナイスは田舎者ばかりのボルニアに呆れているんじゃないかとさえ思って不安になる。でも、おまえが相手をしてくれるのならば安心だ。あれの物足りなさも減るだろう」

兄貴は核心に踏み込む。

「その婚姻の式には大陸中の名士を呼ぶのか？」

次王は瞬きをしてすこし考え、兄貴の顔をじっと見つめた。

「一大決戦になるか？ おれが周辺国の名士だったらここで叩きたいと思う。やつらはここで仕掛けてくるか？ 修羅場になるか？」

兄貴は神妙にうなづく。

「ぼくもその式にはそばに居させてくれ。ボルニアの軍師はぼくだ」

「当たり前だ。間に合ってよかった。頼りにしているぞ。それに仕掛けるならここだ。大挙して攻め込んでくる。大戦争になる。おれの勘は外れたことがない」

兄貴はくすりと笑い、鉄鎖の次王がそういうならば間違いないという。

「当たり前だ。ヴァンダル族は戦争しか能がない。ヴァンダルからそれを奪ったら、何も残らない。それがびんびんと感じる。大戦争になる。仕掛けられるのを黙っているわけにはいかない。まず叩くぞ。ぶちのめしてから様子を見る」

ずいぶんと物騒な言葉に、兄貴は笑顔を向ける。

「そうこなくちゃね。間に合ってよかったよ。ぼくも楽しみなんだ。北方中が大戦争を始めるその場にいられてぞくぞくするよ」

次王はへへっと笑うが、実のところこの鉄鎖の次王は、おそろしいほど難しい序盤の外交戦をイオの助力は借りたとはいえ、リュディアの天才を無しに乗り切っている。兄貴に鍛え上げられたイオでさえ意外に思えるほどの上首尾なのだが、それは兄貴の知らない上手だった。

いや、そもそもその役に大いに役に立ってこのもう一人の王の代役を自分がしたことを、イオはまった

くわかっていない。

そもそもこの王は、自分の聡明さに気付いていない。

アイギスの民を掌握したのは、この王の正直な本心だ。

この王は単なる戦上手ではない。

史上屈指の天才だ。

リュディアの次王はそれでほっとして、次王に急いで駆け付けた理由を説明する。

リュディア族はその重大な任務として、ボルニア国内の公文書の管理をする部族であることが認識されている。蛮族であるボルニアが国として成り立つのは、リュディア族という一大官僚組織を持っているからであり、リュディアを握る部族こそがボルニアの覇権を握るとさえ言われている。

しかし、この兄貴はこの官僚部族に全世界の書物の管理を任務として与えてしまった。

リュディア族の全権を握るなり、己の純粋な欲望のために部族を動かし、全世界から書物を集め始めた。内紛がうわさされるレト族とは一線を画して、兄貴はその温和な性格と、そして最強の用心棒であるヴァンダルを味方につけ、その軍師の座に座った。

いまやリュディア族に歯向かえる内政組織はなく、無敵を誇る鉄鎖の次王の信頼も膨大に厚い。

ボルニアの影の支配者というのは大げさであるが、新生ボルニアの宰相という評は間違っていない。ほとんど敵を作らない柔軟さは、ボルニア本国でも絶大な力を誇っており、ひょっとしたら、老王がまっさきに殺したいのは兄貴かも知れない。

ヴァンダル族と強力なパイプを持っている兄貴は、武力においても他の追隨を許さず、鉄鎖の次王よりも慕われているのは、この王かも知れない。

(あたしがついてなくていいのだろうか?)

そう心配してしまうほどで、それでもこの王は無邪気にアイギスに駆けつけた。

アテナイスの心休まる話し相手になるだろうし、そもそもイオは兄貴よりも優れた自然体の宰相を知らなかった。

この王に血なまぐさい陰謀はない。

無邪気に世界中の知識を求め、リュディアの集落に大学を作るという。

古サウスが全土に持っていたという、知識を学ぶ知恵者の楽園。この理想に文句を言うものは一切おらず、リュディアの大組織は、黙々と兄貴の理想のために働く。北方大陸のみならず、南方大陸の蔵書でさえも、この王は欲した。

リュディアには書物を写本する大部隊が存在する。

2000を超えるというあらゆる言語に精通した官僚組織が、世界中から集まってくる書物を写本し、その礼として、自部族内で製造される「紙」を送る。

産業らしい産業のないボルニアにおいて、リュディアの紙は世界に轟き、その丈夫なジャングルの繊維が世界中に流通している。ジャングルで採掘されるエメラルドの鉱石と並んで珍重されるのが、リュディアの紙である。

しかし、そんな大部隊を擁するリュディア族にあっても、アイギスの大書庫を、北方の宝石と呼ばれる千年王国の書庫を丸ごと写本した経験はないはずだ。

だから、兄貴はそれを見に来たのだし、大部隊を送らせる段取りのために、アイギスを訪れているのである。

それは確かに兄貴にしかできない仕事だった。

「おい、イオ！ 話は聞いていただろう！ 困ったことにこの馬鹿は、翼竜よりも早くアイギスについてしまったらしい。覚えているだろう。もう一度書いてやってくれ、いちいち口頭で説明するのは面倒だ。こ

こで書いて渡してやってくれ！」

次王が呆れたように言うのに、兄貴は気付く。

「イオ！ イオじゃないか！ なんてこんなところにいるんだ！ どこに行っていたんだ！ 心配していたんだぞ！ リュディアの連中とは話したか？ あいつらがどんだけ心配したか！ まったく顔を出さなくなっ！」

「この赤毛に気付かないって、どうなんだ？」

次王は呆れたようにため息をつくが、兄貴はイオの肩を抱き、その細い背を兄弟を抱くように、叩く。その驚きはイオにとっても困惑する驚きであり、イオはしどろもどろに兄貴に揺さぶらるままにした。

「兄貴、痛いよ。そんなに驚くことじゃないよ。リュディア族はヴァンダル族とは盟友だよ。あたしが次王さまのそばにいて何がおかしいの？」

状況が読み込めない兄貴に、次王が助け舟を出す。

「詳しいことはおれも知らん。こいつは暗殺を試みた。それが誰の意志だったのかは知らん。ただ、それは大罪だ。放置すれば罪を問われる。おれが保護すれば、こいつの身は安全だ。だから、預かって側近にした」

「あ、暗殺？ いったい誰の？」

狼狽する兄貴に次王は答える。

「老王だ。いたって迷惑なことに、こいつは王位継承戦争に介入しようとした。次王は真っ先に、ボルニアの人間が老王を殺めようとするのは、この国の秩序をずたずたにする。物凄い執念で、老王を暗殺するチャンスを探していた。おれもちょうど老王の動向を探っていた時期だったので、非常に迷惑だった。いつでもおれに先行し、おれよりも深く老王の秘密に迫っていた。優秀だった。だから拾ったんだ。その暗殺する剣を奪った。おれに仕えれば、復讐もできる」

兄貴はぽかんとしてイオを見つめ、それでしばらく集落に顔を出さなかったのか、と呟く。

「なんでそんな馬鹿なことを」

「あいつは！ あの老人は！ あたしの部族をめちゃくちゃにしたんですよ！ 滅ぼしたんですよ！ なぜって？ なぜなんて、なんで聞くんですか！」

兄貴は弱々しく肩を落とし、ため息のように呟く。

「イオは、イオは、もうリュディアの子だと思っていた……。イオを大切にしようと、リュディアは全員で思っていた。イオは悲しいから、それを癒して、いや癒えないけれども、ずっとやさしくしようと、そして、いつかは……」

「まってください！ あたしはリュディア族ではなくて！ いろいろそうなんです！」

「リュディアは、リュディアはそう思っていなかったなあ……。なあ、イオ、聞いていなかったか？ ぼくは一時期、長老連中から言われていたんだ。なんで、イオを娶ってやらないんだって……。リュディア族は、あたまの上から下まで、イオをリュディアの中枢に据えようと思っていたんだよ」

もちろん、そんな声はイオの耳にも届いていた。

しかし当時のイオは復讐にしか頭はなく、綿密な暗殺計画を考えることに没頭していたのだ。そんなこと、考えもしないというか、いまになるとどきりとするのだが、そこまで進んでいたのかとびっくりするのだ。

(あたしが、兄貴の妻に？)

それは想像もできない世界で、もちろん側にいれば、安心して眠れるだろう。

しかしそんな安眠をしていいのだろうか？

部族を滅ぼされたのに。

復讐する相手は、安眠しているのに。

次王はのんびりとその様子を眺めていて、のんきに兄貴の肩を叩き、まあそういう難しい話は、飯でも食いながらしようという。

「翼竜の腸の、香辛料漬けは旨いぞ。エストは寒いからな。辛いが旨い。キュディスも近いしな。あんな新鮮で旨いものはない」

あまりに冒瀆的な言葉にあぜんとするが、次王は兄貴の肩を抱き、どうせリュディアの天幕に顔を出してないんだろ？ まあ募る話はおれも付き合うから、道々話そうやと言った。

この次王はいい王だ。

兄貴のそばのように心が休まる。

8. イオ、リュディア族へ帰る

次王は幾人かを引き連れ、リュディア族の宿営地に向かう。

さっきからレイが緊張した表情を浮かべ、その側にイオと同じ年ぐらいの小柄な女性が完全武装で、落ち着いて従う。どんな立場なのかは知る由もないが、ありていに言えば副官だろうか。打ち解けたら、この湖上都市のことがいろいろ聞けるかもしれない。

イオは次王の腹心になりつつあるのだが、本人はそれにまったく気付かない。

次王が無造作に言う。

「このアイギスは面倒だ。島に竜は入れないし、狭い島で分断されている。戦えない」

「ですが、それでアイギスの防衛は容易になります」

レイに厳しい視線を向けたのは、次王が主導権を握って相手を叩きのめす戦術が得意だからだ。

「おまえは戦いたくないのか？ 戦って勝てば、それで相手は崩れる。それほどアイギスの近衛兵は、戦いを避けるのか？ おまえらは強いのに」

レイはくちどもり、我慢で唇を噛む。

「アテナイスさまの親衛隊は、アテナイスさまの安全が守れれば、それでいいのです！」

たまたず副官が言うのに、次王は頷く。

「それが任務だ、それはいい。だが、それではもったいないと言っている。レイは強かった。いい太刀筋をしていた。鍛えればもっと強くなる。そう思ったことは、罪だったか？ もっと重要な役目を任せたい。アイギスは親衛隊が守るべきだ。近衛兵でもどちらでもいい。アイギスを守るのは、アイギスの人間だ。強いから、拒否は困る。それに第2軍は撤退する。アイギスにはおまえたちしかいなくなる。おまえたちの首都だ、おまえたちが守れ」

この言葉少々大げさで、実際に撤退するのは次王のことばを信じれば、その中核である次王直属の遊撃兵だけで、それはいくら無敵と言ってもわずかに150騎を数えるに過ぎない。2000騎近い第2軍のほとんどは残る。

それにエスト騎士団も、壊滅したわけではない。

しかし、おもわず絶句するには十分な言葉で、この次王は背中を突き飛ばすことが好きらしく、簡単に逃げ道を遮断する。

「き、騎竜兵相手に戦えません！」

「大丈夫だ、鉄鎖操竜法を叩き込む。ヴァンダル族の精鋭が戦いを教える。おれの部族で、最強の部族だ。問題があるか？ すぐに覚えろ。ヴァンダルの戦士はいつまでもいてくれるやつらじゃないぞ。あちこちから救援要請が来る。そうなればおれも率いなければならない。ボルニアは忙しいんだ、申し訳ないがな」(いつ王位継承戦争が始まるかわからない……、のか)

それはボルニア中を戦乱のただなかに叩き飛ばすはずで、アイギスが足手まといになることを恐れている。そもそもこの次王は、対エスト戦など物の数にも考えておらず、正念場はボルニアを征する大戦争だと考えている。

(そのために、アイギスの近衛兵を自立させたい)

ヴァンダルは誰と戦ってきたのだろう。

いったい、次王が考える最強にやっかいな敵とはだれなのだろう？

そんな部族がいたのか？

いや、そもそも鉄鎖の次王が王位継承戦争のトップを走っているからには、これまでに挙げた戦績があるはずだ。それが何なのかをイオは知る由もないし、まったく想像もつかない話かもしれないが、実はそれはすぐそばで起こっていた大事件だったのである。

「騎士団は残っているだろう？ あの何だったか」

「聖楯騎士団」

リュディアの兄貴が呟くのに、次王は頷く。

「そう、そいつらだ。あれは編成が少年兵と老人ばかりで問題だが、あれはあれで骨があった、強かった。そうだ、このおれに立ち向かってきたやつがいたぞ、あのだぼろな状況でだ、完全に突破されていた、やつが最後の壁だった、あいつは強かった。やつを知っているか？ 確か、一番隊筆頭とか、なんとか言っていた」

「エステバン？ まさか、あいつがそんな」

レイが驚いて呟く。

「そうだ、そんな名前だった。やつに騎士団を率いさせる。あれなら、敗軍を統率できる。実際に敗軍を統率していた。騎士団はやつに任せる。レイ、やつと協力して近衛兵と騎士団を率いてほしい」

めちゃくちゃにさえ聞こえた。

そもそも、イオが見た限りは、その男は第2軍と刃を交えていないはずで、もっと致命的なことを言えば、この戦で死んでいるかもしれない。

(でも次王は、それが生きていて、エストの騎士団を叩き直せると信じている)

めちゃくちゃだ。これこそめちゃくちゃだ。

それでも誰も口をはさめないのは、言葉のすべてが、鉄鎖の次王の戦場での勦から生まれていると思えるからだ。

レイは口元を厳しく締め、アイギスの防衛を異国の王に指示されることに耐えた。

「それは命令ですか！」

副官が叫ぶように聞く。次王は副官を冷たい視線で眺め、肩をすくめた。

「どうとでもいい。命令でも、助言でもいい。どちらにしても、第2軍は撤退する。おれはアテナイスをおまえたちに託す。アテナイスを守るのがおまえたちの使命だろう？ であれば、騎士団と連携したほうがいい。1500騎は残ってるだろう。エステバンなら叩き直せる、おれが保証する。これはほとんど忠告だ。ボルニアの王位継承戦争は血を血で洗う大戦争だ。ボルニアの精強軍は第2軍だけではない。おれも勝てないかもしれない。勝つには騎士団が必要だ、だから協力しろ」

(2000騎の第2軍に、エストの1500騎。これで勝てない相手はない。あ、それに近衛兵も騎竜兵にするのか、500騎は堅いとして、4000騎の大軍勢か)

計算をするが、それに太刀打ちできる勢力がボルニア以外にあるとは思えなかった。

精強軍を大量生産できる鉄鎖操竜法はボルニアにしかない。

ボルニアは総勢6000騎と言われている。

しかしその半分は内戦が予定されているので、正直6000もない。

それが鉄鎖の次王の勢力は4000騎である。

もちろん次王が内戦に突っ込むのは、第2軍の2000騎のみだろう。そして防衛は、エストの2000騎に任せたい。

(大内戦か……。これが次のボルニア王を決めるんだ……)

身震いすらしてくる。

これから勃発する大戦争の激烈さに想像さえ及ばないのだ。

妙なことに巻き込んで、すまんな、と次王は謝り、レイに頼んだぞと声をかける。

「エマ、命令だ」

レイが震える声で言うと、エマと呼ばれた少女は直立する。

「エステバンに伝令だ。伝えて来い。このアイギスは、おまえが率いる騎士団と、おれが率いる近衛兵で守る。これから鉄鎖の次王の直属に入る。アテナイスさまはアイギスの兵が守る。鉄鎖の次王は了承している。アイギスを守るのはおれたちだ、当たり前だ！ おれたち以外に誰がいるんだ！」

レイが次王を見ると、次王は大きく頷いた。

「レイは正しい。勅命でも、命令でも、助言でも何でもいい、アイギスは今からそうなった。伝えてくれるか？」

エマはこくりと頷いて走り出す。

それをみながら、一抹の不安を覚える。次王の直断はいきなりすぎて驚くことが多い。おそらく次王なりに考え抜いて決断しているとは思っているのだが、この一種の強引さは、長所であり短所だ。ついていけない人も多いのではないかと思うのだ。

しかし、ボルニアを率いるのはこの王しかいない。

「翼竜を飛ばせばいいのにな。そんなのはイオでもできる。このアイギスは分断され広すぎて、連絡が届かない。これだけ橋で分断されて、どうやって、防衛兵団を指揮するのだ？」

「アイギスを守るのは水竜の騎兵団です。それはご存知のとおり、騎士団に属します」

「近衛兵が水竜に乗ればいい。それよりも翼竜の使い方を覚えればいい」

次王のことばは端的で冷たかった。

「あ、あの、わたしたち近衛兵は泳げないものがほとんどです。泳げないから騎士団ではなく、近衛兵になっています。できないから近衛兵なのです。それに、装備を身に着けて泳ぐのは至難です」

実のところボルニアの兵団に泳げる兵はない。

だから次王の言っていることはないものねだりなのだが、イオは少しだけこのレイという男が好きになったというか、同情した。次王の言う通り誇りは失っていない。

「ならば、余計に翼竜の使い方を覚えろ。イオ、教えてやれ。第2軍にはおまえほど翼竜の扱いに長けたやつはいない」

「あ、あ、はい。でも、これは機密で」

正直に言うと、この翼竜を駆使した次王の電撃戦は、ボルニアのほかの軍にも教えていない最高機密である。次王がもし、王位継承戦を戦う気ならば、ぜったいにほかに漏らすべきではなく、この命令だけは戸惑うのであった。

「イオ。アイギスは第2軍の家であり、近衛兵も騎士団も家族だ。家族に秘密はない。それともレイが気に入らないか？ こんなのが家族になるなど気に入らないか？」

「いえ！ そんな！ めっそうもない！ レイさんの将来の貢献には、ほとんど疑っていません！ わたしの剣も届きませんでした。こんな強い人は見たことがありません！」

次王はゆっくりと頷き、レイの肩を叩く。

「そういうことだ。イオに学べ。もしイオが文句を言ったらおれにいえ。こいつは強いぞ、おれの腹心をしているぐらいだ。ちびだからとあなどるな。リュディアに学んだ秀才だ、博学だ。おまえもその太刀筋を受けたらう。理由なく側にいるわけではない」

レイはこくりと唾をのみ、おそろおそろイオを見る。

「おまえは強い。そうでなければこんなこと教えたりしない。自信を持て。おまえがアイギスを守るんだ。おまえじゃなければ任せなかった」

ひとりごちたように次王は呟く。

「まさか、こんな精強軍が見向きもされずにあつたとはな」

アテナイスの近衛兵などだれも見向きもしてしていなかったのだ。

※

「それで、レイ、さん？ 僕はいちおうボルニアの次期宰相ということになっています。ちょっとお話を伺っていいですか？ 兄者もいいかい？」

兄貴が聞くと、レイはぼんやりと振り返り、小柄な兄貴に聞く。

「な、なんだ？」

「あ、ごめんなさい。口をはさむつもりはなかったんだけど、ちょっと確認したいことがあって……」

見慣れた光景だった。この兄貴はとぼけて聞いているようで、実は本質に鋭く切り込む。

「兄者は、このレイさんをアイギスの総督にするの？ 僕は反対しないけれど、そうするつもりなの？」

次王は兄貴の言葉を測りかねているようで、レイはそれを聞いてぎょっとした。

総督とは、軍事内政に全権を与えられた、古サウスの役職である。その伝統の残るエストの武官であるレイには意味が分かったようで恐縮するが、次王にはさっぱりわからない様子だった。

「その、その総督というのはなんだ？ 説明しろ」

兄貴はほっとしたように落ち着き、その膨大な知識の一端を次王に献上する。

「エストは千年王国だ。古サウスの伝統を受け継ぎ、古の統治の知恵を引き継いでいる。千年続いている王国だと、誰も信じている。エストとは、基本的にフィヨルドの都市国家間で結ばれた盟約の国家なんだ。防衛が容易なフィヨルドの各都市が結んだ盟約。それは、航路の安全を守るためのものだった。エストというのはもともと航路を守る同盟なんだ」

次王はまだ分からないといらいらするが、レイは感心のため息をついた。

「だから、エストの諸都市にとっては大切なのは航路。この航路をお互いに害さないという諸都市の同盟がエスト。そして、この盟約国家の盟主に選ばれたのが、アイギス。難攻不落のこの群島が首都に選ばれた。アイギスは王都ではなく、なんとといえばいいのだろう、盟主の都だ」

「だが、千年あれば、争いもあるだろう」

次王が聞くのに、兄貴は喜んで頷く。

「そう、そうだ。それでアテナイス制が生まれた。アテナイスは個人名ではないよ、称号だ。ボルニアの言葉で訳せば、皇妃がふさわしいかもしれないけど。アテナイスは、絶対中立の立場でエストの諸都市の仲裁をする、もう何百年にも渡って引き継がれてきた伝統。アテナイスは国内のみなしごから選ばれる。これは血筋があると、それがひいきに繋がるからね」

兄貴はレイに聞いた。

「いまの代のアテナイスが古城に入ったのは何歳のときだい？」

「え、10歳ぐらいだったと思うが、おれもその時は近衛兵ではなかったから、」

「北方は南方に比べて、結婚適齢期が高い。なぜそうなるかはわからないのだけど、歴史書を読むと、その顕著さが際立つ。ボルニアでは十代で婚姻するのも珍しくないけど、北方ではそれが三十代でも珍しくない。だから、アテナイスさまはもう十数年もアテナイスとしての教育を受けていると思われるんだ。先代が亡くなったのは？」

レイは、兄貴の適切な指摘に困る。

「あ、5年前だ。これは間違いない。おれも葬式には参列した」

「では幼少期から成人するまで、ほとんどアテナイスになるための教育を、先代に叩き込まれて過ごしている。これがアテナイス制だ」

イオはふと気づいて聞く。

「なぜ、結婚適齢期が問題なのですか？ アテナイスはそもそも婚姻しないはず。なら、婚姻適齢期は関係ないはずではないですか？」

兄貴はうんうんと頷き、イオを頼もしく見つめる。

「その通りだ、イオ。しかし、アテナイスの先代は、アテナイスに最大の武器を与えようと思った。この眠れる千年国で唯一目覚めているのが歴代アテナイスだ、盟約を守る女神さまだからね。それが何だったのか分かるかい？」

イオはしばらく考えて愕然とする。

それはアテナイスが実際にやったことじゃないか。

「いざとなれば、籠絡もできる……」

「そのとおり。僕はこの婚姻は反対しない。そもそも、兄者がエストを籠絡する材料に使ったぐらいだし、兄者が上手く使われているわけじゃない。そもそも相手に害を与えるようなことをアテナイスはしない。ただ、これで、ボルニアとエストは運命共同体になったのは確かだ。それがたった一人の犠牲で成り立つならば、こんな安い取引はないだろう？　これがこの国のしたたかさだ」

(なるほど、でもそれはアテナイスがそれを交渉材料として、「常に駆使していた」ことを意味する)

「でも、それって……」

兄貴はふっと笑う。

「イオ、充分腹心らしくなったじゃないか。そうだ。だからアテナイスは面倒なんだ。だけど、くりかえすけど僕はこの婚姻には反対しない。そもそも王命だしね。それに兄者は、そんなことも知らずに、アテナイスの至宝を手に入れている。レイさん？」

兄貴が言うのに、レイはびくりと首を上げる。

「総督は簡単に言うとエストの王だ。僕は総督でもなんでも反対はしない。兄者に必要なのは、アイギスの総意だ。もし、レイさんが総督職が欲しいならば、僕が第2軍を説得しよう。兄者が反対すれば説得しよう。僕は兄者の半身だ。半分とはおこがましいのだが、もう一人盟友がいる。そいつも説得して見せよう」

アイギスは次王の個人的な資質の前に王たることを認め、アテナイスを提供している。アイギスの総意はもう固まっているのだ。レイが降りたのも、それを見ての判断であるし、王としてふさわしいと、ボルニアより先にエストで認められている。

しかし、実のところ、兄貴が承認していることがどんな意味を持つのかを、エスト人はまったく理解できない。

リュディアの次王という地位が、レイたちアイギスの人々には分かっていない。

ボルニアの王を決める部族が、リュディアだと言われている。

莫大な官僚組織を持つリュディア族の賛同を得られなければ、ボルニアの内政は機能しないし、そもそも規模的に大部族なのがリュディアなのだ。

「余計なことをしなくていい」

次王が言うと、兄貴は少し感心した風にことばをおさえる。

「レイ、おまえは近衛兵団を指揮できる。この前も、今も、近衛兵はおまえに従っていた。このおれを殺めるという指示にも従ったのだし、エステバンへの伝令にもさっき従った。それはおまえに近衛兵団が従っているということだ。だからおまえは近衛兵団を指揮するにふさわしい。しかし、騎士団はどうだ？　騎士団はおまえに従うか？　おれは、戦場でエステバンに従っているのを見た。だから、あいつなら騎士団を率いられると思っている。そして、同じ重責を担うエスト人同士なら協力もできると思っている」

あいつは敗軍を率いていたと呟く。

レイはどうだかわからないが、兄貴は感銘を受けていた。

「もし、騎士団も率いれるならば、おまえが率いてもいい。ただ、騎士団は敗軍だ。士気を立て直すのは大変だ。それに弱い。きっと近衛兵の足手まといになる。エステバンを上手く使え、協力しろとおれが命令

する」

レイの顎が上がる。

「おれはおまえを買っている。だが、アイギス市民はおまえに従うか？ おまえの指示は正しいものとして、いのちを預けるほどか？ もし、騎士団も従い、アイギス市民も、そしてエスト全土が従うのであれば、おれは迷うことなくおまえをエスト総督にする。できることからするんだ。できることが増えれば、おれは迷うことなくそれにふさわしい地位にする。総督にふさわしければ、総督にする。地位が仕事を与えるんじゃない、できそうだから地位を与えるんだ。できるようになれ。貪欲にどこまでも望め。どこまでもやろうとしろ。達すれば絶対におれは与える」

それはあきらかなボルニア流だったが、レイの心には響いたようだった。

兄貴は嬉しそうにうんうんと頷き、レイは次王の前に正規の礼で忠誠を誓う。

イオはひとりごちる。

この王は、エスト併合を契機にボルニアをつくりかえようとしている。

これまで、リュディア族はボルニアの内政を牛耳っている一大官僚部族だった。

その長である兄貴がなぜ次王を支持しているのかは謎なのだが、リュディアがボルニアを握る。

ボルニアの宰相というのはフロックではなく、兄貴は生まれて頭角を現してきたときから、その地位を約束されていた。そもそも宰相に選ばれたものが、次の王なのだ。

だが、鉄鎖の次王はその聡明な兄貴の想像さえ越えようとしている。

それを一番喜ぶのは、王を選んだ兄貴のはずで、その原因を何だったかと考えるはずだが、それはイオにも分らない。端的に言えば、それがこの次王がイオを決して手放さない理由であるし、いくら考えてもわからない理由は、イオが何をしたのかをイオ自身がまったくわかっていないことにあった。

誰もが羨む天性の外交官が妻となったのは、イオと次王の合作がきっかけなのだ。

それで、アイギスは鉄鎖の次王の資質を理解した。

民の支持を見て、アテナイスは妻になった。

「アテナイスは面倒だと言ったな？ それはなぜだ？ 変な契約をしているのか？」

次王が振り返るのに、兄貴は、あ、と思い出したように言う。

「うーん、いや、それはないと思う。たぶん何の約束もしていない。ただ勘違いしている奴らが大量にいるということだよ。それが襲い掛かってくる。それが大量なんだ、たぶん。ついたばかりだから分からないけど」

「勘違い？」

イオは理解する。アテナイスは周囲にぼんやりとした期待を持たせているのだ。アテナイスの慎重さから言って、変な約束はしていない。

「何の約束もしていないのに、アテナイスは自分のものだと思っている奴らが大量にいる、ということ。それは婚姻のお披露目で明らかになるよ。間に合ってよかった」

次王は理解が難しいようで、眉根をしかめる。

「それでどうなる？」

「奪い取ろうと襲い掛かってくる」

その言葉は次王の理解に直結したらしく、直断した。

「叩きのめすまでだ。何千騎いる？ アイギスの防衛網は完璧だ。ここに、ボルニアを征するだけの兵がいる」

兄貴はゆっくりと笑う。

「では、北方の征服なんて、朝飯前だね。でも、策がある、それはゆっくり後で話すよ。王位継承戦争もこ

れで片付けよう。考えてみると簡単なんだ。あっさり片付く」

この策が北方大陸どころか、のちの世界の勢力図を決めるのである。

まったく困った兄貴である。

にこっとされても困る。

※

「あ、そうだ。そういえば聞いてなかった」

第2軍の本営から、リュディア族の宿営地に向かう途中、兄貴は能天気な声を出した。こういうときの兄貴は、基本的に油断ができない。ずばっと切り込むときにそう装うのであって、これは切り込むよ、という合図だった。

「イオは、なんで兄者に従おうと思ったの？」

次王はそっけなく言う。

「話しただろう。イオは老王に対して暗殺を試みた。それを止めた。それだけだ」

「うん、それは聞いた。でも、イオがどう思ったのかは聞いてない」

混乱してくる。正直、次王に手首をつかまれたことはトラウマなのだ。

完全に誰にも察知されていないようには準備していた。それが阻止された。握られた手首の跡が罪のしるしなのだ。いまでもその跡はうずく。

「それに意味があるのか？」

次王のことばは、イオを守っていた。

「イオの口からききたいんだ。別にイオが悪いとは思っていない。僕は知りたいんだ。イオがなぜリュディアから去り、そして、その後次王の側にいるのか。これは僕の勝手だ。イオをどうこうしたいわけじゃない。その理由が知りたいだけなんだ」

のんきな兄貴に腹が立ってくる。

あれほどまでに執拗に計画をたてたのに、たった一人にそれを潰されたのだ。

殺したかった。

その憎しみをどう話せばいいのだろう。

家族が全部殺されたのだ。

かわいがっていた弟も、尊敬していた兄も、父も、母も、祖母も祖父も、すべてが殺されたのだ。そのだれもがわたしなんかよりも、ボルニアの未来を創るはずだったのに。

「ぶ、ぶぞくを、部族を、家族を滅ぼされたんですよ！」

イオは感情を爆発させていた。

「なにひとつ残らないように、執拗に、徹底的に、陰湿に、凄惨に、滅ぼされたんですよ！！ その一つ一つを思うだけで、復讐しか生れない！！ だれが、家族を滅ぼされることを喜ぶんですか！！ なんて、老王を殺してはいけないんですか！」

兄貴はあつけにとられる。

「そ、それで、なんで、兄者に？」

イオは我慢した。

「このろくでなしは、嘘をついたんです。それをしたのはおれだと。それをしたのはぜんぶおれだと。殺したければおれを殺せと」

兄貴は呆然とし、事態を把握するのに、時間がかかった。

「あ、兄者はそんなことをするはずがない、それぐらいわかるだろう。鉄鎖の次王がそんなことをするはずが、どうやってもあり得ない」

「分かってますよ！ 次王さまは、そんなに卑怯でも凄惨でもない！ 絶対にそんなことはしない人が次王さまです！ だけど、あのときにそれが分かりましたか？ わたしは部族を破滅させた人を殺したくて仕方なかったんです！」

次王は言った。

「イオ、その言葉は嘘ではない」

息をのむ時間を与えた。

「おれが殺した。おれが止められなかった。どんなにひどいことになるかを理解しながら、おれはあの老王の暴虐を止められなかった。イオは知らないかもしれないが、おれは老王のすべてを掴んでいた。正直、その前に常におまえがいて邪魔だった。おまえは優秀だった。だから、おまえが老王の暗殺を試みていることが分かった。しかしおまえを止めることしかできなかった。こんなことしかできなかった。それはおれの罪だ。殺したければおれを殺せ。イオにはそれだけの権利がある。おれはそれを許可している」

兄貴は啞然とし、イオの赤毛を見つめる。

「そうか、これはイオの言葉ではないな」

次王はイオの小さい肩を叩き、おまえはリュディアの子だったのだな、とささやく。

「ちがう！ あたしは、鉄鎖の次王の歴史を書くんだ！ そのためにいるんだ！ あたしはリュディアに保護されたけれど、鉄鎖の次王の書記だ！ そのすべてを記録するのは、あたしだ！ それはリュディアには譲らない！ これだけは、あたしのものだ！」

レイがため息をついて、兄貴の肩を叩く。

こりゃあ、頑固だ、説得しても聞かねえな。

兄貴はため息をついて肩をすくめ、説得したいなんて思っていないよと返す。

「イオ、おまえは立派な兄者の腹心だ。正直、ここまで成長しているとは思わなかった。僕が言えることはないよ。やりたいことやって、それから死ね」

最後のことばはボルニアで一般的な慣用句である。だいたい30才になる前に死ぬのがボルニアだ。戦いばかりで、みんな死期が早い。

「次王さまの前に死ぬつもりはないです」

「そうじゃないと、歴史が書けないからなあ」

兄貴はおかしそうに笑い、ぼくも気を付けないとと気楽に話す。

「イオ」

次王が口を開く。その視線はどこか戸惑っていて、考えがあるようだった。

「おれは、おまえを見て、これが老王の失政であると同時に、おれの責任だと思った。こんなむごいことを許すべきではなかったと。だが、おれには力がなかった。それはおれが不甲斐なかったからだ。イオ、おまえに出会って、おれには分かった。こいつが心から従える王におれはなれるだろうか？ 老王と同じ道をたどるかも知れない。これは恐れだ。怖いんだ。だれもそうならないと保証してくれない」

手に取るようにこの正直な青年の恐れが分かる。

「だから、おまえが欲しかった。おれの治世を見せたかった。違う世界を見せたかった。それが同じだと思えば刺してくれるやつが欲しかった。おれが死ねば、その暴虐は続かない。イオはおれが間違っていたら殺してくれる。それで心が安らぐ」

これは王の深い闇だ。

イオはボルニア王という地位について考えをめぐらす。次王が言う通り、悪い見本しかなくて、うんざりとしてしまう。

兄貴やレイがことばを発するまでもなく、次王は言う。

「もし問題があれば、言え。おれはおまえたちを信用している。刺せとは言わないが、おかしいと思えば言え。遠慮は許さない。遠慮は最大の罪だ。ボルニアには3人の王がいる。全員が王だ」

この言葉が、ヴァンダルの次王、リュディアの次王、レトの次王の3人を指すことは、すぐにわかるのだが、この言葉は、北方大陸中に広まる。そのひとりがレイなのか、エステバンなのかと散々に噂になるのは、おまけみたいなものだ。どう考えてもボルニアの王ではないだろうと思うのだけど。

「おまえも王だ。イオの刃には気を付けろ。おれは平気で許可するぞ。王として顔向けができることをしろ」

次王が言うのに兄貴は、ちらりとおどけたように見る。

「こわい、こわい」

「そういえば聞いていませんでした」

イオが口をはさむと、次王は、ん？ と視線を向ける。リュディアの宿営地はもう近いはずだった。その先に、翼竜の腸の鍋が待っているのかは謎だったが、リュディア族はそもそも戦闘的な部族ではないので、牧歌的である。

「兄貴に聞きたい。なんで、兄貴は次王さまに従うと決めたのですか？」

兄貴と次王はうーんと、お互い見つめあって悩む。

「いつというのはいないんだ。記憶ないような頃から、一緒に狩りに出ていたし、思い出すといつでも一緒にいた。だけど、兄者はすごいんだ。竜を次々と狩った。ほんの子供の頃だ。だから、ずっと一緒にいるためには同じことをしていてもだめだと分かった」

初めて聞く兄貴の幼少期である。

「それで本を読んだ。兄者は本を読まなかったから、本を読めば兄者の側にいれると思った。それからは聞くかい？ 閉じこもって本を読む話ばかりだけど」

というか、さすがに兄貴には追いつかないが、次王は読書家だ。

サウスの書物さえ読むほどだから、順位をつけるならば、一位と二位だろう。

次王は恐ろしいほど読む。

知らないのではなくて、知らないふりをして、自分の理解が正しいことを確認する。

イオは間違ったことを言った。

「では、リュディア族がヴァンダル族の指揮下に入ったのはどうしてですか？」

次王と兄貴は顔を見合わせて、次王が言う。

「イオ、リュディアは下僕ではない。そんなことわかるだろ。おまえはいちおうリュディアの人間だ。だから、その侮辱はぎりぎり我慢しよう。だから繰り返す、ボルニアには3人の王がいる」

兄貴が助け舟のように言う、

「リュディアは助けてくれる部族なしに存在できると思うかい？」

リュディア族は、ボルニア内で官僚部族と言われる大部族である。これほどまでに多様な部族入り乱れるボルニアにおいて、内政が機能するのはリュディア族の圧倒的な内政力によるところが大きい。そのため、リュディアを征するものがボルニアを征すると言われるほどで、兄貴はその全責任を負っている。

そもそも、この兄貴はその全権を握ったのちに、自分の欲望の為に、全世界から書物を集める事業を始めたのであるが。

「争いがあったんですか？」

イオが聞くのに、兄貴は頷く。

「大戦争だ。ボルニア史上初めてかもしれない。それにリュディアは巻き込まれた。あのときイオもいたよ。ちいさくて、よく分からなかったかもしれないけど」

記憶がまったくない。

どこで戦争が起こっていたのだろう……。

「現王が、リュディアに服従を要求した。王権にリュディアは従わなければならないと。それを永続化しようとした。もちろん、リュディアは特定の部族に従わない。部族としての誇りがあるからね。隷属は奴隷だ。絶対に拒否する。それを破廉恥にも求めてきたのが現王だ。現王には強大な兵がある。それで、兄者に助けを求めた」

それが、幸運にも鉄鎖の次王という神がかり的な天才だった。

「強いという言葉さえ馬鹿らしくなるほど強かった。ほとんどの戦場で敵を壊滅させ、戦う事さえおかしいと思えるほどだった。なぜ戦おうと思うのか不思議だった。全部死ぬのに。明らかに強いのに」

鉄鎖の次王と呼ばれる青年の、その背中が名づけられるのは、老王との戦いのためだったのだ。

(あれ？ なにかおかしい)

それが何なのか、イオには分からないのであった。

9. エマの知らせ、騎士団と決裂

イオの鋭さは、次王が寵愛している感性だ。

ほんのわずかな違和感に気付き、それがしてしまう致命的な事象に気付く鋭さを、イオは持っている。次王が、イオを護衛だというのはフロックではなく、炭鉱のカナリアよろしく、次王はイオを側におきたいと思っている。

アテナイスとの対面でしたように、イオはそこにあるおかしなにおいをかぎ分ける。

次王は、老王対策だと言うが、その陰謀の匂いを嗅ぎつける力は、イオ以上のスペシャリストはいないことを分らせる。そもそも、もう既にいくつの陰謀を破ったのか知れない。

「うわ、匂ってきましたね」

イオはリュディアの宿営地から漂って来る強烈な香辛料の匂いに鼻を利かせ、とても心配そうにレイを振り返る。

「すごい匂いだな。これがボルニア料理か？」

「あ、いえいえ、これはリュディア族だけです。リュディアだけ昔から特別なのです。リュディアはジャングルの香辛料を見つけてくるのがほんとに上手いんです」

実際には、リュディアの香辛料はボルニア内では高値で取引されるのだが、それはさすがにイオは言わなかった。これが普通と思われると困るのである。

「別に食べなくてもいいものだよ？」

兄貴はさらっという。そもそもリュディアの伝統料理を食べて無事で帰った人はいない。

辛いのである。

内臓がひっくり返るほどとはよくいう比喻だが、はじめて食べれば、二三日はおかゆなどを食べて養生しないと、帰るだけの足腰が立たない。

さすがにイオも、次王も馴れているのだが（馴れとは怖いものである）、まったくの客人であるレイが食べるのはどうかとは、イオも思うのだ。

次王はその様子を見て、すこし考えて言う。

「食うな。これは忠告だ。もっと身体に合う料理を出すように、ボルニア中にいう。だから食わなくていい」
「ですが、」

イオはますますこの男が好きになる。

イオだったら絶命しても食べる。ただその役はイオひとりで十分なはずで、この頼りになる近衛兵団長にはもっと別の役目があるはずだった。

「近衛兵団長殿が食べると、近衛兵団は全員食べなければなりません。三日は立ち上がれなくなります。それは次王さまにはとても困ることなのです」

イオの言葉に、レイは困る。

「近衛兵団長殿？ おれが？」

「そうですね？ 率いてもらわなければ困ります。次王さまはそう言いました、あなたがアイギスを守ると。近衛兵団は一秒たりとも、この第2軍になくってはならないものなのです。それを一秒でも損なうわけにはいきません」

実のところ、リクトルを無事に第2軍の指揮官に収めたのはイオである。

だが、それが腹心の仕事だというのは、高望みである。

次王は分かっているのか、分かっているのか、とにかくイオを気にしていた。

ほとんど非公式であるのだが、イオはおそらく兄貴ならこういと思ったと弁解するだろう。ただそれは、みごとにリュディアの次王の代理をしているのであって、兄貴であれば困ったなあと苦笑しつつ、その

成長を喜ぶであろう。

イオはリュディアの妹なのだ。

そして四人目の王なのだ。

そもそもリュディアとは血は繋がっていないが（部族が違うので当たり前だが）、兄貴との婚姻はあり得ないとイオが思うのは、イオが兄貴を兄貴と思っているからで、イオはイオでリュディアの子ではあるつもりなのだ。

イオの失くした家族を埋めたのはリュディア。

それは、絶対に失いたくない繋がりであり、そのもっとも強いつながりが兄貴なのだ。

自分は兄貴の妹なのだ、それが代理して何がおかしい。

それは、兄貴であれば困ったように笑い、苦笑し、あー、こまったなあと、あっぴろげに言うはずだった。「レイさん、イオの言う通りだ。どうもイオはあなたを気に入っているらしい、とてもおかしいのだけど、イオの言葉はぼくの言葉と違っていい。そして、兄者も反対しないよね？ こんなに側に代理がいたとは驚きだよ。イオにいつ兄者の側を取られるか心配だよ。あー、いや、もうとられているか」

兄貴のことばはとても明るく、この人はいつも青空のように明るい。

決してイオには代理が務まるはずもなく、そんなわけがないといつもイオはほっとするのだ。知識量が違う。分かっていないことは分かっている。兄貴がいてくれればイオが安心するのは、自分が間違えても補足してもらえと思えるからだ。

空を見れば安心する。それは次王も同じだと、イオは思うのだ。

リュディアの宿営地に入ると、においが強烈になる。

あちこちでたぎっている鍋のそれぞれが強烈な香辛料で、なんだかわからない肉を煮ており、幼児がそれをつまみ食いしたりするのである。

習慣とはおそろしい。

レイはさすがに、そのおどろおどろしさに気付いたようで、鍋に視線を合わせられないでいた。まずもって、鍋にはおかしなものは入っていない。ただ辛いだけであって、中身が翼竜の腸とか、獣脚竜の腿だったりするだけである。

「食べなくていいです。食べる必要はありません」

イオは念を入れて言う。

「そうか、しかし、このにおいは強烈だな。どうしたらこんな匂いになるのか、まったく想像もつかない」

レイは冷静だったが、次王も兄貴も、さすがにこれがやばいことは分かっているようだった。兄貴が言う。

「これは、特別なリュディアの料理で、ボルニアの一般的な料理ではありません。もっと優しい味もありますし、アテナイスさまには、こんな料理は出しません。これは食べるべきものではなく、兄者を歓迎しているのです」

その言葉は素晴らしく、レイは冷静になった。

「からいのか？」

「ええ、数日は立ち上がれなくなるほど」

イオの言葉に、レイは頷く。このエストの最高責任者は、イオの言葉は信頼することにはしたようで、イオを見てほっと息をつく。

「わたしはボルニアを知らないのです、教えてほしい。分からないんだ。なにもかも。重責を負いたい。でもどうしたらいいのか全く分からない。それに、助言をしてくれ」

イオは恐縮する。

「わたしは次王さまに、兄貴が言いそうなことを言っているだけです」

「やりたいことをやってから、死ぬ」

兄貴が、唐突にボルニアの慣用句を言う。

レイは困ったようにその真意を測りかね、言葉に詰まる。

「きみは生きている。それは殺さない限り、だれにも否定しようがない。きみは生きているんだ。生きている限り、自分のやりたいことをしろ。ボルニアにはそれを妨害する人はない。ボルニアは自由だ。望むことをしろ。ぼくは王だ。そう言われた。イオに殺されるかもしれないけど、その王として言う。おまえは自由だ。好きなことをしろ。ボルニアは自由しか尊重しない」

レイは迷う。

「裏切ってもいいというのですか！　こんなに厚遇されているのに！」

次王は冷たい言葉を言う。

「裏切らければ裏切れ！　それはボルニアがそれまでだったというだけだ。そんなにみじめになりたくない。だから、裏切ってほしくないとは思う。ただ、それは、他人の評価だ。他人の評価は、受け入れる。ただ、そんなにみじめだとは思いたくない。おれはおまえたちの王になりたい。そのためにどうすればいいか、教えてくれ。それは全部おれの義務にする」

この王は、とてもたくさん誤解される。

暴力的であったとか、支配的であったとか、乱暴であったとか。すくなくとも蛮族の連合体であったボルニアを統率したのである。文化も風習も違う諸部族を、史上唯一統率したのはこの王である。

それがボルニア全土の規範を作らなかったと考えるのは困難である。

ボルニア王がはじめて生まれた。そう考えるだけの知識はイオにはなかったが、兄貴はそれが分かっているはずだった。

いや違う。

兄貴はとっくの昔に分かっていた。このヴァンダルの次王が、稀代の王の器を持つ、史上最高の王だと。

それはイオにはようやくとわかり始めたところで、これからボルニアが辿る道筋に、果てしない希望を持ったのだ。まず、シドと戦う。それからどうなるのだろうか？　シドには大量の技術者がいる。サウスの秘密兵器を復興するかもしれない。そうなっても、ボルニアは勝てるのだろうか？

「イオ、翼竜を飛ばせ。あいつも知りたがっているはずだ。レトに詳報を知らせろ。大陸の果てからでも、最大戦速でアイギスに駆けつけるはずだ」

もう一人の王が来る。

翼竜を飛ばすのは難しいことではない。

とても簡単に、翼竜は主の元に戻るし、あとは伝令文を結いつけて、飛ばすだけでいい。

笛を鳴らせば、翼竜は寄って来る。それがどの部族の翼竜なのかを見なければいいだけの話である。ただ、翼竜を飼い馴らす方法だけは機密で、そもそもここに機密があると思わせてはいけない。

翼竜はある食べ物でなつく。

それを連続的に与えればすぐに従ってくれるし、ほとんど労力はかからない。

だから、その食べ物を教えるのは禁忌に等しかった。

「たいちよー！　エステバンと話をしました！」

けたたましくたぶんエマだったか、そんな少女が大声を上げて、駆け寄ってくる。

次王は冷静に言う。

「黙らせろ。騒々しい」

レイは端的に叫ぶ。

「端的に言え！ その前に息を整えろ！ 近衛兵が息を切らしてはならない！」

エマは几帳面に駆け寄り、次王の前まで来て肩で息をし、たくさんの息をはいた。それから落ち着き、それでも肩で息をした。

「決裂です。エステバンは次王に従いません」

イオは計算をするが、それよりも次王の方が早かった。

「では、従わせる。エステバンが否定した理由は何か。それを満たす」

エマは信じられないという表情で、次王を見上げる。

「自分たちは負けてないと」

次王はおかしそうに笑う。それは世界を掴んだ王者であるように、一切の遠慮をなく笑った。その大声は、世界に響くようで、どんな大声も届かないほどの盛大な笑いだった。次王は楽しそうだった。

「おまえが欲しい。そう言え。おまえがアイギスの騎士団の主だ」

10. 古城での婚姻準備、対シド戦を決める

「次王さま！ どれほどお待ちしていたことか！ いくぶんの時間も、もうありませんのですよ、お分かりになっておられますか?!」

アテナイスの古城は、活気に満ちているというよりは混乱していた。

いろとりどりの衣装を身にまとった侍女たちが走り回り、大きな喧騒を作り上げていた。

次王はすこし戸惑って、イオに呟く。

「ずいぶん、騒々しいな・・・」

「あ、はい、なんととっても、はじめての祝事らしいですから」

次王は分かったように、息をのみながら頷き、兄貴が助言をしようとするのを視線で制する。駆け寄った侍女の長を見下ろし、その両腕に抱えた服の束にぎよっとする。

「アテナイスさまはもう準備を整えられています！ はやくお召し物を決めてください！ お二人の衣装が決まらないと、他の者が着る服も決められません。この城は大騒ぎなんです！ こんなに急にアテナイスさまがご婚姻なされるなんて！」

その迫力に気圧されるが、次王は落ち着いて聞く。

「アテナイスは、あ、いや、妻はこれは了承しているのだな？ 婚姻の式をするよ」

盛大すぎるとイオが思うのは当然で、実際のところ、ボルニア王とエストの姫君の婚姻であって、千年間眠っていたこの国には初めての事態なのである。イオは、周囲に寄ってきた侍女たちに戸惑いながらも、手足の長さやら、寸法やらを採寸する侍女たちに取り囲まれた。

兄貴は同じように採寸されながら、イオに、これが兄者の王としてのはじめての仕事かもしれないよ、と端的に教えてくれる。

「アテナイスさまは、とてもお喜びです」

「それならいい。妻に嫌われる夫ほどみじめなものはない。この城はいい城だ。ここを居城とすればどんなに嬉しいだろう。立派な城だ」

あわてて兄貴がことばを付け足す。

「次王はここに住みたいと言っている」

兄貴がさりげなく言うのに、侍女たちは振り返り、ああたいへんだと、もっと混乱して慌てはじめた。次王がアテナイスと婚姻するのであれば当然に、次王の居所はこのアテナイスの居城になる。だが、この古城はアテナイスのためにあるのであり、そもそも、夫がやって来ることを想定しているはずがなかった。

散々に激論を交わしていた侍女のうちの二人が、次王のもとに来る。

「この城の料理はどうしますか、次王さま！ 決めてください！ わたしたちでは決められないんです！」

次王はすこし困って、頬を搔く。

「ボルニアの料理は正直辛い。おれはだいたい馴れたが、それを貴国の人々に強いるのはどうかと思う。食べ馴れない者は数日は立ち上がれなくなる。それでは困る。兵を寝床に横たわらせるわけにはいかない。なので、食べ物は全部エスト流にしてくれ。エストは海産物が豊富だと聞いた。その料理を食べたい。おいしい魚を食べたい。タコが食べたい、カニでもいい。ボルニアの連中はシーフードは馴れていない。そこには配慮をしてくれ。たぶんスパイスを用意して、自由に辛くできるようにしてくれれば、すぐになれると思うが」

次王のことばに、侍女たちはふしぎに納得し、すぐさまあちこちに散っていく。

ふしぎそうにするイオに、兄貴はささやいた。

「ふふ、イオもまだまだだな」

それから、走り回る侍女たちに、ボルニアの香辛料の説明を始める。

どんな香辛料があって、どんな味がするか。その使い方、ボルニアでの料理の仕方。

まったくこの兄貴は、と思うのはイオの勝手ではあるのだが、そもそも次王の側近というのがイオの領域を超えている。それが礼式にはうるさい、千年王国の王の側近であればなおさらだ。それが務まるのは兄貴であり、幼少時代から次王の側にいるのだから、どう考えてもイオは分が悪い。

さかなの好みなど分からないし、なにを食べたことがあるかも知らない。

だが、この兄貴はそれが分かるようで、次々と、こまかな指示をしていく。

それを熱心な侍女たちが筆記していき、一枚一枚書きあがるなり、城中のあちこちに散っていく。それをイオはぼかんと眺めた。

(なんて、忙しい人たちなのだろう)

ボルニア人は一般的に臭みの強い食事を好み、強烈な辛味で味付けする。

それはエスト料理とは合わないのではないかとイオは思ってしまうのだが、イオはエスト人のことは分からない。兄貴のように諸国の人々と触れ合っているわけでもないし、そもそも、知識量では圧倒的な差がある。だが次王はそこを見て、イオを側においているわけではないし、同じ能力を持った人物がふたり欲しいわけでもない。

イオは兄貴よりも信頼されたいと思っているわけではないし、むしろ、兄貴が側に来てくれる方が、自分の失敗をカバーしてくれるだろうと思っている。

しかし、自分の役立たなさが浮き彫りにされていくのはつらい。

(あたしが役にたつはずない。これはめちゃくちゃだ。あたしは兄貴に教わったことしか知らないのに)

兄貴は兄貴で、イオを少しでも自分の代理をしてくれるようにと思っているのだが、それは本来次王が求めていることではないし、端的にそれはイオに恐ろしいほどの勉強を要求している。

その途方のなさに、震える。

青ざめたイオを見て、兄貴は気を利かせて、フォローを入れる。

「イオ、ほくも兄者から学んでいるんだよ？ わかるかい、イオ。兄者は世界を動かそうとしている。ぼくは軍を動かしたことはない。リュディアの次王だからね。助けを求めることしかできない。だから戦ができる人を尊敬する。イオはできるかい？ 世界を変えてしまうような、戦を。ぼくはできない。でも、それができる人を見れば、どうすればできるかが分かるんだ。見ていればいいんだ。そして学べる」

次王は颯爽と場内を歩き、あちこちの侍女たちと細かな話をしていく。

それはほとんど、話を聞いているだけなのだが、こまかなところで小さな決断をし、侍女たちを勇気づけ、そうやって全体像を作っていく。ボルニアに金はない。だから、この礼式を成立させるのはおまえたちだし、その資金源はエストの資産であって、ボルニアは何もタッチしていない、おまえたちが決めろ。この式はおまえたちのものだ。

一貫して鉄鎖の次王は、エストに対等なパートナーとして自律を求めている。

これは近衛兵たちに求めたものと一緒だ。

「この婚姻はエストの祝事だ。アテナイスを妻に迎えることには、とても大きな喜びを感じる。だが、それはエストが祝うべきだ。おれは嬉しいが、それよりもアテナイスが嬉しいほうが嬉しい。心から祝えて、通じ合えるのはおまえたちだけだ。エストの民がかなしんだら、アテナイスはこの婚姻を躊躇するだろう。おれはそれはいやだ」

さりげなく言う。

「アテナイスは、この婚姻を喜んでいないか？」

「いえ、まさか」

正直言うと、ボルニアには資金がある。

それはほとんどリュディアの資金であって、リュディアには莫大な資金がある。なので、兄貴が領けば、いくらでも資金はでるのである。しかし、次王はそれをよしとしない。

(というか、レト族もおそらく資金は貯めていると思うのだが)

おそらく、次王は資金など必要ないと思っているのだろう。

盟友が守ればそれでいいし、それに対価を求めたことはない。

ヴァンダル族は、資金力に雇われる傭兵ではないし、資金力を誇示する部族でもない。ヴァンダル族にあるのは狂気とさえも言われる無類の強さ。盤石なリュディアとはまったく正反対と言ってもいい部族なのだ。

「では、祝ってくれ。資金は足りなければ出そう。ボルニアは貧素な国ではない。欲しいだけ言えばいい。金貨も出せるし、銀貨もでる。ジャングルは無尽蔵なんだ」

そもそも、リュディアとヴァンダルは運命共同体である。

次王がいちいち言わなくても、兄貴は湯水のように資金を出す。

イオはヴァンダルの風習はよく分からないし、リュディアのように対価を求めることをしない次王は、異常に思えてしまう。お金を知らないのではないかとさえ思う。

兄貴が助言する。

「お金の心配は全くしなくていいよ。ボルニアはエメラルドの産地なんだ。河底をすくうとその中にエメラルドが混じっている。ボルニアの隊商のことは知らないかもしれないけれども、その隊列はリーズデルまで届く。第2軍の装備はリーズデル製の鋼鉄で、シドの鎖帷子もほとんど全軍に行きわたっている。この祝祭の費用なんて、エスト軍の装備を刷新する費用に比べたら、子供のおこずかいみたいなものだよ」

当たり前だが、リュディア族はボルニアのお金の流れをすべて掴んでいる。

この国のすべての帳簿を書いて、まともなまわすのがリュディア族の仕事だからだ。

(あ、レト族って、商業の実働部隊なのか)

ちがう、商業の最強部族だ。イオはレト族をそんな風に見たことはなかった。

軍事のヴァンダル族と、商業のレト族。そして、全てをコントロールするリュディア族。

イオにはようやく、この新生ボルニアがどう動いているのが理解できはじめた。

兄貴がなぜ、この地位に満足しているかが分かるような気がし、実質的に兄貴が新生ボルニアの宰相であることが分かり始めた。

三人の王が、対等な立場でお互いを尊重している。

鉄鎖の次王は無類に強い。兄貴はおそらく賢い。レト族の王はどんな人なのだろう。

次王のことはを信じれば、表面上は柔らかいが冷酷で、どんな交渉でもまとめてくる交渉の達人。そして、この陣営に、天性の外交官であるアテナイスが加わる。

(わたしがやることなんてあるのだろうか?)

それは恐れだった。

必要ないのではないのではないかとさえ思う。

次王は、世界を征服しようとしている。

ザブンテを征服し、エストまで飲んだ。それが意味するのは、北方の交易路を全部支配下に置いたことで、たぶん言わないと思うのだが、実質的に北方を支配下に置いたということである。キュディアの喉元に、凶刃を突きつけている。これは怖い。ボルニアはキュディアと戦うのだろうか?

「あ、あの、聞いていいですか？」

イオがおどおどと口をはさむと、兄貴と次王がすぐさま視線を向けた。

「あ、あの、えーと……」

イオが困っていると、次王が端的に言う。

「すぐに話せ。おまえには与えた権利があるのだ。それは与えられていることは分かっているだろう？ それはおまえのものだ、おまえだけのものだ。おまえ以外には許さない」

「あ、はい。あの、キュディスとは戦うのですか？ ボルニアはエストと一緒にあって、キュディス、トランと国境を接しました」

言うまでもない、北方最強と呼ばれる二大強国である。

兄貴がすこし考える。

「トランとは戦うことにはならないよ。トランはそもそも割れているし、浮遊船団は空を飛んでこの地域は無視する。トランには5つのギルドがあり、お互いに争っている。彼らにとっては、敵対するギルドを出し抜くことの方が重要なんだ。その中ではタルボットギルドかな、もし突っかかって来るとすれば。でも、そもそもトランの浮遊船団は北方諸国なんかにはまったく価値を感じていない、だから争う気はない。藪をつついていちいちボルニアの兵団の侵略を呼びたいと思うかい？ こんな迷惑な話はない」

イオは頷き、この兄貴は全知全能なのではないかとさえ思う。

「でも、キュディスはやっかいだ。虹翼騎竜兵団の統率力は北方最強の名に恥じることはなく、うわさが正しければ虹翼には8つの軍団がある。精鋭の8軍だよ。4000騎の精鋭兵団だ。そしてこの兵団は翼竜の兵団だ。ボルニアの牙は空には届かない」

「あ、あの、虹翼は7軍ではないのですか？」

兄貴はゆっくり頷き、そうだねと呟く。

「これが一番厄介なのだが、第八の兵団がキュディスにはある。黒の兵団と呼ばれる兵団で、主に諜報を役割としている。北方中を暗躍している知られざる影の兵団。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の7兵団のおそろしい強さは全土に知られているが、この8番目の兵団はほとんど者が知らず、おそらく一番厄介なんだ。精鋭中の精鋭。たぶん、これがアテナイスの婚姻のお披露目には来る。キュディスは強い。戦いを避けるべきだよ」

次王がそれを聞いて、聞いた。

「キュディスは何が望みだ？ どうなって欲しいと思っている？」

「さあ、わからないよ。そもそもキュディスの虹翼騎竜兵団は対外戦争をするための兵団ではないんだ。キュディスはボルニアと同じような蛮族の連合国家で、大地の巫女を中心とする宗教軍事国家だ。虹翼はその諸部族の争いに制裁を与える目的で存在していて、恐怖による規律を旨としている。あの兵団は反乱を抑えるためにあるんだ」

次王はしばらく考える。

「まず手を出さないことだな。あんなところを取っても航路が増えるわけではないし、ろくな分け前を取れるわけでもないだろう」

「そうだね。でもキュディスはそんなに貧しいわけでもないよ。彼らの住んでいる地域には毛皮を算出する竜が多くいる、寒いからね」

「毛皮、ですか？」

イオが驚くのに、兄貴は平然と答える。

「キュディスの翼竜には毛が生えているんだ、そうでないとあんなところには住めないだろ？ でもボルニアに毛皮は必要ない。ボルニアのジャングルは暑い。エストは欲しいかもしれないけれど、それは交易をすればいい」

次王は考え、端的に言う。

「キュディスには手を出さない。しかしそれだけではあいつらの疑いは晴れないだろう。もっと確かな納

得が必要だ。キュディスと敵対しているのは誰だ？ 何かいないか。もともとボルニアは内紛続きでキュディスと戦っている余裕なんてないのだが、そんなことを言っても納得しない。もし、国内統一をしたのちにキュディスに侵攻するならば、争っているうちにボルニアを叩き潰した方がいいと考える。おれもそう考えるし、そうする」

次王のことばに、兄貴は嬉しそうに天井を仰ぎ、そのスタンドグラスから漏れる陽光ににっこりと笑う。「なにがおかしい？」

「いや、ぼくが考えていることと全く同じだ。どこでそんなことを知ったの？ キュディスには敵がいる。それははるか南方の豊かな国で、キュディス領内に衛星都市を持っている。そこを通じて貿易をしているんだけど、その貿易品が非常にまずい。どうやっても怒りを買う」

「なにを貿易しているんだ？ そんなものがあるのか？」

聡明な次王のことばに兄貴は嬉しそうに笑い、言う。

「奴隷だよ。その国は、キュディスの蛮族を、鎖で縛り、本国で売っているんだ。高く売れるらしい、とんでもないほど。いくらでもいるキュディス人を捕えて豊かな国で売る。これがその国がしている貿易だ」

次王の反応は早かった。

「その国は、ボルニアの諸部族にも手を伸ばすと思うか！ このボルニアのひとりの民も鎖でつながせない！ キュディスとボルニアは恐れを共有している。その国を滅ぼそう。何て愚かな国なんだろう。民は鎖でつないでも従わない。自分の未来の姿が見えなければ、同意しない。王は民を強制できるから王なのではない。王に民が従うから王なのだ。それでは老王と同じじゃないか！」

激しい叫びはアテナイスの古城中に響き渡り、動き回っていたはずの侍女たちが次王をぼかんとみつめる。イオには分からなかったが、侍女たちは次王のことばにこれこそアテナイスさまの夫であるという確信を新たにし、それから慌てて念入りに準備を始める。

この王は一貫している。

これは、レイに言ったことと全く同じだった。民がお前に従えば、おまえにその役目を与えると。

「その国は、シドです。北方最大の商業国家です」

「兵団はどれぐらいだ、指揮官はいるか」

「兵はそうですね、2000騎ほどでしょうか。ただこの兵はやっかいです。河の防衛に特化しています。ボルニアの牙は河には届かない。そして、首都は難攻不落の要害です。渡河は難しいと思った方が良いでしょう。それにザブンテの残存勢力が流れ込んでいるかもしれません。あの辺りで養えるのはシドぐらいです」

「どうせ、鎖で縛っているんだろ、それは兵ではない。指揮官は？」

兄貴は嬉しそう言う。

「非常に優れた指揮官がいましたが、もう数年前に死去しました。ただ、非常に優れた宰相がまだいます。サウスの技術の復興を掲げていて、シドはほとんどお祭り騒ぎのように、その文明の復興にまい進しています。サウスの技術があるから、シドは無敵だというように」

次王は考える。

「もし、たったひとりでも、優れたシドの博学のものがいれば、ボルニアはシドに技術力で勝てると思えるか？」

兄貴はしばらく考え、シドの蔵書が分からないなあと呟く。

「ぼくは、まだエストの書庫にある書物を読んでいないんだ。だから分からない。でも、エストの書庫は千年の書庫だからね。リュディアにはサウス語が分かる者がたくさんいる。すくなくともシドよりは、鍛えられているとは思うけど……」

こんなにも、兄貴の欲望がボルニアに上手くはまるのは珍しい。

次王は考えた。

「キュディスには〈南進する〉という。シドを滅ぼす。シドを滅ぼすことは、キュディスとボルニアが目的を一緒にしている。キュディスは理解するだろう。南進だ、南に第2軍の全勢力を向ける！ 叩きのめす。そんな国は絶対に存在してはならない」

兄貴はにこにこして言わないが、兄貴が考えていたのは、このボルニアの南進政策だった。

キュディスと衝突せずに、豊かな土地と無限の航路が取れる。

それには共通の敵であるシドに侵攻する。そして第2軍が他国と戦端を開き、そこに大義名分があれば、内紛などだれも興味がなくなる。奴隷化されないための戦いだ。充分すぎる理由である。

しかし、兄貴が想定していなかったのは、その優れた指揮官に姪がいて、その姪が稀代の天才的な指揮官であり、ザブンテをたった一つの呼びかけで掌握し、「始まりの女王の再来」と呼ばれる、最強の指揮官だったことだ。

その指揮官は言った。

「滅ぼすものがあるから滅ぼされるのではない。滅ぼすべきだからこそ、滅ぼすものが現れるのだ！ シドはそうなりたいか！」

死神リニーと鉄鎖の次王の死闘が始まる。

ボルニアには不幸なことに、この死神はおそろしく強いし、おそらく次王でさえ陣営に欲しがるような者だったのである。

11. アテナイスの名付け、書庫の主

アテナイスが階上から降りてくると、古城はざわめいた。

ゆっくりと、まったく驚きがないように自然に、アテナイスは石造りの階段を歩いてかかとを静かに鳴らす。

「アテナイスさま！」

「その名は呼ばないで、こんなときぐらい人になりたい」

その言葉はやわらかいが、たしなめるように騒がしさをおさえる。

次王はその質素な姿にほうと声を漏らし、金縛りがかかったように話せずにいる。アテナイスは部屋着のままで、次王のそばまで歩き、にこりと笑う。

「あなたの妻はアテナイスさまですか？」

次王は戸惑うが、老王に命令されたから妻にしたわけではないだろう。

ことばを失う次王を見て、これこそ夫だと理解する。

「あ、いや、失礼した。見とれてしまった、あまりにも美しくて。おれはレイに言われた。もっと次王らしい恰好をしてくれと。立派な格好でなければ王と分からないと」

アテナイスはきょとんとして聞く。

「それでなんと？」

「おまえが守るのは、服か、とです！ アテナイスさま！」

レイが慌てて答えるのに、アテナイスはくすくすと笑う。

「レイはいい王に出会いましたね？ わたしも同じように思います。あなたはこのエストを守るかなめです。そしてエストの防衛は鉄鎖の次王の指揮下にあります。その次王があなたに任せたいと思うのであれば、反対する理由はまったくありません」

「まってください！！！」

古城に響き渡る声で、エマが叫んだ。

エマはその残響に戸惑うようで、叫んでしまった自分を恥じるように、おどおどと戸惑う。アテナイスは次王をちらりと見て、息をついていう。

「どう言えばいいのでしょうか？ あ、えーと、エマ、よく言ってくれました。あ、わたしはエマを誇りに思っています。あなたを信じます。あなたが言いたいことをそのまま話してください、どうか恥じないで」

たぶんアテナイスは、次王が自分にしたのを理解しようとしているとイオは思う。しかし、エマが投げたのは、爆弾だった。

「騎士団は従っていません！ エストはアテナイスさまに従っていないのです！」

次王はとっさに鋭くことばを投げる。

なにを言うかわかっていたのだろう。

「騎士団は従わせる。おれに従えば、妻に反抗することにはならない、そうではないか？ 妻に敵対するものがあれば、それはおれの責任だ。そうならないようにするのはおれの責務だ。おれはアテナイスを守る、それはおまえと同じようにだ、それが不満か？」

エマは次王の迫力に気圧され、それでもわずかに震える。

イオには分かった。この若い副官は、といってもイオと同じような年齢なのだが、このエストの近衛兵団の中核なのだと。それは裏返すようにイオがボルニアの中核であることなのだが、そこまではイオは気付かない。

「では証明してください！ だれもが納得する形で！ 騎士団なしにアイギスは守れません！ わたしたちに騎士団の仕事までさせないでください！」

次王はあごをゆっくりとなで、しばらく考える。

そしてそのエマの突拍子もない言い分を、次王は吸収していく。

「わかった。では竜上試合を行う。婚姻のお披露目の余興にする。それで勝てば認めてもらえるだろう。これまでもそうしてきた。聖楯騎竜兵団から一騎出せ。それと戦う」

アテナイスは血相を変え、騎士団長は老齢で戦えませんという。

「騎士団長などいらん。おれが欲しいのはエステバンだ。あいつが騎士団長になる。勝っても負けても、おれはあいつを騎士団長にする。あいつはバーラルの戦いでずたぼろの騎士団を率いて、おれに立ち向かってきた。あんなにぼろぼろの騎士団を指揮していた。どんなに劣勢でもあいつに預ければ安心だ。あいつは率いる。どんなに劣勢でも騎士団を鼓舞し、それを率いる。自ら先頭に立って戦いを挑む。決してあきらめることのない防壁とはあいつのことだ。おれは、あいつ以外はいらん」

正直に言うと、竜上試合はどちらかが死ぬ。

もちろん刀剣の刃は落としてあるが、それが鉄の棒であっても撲殺されるのが日常だ。ボルニアの竜上試合はし烈で、それで死んだ者をイオは大量に見てきた。危険すぎるのだ。

「だめです！ 絶対にダメです！」

イオは思わず叫んでいた。

「あなたは、次王さまが死ぬかもしれないことをゆるすんですか！ あたしは絶対にゆるさない！ これはダメです！ アテナイス、あなたは、これを許すのですか！」

アテナイスはわずかに考えるが、次王を見つめ、あろうことか頷いた。

「エステバンはエストの大切な者です。それを殺すことはないかと約束できますか？ エストはエステバンを失うことに耐えられません。止めても頷かないことは知っています。頷いたら、あなたはあなたではなくなってしまう。それはわたしも同じです。わたしもアテナイスと呼ばれると、自分ではなくなってしまう。だからあなたを失いたくない」

次王はしばらく呆然としていたが、染み込んでくることばに気付いて、はっとして笑う。

「いまようやくわかった。どうもおれには出来すぎた妻のようだ。約束しよう。血は流さないし、傷つけることもしない。かすり傷ぐらいは許してほしいのだが、竜から落ちればすり傷ぐらいできるし、棒が当たれば打撲ぐらいはする」

なぜアテナイスはこんなにも危険なことを許すのだろう。

イオはぐらぐらと揺れる不安でいっぱいになり、さんざんにそれに揺さぶられた。

それはイオが幼すぎるからではあるのだが、アテナイスが到達している年齢相応の落ち着きにはどんなに手を伸ばしても届かなそうだった。

(この人はどう生きてきたのだろう？)

アテナイスには名前がない。

みなしごから選ばれるアテナイスは、選ばれた時から慎重に名前を消されて、アテナイスとして育てられる。家名を消され、個人名を消される。アテナイスはアテナイスであってそれ以外の名前を許されない。家名が残ると、絶対中立であるアテナイスの役目を全うできないからだ。名前が消えるとはどんな気持ちなのだろう。家族のことは一切なかったものとされ、一切のものを奪い取られる。

かわいそうと思うほどイオは成熟していないのだが、それが想像を絶することだという事だけはイオには分かった。

(この人はどう生きていたいのだろう？)

それは鮮烈でショックを受ける。

次王に名づけてほしいのだ。自分の名前を呼んでほしいのだ。

奪い取られた名前を次王に与えられ、その名前で自分を愛してほしいのだ。その名前は妻ではない。たぶん、子猫につけるような愛称でいいのだ。

そのささいな欲望の大きさに気付いて、イオは愕然とした。

あたしはイオだ。それがどんな由来なのかは分からないが、次王がその名を呼んでくれることに喜びを感じる。イオ、青色弾を上げろ！ イオ、前線の斥候の連絡を知らせよ！ イオ、アイギスについて何か知っているか？

あたしはイオだ。

そのかずかずの言葉はあたしに向かってくる言葉だ。

アテナイスには名前がない。

兄貴の言葉が正しければ、アテナイスは称号であって、それは姫さまぐらいの意味しかない。綿々と千年続いた果てにある、使い古された称号でしかない。アテナイスは人ではないのだ。でも、アテナイスは人になりたかった。

イオはたまらない気持ちになった。

「次王さま！」

おもわず言葉を出していた。

次王はイオを怪訝そうに向き、それから考える。

「イオ、話せ。そのためにおまえがいる」

イオは慌てて、考えをまとめようとし、それが言えるのは自分しかないと理解した。イオ、話せ、そのためにおまえがいる。あたしが、イオだ。

「アテナイスさまに名前を与えてください！ 夫にアテナイスと称号で呼ばれるのは不幸です。アテナイスさまは、名前を欲しがっています。どんな名前でもいいのです。それが自分を指せばいいのです。アテナイスは個人名ではありません」

兄貴はほうと呟く。

次王はしばらく考え、イオを見る。

「アテナイスは名前が欲しいのか？」

「それはあたしに聞くことではありません」

次王は頷き、アテナイスを見つめる。そして、ゆっくりとやわらかく聞いた。

「アテナイスでは不満か？ 名前が欲しいか？」

アテナイスは戸惑いながらも、おずおずと頷く。

次王は感心して、しずかに聞いた。

「では聞こう。どんな花が好きだ？ どの花が心底好きか？」

「野ばら」

次王は、感心したようにため息をつき、すてきな花だと頷く。

「では、野ばらの姫とおれは呼ぶことにする。野ばらの姫はアテナイスとは呼んでほしくない。だから、アテナイスと呼ぶな。野ばらの姫だ。これはアテナイスの選択だ。そうしてほしいとアテナイスは言った。おれは野ばらの姫の希望を最大限尊重する」

たやすいことに見えるが、千年国の伝統を根本から覆している。まるで、この次王がこの国に新しい秩序を与えたというように。

アテナイスは心底ほっとしたように頷き、その肩に寄り添って幸せそうにほほ笑む。それはイオの癪に障るのであるが、それはまた次の物語である。

兄貴が感心したようにささやく。

「イオはすごいな、みてごらん。アテナイスはアテナイスではなくなった。鉄鎖の次王に嫁いだ女性だ。たしかにボルニアはエストを征服した。しかしどうだろう？ 兄者はエストを征服したのではなく、妻にした。このアイギスを守る理由を作ったんだ。兄者はアテナイス、じゃなかった野ばらの姫を絶対を守る。それにエストは不満を持たないだろう。騎士団はどう動くのだろう？ ああ、分からないや。イオ、エステバンとやらはイオから見てどう思った？」

イオはその言葉に黙った。

「いまする話ではありません」

正直に言うと、イオは兄貴に話せるほどエステバンを知っているわけではない。戦場でわずかに声を聞いただけだし、正直次王があればほど信じ込める理由をまったくわかっていなかった。

「そうだね。ぼくにはもっと大切なことがあったことを忘れていたよ。わざわざこのアイギスまで竜を走らせたのはそのためじゃないんだ」

にっこりと笑い、この笑顔が一番怖いのだが、イオは解放された気分になる。

兄貴は困ったように古城の様子をながめ、アテナイスに向かって言う。

「ぼくは、ボルニアでは知識を担当しています。ボルニアは全世界から知識を収集しています。野ばらの姫、エストの知識をお見せください。決して奪うことはしません。それらを写本し、写本をボルニアに蓄積します。もちろんエストの方々もボルニアの書庫にいらしてください。いくらでも学んでいただいているのです。街道を作りましょう。護衛はボルニアの兵がします。多くの方々もボルニアの書庫にいらしていただくことが、ぼくの喜びです。写本させていただいたお礼として、ボルニアの紙を大量に提供します。これまでもそうしてきましたし、これからもずっと同じです。そうしてみんなの知識が増えていくことが、ぼくの幸せなのです」

この兄貴は対立していない限り絶対的に強い。

対立すると、次王や、レトの次王が出てくるのだろうが、少なくともエストの民と話すときは対立は必要ない。

「あなたさまは、鉄鎖の次王の義兄弟でしたね？ アイギスの書庫はいつでもあなたに開いています。これからご案内しましょうか？」

「ぜひとも！ いますぐ！」

その熱意に気圧されるようにアテナイスは戸惑ったが、ふふと笑って、侍女に鍵を開けるように言う。侍女はあわてて立ち去り、アテナイスは兄貴の側に寄る。

「ご案内しましょう。ようこそいらっしゃいました。この書庫は主を探していたのです」

「アイギスの書庫はぼくの手には余ります」

「それはこちらの言葉ですわ。アイギスにはサウス語が読める者はわずかしかないのです。世界中の書物を集めておられるのでしょうか？ ではサウス語はご堪能だと思いました。アイギスの書庫の蔵書はほとんどがサウス語の書物なのです」

正直言うと、リュディア族にはサウス語が読める者が数千人単位にいる。アイギスではどうしたらいいか分からない膨大な書物が、リュディアにとっては宝の山なのだ。

「ぜんぶサウス語の書物だって!？」

「あ、いえ、全部ではありませんが、ほとんどがサウス語なのです。だから読めません」

イオは側で見ていて、兄貴が異常な興奮に包まれ始めるのを見てとった。

(兄貴の本狂いはこれだから・・・)

この兄貴は欠点らしい欠点はないのだが、とにかく本に対する異常と思える執着心はイオでさえも戸惑う時がある。もう鼻歌でも、サウスの聖歌でも歌いだしそうな勢いで、そこから得られるサウスの先史時

代の知識に妄想をしている様子が見て取れる。

アテナイスは、石の階段を登り、降り、半地下のような書庫の扉の前まで案内する。

「炎は厳禁です」

侍女はランプの灯を消し、だれも火の手を持っていないことを綿密に確認してからアテナイスに頷く。

「では、どうぞ。許可ができました」

兄貴は勢いよく重い扉を開き、そこにならぶ書籍に食いついた。

イオは呆然とその書庫を見るが、どれほどの書物が並んでいるのだろう。数千冊？ もっとかも知れない。書庫というものはこういうものなのだと思い知らされた気がし、そのすべてが貴重なサウスの書だと思うと震えた。

「これは蒸気機関の本だね！ 蒸気機関についてこんなにも詳しく書かれた書を読んだことがない！ すごいね。読むのにかかる時間が悔しいよ。復水器ってなんだろう？ 冷やすのかな？ たしかに蒸気は冷やさないと役に立たないし、なんかすごいことが書いてあるな。冷却水を大量に貯蔵して、蒸気を冷やすと書いてある。こんなことをしなくても、川沿いに進路を引いて、常に河から冷却水を補給すればいいのに」

この兄貴の発想は、のちにボルニアの蒸気機関の常識になる。

「あなたはほんとにこの書物が理解できるんですね！」

とアテナイスは感激して言うが、こんなのはリュディアでは常識である。もちろん、イオがその恩恵に預かっているのは、兄貴が欲望の限りを発して、世界中の書物を集めようとしたからである。

イオはリュディアの子であると同時に、兄貴の子なのである。

12. イオとエマの訓練、書庫の兄貴

イオが複雑な韻律で竜笛を吹くと、上空の翼竜たちが旋回をやめて一斉に下降を始める。晴れた上空を見上げ、その風を気持ちよく受ける。

その短い赤毛がなびくのをエマはぼうと眺め、つぶやく。

「イオの赤毛ってきれいだね」

「え？ そうかな。あたしは生まれたときからそうだから、気にしたことはないかな。でも目立つから分かりやすいって、次王さまは言ってくれる。いつもそばにいるから関係ないんだけどね……」

エマはぼんやりとイオが腰に下げた皮袋に手を入れ、それを群がる翼竜たちに与えるのをみる。それを宙に差し伸べるのであるが、これがクサイのである。銀杏の実をなぜ翼竜たちが好むのかまったく分からないのであるが、このにおいがもしかしたら癖になるのかもしれない。

この銀杏の実は北方ではほとんどならない。

なので翼竜の本場であるキュディスではこの馴らし方は知られておらず、キュディスで伝令に翼竜を使う方法は広まっていない。ただ、竜笛で翼竜と意思疎通する方法はキュディス直伝と言われ、それがどうボルニアに伝わったのかは分からないのであるが、おそらくレト族の交易と関係があるのだろう。レトが主に扱うエメラルドはどの地方でも通貨として通用し、それはジャングルの河川の砂の中から採れる。そしてレト族は交易の民であり、世界中を縦横に行き来している。

「じゃあ、やってみて？ 吹き方は分かったよね？」

イオが竜笛を渡すと、エマはためし吹きをし、イオから銀杏の袋を受け取り、上空を見上げた。それからイオを振り返る。

「これってさ、わたしだけが覚えても意味がないんじゃないかな？ こんど兵団の子たちを連れてきていい？」

イオは困ってしまう。

そもそも第2軍の中でこれを知っているのは、イオを含めてわずかである。翼竜はあちこちに散ってそこに届け、そこから戻ってくるだけなのだ。メッセージを受け取る側は翼竜の扱いができなくても成立するのだ。

もっともとびぬけた伝令のスペシャリストであるイオに事故があった場合どうするのかという問題はあるし、リュディア族のイオの妹分はまだ未熟なところがある。エマが不安に思うのも分からないでもなかった。

イオはすこし考える。

これが判断できるのはいったい誰だろう？

次王は迷うことなく教えろと言う、兄貴はそんなことまで考えたりはしない、まずいんじゃないかと思っているのはイオなのだ。

(レトの次王はどう判断するんだろう)

イオと同じサイドと思われる、冷酷組のレトの次王であればもう少し深刻に考えてくれるんじゃないかと思うのだが、その次王はアイギスにはいない。

「困ってるの？」

「い、あ、うん。どういえばいいのかな。エマの不安は分かるよ。あたしも自分が流れ矢で戦えなくなったらどうするんだろうって思うし、いつでも任せられる人がいれば、そんな責任を一人で負わなくてよくなるから、それはその通りだと思うんだ」

エマがうんうんと頷くのを見て、ほっとする。

「でも、うん、そうだ、こうしたらどうかなあ？ これを覚えるのは最大三人まで、近衛兵団でという意味

だよ？ ボルニアのリュディア族でも実際に知っているのはそれぐらいだから。近衛兵団に教えたくないというわけじゃないよ？ リュディア族でもそれぐらいしか知らないの。だからそれを踏襲すれば」

エマはしばらく考えていたが、ぼそりと言う。

「イオって、保守的だね？」

まさか千年王国の近衛兵団の副官にそんなことを言われるなんてと、ショックを受けるのだが、それでもあわてて立て直す。

「そんなことないよ！ みんな隙だらけでこわくなるんだよ！ エマは怖くないの？ ボルニアはこれから王位継承戦争をしなくちゃいけないんだよ？ 次王さまがいくら強くたって、お互い手の内が分かっている同士で戦うんだよ！ よっぽどシドと戦う方が簡単に思えるよ！」

実際のところ、シドが組しやすいと思っていた目論見は完全にはずれて、シド史上最強と言われることになる指揮官とぶつかることになる。実際には、強いと思われていた叔父よりも強く、それどころかシドの近代化を成し遂げ、始まりの女王の再来と呼ばれる。ボルニアは最悪の時期に、シドに侵攻し、おそろしくやっかいな相手とぶつかることになる。

北方最大の激戦が始まるのである。

ただ、この時点ではシド攻略戦はおまけの余興で、本命はボルニアの王位承継戦争だと誰もが思っていたのである。

第2軍は第2軍である。

第1軍があり、第3軍があるのである。

この二つの勢力が組むことが、第2軍がもっとも恐れていたことだし、実際にこの鉄鎖の次王は好敵手には不足しなかった。それがこの天才的な戦上手がゆるぎない評価を受けている理由であるし、ボルニア最強の王といわれるゆえんである。

周辺が思っているほどボルニアは楽勝ではなかったし、鉄鎖操竜法が有利すぎると思われすぎているのだ。はたして、砲撃を主力とするシドの砲兵部隊にわずかな肉であるボルニアがいかにか有利といえるのだろうか？

イオはエマを見て、気を引き締める。

「さあ、やって！ まずエマが覚えることが先決だよ！ 覚えればわたしなんかどうでもよくてみんなに教えればいいじゃん。まずできるようになるよ！」

エマはうーんと頭をかき、笛に指をあてた。

「そういえばさ、あの人、書庫から出てきたの？」

何回か上手くやったあとエマが気付いたように聞く。あの人とは兄貴のことである。もう書庫に籠って一週間近くが過ぎている。さすがにアイギスの書庫はそのようにこもる人の為の設備は完備しており、書庫には読書室と寝室とトイレが備わっている。

食事は読書室で食べているのだろうし、夜間は蛍光石で明かりが取れる。

眠っているかどうかは分からないのだが、休息しないことの弊害はさすがに分かっていると思う。それよりもイオが気になるのは、リュディア族の写本部隊への指示がいまだに出ていないことである。

兄貴はルーチンを大切にする。

とにかくうまく回っているルーチンを守れば、乱されることなく効率的に世界が回るからだ。なので、イオは書庫に入るまでもなく、その内部が秩序だった清潔な状態になっていると想像できたのだが、エマがそう思っていないことは容易に分かった。

「兄貴は病気だけど、悪いことになる病気ではないよ。それは真っ先に避けるし、これまで兄貴が本に夢中になって、悪いことになったことはなかった」

エマはふうんと頷き、思い出したように言う。

「そういえば、もうアテナイスさまの婚姻のお披露目が近いから、顔を出してくれないとたぶん困るんだよ。あの人がいないとボルニアは動かないみたいだし」

イオはそれを聞いて決断する。

「書庫に行こう。あたしも伝えなければならないことがあるから」

「そうこなくちゃ！ わたしもあの書庫がどうなっているか気になるし」

書庫の扉を開くと、半地下の書庫の窓から採光されたやわらかなひかりが、静けさの中で午後の空気で照らしていた。茶の匂いはしなかったが、兄貴は書庫で香りのつくものを呑みたくなかったかもしれない。

「ボルニア料理って、香辛料がきついんじゃないの？」

「本に匂いがつくのを嫌がったんだね」

イオが呆れたように説明するのに、エマは想像と違った書庫を見てびっくりする。

もしかしたら兄貴がこもる前よりも清潔かもしれない様子を見て、使用人でもいたのかなと驚くが、兄貴が余計な雑音を呼び込むことを好まないことは、イオには明らかだった。

兄貴はとにかくオリジナルは汚さないし、邪魔されることを嫌う。

写本になった時点で綿密な注釈を入れるのだが、それがオリジナルよりも大切なものと、リュディアでは思われている。

それでも、リュディア族にとってはオリジナルこそが大切とされるのだ。

兄貴がアイギスの書庫を汚さないのは、それが千年の書庫であり、大切な注釈など写本したあとでいいからだ。

兄貴はぼさぼさの髪でイオを見つけ、やあ、なんかあったかい？ という。

イオはあわてた。

「リュディア族への指示が出ていません。これは写本すべき書物ですよ？ まずご指示をください。リュディア族はもう一週間も待っています」

「7夜って、一週間だったけ？ ぼくは千年を読んでいるんだ。違うな、サウスは5000年前と言われている。けどこれも違う、2000年続いた文明だと聞いている。7000年を読んでいるんだ。一夜で1000年を読めるだろうか？」

イオは鼻白んだ。

「時間は有限です。一夜で一年読めば、20年生きるとして7000年です。そんなに生きたいですか！

その地点で何をしたいのですか？ なにかやることがあるんですか？」

「まったく、イオは怖いなあ。ぼくはいつも一緒だよ」

兄貴は苦笑いをする。

「ぼくは読みたいだけであって、それ以外には興味はないよ」

確かにまったくこの病気は変わっていない。

「リュディアに指示を出してください。本は共有されるべきものであって、まずそれが優先されるのではないですか？ 兄貴しかリュディアに指示を出せる人はいないんです！」

兄貴はきょとんとして、ああそうか、もう七日たったかのかとつぶやく。

「千年かと思ったら、もっと短かった」

さすがに次王から与えられた剣の柄に手を掛けると、ぎよっとする。

「刺すかい？」

「いえ、本が汚れます」

「それはいい判断だ」

兄貴は本気かどうかわからない口調で大きく伸びをし、たぶんほとんど寝ていないと思われるのだが、紙にサラサラと文字を書いて、イオに差し出す。

「これで十分かな？ ぼくは寝たい」

それを読むと、完全なリュディア族に対する指示書になっていた。こんな完全なものを、この兄貴はおまけのように書けるのだ。

「はい」

「では寝るから、日が明けたら起こしてくれ。蛍光石はいちおう読めるんだけど、もっと明るいほうがいい。暗くて疲れるんだ。明るいうちを逃したくない」

何時間眠るつもりなのだろう。

「あの人は信用できるんですか！」

エマが発した言葉は、たしかに本質を聞いていた。

イオは非常に迷って、ああ、うん、たぶんつつぶやく。

正直に言うとイオは兄貴より優れた知識の持ち手を知らないし、三人の王のひとりであるし、次王はリュディアを新生ボルニアの一隅に選んでいる。それは喜ぶべきことなのかもしれないけど、あの奇行はさすがに考えてしまう。

「だめかなあ？ 問題はあるとはあたしも思うよ？ でも、兄貴が好き放題にやって、悪いことになったことは一度もないんだ。アテナイスも、」

「野ばらの姫」

「あ、そうだ、野ばらの姫さまも、兄貴を書庫の主っていったじゃない。あの人、兄貴の本質が分かっているみたいで……」

エマの怖い表情にぶつかって、しまったとぎくりとする。

「ごめん、馴れないんだよ……、野ばらの姫が身内になることが。あてな、あ、いや野ばらの姫の。次王さまが選んでいるのだから、反対する理由は一切ないよ。でも、ずっと関係ない人だったんだ。よく分からない人だし、」

イオはぎくりとする。

考えてみれば、イオをエストに認めさせたのはアテナイスだ。まったく気付かなかったのだが、この古城からパールルの戦をながめ、その中のイオを発見し、この人は鉄鎖の次王の側近であると、知らしめたのはアテナイスである。

(なんだろう、この人)

それは、稀代の外交官としての素質なのだが、それはイオにとっては異次元すぎて、恐怖さえ感じた。賢い兄貴を恐れるように、聡明なアテナイスを恐れた。この恐ろしくやわらかい物腰で、世界を動かしていく。あの野ばらのようであるとされる女性に、これほどの力があることが怖かったのだ。

(アテナイスは、次王さまさえ籠絡し、北方で最も重要な人物になっている)

それはイオの誤解であったし、アテナイスは鉄鎖の次王の意向に反対する気はまったくなかったのであるし、きわめて平和的な人物であったのだが、イオはボルニアの陰謀渦巻く世界に染まっている。これは不幸であるし、誤解というものはこうして起こる。

「イオは、考えすぎなんだよ。悪いことなんてそんなに起こるもんじゃないよ？ 野ばらの姫は、ずっと仕えてきたけど、お優しいかただし、慈愛に満ちている。イオもことばをいただいだらう？ それに何の不満があるの？」

たぶん、イオは残酷な世界を見すぎたのかもしれない。

それがうまく行くと思えなくなったのがイオなのだ。凄惨な老王の治世下にあって、全ての肉親を殺さ

れたのがイオなのだ。次王が救いたいと思ったのはそんなイオであり、もし同じだと思えば殺せと許可したのは、そうなりたくないと思っているからだ。

イオは恵まれており、不満はないはずだというのは冷酷すぎた。

「あたしは、次王さまを守ることがすべてなんだ！ あたしは、次王さまのおかげで生きている！ 次王さまがいなければ、あたしはいない。なんで、少しでも次王さまの障害になりそうな人を嫌って何が問題があるの？ 殺すとは一切言っていない。何かするとは言っていない。ただ言いたいのは、嫌い、ということだよ！ 好きじゃないことは罪なの？ 信仰していないと罪なの？ あたしは次王さまに仕えていて、その周りに少しでも危険があれば、排除したいだけなんだ！」

その言葉にエマはたじろぎ、しばらく考える。

「イオはちゃんと考えているのに、全然考えていないよね？ 思考停止している。考えることを放棄している。イオは、次王さまが絶対に正しいの？ アテナイスさま間違っていると思うの？ わたしはアテナイスさまに仕えてきた。だから、そのお考えがうまく行くことを知っている。どちらも正しい。じゃあ、どうすればお互い正しくなるの？」

それはイオの領域を超えていたし、それを判断できるのは、次王の領域だし、近いところではリュディアの次王の判断を聞かないとイオには判断できない。イオは自分の考えが、ボルニアの3王の判断をなぞっているだけと分かり、それが衝撃としてイオの小さな身体を突き抜けるようだった。

これがエストか。

千年の文明を誇る王国か。

イオは震えるように身体を起こし、エマにつぶやく。

「ともだちに、なって、くれない、かな？」

13. エステバンと次王の御前試合

アイギスの湖畔を見下ろす高台には、大要塞がある。

バーラルの戦いの際、第2軍が衝突することを避けた大要害で、広い野を見下ろす峻嶮に七重の城壁が張り巡らされ、一説には三万人の兵を1年籠城させるだけの規模を誇っているという。

そもそも、淡水湖をすぐそこに控える城塞は水が豊富で、70の井戸が兵を潤す。

その要塞はいま沸き立っていて、三万を収容する城壁の中にはエスト全土の、いや北方諸国全土の人々はその主役たちの登場を待ち望んでいた。

イオはその轟く歓声に怖気づき、自分が場違いな場所にいるのだと思った。

けれど、主役たちは軽やかだ。

さっそうと現れた甲冑姿はその重装備をものともせず、次王の姿をせせら笑った。

「ぶざまな格好だな？ おまえが蛮族どもの王か？」

胸の聖十字は聖楯騎士団の紋章だ。

次王はふっと笑う。

「バーラルの戦い以来だな？ あのときは、戦ってやれなくてすまなかった、許せ。避けたわけじゃない。あれが一番効果的だった。王は主役になってはいけない。おまえたちが強いんだと分かせなければいけない」

無防備に見える次王の武装は、実際には最新型の重武装。リーズデルの鋼鉄製の鎖帷子で、エストの人間はこれを知らない。それは次王が騎士団に着せたい装備であり、リーズデルまで陸路でたどり着けるのは、レトの隊商しかない。

「いいわけは聞きたくない。なんとと言うと戦わなかったことは事実だ。怖かったんだろう。おまえは戦わなかった」

「だからこれが贖罪だ。思う存分戦い、そして思い知れ。おれはひとりしかいない。おれは負けるのが怖かったんじゃない。おれは勝てる戦いしかしない。少しでも文句があるか？ おれはいつでもそうだ。この戦いでは味方は誰も死なない。死ぬのはおれだけだ。それに文句があるか？」

アイギスは竜が入ることはできない構造なので、竜上試合には向かない。

それで三時間も歩けばたどり着く要塞を舞台としたのだが、山道をハイキングすることは民にとっては労力ではないようだった。そもそも、屈強の船乗りの多いアイギスの民には、山道は障害でも何でも無い。

祝事は面白いことが多くなかった民には、格好の気晴らしだった。

なんといっても、騎士団を代表する騎士が征服者である次王と戦うのである。

一対一でだ。

「もし負ければ恥を負うのはおれだけだ。騎士団は負けてないと民に示せ」

「おれが手を抜くとも思っているのか？」

次王はくっくと笑う。

「いや、それでいい」

イオは鼻白んだが、このやり取りで次王はエステバンをますます気に入ったと、思ってしまう。次王は思い切ったように言う。

「正直に言うと、おれはエストの騎士団をお前に任せたい。アイギスには近衛兵団がいる。だが近衛兵団にエスト全土を任せるのは酷だ。そこでおまえが欲しい」

あきらかにエステバンは戸惑っており、ことばを絞り出すのがやっとだった。

「おれが騎士団を率いる？」

「バーラルの戦いを見ただろう？ あの戦いは騎士団の弱点をむき出しにした。驟雨が合ったとはいえ、わずか150騎の兵にボロボロにされた。だめだったということだ。これはだめだ、役に立たない」

冷たい言葉だ。

「150騎とはいえ、ボルニア最強の150騎だし、それをおれが指揮した。それを伝えたのはイオだ。そもそも準備が違いすぎた。恥じることは一切ない。だがおまえは諦めなかった。あのずたぼろの騎士団を鼓舞し、指揮していた。絶対にあきらめることのない防壁とはおまえのことだ。おまえが指揮しないと騎士団は機能しない。だからおまえが指揮しない騎士団には興味がない。近衛兵団に重責を担わせるのは残酷すぎる。騎士団を指揮しろ。おれが望んでいるのはそれだ」

「おれはお前を殺すかも知れないのだぞ？」

「手を抜いたら、容赦はしない。おれは数百の竜上試合をしてきた。そのほとんどはボルニアの猛者どもだ。そのすべてに勝った。だからおれが次王になった。だから手加減すればわかる。そうしたら、おれはこの試合でお前を殺す」

「勝ってから言え。どっちが強いかはこれから決める」

次王は大声で笑った。それは歓声を上げる観客にも届きそうで、おそろしいほど長く続いた。

「何がおかしい！」

「いや、失礼した。おれの目に狂いはなかった。嬉しかったのだ。まず戦おう。終わったら、一緒に戦おう。ボルニアの戦い方を教える。そうすれば仲間だ。なぜ頼もしい仲間がいることが分かった時に、笑ってはいけないのだ？」

次王のことばにはその意図が分からなくて困ることが多々ある。

心から思っていることを素直に言っているだけであって、そこになんら意図はないことは分かるのだが、イオでさえなにを言っているか分からなくなる時がある。

素朴すぎるのだ。

この王は素朴すぎて誤解されるのだ。

単純にこの鉄鎖の次王が広大なボルニアの諸部族に支持されるのは、単純明快だからであり、一切の煩わしいことがないから戦士に支持される。出身部族も、騎竜兵であるかどうかとも問われない。ただ、学べと言われる。無国籍的な諸部族に、簡単な言葉で、簡単に指示を出す。

新生ボルニアは、どうも3王があるようなのだが、きわめて機能的で、誰が何を担当するかが、イオはレトの次王に会ってさえいないのだが、それもこの王のもとで、健やかに統治されるのだろうかとなさえ思う。

それが納得できないのは、千年王国の複雑な組織の複雑な騎士だ。

「ききたい。近衛兵団はなぜおまえに従った？」

次王は考えるが、素直に言う。

「それはおれが答えることではない。おれが従わせたわけではない」

「……変な奴だな、おまえは」

「おれは、おまえが仕えるのにふさわしい王になりたい。そのために必要なことがあれば何でもしたい。この試合があることが不満か？」

エステバンはふふとわらう。

「おれは、おまえが近衛兵団に襲われたと聞いている。それは本当なのだな？」

イオは証言しようとするが、それよりも次王が速い。

「べつに、騎士団が襲ってくれても構わない。そうなれば第2軍が出るし、おれに白兵戦で勝てると思うのであれば、自信過剰だ。イオでさえも強い。100人までは相手しよう。だがそこからは疲れる。101人でこい。それは認める」

それは無防備すぎて怖すぎるのだが、これが次王であることを否定しがたかった。

「おれはイオに、王にふさわしくないとせば、刺せと命令している」

エステバンは躊躇する。

「おれにも刺してほしいと？」

「王じゃないと思えば刺せ。許可する。こんなに安いことで従うならば、こんなに安いことはない。殺したくなったら殺せ。一切の罪を問わないようにしておく。この戦いで殺してもいい」

開幕が近づいて、お互いの獣脚竜が吠えはじめる。

ボルニアの獣脚竜に対して、エストの獣脚竜は小ぶりだが、この王はどんなに不利であっても勝つだろう。刃を落とした鉛の大剣は、この次王の手になじんでいるはずだし、そもそもボルニアは竜を使い捨てる。

エストに無敵の王にかなう猛者がいるのか、ということだけが興味の範囲で、誰もがエステバンが勝てるとは思っていなかったのである。

ただ、ひとりだけ考えが違った。

「子どもじゃないか」

エステバンが気にしたのは、想像もしていないことだった。

「イオか？ 確かにイオは幼い。だが、度胸があるし、発言を躊躇することがない。それにこの赤毛は目立つ。レイはおれを殺そうと探したときにイオを目印にした。それにイオは頭がいい。知識の部族に家族同然に関わっている。第2軍では、各部族への連絡役をしていた。イオは言葉が書けるのだ。野ばらの姫でさえも、古城からイオを発見していた」

きれいな赤毛とイオが言われたのはエマが初めてだった。

それは当たり前前の家族としてリュディア族にいたことが多かったからでもあるし、もしイオが老王の暗殺に成功していたら、真っ先に足がつく証拠だった。

エステバンはしばらく考える。

「その、連絡方法は騎士団には教えてくれるのか？」

「当たり前だ。防衛してもらわなければ困る。いまイオが近衛兵団に教えている。隠すものは何もない。アイギスは家族で、エストは運命共同体だ」

正直言うと、ボルニアの王位継承戦争が本番であり、エスト攻略などおまけであるということをつけ足してほしかったのだが、最強の敵が国内にいる以上、国外の戦力を敵に回す理由は一切ない。

ただ、これはボルニアの状況を分かっていないと理解しがたい。

エステバンはふときく。

「その連絡方法を教えているのは誰だ？」

ああ、この人は優秀だと思いながら、イオは答える。

「エマです。たしか、近衛兵団の副団長ですか？ 細かい階級は分からないのです」

「エマ？ ああ、あの小娘か。正確には近衛兵団の指揮官見習いだ。立場的には副官になる。近衛兵団はほとんどがだいたい若いからな」

そんな立場だったのかと、イオは衝撃を持って受け止めるのだが、エステバンは続く。

「なぜ、あの小娘に教えることにした？ まあ、たしかに適任かもしれないが、あれは小娘で、ろくに剣も扱えない。指揮する前に、自分の身の心配をした方がいい奴だ」

これはエマが言っていた騎士団と近衛兵団の立場上の格差なのだろう。

そして、エステバンから見ると、近衛兵の剣技は劣るのだろう。

「エマは、とても覚えが早いです。どんどん覚えていきます。こんなに早く覚える人はリュディアにはい

なかった。それにあたしも話しやすいんです。同じような年齢だからだと思うのですが、めきめき上達する人を買ってはいけないんでしょうか？」

顎に手を当てて考える。

「それに全部教え込んでいるのだな？」

「え、ええ、エマはほんとうに覚えが早い。あたしなんかより優秀なんではないかと思うほど」

これでイオはエマに、苦情を言われることになるのだ。

べつに、イオは悪意があっていているわけではまったくないのだが。

イオはエマを推薦してしまったのだ。

※

開戦を告げる銅鑼の音は、熱狂的な観客の叫び声にかき消された。

野ばらというのはだいたいバラのことなのだが、その名を冠した竜上試合に盛り上がる理由はいくつもあった。これがアテナイス妃の臨席の戦いであり、不遜な蛮族の王とエストを守護してきた騎士の戦いであったこと、そして、間違いがない一騎打ちの戦いで、誰もがそれを確認することができること。

イオは心臓が打つ音に抗うことができず、大歓声を聞くことにして、もしかしたら次王が死ぬかもしれないということは頭から振り払った。

はるか頭上を見上げると、凶暴な大型獣脚竜に騎乗する次王の姿。

エストより優れているのはその武装である。

大きな大剣を構えるのはいつもの次王で、それで数多くの挑戦者を血祭りにあげてきた。もちろん、次王がエステバンを殺すとは思えなかったし、考えてみれば不利なのだ。

次王はエステバンを殺せない。

すくくと大剣を構え、歓声の鳴り響くスタジアムに出て行く。

その腕の筋肉が美しく、イオはほれぼれとする。

こんなに近くで次王の戦う姿をみたことがない。もちろん、副官として常にそばにいた。

ただそれは、補佐役であってイオは次王の美しさなど考えたことがなかった。

しかし、イオが見上げる次王は美しい獣のようであって、これがヴァンドルの次王なのだと衝撃を受けるには十分だった。

「両者、定位置について」

定型的な言葉が発せられる。

「装備は充分だな？ これから戦いが始まるが、どちらが死んでも文句はないことになっている。それは両者は納得しているか？」

「問題ない」

「ラー」

審判役は竜を降り、その竜を広場の外へ連れていくように指示する。

それから二人見上げて、水時計を示す。

「これが落ちたら、開始だ。その前に観衆の前で名乗りを。時間は充分にある」

それを合図にエステバンの竜が歩を進めると、世界は静寂する。

「このとき、代表をつかまったのはおれだ。べつにおれが騎士団で一番強いとは思っていない。王さまのご指名だ。おれが選んだんじゃない、王さまが選んだんだ。だが、おれは思っているほど弱くない。おれは勝つ。おれは負けない。この時を待ち望んでいた。あの蛮族の王に鉄槌を。もしかしたら死を！」

それは稚拙な言葉だったが、民衆を熱狂的にさせるには充分だった。

大歓声が沸く。

ゆっくりと、鉄鎖の次王の竜が歩を進めるまでそれは続き、次王が定位置についても鳴りやまなかった。
「あ、アテナイスさまが！」

観客が騒然となったのは、アテナイスが席から立って、両手を上げたからだった。

静粛に。

それはイオにもわかったし、観客は静まり始める。

動揺は収まることがない。それでも次王は叫んだ。

「エストの騎士団は、エステバンが今後率いる！ それはこの試合に勝っても負けてもだ！ もしかしたら、おれは死ぬかもしれない！ そうなると率いるのはおれの弟であるリクトルだ！すでにリクトルは軍を率いている！だからおれが死んでも何も悪いことは起こらない！おれはエストの民を一人も殺したくない！そこにはエステバンも含まれている！言い訳は一切しない！試合は神聖なものだ！まず戦おう！そこからどうすればいいか考えればいいじゃないか！」

静寂が、信じられないような静寂が降りた。

それは、ごくりという唾をのむ音さえ聞こえるようで、イオは観客を呑んだ次王のことばが何だったのかと考える。それは王の姿だ。王が命をかけて戦ってはならないと激しく抵抗したくなるのだが、ただ、そこにひとりの王がいることは、手触りとして掴んでいないのだけれども、触れている気になるのだ。

これが王だ。

(王にふさわしくないと思えば、殺せ)

最強のボルニア王だ。

ぼろぼろと涙が出てくるのをイオは止められず、なにもできない自分が悔しかった。

戦場にいれば、あたしには伝令の役をもらえる。あたしは、次王のことばを書き、そのまま騎竜兵に伝えられる、次王はそれで騎竜兵を自在に動かせる。それがどんなに貴重な経験だったのかと思ひ知り、戦場が無限に恋しかった。

あたしには次王さまの側にいる特権があるんだ。

イオは自分のちっぽけさを思い知るのだ。

※

試合は鏑迫り合いから始まった。

獣脚竜同士がかみ合って、その竜上の戦士同士の鉛の棒が火花を散らす。

これは高度な操竜技術のなせる業で、そもそもピンポイントで相手の騎竜兵のところに剣を合わせるのは難しい。

歓声は無責任で、殺せと叫ぶ。

「つよいな」

「最強とかいうおまえの化けの皮をはがしてやる！」

次王は竜を操って距離を取り、息を一切乱さずに下段に剣を構える。

ちいさいエストの竜を相手にするからには当たり前なのだが、それにエステバンは激昂する。

「おれを見くびったか！」

「いや、これが最善だ」

次の衝突は、観衆を沸かせた。獣脚竜同士が衝突し、その振動の中で、剣が振るわれる。キンという音は、いちいちイオの心臓を縮ませるが、ほんとうにイオが怖がらなければならないのは、音がなかった場合であり、そこまでイオは気付かないすべてをのた。

竜の咆哮が、観客を轟かせる。

ボルニアの凶暴な竜と、エストのそこまでではない竜。

圧倒的に不利なのはどちらかは誰もが分かっていった。

それでもエステバンは竜を駆り、次王に挑んでいく。

イオには、次王がとてもうれしそうで、邪魔するなと言っているようにしか思えなかった。

もう何度目かとわからない衝突に、エステバンの剣が次王の腹をとらえる。

毛皮の向こうにあった鎖帷子を目にして、つぶやく。

「なんだ、それは？」

「鋼鉄だ。リーズデルまでボルニアは届く。おまえもこれを着ろ。生き延びられる。おまえを失いたくない」

それでも気力出して、次王は剣を振るい、距離を取る。

再びの衝突で、次王は落ちた。

エステバンの剣が竜の眼にあたり、竜が激しく暴れたのだ。

大歓声とは、無思慮なものだ。

しかし、王はどういうのだろう？

たぶん、これが最善だったと。

14. 市民による婚姻の了承、黒の兵団長との密談

正装したアテナイスがバルコニーに現れると、数万の観衆がどよめく。

本来であればそこは、要塞の司令官が軍を謁見するためにあるテラスで、アテナイスは細い腕をゆっくりとおおきく振る。

その側には、身を清め、同じような正装に身を包んだ次王が並び、従者のようにその側にたたずむ。その姿はエストの国民に征服されたことなど忘れるには充分で、幸せそうににこにここと笑う野ばらの笑顔に、だれもがほっとするのだ。

実際にはアテナイスが心の底から笑顔でいるのは、最悪の事態にはならず済んだからであり、イオにはそれが分かって憎たらしかった。しかし、その開放的な明るさが羨ましくて、自分はどうしてこんなにも憎しみに満ちているのだろうと思う。

実際には、それは不公平な世界に翻弄されたから、自分が肉親の肉親のすべてを失目に遭ったのではないかとさえ思う。

確かに老王は容赦なくイオの部族を死滅させた。

それは反乱の恐れがあったからだと言られるが、新しい次王の元では、重臣だ。それどころか、次王がもっとも重用しているのはイオであり、それを命令しているのは次王である。

世界の中心にいるのは明らかにイオであり、そこに対する文句は一切でないように組織がつくられている。

「イオ、おまえはそこにいろ。間違っていると思えば刺せ。おれはそこが好きなんだ。いつでも間違っていると思えばおまえが刺してくれる環境が好きなんだ」

これは病気だ。それははっきりと分かった。

「でもあなたは病気です。責任感が強すぎるんです。だれが、ボルニアの未来に責任を取るのですか？ あたしが刺せは解決するのですか？ あたしには鉄鎖の次王の代わりはできない。それは誰でもです！ あたしに殺せという時に、あたしが指揮できると思いますか！」

イオが次王の瞳を見つめると、次王はいくつか言葉をつぶやき、おまえがイオだと呟く。

「あたしは鉄鎖の次王に仕えているのです！ それは、鉄鎖の次王のもとで正しいことをすることです。だから欲しいのです。あなたの為に命を尽くすにはどうすればいいかを」

イオは、非常に大切なことを聞いていた。

※

「みなさん、ありがとう！ 最後まで残ってくれて！ アテナイスから重大なお知らせがあります。最後まで聞いてどうするかを決めてください！」

もともと、この余興のあとにはアテナイスから重大発表があると聞かされていたので、民衆は残っていたのだが、アテナイスはそれに加えてあなたたちで決めろという。おそらくほとんど者にはどんな発表かは想像がついていたのだ。

それはもしかすると、侮辱的な内容に感じる人もあるかもしれない。

形式的には千年王国を、新参者が武力で蹂躪し、その象徴であるお姫さまを妻にするという内容なのだ。しかし、この野ばらの姫の抜ける青空のような笑顔を見ていると、そんなものはどうでもよくなってしまふ。

底抜けに明るくて透明にたかく、まぶしさがある。

成人前の娘のようにとはボルニアの表現だが、この比喻にぴったりのお姫さまが、この北の果てにあると信じられないのだ。

「私は、」

と唐突に、アテナイスの言葉が始まる。

「私は、この人と婚姻することに決めました。アテナイスは婚姻するものではないということぐらい分かっています。ですが、一目ぼれをするなどと言う決まりはあるのでしょうか？ もちろん、私はこの国の重大な役目を負っています。ですが、この方の妻となっていけない理由があるのでしょうか」

次王はおそろしいほど口を挟まない。

エストのことはアテナイスに任せるつもりだったのかもしれないし、イオの考えも及ばない考えがあったのかもしれない。

次王の定義に従えば、民に従える資格がある者だけが民と話せばいいのだ。

「評決を取ります！ みなさんが正直に思うところを意思表示してください！ 私がボルニアの次王、まだボルニアの王になるかどうか分からないこの人の妻になることを許可しますか？」

それは地波のようで、要塞中が響いた。

「ラー」

つまりイエスである。イオが見る限り、激しい拍手をしている人もいるほどで、足踏みが地震のように要塞を揺さぶった。それにアテナイスはまぶたをぬぐい、夫となる蛮族の王を見て、ひそやかに言った。

「決まりました。私はあなたの妻になれます」

「その涙に申し訳ない。苦勞をかけた」

そもそもアテナイスはなぜ次王の妻になりたかったのかと考えるのは、あんまりお行儀がよくないかもしれないが、単純に魅力的だったのだろう。千年停滞していた国に破壊的な新秩序を作る王がやってくる。それが魅力的ではないはずがない。そしてそのやり方がおそろしく紳士的だ。すべてを破壊する蛮族の王ではない。千年国の価値を分かり、それを最大限尊重する。

もしかするとアテナイスはもっとすごい美点を見つけているかもしれないが、最強の蛮族王だったのだ。

イオはこの青年の価値を再認識した気にもなるし、ここから壮大な外交戦が始まるのであるが、ここでもこの青年の価値は発揮されるし、アテナイスが見出したこの将来の王は確かに世界の王だったのだ。

この新しい王はおそろしく若いのだ。

※

アテナイスの古城に舞台が移ると、そこには数々の名士が姿を現した。

古城の侍女たちに抜かりはなく、酒が振る舞われるが、それに口を付けたのはわずかだ。魚介のアンチョビとか、ほんとうにおいしいのだが、イワシを乗せたバケットだけはたくさん食べられる。

悠然と歩いてくるのは黒い衣装で、キュディアスの黒の部隊の責任者だろう。

初老の紳士で、わずかに物腰が重くて、たぶん武装をしている。

兄貴は警戒を解かずにその人と談笑し、知識を軽々しく交換する。

「スカイはどうですか？ ボルニアにはスカイは身に余ります。キュディアスはスカイが欲しいのでしょうか？ あんなにも何も無いところを？」

これは牽制である。

それに、黒の指揮官は満足そうに細く笑い、軽い話題のようなふりをした。

「キミは、たしかボルニアの3王の一人だったね？ あなたがボルニアの軍師だと認識している。キミが一番頭がよくて、物知りだ。キミを説得できれば、ボルニアは説得できるのだろうか？ それに、ボルニアはほんとうにスカイがいないのだろうか？」

兄貴はくすくすと笑う。

それはもう既に対応済みだからだ。

「あなたが言うように、ぼくのことばは王のことばです。鉄鎖の次王がスカイを欲しがっているという話は

一切ありません。ボルニアはスカイが欲しくない。ただキュディスはスカイが欲しいように思えます。それは欲しければあげます。そもそもあの地域に王権はない。エストは守りますが、スカイ流域は広すぎて、手に余るのです。

北方諸国に侵略する気はありません。

ただ、どうするつもりなのかは、王のことばを聞いた方がいいでしょう」

「鉄鎖の次王は今後の方針を話すのか？」

「すでに用意されていてぼくも知っています。ただ決断するのは鉄鎖の次王です。キュディスと戦うべきと思えば戦うことを決断するでしょう。ぼくはボルニアの内乱で鉄鎖の次王に助けを求めました。そして鉄鎖の次王は無敗だった。これ以上の信頼は他にあるでしょうか？」

黒づくめは答えに窮する。

「たいした自信だな」

兄貴はゆっくりと笑う。

「あんなのがいると誰が信じるでしょうか？」

※

鉄鎖の次王が颯爽と現れると、その場は緊張した。

次王は、軽々しく黒づくめを見つけて、たぶん貴公は黒の兵団の代表者だなと声をかける。

「いかにも」

「提案がある。ボルニアはキュディスと戦いたくない。そもそもボルニアは内乱を抱えているし、おれは正式な王の立場ではない。この後王位継承戦争を戦わなければならないし、それがおそろしく熾烈であると思っている。おれが貴公ならば、この隙にボルニアを滅ぼしてしまえと思う。それは正当な権利だ。それに反対する気は一切ない」

あまりにも正直だが、これで揺るがない人はいない。

「だが、おれはもし納得してもらえるのであれば、キュディスを一切攻めるつもりはない。それは攻める状況に明らかでないからだ」

これはさりげなく、ボルニアはキュディスのうちわ争いに乗じるつもりはないと言っている。

「だが、そんな約束はおれは信用しない。おれだったら、絶対に信用しない。だからまず信用してもらう行動をしよう。決して後戻りできない行動をすれば、キュディスに攻めるなんてありえないと思ってもらえるだろう。まず行動してから信じてもらっても構わない。これはキュディスのためにもなる」

その黒づくめは動揺する。

「どんな行動の約束をするのだ？」

「おまえはどう思っている？ おれは答えは決めている。それはボルニアの中枢には通達している。だからもう変えることはできない。もうどうやっても嘘をつくことはできない。おまえが望むことをまず聞こう」

黒づくめはあぶら汗を流した。

「南進を」

にやりと笑う。

「話が合うな。シドに侵攻する。豊かな国だ。そして大量の交易路が取れる。ボルニアはキュディスと戦いたいとは思わない。ただそれを約束しているのはおれだけだ。だからもしおれ以外がボルニアを制覇したらその約束は反故になる」

次王は畳み掛けるように言う。

「シドがしているのは、アドレルを通じた奴隷貿易だ。キュディスの民が不法にシドに売られている。おれはボルニアの民が奴隷に売られるのあれば絶対に許せない。民が望まなければ王はない。その民がかなし

むことは絶対に許せない。おれが間違っただけを言っていたら教えてくれ」

「いえ、あなたは王だ」

イオにはその黒づくめが、次王に従ったように見えた。

ただそれはイオの錯覚で、自分はどれほど甘いのだろうと認識することになる。

「とにかくこの約束は守りたい。絶対に王は約束を破ってはならない。だからもし少しでも手助けをしてもらえたらと思う。おれが欲しいのはキュディスではない。翼竜の兵団はたしかに強いが、目立つし、シドは遠すぎて届かない。そんなものは欲しくない」

次王はその初老の男を見つめた。

「おれが欲しいのはおまえだ」

※

考えてみると、キュディスの黒の兵団ほど諜報力に優れた組織はなく、兄貴のまた聞きでは、北方大陸中に暗躍しているのがこの兵団である。

それが欲しいというのは単純明快で、北方最強の諜報力を手に入れることになる。

イオは常々、ボルニアには冷たい考えの人が足りないのではと思ってきたのだが、ここで帳尻があったことに震撼する。

(次王は始めから黒の兵団を取り込むつもりでいた?)

そう考えてしまうのはイオの妄想で、次王は単純に素直に、欲しいと言っているのだ。

たぶんイオは自分のことなど振り返れないのであるが、次王がイオにおまえが欲しいといったのは、いろいろなしがらみとか関係なく、ほんとうに人として側にいてほしかったからだ。

おれはおまえが欲しい。

それだけなのだ。

次王はほんとうに素直で、嘘がない。

それがどんな結果になっても構わないのだ。

イオにはそれが分からない。それは次王が選らんで来た人たちが、自分よりもはるかに優れているように見えるし、実際に優れているからだ。

リクトルは優れているのだろうか?

たぶん優れているんだろう。弟だからと言う理由でこの王は全軍を任せたりしない。

それでイオは身体の震えが止まらなくなった。

「イオ、大丈夫か? 顔色が悪いように見えるけど」

兄貴の言葉に、無理やり笑顔を作る。

「あたしには、この場は厳しすぎます。こんな場は辛すぎます」

「まあ、兄者が戦場だと言っていた舞台だからね。無理もない。だけどイオは分かるんだなあ。そっちの方が驚きだよ」

実際のところは、兄貴がなぜ平然として入れるのかの方が怖いのだが、この場数の違いはどうしようもない。

(あたしは、これを歴史として書くんじゃないのか!)

膝が崩れないようにするのがやっとだった。

※

もともとイオのくそ度胸は、イオ自身は恥だとか暴発だとかしか思っていないのだが、それが次王に愛されている理由だと分かっていない。

自分がどれほどボルニアのエスト平定に役に立っているかを分かっていない本人ほどやっかいなものは

ない。それがアテナイスが次王を信じる理由だし、周りで見ている人は、イオが許されているのを見て、次王の度量を理解しているのだ。

イオが次王の羅針盤であり、だいたい問題があればこれが暴発すると思われる。

そんなことはイオには分からないことで、兄貴はため息まじりに、困った妹だ、という。

赤毛だから目立つのではない。

曲がったことが許せないから目立つのだ。

イオは、次王が王にふさわしくなければ殺すだけの権限を与えられている。

それはどうも次王の言によれば、3王に及ぶようで、そんなことができるとはイオも思えないのだが、兄貴を刺すことも許されている。そのイオは脚を震わせて、熱病にかかったように、びくびくとしている。

「鉄鎖の次王、このエストへようこそ」

顔を上げると、端正な長髪の男。

あからさまな武装をしているのは、戦う気があるのかもしれない。

「たいした、歓迎だな？ おまえが海竜の貴公子か？ ここは戦場ではない。戦場にするには宣戦を布告するのが礼儀だ。おれは不意打ちは嫌いだ。ただ、挑まれればいつでも戦う」

男はふっと笑い、ずいぶん好戦的だな？ とつぶやく。

次王はしばらく考えた。

「その通りだ。おれは隠しはしない。妻に対する反勢力は敵だ。おれには野ばらの姫を守る義務がある」

「アテナイス」

「その名まえは妻を悲しませる。おまえは絶対に許さない」

「愛情ですな。あんな年増の女を娶って何が意味があるんですか？」

それでこの男は世界を敵に回した。

次王はアテナイスを振りかぶり、小さく頷くのに勇気をもろう。

「おまえが言うアテナイスは、おれの野ばらの姫だ。おれの妻を侮辱するな。こんなに可憐で、思慮深い伴侶はいない！」

「まで！ その男はキュディスと深い関係のある人間だ！」

危機を悟ったのであれば、この黒づくめの男は有能なのかもしれない。

しかしそこで発言したのは、エストの一部がキュディスに取り込まれていることであり、それは簡単に言うと、王は想定していたことだ。

海竜の貴公子は、キュディスとエストの交易で莫大な富を生んでいる。

それは公然の秘密であり、エスト中のだれもが知っていた。

「アイギスは古来より、我が妻である姫の居城だ。これは千年の長きにわたって変わってこなかったし、これからもそうだ。アイギスはずっと変わることはない。愛する妻を守るのが夫であるおれの義務だ。だから第2軍は湖畔の大要塞に駐屯する。いずれボルニアの正式な王位継承戦争を起こるだろう。最大の敵はボルニアにある。そしてシドだ。シドを征服してはじめて、この北方大陸をめぐる争いが終わる」

次王は淡々と極秘であるはずのことを話す。

ちらりと脇をながめ、そこにあるちょび髭の太っちょの豪奢な身なりをした男を見る。

「おまえは、トランのタルボットギルドの者だな？」

優雅にガーリックが塗ったくられたアンチョビの載ったバケットをかじる男を、睨む。

「え、はあ、ええ、おっしゃる通りで……」

肝が太いというよりは無神経で、ぼりぼりとアイギス名物を平らげる。

次王は目を細めた。

「率直に言う。トランが望むのはたったひとつだ。貴公らは、交易路を荒らしてほしくないというだろう。一切そのつもりはないし、膨大な交易をしたいと思っている。トランにしかできない交易がしたい」

その男はもったいぶった男なのだが、その申し出に戸惑う。

「絹が欲しい。そこに届くのはトランだけだ。ボルニアは暑いが、エストは寒い。このエストに絹を届けてほしい。代金はエメラルドで払う。不満かな？」

「ええ、まあ」

次王がすごいのはそれはすべて予定していること。

「ボルニアは、タルボットギルドに独占商業権を与える。トランのほかのギルドの荷物は一切拒否する。武力をもって、全部排除する。タルボットギルドだけが、ボルニアで正式に商売ができるようにしよう。何か不満があるか？」

この施策はたぶん、レト族に深くかかわっているから分かることなのだと思うのだが、レトが何を望むかを、もう一人の王を通じて分かっている。

ボルニアは田舎ではないのだ。

イオは、どこまで感動していいのか分からなかったし、トランがなんというか気になって仕方なかった。「絹を無限に運びましょう。ですが、ジャングルにお金はあるんですか？」

「ジャングルは無尽蔵だ」

それは、次王の決まり文句だったし、実際にはリュディアの紙を考えれば、実質的に无尽蔵である。リュディア族には数万単位の製紙職人がいるし、その原材料が尽きることはないからだ。

次王はその男を見つめ、やさしく言う。

「妻が絹に困ることになったらどうだろう？ こんなに寒いのに。絹が欲しいのだ。いくらでも払うものがあるのに。不満か？」

その太っちょは不満げで、それを見た次王はイオに目くばせをした。

イオは仕方なく脇にあった箱からエメラルドを出して見せ、それでその太っちょの目の色が変わる。

「これはわずかな量だ。こんなクズではなくて本当に価値のあるエメラルドが欲しければ、ほんとうによい絹を持ってこい。まずクズを渡す。それから、いい絹であればもっと良いエメラルドを渡す。そこでお互いの交換をしよう」

すごい難しいことを言っている。

「タルボット以外は排除するんですね！」

「なにか証明書を作ってほしい。タルボットギルドの構成員であるという証明がなければ取引は一切禁止しよう。ボルニアのエメラルドは北方大陸中で取引されている。通用する価値のあるものだし、どんな価値があるかは自分たちが一番知っている」

ごくりと喉を鳴らした。

次王はそれで満足げにうなずいて、バゲットを口にした。

※

バゲットに乗ったアンチョビを食べると、サクッという音がした。

お酒もそろそろいきわたり始まっていて、葡萄酒を拒むのは失礼になりつつあった。

ほんとうにおいしいのは、チーズを乗せた塩辛なのだけども、カニ肉を食べるのは勇気がいった。その肉をほじくらなければならない。これが、優雅ではないと思われるのだ。

不便とはだいたいそんなもので、おいしくないわけではない。

そんな食事をしてしていると、ガーリックを塗ったくったバゲットを食べながら、イオは思ってしまう。(そもそも、国とか意味があるのだろうか?)

おいしければどこでもいいじゃないか。こんな「食べ物無政府主義」はめずらしいのであるが、これにいろいろと理由を付けるのが現実だ。

ボルニアは辛い香辛料をかける。

リュディアでおそろしいほど辛い食事をしてきた身としては、なれてしまったというよりは、当たり前の日常だったのだ。その辛いバケットを避けて、一人の人が来ても、それが誰なのかイオはよく分かっていない。人が多すぎるのだ。

大量の香辛料をかけたバケットをかじりながら、歓迎する。

次王は、けっこうな量の葡萄酒を飲んでいるはずだったが、酔っている様子はなかった。

それで平然と、その祝祭会場を歩き回っているのだが、キュディアスの黒づくめを見つけると、大胆なことを話し始めた。

「そんなに、あの貴公子は役に立つのか？ おれは国として同じような貿易を国としてしようと提案する。おれは黒の兵団に莫大な報酬を払おう。それは、キュディアスの国家予算を上回るかもしれない。エストのお小遣いではない。ボルニアの国家予算じゃない。得られた富のほとんどだ」

金額と言うのは、総額を上回られると、簡単忠誠を約束しなくなる。

黒づくめは端的に困る。

「どう信じたらいいんですかね？」

「それでいい。」

※

騒ぎが収まると、エステバンが次王に耳打ちする。

「海竜の貴公子はやっかいです。キュディアスの支援もありますし、あのフィヨルドは難攻不落です」

次王は鋭く睨み、それから怒りを納めた。

「安心しろ。騎士団は使わない。騎士団が有効なのは広い野だ。そんなことは分かっている。近衛兵団を使うとアイギスが空白になる。その防衛を任せたい。第2軍を頼るな。あれは本土決戦を予定している。一切消耗したくない。アイギスを守るのは、アイギスの民だ。いるのはおまえたちだけだ。おれはそれを信じる。おまえは信じられたくないか？」

「いえ、あなたが名将であるということを理解しました」

イオには高速すぎて分からないのだが、エステバンは忠誠のしるしの十字を切り、どうも騎士団が次王の指揮下に入ったようなのだ。

レイがイオの赤毛を見つけて、声をかけてくる。

「なんだ？ どうなったんだ？ 近衛兵団はどうすればと言っている？」

「海竜の貴公子を近衛兵団単独で倒せと」

それは冷たい言葉だったし、イオはそのまま伝えただけなのだ。

それでもレイは慌てふためき、どうしろと言うんだとつぶやく。

「指揮をするのは、鉄鎖の次王です。勝てない戦いはしません。一人も殺しません。それを信じればいいんです。軍神です。宣戦布告はもうされました」

15. イオとエマの衝突

「おまえのせいだからな！ 責任を取ってくれるんだろうな！ わかっているのか！」

盛大な剣幕で詰め寄せられ、イオはその白い短髪の女性の甲高い非難を、たじろいで受け止める。

「なに？ なに？ なに？ あたし、なにもしてないし、そう、エマはとても覚えが速いとは言ったよ。でもそれは褒めているんだし、嘘を言ったわけではないでしょ？」

激昂した目の前の色白の少女の紅潮した頬には、それは無力なように思えた。

「だからそれだ！ そのせいで騎士団がわたしをスカウトしたんだ！ いい迷惑だ！ わかるか！ エステバンだぞ！ 地獄の鬼騎士だ！ わかっているのか！」

猛烈な剣幕で怒鳴り散らすエマのことばを総合すれば、どうやら騎士団を率いることになるエステバンは、騎士団と近衛兵団を連絡する共通の副官役にエマを選んだようだった。

イオは感心する。

「あの騎士団長は見る目があったんだねえ……」

その声に余計にエマは激昂する。

「おまえは全然わかっていない！ エステバンは騎士団一強い！ だから同じ強さを、全員に求める！ わたしは剣が弱いから近衛兵団に入ったんだ！ だけれど、エステバンは容赦を知らない！ わかるか！ 鬼のしごきだ！ 騎士団の標準に達するまで骨が折れても徹底的にしごかれる！ 全部お前のせいだ！ わたしは強くなるまで徹底的にしごき抜かれる！ あざを作っても、骨が折れてもお構いなしだ！ 死ななきゃいいぐらいにしか思っていない！」

「はあ……」

イオは正直に言うと、蛮族であるボルニア出身だ。

なので、生存の為に千尋の谷から叩き落とされるのは慣れっこで、むしろ自ら望んで谷に落ちて修行することが普通になっている。なので、それが普通じゃないのかとってしまうのだが、それはイオとエマの間にある齟齬なのだ。

次王はエステバンを気に入った。

それはおそらくエステバンがそのボルニアが持っている、獅子の魂を持っていると直感しているからで、そのエステバンに気にいられば、谷に叩き落とされることになるのは当然の帰結だと思えて仕方なかった。

そして、イオがああの上試合を見ていた限りにおいて理解したのは、この新しい騎士団長はおそろしくあきらめが悪いということだった。そして鉄鎖の次王が率いる第2軍に、敵意と言うかライバル心を燃やしていた。

しかし、それはボルニアの日常なのだ。

イオが絶対に言ってはならないのは、普通だよ、ということだった。

だけれども、それがイオの日常だったので、どう言っているのか分からないのだ。

「でもさ、あたし安心した」

うっかり気安く言うと、燃えるような怒りの炎がイオに向けられる。

「あ、さ、エマってもっと難しい人なんだって思った。単純なボルニアから見る、エストはとても複雑で、いったいどうしていいのか分からなくなる」

すこし感心したようにそうかと思つた。

「エマはさ、文句があったら絶対にちゃんと言ってくれる。もし、怒らせるようなことをしていたらすぐに言ってくれるじゃない？」

「そんなの当たり前だよ！」

イオがずっと触れていたのは、陰湿な老王の策略の世界。

鉄鎖の次王がボルニア中で崇拜されるのは、一切の難解さを排除して、単刀直入に、単純明快な論理で軍を率いているからだった。

もしエマが、怒りをぶつけるのではなく、陰湿な陰謀でいやがらせをすることを選んだとしたらどうなっていたらと思う。単純にぶつけてくれるエマが、イオにはほっとする相手だったのだ。

それはイオが見た闇が深すぎたのかもしれない。これが日常なのだと思うと、心の底から救われる気持ちになるのだ。

「そういえばさ、エステバンとレイではどちらが強い？」

思わず聞いていたのは、レイの太刀筋はイオは理解していたからだ。

エマはふしぎそうな顔をして、騎士団の太刀は重いから、近衛兵団では受けられないよという。イオは即座に理解して、それなら受け流しだね、と剣を抜く。ぎょっとするエマを尻目に、抜きなよ、いまから見せるから、と話す。

「まず言うよ。これは円弧なんだ。円を描くように剣を動かす。どんな円なのかは使い手による。どこで力を入れて、どこで力を抜いて円の軌道に持っていか。これをマスターするとだいたい死ななくなる。でも結論は円なんだ。覚えて見せてあげなよ、エステバンに。たぶん騎士団は文句を言わなくなる。エマは覚えが早いし」

エマは渋々抜き、震える腕でそれを構える。

ふっと笑うと、イオはいつでもいいよと囁くように言う。

それでも動かないので、イオは剣を大地に刺して、エステバンだったら蹴飛ばすよと、言う。もちろんそれは充分な挑発で、エマは重い剣を上げた。

イオにはそれはとても遅いように見えたし、剣を引き抜いて応戦するには十分な時間があった。重い一撃が振りかざされた時に、円弧に沿ってその力をそらすことはできたし、次王はこんなに下手ではないと思う余裕があった。

受け流されたエマは重心を失いよろよろとよろめく。

「なんだ？ それ？」

「だから、これが受け流し。これを覚えれば、エステバンは一切の文句を言わなくなる。謝りたいんだ。エマにつらい思いをしてほしくない。でもそれはエマが話してくれたから分かるんだよ？ だから、ずっと友達でいてほしい。あたしたち悪くないと思うんだけどな。エマは全部話してくれるから好きだ。エマはどう思う？」

※

第2軍の一部が出て行く本国への報告団の見送りは、次王の実の弟であるリクトルが指揮するにもかかわらずあっさりとしたもので、とにかく本国にプレッシャーを与えないように、浅い部隊として送られた。

たしかに、本国を制圧する屈強の部隊と思われるはず。

実際に第2軍の主力は、次王の決断が正しいのであれば、エストの近衛兵団と騎士団であり、次王直属のヴァンダル族が鍛え上げているのは、だれも戦力になるとは思っていなかった近衛兵団であり、騎士団だった。

「旗を取れ！ 迅速に機動しろ！ 地形を言い訳にするな！」

次王が課しているのは模擬戦で、そのほとんどがあらゆる地形における機動の仕方を叩き込む訓練だった。

どう考えても竜では下れない急坂を走らせたり、広範囲に広がった陣でどう標的を追い詰めるかを、ひたすらにやった。

現在のところ次王がすべきことは、エスト国内の平定であって、アイギスに居するボルニア軍をよく思っていない国内勢力は多々いる。エストは先に書いたように、堅固なフィヨルドに或る交易都市の連合であって、その盟主にアイギスが選ばれ、そこに連合の盟主としてアテナイスが在するのは、アイギスだけは誰もが落とせないことを理解しているからだ。

広大な淡水湖に在する群島都市。

淡水は豊富で、それどころか広い島々で作物を栽培できる。

たった単独ですべての兵站を維持できるのはアイギスだけであり、そしてフィヨルドの諸都市が擁する海竜は、淡水湖のアイギスに攻め入ることができない。

しかし、この鉄鎖の次王は、この難攻不落のアイギスを、十分な後詰があったとはいえ、実質的にはたった150騎の精鋭部隊で落したのだ。アイギスが親次王派になっていくのに時間がかかるとは思えなかった。

イオの任務が次王の護衛ではなく、エマを鍛え上げることになっているのは、次王はエストの平定に第2軍を使えないことに理由があった。ボルニアは近い将来に王位継承戦争を予定している。これまでの全く見ず知らずの軍隊に不意打ち的に攻め込むのではなく、もうすでに何回も会戦し、お互いを知り尽くした最強の勢力にぶつかなければいけないのである。対外遠征をしているのは第2軍だけで、ここで第2軍が消耗するわけには一切いかなかった。

だから、エストの平定に近衛兵団と騎士団が使えないと非常にまずい。

第2軍がこの土地を離れたときに、ここはいくらでも荒していいと思われるのはまずいのだ。そのためにはエストの既存の軍事組織がプレゼンスを誇っていないといけないのだ。

まずそのためには、見せしめになるんだろうか、エストの平定は、エストに常設されているアテナイス直下の二大兵団で成し遂げなければならない。そのために次王は、どこまで意図していたは分からないのだが、その長であるレイとエステバンを従わせた。ここまではとてもきれいな思考だ。

しかし問題は、ほんとうにこれが役にたつのかということだった。

だから、次王はヴァンダル族の戦士たちを総動員して、劣っている部分を気付かせるように、ひたすらに模擬戦を繰り返す。

「イオ！ エストの伝令が遅れている！ おまえは何を教えた！ あんなので役に立つか！ 5秒が重要だとおまえは知っているだろ！ なぜそれを教えない！」

次王の指摘は的確すぎて、身震いしか感じない。

(この人は、戦場の動きを全部把握している……)

畏怖なのだ。イオを鍛え上げたのはこの稀有な才能であり、エマにとっての上司がエステバンであるのなら、イオにとってはこの無敵の若者なのである。

すばやく筆記して、翼竜を飛ばす。

(エマ、15秒遅れていたよ。それで次王に怒られた。めちゃくちゃだと思っても躊躇してはいけない。そうすると10秒は遅れる)

飛ばすが、エマがどう思ったかは分からない。

世界はこれだけ難しいのである。

その翼竜が飛ぶ先がどう思っているかなんて、わからない。

すこしの遅れが、次王の計算を狂わせる。躊躇させないように、10秒を失わないように文章を書かなければならない。生死を分けるのは次王が言うように5秒なのだ。それは単純明快でなければならないし、次王のことばをそのまま書けばいいというものでもなかった。

ものすごい速度で文章を書きながら思う。

(エマ、生き残ろう)

※

「騎士団の正副官として、エマを任命する」

鬼教官である騎士団長はぴくりとも頬を動かさず、冷たい視線をエマに向けた。

エマは事前に分かっていたとは思うのだが、それでもその正式の発言を受けて、これまでの苦しさを思っ
て涙した。

ことばが出なかった。

さんざんに号泣するだけで、ひっくひっくと嗚咽だけがつづいた。

その姿をみて、聖堂に集まった人は理解したのだ。だれかがメロディーを歌い始めると、それは自然に
合唱になった。あなたは一人ではない。こんなにもたくさんの仲間がいる。あなたはひとりではない。

エマが感じたことを、イオは説明することができない。

聖教を理解することができないし、イオはボルニアに人間だったのである。

それは衝撃的な壁であり、国というものはじめて理解した事件だった。

兄貴が側による。

「泣くな。おまえが泣くところじゃない。旅立ちをいわおうじゃないか」

この兄貴はいちいちもったもなのだ。それでも、もうすこし個人的な気持ちに浸ってはなんでいけない
んだらう？

声が出せなかった。

「イオは、やさしいね。ぼくみたいに冷たくない。イオは、分からないんだろ？ そういう時は正直に分か
らないというんだ。そうすれば分からないことが分かる」

この兄貴はいつでも前に立っていて憎たらしい。

「エマがさ、」

「うん」

超然としているというよりは、公平さを保とうとしている。

「せっかくの友達がいなくなってしまう気がするの」

やっと絞り出したことばだった。

これがイオの恐れのすべてあり、怖い理由はエマを失うかもしれないもということだった。

兄貴はぽんぽんとイオの赤毛を撫で、それから肩を抱いた。

「友達はなくなるらない。それはイオの錯覚だよ」

むせび泣く背中をやさしくさする。

「イオは大切な友達を見つけた。これはすごい幸運だ。そして失いたくなくなった。イオは正直にそれを言
うといい。エマに言えばいい、キミを失いたくないと。どんなことをしても、あらゆる手段を使っても、友
達でいるためなら何でもすると、そう言えばいい」

「でも、あたしは失うことの準備をずっとしてるんだよ！ エマがいなくなったら！」

兄貴は笑う。

「それはイオの恐れだ。それを素直にエマにぶつければいい。素直であればあるほど気持ちは伝わる。イオ
は難しく考える癖がついているのかな。世の中はもっとシンプルだよ。友達を失いたくないんだろ？ と
てもストレートにそう言えばいい。そう言われて嫌がる人がどこにるんだらう？」

この猛者は非常に困るというか、猛者すぎて参考にならない。

その瞬間にイオは冷静になれるのだが、これがこの兄貴の効用だと分かる。

とっさに質問を思いつく。

「兄貴は、友達である鉄鎖の次王が死んだらどうするの？ もし永久に会えなくなったら。それは怖くないの？ 次王は友達じゃないの？」

兄貴は考えた。

それは公式見解を推敲しているようで、だいたいは結論は出ているのだ。

「兄者が死んだら、リュディアは滅ぶ」

息をついて、推敲していた内容を話す。

「リュディア族には武力はないし、ヴァンダル族の庇護なしには生き残ることはできないよ。そこで起こるのは皆殺しだ。それにはぼくも含まれている。鉄鎖の次王が死んだら、わずかに数時間の誤差はあるかも知れないけれどもぼくも死ぬ。だから一切の心配がない。これは運命共同体だからね」

理解が難しかったが、リュディアは鉄鎖の次王が死んだら、滅びる気であるのだ。

数時間差で死ぬならば、心配している余裕はないということなのだろう。

それは、イオにはおそろしすぎる選択すぎて、こんな危険をリュディアは背負っていたのかといまさらながらに実感するのだ。

「リュディアを滅ぼすの？」

皆殺しになる光景がイオには浮かんだ。それは耐え難かったが、もっと耐え難いはずの兄貴はにっこりと笑った。

「どうして、あんなやつが存在すると思えるのだろうか？」

16. アリエス攻略戦

「手筈は言った通りだ」

丘陵の陰に集結した近衛兵団に、次王は言う。

「おれが偵察をする。イオは予備としてついてくる。作戦を立てたら翼竜を飛ばす。その指示に従って、兵団は動く」

単刀直入だ。

「イオはエマに飛ばせ。兵団はエマの読み上げる指示に従え」

ごくりという音さえ鳴らそうとしないのは、その丘陵が隠れているとはいえ、海竜の貴公子の本拠地の間近であり、近衛兵団のほとんどが海竜の貴公子の私兵団に勝てるとは思っていなかったからだ。

次王は大きな声でレイに聞く。

「海竜の貴公子はおれよりも強いかな？」

「い、いや、そうは思わないが、」

「なんだ、歯切れが悪いな。おれはまどろっこしいのが嫌いだ。勝てないと思ったら素直に言え」

正直なところ、近衛兵団は次王に課された訓練の日々でどれほど強くなったのかを実感できないのだろう。初戦である。自信がないのは当たり前だ。イオは何気なくエマを見る。その姿は初陣の戦士のように、どことなく浮つかない表情をしている。

「エマ、おまえだ。レイが答えられなかった。それを助けるのはおまえの仕事だ」

エマは直立し、慌ててことばを出そうとした。

「は、はい、近衛兵団は初陣であります！ 実際に戦ったことのないものがすべてです！ もちろん訓練はしております！ ですが、ほとんどものが人を殺したことがないのです！ ですから、そのような者たちであるをご認識ください！」

次王はなるほどと頷き、考慮すると呟く。

それから頭をかいて、なにかを考えた。

「わかった。殺す必要は一切ない。大切なのは無力化することだ。殺すのと無力化することは同じだ。逆らったら殺されると思わせることだし、武器を奪うだけでも十分に無気力になる。ほんとうは縛って自由を奪えれば十分だが、いまはそんな用意はない。殺さなくていい。降参させて武器を奪え。ただこれは殺すよりも危険だ。一切の油断をするな。殺すのが一番安全なだけなんだ」

おそろしく端的な言葉に兵団は思い出したように唾を呑む。

次王は愉快そうに笑み、軽々と片手を上げた。

「これは本番でも何でもない。訓練の一環だ。エスト中にアイギスに近衛兵団ありの声を轟かせようじゃないか。大丈夫だ、おれは訓練の中でアテナイスの兵団の無敵さを手に取るように理解してきた。おまえたちこそがアイギスの守護者だ。それを否定する奴はおれも含めてひとりもない」

もう少し正確に言うと、それを率いる無敵の王がそう言っているんだから間違いない、になるのだろうが、さすがにそこまで次王は言わない。

さすがにこの百戦錬磨の王は、兵の士気を掴むのが上手い。

イオが選ばれたのは副官であり連絡役であることもあるのだが、老王を暗殺しようとしていただけだって、隠密行動に長けていたからだった。

音もなく走る次王についていけるのは、たしかに数少ないだろうと思いつつ、イオはその側で役に立てることに感謝をしていた。連絡だけならエマでもいいし、実際に剣を振るうのであればヴァンダル族に猛者が大量にいる。

それでもイオが選ばれるのは赤毛が目立ちながらも、チビだからだ。

チビで、剣も使えるとなると数が限られる。

次王は慎重にフィヨルドを上から降りれそうなところを探り、当たり前なのだが降りれるところは要塞化されていることを確認する。それから周囲を探り、十分に遠いなだらかな斜面を探す。

嫌な予感しかしなかった。

この王は陽動作戦の天才なのだ。

「作戦が決まったぞ。すぐに指示を飛ばせ。近衛兵団は南の入り江に集結。合図があり次第、アリエスの港に突入する。入り江からアリエスまでは陸路で行ける。ただ最大戦速だ。イオ、戦えるか？ 厳しい戦いだぞ？」

顔くしかない。

身震いはするが、武者震いだと思いたい。

そもそもイオのくそ度胸は、老王を殺そうとしていた時から、次王に見染められていたのだ。その小さな背中をととも強く次王に叩かれ、イオはむせ込む。

「ちゃんと、鋼鉄の鎖帷子を着ているな。大丈夫だ、それはおそろしく頑丈だ。痛いことはあるがそれは我慢しろ、死にはしない」

※

翼竜を飛ばすと、もう戻れなくなる。

次王は小さく時間を数え、タイミングを計算する。

この人の頭の中にはこの付近の地形がすべて入っていて、そこを動く近衛兵団の状態がリアルタイムで分かるのだ。それから、小さくよしとつぶやく。それが何なのか分からなかったのだが、もしかしたら、近衛兵団の布陣が完了したタイミングなのかもしれない。

「赤色弾を詰めておけ」

次王の指示は端的だった。

赤色弾は王の位置を知らせる信号弾。

それを合図にして近衛兵団に全軍突撃させるつもりのようなようだった。

わなわなとは震えるが、この獰猛な王とともにあれるのであれば、それは光栄であるようにさえ思った。
(剣はちゃんと研いだっけ?)

ほんとうにどうでもいいことだけが脳裏をよぎる。

それでも、イオにとってもこれは初陣なのである。もしかしたら、はじめての敗北は次王に手首をつかまれたことなのかもしれないけど、そんなことを考え始めると混乱する。これが初陣でいい。あたしはいつの間にか単刀直入な次王の側にいることがとても好きになってきているのだ。

「次王さまは、危険を冒そうとしています。もしボルニアから輝きが消えたらどうなるでしょう？ ジャングルの闇しかありません。そんな危険を誰かが冒せるのでしょうか？」

自分で言っていて答えが分かった。

「それは、王だ。犠牲にするのは自分だ。このリスクを冒せるの自分しかいない。だからおれがするしかない。文句があるか？」

すこし考えてみるが、あんがい重要なことしか言ってなくて、怖いぐらい的確だった。

「では、はじめるぞ。背中には任せていいか？」

「次王さまを刺していいのは、あたしだけです」

次王はゆっくりと笑い、じゃあ、はじめようとおつぶやく。

アリエス攻略戦が始まったのである。

※

次王はすばやく要塞化された斜路に駆け抜けると、衛兵を容赦なく斬った。

血飛沫が強烈なサイレンとなり、混乱し始めた街道路の関所をたったひとりで制圧していく。フィヨルドが蜂の巣を叩いたようになり、鐘の音がはやく鳴る。それでもたったひとりの侵攻は迅速すぎて、イオでさえついていくのがやっとだった。

10人も殺せばふつうは充分なはずだったが、この鬼はそれで満足しなかった。

数えるのが馬鹿らしくなるほど、正確に頸動脈を斬った数はたくさんと言うしかなく、自分がひとりも斬っていないのが、おかしいような気さえた。

剣と剣がぶつからない。

まず頸動脈が斬られる。

鮮血だけが、その要塞化された防壁には充満されていた。

イオは息苦しくなってせき込む。

それでも伸びてくる剣を跳ね返していると、弱いなあと思えてくるのだ。

次王の太刀筋の恐ろしさに慣れると、しょせん傭兵風情だろうと思えるのだ。

事実、アリエスを守っていたのは、ザブンテの敗残兵がほとんどで、イオはこの時分かっていないのだが、ザブンテの精鋭はシドの始まりの女王の再来に忠誠を誓うことになる。

シドと言う国はあったのかと考えるのは複雑なのだが、金銭の面で考えればあったのだろう。ただ、死神が乗っ取ったと考えたときに、それはもともとあった国なのかとは考えてしまう。

実質的に一部を除いてシド兵は戦っていないし、ほとんどの主力はザブンテの敗残部隊だったのだ。死神はザブンテの敗残兵を掌握し、そこにあらゆる勢力が集結した。あまり語らない方がいいのだが、エストの勢力さえ合流した。

シドと言う名の、死神リニーに率いられた反ボルニア勢力と、鉄鎖の次王は死闘を繰り広げるのである。

たぶん、鉄鎖の次王がまったく想定していなかった最強の敵である。

その話をするのはもう少し先の話だ。

この戦いは、次王が訓練だというのにふさわしく、あっさりと終わる。

血まみれの次王が港に入った時に、完全武装の騎士が立ちふさがった。フェイスガードで見えないが、海竜の貴公子だろう。重武装の戦士の登場は、周囲の傷だらけの傭兵たちの士気を上げるには充分で、次王はさすがに刃こぼれした剣を振りかざすわけも行かずに困った。

「イオ」

「赤色弾を上げましょう、そのために準備していました」

次王は理解し、上げろと言い、イオは着火して天高くそれを上げた。

驚くべきことに、次王は剣を捨てた。

「剣を捨てるとは、戦いを捨てたか。まあ文句はないのだが」

ちがう、剣がいらなかったんだ。

イオはとっさに思うが、それよりも次王は速かった。すばやく重武装の懐にすべりこみ、首に腕を伸ばし、それを素早く折った。

ゴキッという音がした。

あまりにも生々しくて、イオでさえトラウマになる。

海竜の貴公子は、それで、どういったらいいのだろう、無力化された。

指揮官を失ったアリエスは近衛兵団の侵攻に耐える手段を持たなかった。

たぶん、近衛兵団はこのときはじめて自分たちは充分にやれるんだと思っただろう。

少数の部隊に分かれた兵団は、つねに多数を作って港を制圧し、複雑に入り組んだ港町に浸透していっ

た。もはや近衛兵団には殺す必要はなく、武器を奪って捕縛していく。

「アイギスは、エストの住民を殺すつもりはない。いろいろ思うところはあるかも知れないが、剣を向けなければいい。武器を渡すことは、その誓いだ。それでいい。それ以上は望まない！」

レイが叫ぶと、アリエスの住民たちは安心をして、脱力をする。

ザブンテの傭兵風情がどうするかをイオは注意深く見ていたのだが、富の象徴が死んだのを見ると無気力になった。しょせん金で繋がった戦力は弱い。

ついに虹翼の援軍は来なかった。

そもそも、次王が奇襲を開始したときから助けを呼びに行っても間に合わなかっただろう。しかし、やはり虹翼とアリエスのつながりもやはり金だった。次王が交渉材料に使ったのは、北方大陸を荒らすシドと言う無法商人である。かつてに国を荒らしていく国よりも、その国と全面对決すると宣言する王の方が魅力的だったのだ。

あんがい上手くやったというよりは、考え抜かれている。

それで、アリエスはどうでもいい港町になった。

シドの悪徳が、次王の姿を輝かせたのである。

※

アテナイスの兵団とは、いわばロイヤルガードである。

だからその赤服は非常に礼儀正しく、占領下にある港町を荒らしたりしない規律がある。

そこに次王が目を付けていたのかは不明なのだが、何の問題も起こらずに戦後の規律が回復していくのには、目を見張るものがあった。

「制圧完了です」

直立して言うレイに、ご苦労と小さく呟く。

「財産は一切奪うな。おまえたちへの給金は、おれから払う。十分な額になる。少なくとももう一回はこの戦に参加したいと思うぐらいにはだ。それは期待して待て。おれはタダで働けとは言わない」

この王が自信を持って言えるのは、レトとリュディアの類稀な次王を義兄弟にしているからだ。レトの実力だけは、イオには判断がつかないのだが、取り方によってはボルニア最強の商業部族である。隊商をジャングルの縦横にめぐらせ、つねに商売のことしか考えていない。

レトだけが謎なのだ。

アリエスの平定は、平和裏に進んだ。

そもそもアイギスは盟主であるし、アテナイスの居城である。

絶対中立の盟約が破られたのは、ボルニアが危機を抱えていたからである。しかし次王が殺したのは、ザブンテの傭兵風情とその主だけであり、ほとんどの人には安全が約束され、その条件は武器を渡すことだった。

次王はその様子を徒歩で検分し、潮風を確かめた。

「ここは良港だ。引き続き、キュディスとの商売をしてほしい。キュディスとは合意を得ている。おれは商売の邪魔はしない」

風に吹かれる姿はしごくうつくしく、波さえ味方につけているように見えた。

こわいぐらいの気持ちが出て、イオはさりげなく言う。

「勝利に浸るのはこの辺でいいでしょう」

「おまえは無粋だな」

イオの心臓がおどったのは当たり前で、不興を買ってしまったのではないかと思うのだ。だけれどもそれはイオの思い過ごしで、このひとはとても素直な感想しか言っていないのだ。

「おまえは、リュディアの弟分に似ている。それでは同じだ。おれが欲しいのはリュディアのコピーじゃない。イオが欲しいんだ。おまえはイオだろ。おれが欲しいイオだ。なんで、おまえの兄貴の真似をするんだ」

そうだよ！ イオと呼んでほしい！

そもそもイオは、リュディアの文化に染まりすぎているので、そして、兄貴を信奉しすぎているので、いったい何がイオなのかなのかなのかなんて考えられない。ただ、次王は認識していて、これがイオだということが分かっている。

(あたしはなんなんだ)

辛い料理は食べれる。文字は書ける。翼竜の扱いもうまい。エマと仲良しだ。次王の側にいる。剣も使える。

涙が出てくるのを止められなかった。

(あたしはなんなんだ)

ぼろぼろと涙が流れた。それは、自分が意味不明に思えたからだ。

それが知りたかった。

それは次王は言っている。

「おれを殺して、一緒に死ぬのはおまえだけだ」

※

世界はいつも無邪気だけど、おそろしいことを告げに来る。

たった一騎の竜が走ってきたときに、その武装がヴァンダル族の精鋭だと分かって、イオは緊張した。

「族長！ 族長！」

ことばになっていない混乱が、すさまじい威力を持って、イオを震わせた。

大きな声で世界の終わりを叫ぶ。

「ザブンテが蜂起しました！ ザブンテは第1軍の支配下に落ちました！」

世界大戦がはじまる。

17. ザブンテ制圧戦 1

それほど長く仕えたわけではないイオが次王を想うときに、まず浮かぶのがふしぎと素直という言葉だった。

素直。

これは決してほめ言葉ではないはずだ、と思う。

王に対して使っていい言葉ではないし、無類の戦上手であるのだから、どこかには狡猾さに似たものを隠し持っているはずだった。しかしあの青年を眺めていると、それは野生動物が持ち合わせている生き残る術のように見え、獯猛というよりは精悍で、生命力に満ち溢れた生き物に見えて仕方ない。

はつらつとした精気があり、力強く、強靱である。

その筋肉のひとつひとつが躍動的であり、戦をするために生まれてきた鬼とはこのような姿をしているのではないかとさえ思える。

そんなことを惚れ惚れと想いながらも、その青年を包み込んでいるのは、素直さなのだといオにはわかるのだ。この王に、あなたは素直な人だというと、きっとその言葉を意外に思いながらも真剣に受け止め、いったいイオは何を言っているのだらうと、きっと考え込み始める。イオにはそれがたまらなく愛おしくて、心の中で大切に、なんどもなんども抱きしめていたくなる。

そんな素直さ。

老王の狡猾な暴政を間近で見てきたイオには暖かいぬくもりのように思え、この王を手放したくない、この王にボルニアを統べてほしい、そのためだったら何でもする、そんな気持ちをふしぎと感じさせるのだ。(もう、この人なしには生きていけないのかもしれない)

嬉し涙さえ流れない。

あたしはこの人の一部で、この人はあたしの一部だ。

自分が自分であることをうれしいと思う人はあるのだろうか？

この王のいるところがあたしの家だ。

第2軍があたしの家族だ。

それがこの次王の兵団を包み込んでいる空気であり、イオはようやくその空気をなかまと吸っていることがわかり始めてくる。なかまのだれもがイオと同じ気持ちなのだ。それがひとりひとりの動きからさえも見えてくるようで、愛おしくなっていく。

ここがあたしの生きる場所だ。

鉄鎖の次王の率いる無敵の兵団が、あたしの居場所なのだ。

もしこの空気がなくなったら、あたしたちは生きていけるのだろうか？

イオはもはや、空気というものがいったいどういったものだったのかを忘れつつあり、呼吸ができないということがどういうことだったのかを忘れつつある。

「イオ、第2軍を統制しろ。浮足立っている。まず正確な情報を伝えろ。そして何が起こるかを正確に伝える。おまえが副官だ」

このことばはおそろしく厳しい。

イオは持てる限りを尽くすが、この上司だらけの第2軍に何を言えるのだらう。

同じように困っているエマを思った。

(ごめんね。あたしが甘かった)

それでもイオは次王の威光を借りて、混乱し始めた前線を統率していく。

「戦う理由がなくなったら終わりだぞ！ おまえらは全員死ぬ。だけど生き残ったら、莫大な報酬が得られる！ 次王様はどこまでも報酬を与えてくださる！」

アイギスには、反次王勢力がいて、それが緒戦になった。

次王の兵団は当たり前のように、アイギスが持つ大要塞に籠り、エステバンが率いる騎士団と対面した。「予定されていた最悪の事態が起こった」

「おまえは計算していたのだろう？ さかしい真似は、けっこうだ」

次王は楽しそうに笑う。

ほんとうに楽しいのかもしれない。

「騎士団に命じる。スカイを遡れ。スカイを征するのは、この区域の制者だ。スカイが取れる。エスト騎士団に命じる。スカイを征せよ！」

わなわなと震えるエステバンに言う。

「別にこれは、アテナイスの近衛兵団に命じてもいいのだ」

ザブンテの蜂起を知って、真っ先に齒向かったのがエストの騎士団で、それを指揮していたのはエステバンだった。次王の対策は迅速で、近衛兵団にアイギスの守備をまかせて、第2軍の全軍でそれを迎え撃った。

おそろしいほど迅速に、反乱は鎮圧されていく。

ヴァンダルの戦士がほとんど残っていたのは大きいし、そもそもボルニアの戦力とエストの戦力を比べるのは、おかしい話だ。1騎当千とまでは行かなくても、5騎ぐらいはだいたい渡り合う。次王はおそらく模擬戦ぐらいにしか思っておらず、これはほとんどボルニア勢の強さを知らしめるデモンストレーションにしかならなかった。

多くの人はこの鉄鎖の次王が無敵の次王だったという。

しかしそれは、諸部族の戦士たちの忠誠に支えられていて、決して次王が無限に強かったとはイオでも思わない。この王を支えていたのは、諸部族の忠誠だ。

いみじくも、敵国となるシドの最高司令官であるリニーが言った言葉が、この王を解き明かす文句になる。

――滅ぼすものが現れるから滅びるわけではない。滅びるべきだからこそ、滅ぼすものが現れるのだ。

鉄鎖の次王はそんなに優秀なのではないのかもしれない。

そもそもボルニアは強いのだ。

そこに、絶対的な支持を受ける王が登場すれば、無敵になる。

イオは次王の明快さにくらくらする。

でもそれは老王の暴政を味わい尽くしているから、絶対的な忠誠を感じてしまうのではないかと思うのだ。正常な判断ができないようで、イオは次王を支持してしまう。

たけど、これは正常な指揮なのだ。

あまりにもこれまでが正常でなかったから、病のように正常さに支持をしてしまうのだ。

滅ぼすものが現れたのは、滅ぼすものが優秀だったからではない。

滅ぼすべきだったからこそ、滅ぼすものが現れたのだ。

次王を見ていると、きわめて有能という特徴を持ちながらも、ヴァンダル族の最高責任者と言う肩書を持ちながらも、有能な盟友をたくさんを保持している。

筆頭に挙がるのはリュディアの兄貴だが、兄貴の言を信じれば、幼いころからの仲らしい。しかし、兄貴があのおそろしいほどの努力をなぜ積み上げはじめたかと考えると、鉄鎖の次王がボルニアを統べる世界を想像できたときに、そこにいたいと思ったからだろう。

その傍らに立つ宰相になりたい。

現実にそうになっているし、あたしは兄貴ほど知識を持っている人を知らない。

幼少期から、兄貴には目標があったのだ。

このボルニア王を支えるのは自分で、内政分野は全部任せてくれる。ならばリュディアの次王の座を取ろう。リュディアの次王になれば、鉄鎖の次王は無視できない。

これをなんというのか、イオは語彙が少なくて困る。

コネと言うには、実力があまりすぎる。

そもそも、兄貴は老王から配下につかないと酷いことになるかと脅されていたのだし、リュディアは兄貴の元で結束していた。リュディアが欲しいのは誰でもそうなのだ。だけれども、兄貴は鉄鎖の次王に未来を見ていた。

(レトの次王はどうなんだろう?)

そう考えると、まだ分かっていないながらも、レト族の次王がどうも鉄鎖の次王に未来を見ているように思えて、レトが分かっていないので断言はできないのだが、あの損得しか考えない部族が、鉄鎖の次王の危機に役に立つのだろうかと思ってしまう。

もちろんそれができるから、3王のひとりなのだ。

ばけものは3人いる。

これが新生ボルニアを統率する、第2軍の陣容であって、3王が揃うと無敵と言われる、最強のボルニアの姿なのである。

それはこの、アイギス攻防戦で存分に世界中が思い知らされる。

「騎士団は後詰だ。先鋒は第2軍が務める。騎士団の任務はスカイの制圧。おまえたちは常にスカイの制圧を考えてきたんではないのか？」

「いかにも」

明快すぎて反論のしようがない。

エステバンのことばに次王は微笑み、言葉を継ぐ。許すとさえ言わない。

「では、安心した。アイギスの防衛は近衛兵団に任せる。思う存分にスカイを取れ。後方は心配するな、アテナイスの兵団が、絶対に死守する。いつでも帰れるところは、近衛兵団が守っている。アイギスまで帰れば、絶対に安全だ。犬死することはない」

これが見事というのは侮辱かもしれないけれども、どういう計算なのか、鉄鎖の次王はエストの防衛体制を確立していた。

「第2軍は全面攻撃だ。ザブンテを取り戻すし、不法な蜂起を許すわけにはいかない。叩きのめすしかない。やつが出てくる。最強の相手だ。こんなことは言いたくない。だけれどもしかたない。おまえたちの命をくれ！」

それは叫ぶようであり、贖罪の言葉のように聞こえた。

イオには次王が泣いているように見えたし、胸を突き刺された。

心臓などどうでもいいように思えた。

(この人はどんだけの重圧を背負っているのだろう)

それは遅すぎたし、あきらかにイオはそれを回避するだけの能力を持っていなかったのだが。

18. ザブンテ制圧戦2

イオは第2軍を率いる次王の背中を見るとき、泣いているように見えるときがある。

兄貴が鉄鎖の次王を見たときに思ったように、このたいして年齢の離れていない青年は、老王の暴政を見たときに、ボルニアは無尽蔵だと確信したときに、みにくい内部抗争をし続けてアテナイスでさえそこに人がいるとは思ってもいなかった状況だったときに、ボルニアに必要なのはたった一人の、誰からも明らかな王であり、その王はどの部族も忠誠を誓えるほど立派な王でなければならないと確信し、自分がそうなろうと誓ったのだ。

そのときに感じた、そして今も背負っている重責はどれほどのものだろう。

それがイオには、泣いているように見える。

泣きべそをかきながら、精一杯の強がりて兵団を率いているように見える。

それが突き刺さったとき、イオはもう運命から逃れることができそうになかった。

身体中を突き刺され、もう一ミリも鉄鎖の次王の領土でないところは無いように思う。

「イオ、ここを宿営地にする」

「あ、はい」

あわてて全軍停止の信号弾を宙に放ち、スカイの中州に全軍を終結させる。

「ここを本日の宿営地とする！」

朗々とした声は風と水の音しかしない中州に響き渡り、第2軍の面々が竜を降りて、騒々しく宿営の準備に入った。あちこちで火が焚かれ、せわしなく駆り出しに行く部隊に命令が飛ぶ。周辺から食べるものを集めてくるのだ。主食はあるが、保存のきかない食材は周囲から集めるしかない。

次王は竜を降り、集まってきた各部族の長と歓談に入る。

「ザブンテで待ち受けているのは、第1軍のやつらだ。てごわいぞ。おれも何回も戦ったが、あの指揮官は厄介だ」

「ブンダルスのは、なんで老王なんかにつくんですかね？」

「やつは莫大な報酬を老王から受け取っている。それはほとんどが税収から払われている。おれはその不正が我慢ならない。おれは一切報酬なんて受け取ったことはないし、得たものは全部功績のあったものに分配している」

それは正直に言うと、リュディアとレットというボルニア随一の金を産む部族の忠誠を勝ち取っているからできる業で、次王の無欲さとは無関係なのだが、この次王は基本的に金の問題を、従う2王に任せている。「おれはブンダルスに金を払って引き抜きたいとは思わない。単純に戦場で叩きのめせばいい。そうすれば、ブンダルスに払う分が、貢献した者たちに分け与えられる。何か問題があるか？」

「いえ、ありません」

おそろしく単純明快である。

この状況が続くのは、死神リニーと対峙するまでで、最強の好敵手が現れたとたんに、新しい考えをしなくてはいけなくなる。

しかしそれは、だいぶ先の話だ。

まだこの時は、無敵の第2軍に立ち向かえるのは、同じ鉄鎖操竜法を熟知している身内しかいないとおもっていた。

この時点では、何も始まっていないのである。

ザブンテへのスカイ渡河戦は、いつものように奇襲から始まった。

次王が率いる少数精鋭部隊がまず先鋒で、その渡河を認識させてから左翼と右翼がしずかに渡河する。

たぶん相手はそれを熟知している。

それでも、そのやり方を無視できないのは、次王の直属部隊が圧倒的に強いからだ。

この渡河戦は、先鋒が突っ込む地点が狭い。

それでヴァンダル族中心の部隊は、お互いに音を鳴らし、それぞれお互いの位置を確認していく。正直、イオはすることがなかった。イオが何かをするまでもなく、ヴァンダル族は互いに意思疎通をし、だいたい近いのだから、次王の声が通る。

「しばらく殲滅する。武功を稼げ！」

一番強い部隊を、一番弱いところにぶつけられている。

これは一方的な殲滅になるしかなく、完全に食い破られて、陣に穴ができる。

それから軍を右翼に回し、背後から襲い掛かった。

「イオ、いまだ！ 右翼に全軍突撃命令！」

あわてて信号弾に弾を込め、それを空に放つ。

怒号が右翼から響き渡った。

概観して言えば、陣を破った遊撃部隊が敵陣の左翼に背後から襲い掛かり、混乱したところに敵陣の左翼と対峙する右翼の本軍が襲い掛かる。敵陣の左翼は前後からの挟み撃ちに遭い、まともな陣形を取れなくなる。

敵陣の左翼と右翼を分断して、その片方を包囲殲滅しているだけである。

「中央突破する！ ついてこい！」

次王の転進は、敵陣の中央に向いており、そこから敵陣の右翼をいっきに背後から襲い掛かるつもりだった。完全な殲滅が完成するはずだった。次王の率いるのわずかな騎竜兵の前に大剣を持った男が立ちふさがる。

「いつもながら、鮮やかな手並みだな」

その中央に布陣する重装備の騎竜兵たちを見て、次王は大きな舌打ちをした。

「まさか、無残にやられるのを見過ごすと思ったか？」

「そんなことを思ったことは一度もない。だが、試す価値はある」

おそらく、ブンダルスなのだろう。

次王の直属軍は分厚い中央の守りを見ても、一切の躊躇がない。

「突破すれば勝ちだ！」

次王の指示は単純明快だ。もう何回言ったかわからない。

「イオ！ 中央の部隊に突撃命令を下せ！」

(え？ まだ、中央は崩していないのに？)

「迷うな！ まよったら5秒遅れる！ それが致命傷になる！」

イオはすばやく信号弾を詰め、それを素早く空に打ち上げた。

中央の部隊から、怒号が響き渡る。それで、目の前の兵が動揺する。

(ああ、もうこの時点で挟撃になっているのか……)

「次だ！ 左翼も出せ！」

もう訳が分からなくなる。それでも迷いは致命傷だ。発弾すると、左翼が怒号を上げて一斉突撃を始めた。

これは端的に言うと分断作戦だったのである。

迅速な遊撃部隊の時間差攻撃を利用した心理戦で、互いの指揮官が連絡が取れないようにして、時間差で相手陣の主力の背後を突くことで、不安に貶める。鉄鎖の次王がその直属部隊に機動力を求めるのは、遊撃部隊がどのタイミングで襲い掛かるのかが分からなければ、相手に対処する時間を与えないか

らだ。

そして、無敵の次王直属軍は、そのほとんどがヴァンダル族の猛者なのだが、中央の部隊を背後から敵陣の右翼に向かって食い破っていく。

大量の血飛沫が飛び、イオはその絶叫のほとんどがヴァンダル族のものではないとはわかるほどには戦場に慣れていて。

(とっばした)

先頭を走るのは次王の竜で、背後がついてきているのか分からないのだが、次王が絶叫するように叫ぶ。「おれはヴァンダルの次王だ！ なぜ、ザブンテで第1軍は反乱した！ おれは絶対に許さない！ おまえたちはこのボルニアの秩序を乱すのか！ 何か不満を感じるようなことをおれがしたか！ いま従うならば、一切の罪は問わないと約束しよう！ 今すぐ剣を納めろ！」

それは直属軍が背後に襲い掛かるよりも衝撃的で、たった一人の王が自分たちの背後にいるだなんて思えなかったのだ。

「この醜い内部抗争をやめてくれ！ おれたちはジャングルで醜い争いをしてきた！ その結果はどうだ！

ボルニアに、まさか人が住んでいると思わなかったと言われたんだ！ おれたちはずっといなかったんだ！ それはなぜだ！」

次王のことばは痛烈だった。

徐々に第1軍は戦意を失い、その剣を下ろし始める。

「イオ！ 全軍停止命令だ！ 発弾しろ！」

これみよがしに言う。

イオがすばやくボルニア共通の信号弾を空に放つと、第1軍の陣営に安堵のため息が漏れた。徐々に集結しつつある直属軍の面々をみながら、次王はきさくに騎竜兵たちに無事でよかったと声をかける。

「撤退を許す！ 一切のボルニア人を傷つけないと約束する！ おれたちは本来仲間であるはずだ！ 大いに、これからどうするか話せ！ おれはその結論を尊重する！」

ブンダルスが一騎で次王の前に現れ、唾を吐く。

「狂人どもの親玉が何を偉そうに言う。おまえに従っても一切の報酬は出ないのだろう？ そんな奴に誰が従う？ 次王のおまえに誰が従う？ 一切を握っているのは現王だ。なにか異論があるか？」

次王はしばらく黙る。

「約束は一切ない。だがおれは次の王になる。それは現王の暴政が間違いだと思っているからだ。公正にする。やましいことは一切しない。嘘はつかない。難しいことは言わない。約束は守る。誰もを大切にする」

大勢いるはずのその野が静まり返った。

「おれは今の状況が嫌なんだ！ こんなにめちゃくちゃなことに耐えられるか？ おれはいやだ！ そうじゃなくしたい！ 加わってくれとは言わない。味方になってくれとは言わない。だけど敵対しないほしい。おれは一切奪わない。何も悪いことはしない。ボルニアはまとまれば無尽蔵なんだ。ただそれだけが、おれの言いたいことなんだ！」

イオは竜の背から顔を出して、第1軍の面々の表情を見る。

それは同意をしているようでもあり、次の信号弾は何を詰めればいいのかと考える。

武装解除なのか、一斉突撃なのか。

はっと気づいたのは、まず赤色弾で王の位置を知らせることだった。敵は王の位置を知っているが、味方は王の位置を知らない。それで、慌てて赤色弾を込める。

「おまえは、このボルニアを盗もうとしている！」

それは、幼いというには充分すぎる言葉で、それはイオでさえも分かった。鉄鎖の次王は公正な次王の

勢力争いを勝ち抜くと言っているだけで、ヴァンダル族の支持を一身に受けていることが反則ならば、そもそもボルニアと言う国は機能しない。

リュディアとレトが次王支持に動いていることも不快なのだろうか？

イオは立ち上がり、思わず叫んでいた。

「では、あなたは、どんなボルニアを望むんだ！ 反対するものを一切殺していくボルニアか！」

「イオ、言葉が過ぎるぞ！」

「ああ、そうさ！ そのために必要なのは安定した王位だ！ 常に一つの王位が他部族を支配していないといけない！ 安定のためだ！」

イオはキレそうになったが、次王が見ていることに気付いて、自分には仕事があったと思いだす。イオの言葉は、次王が継ぐ。

「おまえは、老王の息子だな。本心が知れてよかった。だが、ボルニア王の地位は世襲にするつもりは一切ない。これまで通り、王位争奪戦を勝ったものが取るものとする。戦にかかったものが、多くの支持を得られると思うからだ。なので、ここで木っ端みじんに叩きのめす。なんか異論はあるか？ できれば禍根を断つために殺しておきたい」

ぶるりと震えるのを見る。

「だ、第1軍に歯向かうのか！ 反乱じゃないか！」

「現王が率いていない。だからそうならない」

すばやく言った。

「イオ、赤色弾」

用意は完璧なので、すばやく空に上げる。

それから青色3発を最大戦速で込めるが、言うよりも早く上げてしまう。

「イオ、青色3発」

ザブンテに咆哮が響き渡る。

「ブンダルス、なんとかしろ！」

「そう言われても！」

第2軍の軍勢は、速力を基準にして選ばれている精鋭である。それが有機的にコミュニケーションして、最も効率的な殲滅をしていく。そもそもヴァンダル族が中心なのだし、ボルニア最強の兵団ではあるのだ。

殲滅という言葉は大げさだけれども、正面から戦ってもじりじりと押されていく。

次王は意外なことに、それを全く関与せずに見ていた。

19. ザブンテ制圧戦3

そもそも、老王がボルニア王の地位を手に入れることができたのは、出身部族が精強な騎竜兵を揃えていたからだ。ガーリー族は鉄鎖操竜法を生み出した部族として知られ、ボルニア中から尊敬を受けている。

その老王の息子が勘違いをするのは無理もなく、しかし、当時は単なる狂戦士の集団でしかなかったヴァンダル族が鉄鎖操竜法を学び、卓越した族長の元で結束し始めると状況が変わってくる。

いまや、ボルニア最強部族はガーリー族からヴァンダル族に移り始めていた。

次王は、遊軍のど真ん中にいて、冷静に戦況を見ていた。

「やっかいだな」

ガーリー族は組織的な粘り強い戦いが持ち味だ。それは言いかえれば、負けない戦いであり、とにかく相手の根負けを狙う。次王には、各部族から集結させた次王の150将はいまはなく、本陣を率いるリクトルもない。

両翼をもがれている。

それは左翼と右翼と言う意味ではなく、文字通り次王の翼である。

次王は戦場の真ただ中で、悠長にも考え始める。それを見ていたイオがはらはらするほどなのだが、次王は気にした様子もなかった。

「イオ」

「は、はい！」

「この辺に高台はないか？ よく見えない」

この人は何を言っているのだろうと絶句してしまう。ここはスカイの流域で、見渡す限りの氾濫原が広がっている。高台なんてあるはずがない。

「ば、バーラルまで戻らないとないと」

「それはよくない。第2軍は騎士団に先行することになっている。そうなるそうか」

嫌な予感しかしなかった。

「全軍、突撃命令だ！ 上流へ向かう！」

「へ？ あ？」

言っているのは、敵の本拠地に単独で突っ込むということだ。

あまりにも恐ろしくて手が震えた。

次王は竜を奔らせ、単独で上流へと向かっていく。

「イオ、赤色弾だ！ それから青色3発！」

信号弾が上がると、驚いたことに第2軍の騎竜兵たちが整然と突破を始めた。第1軍は突然の行動に理解が追いつかず大混乱に陥り、その隙間をするすると次王の兵団が抜けていく。

計算なんてないことは分かっている。

こういう時は思考停止の言葉にすがりたくなる。

意味の分からない行動をするのだが、だいたいはこちらとつじつま合わせはできる、それは何と言えればいいのかと困るのだが、怖くなってくる。

(て、天才だ……。軍神がそれでいいといっているのだから、大丈夫)

それは祈りであり、信仰だった。

兄貴の言葉を思い出す。

――どうして、あんなやつが存在すると思えるのだろうか？

(兄貴が無条件降伏するなら仕方ないじゃないか！)

このスカイ渡河戦の序盤はこうして終わり、第2軍はまんまと第1軍を突破して、ザブンテ領を見下ろ

す高台に撤退する。

ザブンテが領なのかどうなのかは疑問があるし、それが撤退であったのかどうかは疑問符しか並ばないのだが。

ザブンテに残っていたのは安っぽい傭兵風情で第1軍の精強軍に比べると物足りず、それに次王は見向きもしなかった。

「もっと、ザブンテ兵は勇猛だったのだが」

次王自身が、ザブンテに攻め込んだときのことを言っている。

実のところを言えば、その中核部隊はシドに逃れ、死神リニーの配下に入る。このボルニアとシドの戦いは、ボルニアとザブンテの戦いだったと言われるほどに、シドの中枢にいたのはこのザブンテの兵である。シドにも兵はあったが、リニーに忠誠を誓ったのは、ザブンテの兵なのである。

忠誠を誓われた軍事の天才は圧倒的に強い。

それにボルニアの鉄鎖操竜法に対抗する、シドの砲兵部隊が加わる。

たった一人のライフル銃の名手が、シドを北方最強と言われる砲兵兵団国に変える。

「やっかいだな」

うん、やっかいだ。

次王は頭をかき、それから冷静になる。

「ここを宿营地とする！ まず井戸を掘れ。あとはそれからだ！」

イオは、次王がやっかいだといったのをはじめて見た。

そこまで先を見ていないというか、あとから振り返って、あれは何だったのかということには興味がない。自分がどういう軌跡を追ってきたのかは興味がなくて、いまは何をするべきかにしか興味がない。

それは素直さであるし、冷静な清浄さであるのだ。

(なんて、うつくしい王なんだろう)

イオは心が震える気がした。

周囲の騎竜兵たちが何人かで相談し始め、それで井戸を掘る算段を付けていく。規律のある組織と言うのは見ていて心が躍る。着実に世界が変わっていくのを見ていて、何時間でも見ていたくなる。

「イオ！」

「は、はい！」

「狩りに行くぞ。まさか何もしなくていいと思っていたか？」

「いえ、めっそもない！」

いまにでも声をかけてほしかった。イオと呼ばれたかった。

食糧調達は重要だし、兵団の士気にかかわる。

兵団の騎竜兵たちは支給された主食の穀物を携帯しているし、スパイスも持っている。

足りないのは生鮮食物で、血の滴るステーキを食べたかったら、竜を狩る必要がある。

肉食の獣脚竜は外道とされ、草食の竜がいい。とくに、大スカイ河は首竜が豊富なので、一頭をしとめるだけで、膨大なステーキが取れる。

そして鉄鎖の次王は狩りの名手だ。

次王が単騎で高台から、大スカイの河面まで降りる。

それだけでもイオの背筋は震えるのだが、歯で曲刀を噛んで、鉄鎖の手綱さえ握らずに、大咆哮を上げる大型獣脚竜の最大疾走に耐えている姿をみていると、どれほどこんなことをやり続けてきたのだろう、と思えてくる。

曲刀を鞘から抜くと、たぶん遅いのだ。

だが、頸動脈を斬るには曲刀がいい。

それぐらいは分かる。

慣れてきた。

だいぶ。

このめちゃくちゃさに慣れてきた。

すさまじい速度で、次王の竜は一頭の首竜を標的にし、ものすごい速度で襲い掛かる。逃れる前に、次王は飛んで、その頸動脈を一撃で斬る。それで、どうと首竜が倒れて水飛沫が上がった。

次王は剣を鞘に納め、騎乗していた竜に話す。

「待て待て、わるい。おまえが食う分はあるから心配するな」

それで、竜に伝わるはずがないのだが、河面から剣を向けると、竜は怖気づいた。

「手伝え、イオ」

次王は鉄鎖を竜の背から下し、手慣れた動作で仕留めた獲物をこれまで乗っていた獣脚竜に繋いでいく。イオはあわてて手伝おうとするが、次王の手際が良すぎて、それを必死に覚えながら、手伝えたのはわずかだった。

――学べ、イオ。これが王の仕事だ。それはおまえもするんだ。

その背中がそう言っているようで、狩りは王の仕事じゃないとはとても言い出せそうになかった。

高台まで運ばれた肉には、多くのヴァンダルの戦士たちが群がり、すごいのを仕留めましたねとか、これはちょっと多すぎませんかとか、料理ができるやつを呼べとか大騒ぎになる。

たぶん、これはヴァンダル族の日常なのだろう。

狩りが上手い人が尊敬されるのは理に適っている。

多くの戦士たちが、仕留められた首竜の肉を曲刀で切り分けていき、手ごろな塊になった肉が火の炊かれているところへ、血を滴らせながら運ばれていく。その肉塊が宿営地を横切るたびにおなかをすかせた戦士たちは期待を持って、より自分の仕事にまい進する。

次王は血だらけの姿で宿営地を歩き、イオにこっそりつぶやいた。

「まずは塩と胡椒だけのステーキがいいと思うのだが、あとなにか付け足すものはあるか？」

「あーと、えーと」

正直、イオは料理に詳しくない。

そしてリュディア流の極端な料理しか食べたことがあまりない。

兄貴ならば、すぐに思いつくのだろうけど、必死に頭の中を探る。

「す、スープですかね、辛くない……。肉を煮れば味が出ます。そして骨と一緒に煮れば、深い味になります……。あとは香辛料を好きに掛けてもらえれば……」

次王はなるほどと頷き、

「干し肉を浸せば旨そうだ」

狩った竜の肉に、骨を入れて煮込み、それをスープにする。

食事は誰もの楽しみで、これほど日常を豊かにしてくれるものはない。スープが旨ければ、明日はみんな機嫌がいいし、今日の夕食が楽しみになる。

よそってもらおうと、骨の髄から採った出汁がかおる。

お肉なんてほとんどないのに、スープはおいしかった。

それに麦を散らすと、ノックアウトする。

ボルニアの料理はだいたい美味かった。

好みで香辛料をかけることでだいたいこの料理は完成する。

辛いのが好きな部族もあるし、辛いのが耐えられない部族もある。

そしてお待ちかねの素朴なステーキが熱々で運ばれてくる。酒が御法度なのは、戦時ゆえに仕方ないのだが、脂がはじける肉はシンプルに旨い。

まるで酔っ払いの集団なのではないかと思える宿営地をみながら、イオは食事ってこんなに重要だったんだと、衝撃を受けるのだ。それに次王が気を使っている様子があった。

(エマに話してみよう)

もしかしたら、あの千年国の重臣は違った意見を持っているかもしれない。

あたしには友達がいる。

何もかもをぶつけても、盛大に喧嘩できる安心できる親友がいる。

20. ザブンテ制圧戦4

宿营地のある丘陵を囲んだ第1軍の包囲陣を見下ろして、冷静につぶやいた。

「イオ、なぜ高地にある方が有利なのかわかるか？」

「え、あ、あの」

それは不意打ちすぎて、しかも次王の得意なところを聞かれているので困るのだが、だいたい聞く側というのは勝手なものである。

「あ、相手の布陣が見えるからですか？」

「それもあ。だが、もう少し大切なことがある」

なんとなくイオは、次王の戦い方を見ていて、どうすれば有利になるかが分かり始めていた。

うん、それは。

「包囲する側は兵を薄く敷かなければなりません。だけれども守備陣は、兵を一点に集中して、そこから後背に回ることができます。それに、どのタイミングで仕掛けるかを選ぶことができるし、仕掛ける前に兵に作戦を伝えることができます」

次王は頷く。

「その通りだ。イオ、だいぶわかってきたな。おれが死んだらおまえが指揮すればいい」

これは次王流の冗談なのだが、イオはそれを真に受けるほど子供ではない。

イオはなぜ、次王が高台に布陣しようとしたのかが分かったような気がし、だいたい計算が合っていることにびっくりするのだ。そもそも次王は撤退したのではなく、有利な地形を取りに行ったのだ。

それが背後になれば、前に取りに行く。

だいたいこの人の考えが分かり始めていた。

それは恐れ多くも、代わりができるという意味ではなく、歴史書に書くときに、どう考えていたかが分かるという意味だ。

あたしにはそれが重要で、怖いぐらいにこの激動している世界が分かってくる。

こわい。

こわいことを書くのもこわい。

だから世界はこわいことに満ちていて、そんなことがちっぽけな自分にできるのかとさえ思ってしまう。

あたしが書くことはこわくて残酷だ。

こんなものを誰が読むのだろう。

実際が、こわくて残酷なんだから、正直であろうと思えばどうしようもない。

世界はこわい。

「イオ、行くぞ。第2軍で相談をする」

次王は背中を見せ、何の問題もなかったように、火の炊かれた朝食の鍋の元に行く。穀物を晩飯で余った食材で煮込んで粥にし、あとはジャングルの茶葉でのどを潤す。

「みんな聞いてほしい！」

次王が言うと、匙を口に運ぶ手が止まる。

「誰もが分かっていると思うが、包囲されている。これは絶対的に有利な状況だ。敵陣は薄く、こちらは一点を突破して後背に回ることができる。だから、どう殲滅したらいいかを話したい」

だれもが次の言葉を待ったのは、絶対的な信頼があるからである。

「ブンダルスを狙う。まずやつを無力化する」

これは殺すという意味だ。

「つづいて、ガーリー族を無力化する。ガーリーの次王を殺せばそれで争いは収まるだろう」

これは後日に振り返ってみると非常に甘かったというしかないのだが、適切な指示であったことは否定できない。ガーリーを舐めていたのである。

予想していない事態とは、だいたいは慢心から生まれる。

攻撃のスペシャリストは、しばしば守備のスペシャリストの生態を忘れる。

攻撃こそ最善であり、そのために手を尽くすのがもっともすぐれた戦士であると信じるからだ。けれども、守備のスペシャリストが誇りを投げうって、勝つことに集中する可能性にまでは思いが及ばない。

次王が第2軍に高所からの一斉突撃を命じたのが夕刻、その先頭に立ったのはいつものように次王だった。

待ち受ける第1軍の陣営に向かって一直線に駆けていき、それに第2軍の全勢力が続く。

イオは高揚感を感じながらも、一抹の違和感を感じた。

(第1軍は、この突撃を何も恐れていない！)

その目の前に、ブングルスが騎乗姿で、不敵に笑う。

口の動きまでは見えなかったが、甘いなぐらいは言ったかもしれない。

上空にまっすぐに腕を上げると、それを振り下ろす。

一斉に第1軍の怒号が響いた。

「な！」

もっとも早く反応したのは次王だった。目の前に絶妙なタイミングで鉄鎖が張られ、それに訓練されていない獣脚竜は脚を引っかけ、盛大に転倒する。次王は受け身を取るが、イオはもろに堅い大地に叩きつけられる。次王はすばやく大剣を抜き、大声で叫んだ。

「おれは無事だ！ イオ、返事をしろ！ 生きてるといえ！」

正直、骨ぐらいは折れているはずだ。でも生きています。

「まだ死ぬには早かったようです」

やっと声を出すと、次王は安心して、むちゃくちゃなことを言う。

「全軍突撃だ！ 赤色弾、それから青色3発！」

正直、次王が着るようにいった鋼鉄製の鎖帷子がなかったら危なかったかもしれない。

よろよろと銃を杖代わりに立ち上がり、指示通りの発弾をする。

真っ先に飛び込んだのはヴァンダル族だった。

何が起るかを事前に知っていれば、この狂気の部族は死にさえ飛び込んでいく。

次王は襲い掛かる獣脚竜に、大剣一本で対抗しており、騎乗していない次王の存在が不確定要素として、第1軍の陣を乱して、そこにヴァンダルの戦士たちが食いついているのがふしぎな光景だった。

次王の大剣は、非常に正確に獣脚竜の腱を斬る。

そもそも騎乗した高所から、次王のいる地面まで武器が届かない。

だから次王はきわめて安全でありながら、敵陣の騎竜兵を無力化していくという、ふしぎな状況が生れるのだ。これが意図していたはずはない。

次王が言うように、第2軍の戦士たちは白兵戦を怖がらない。

自分たちの王が白兵戦をするのであれば、同じことをすることに何の恐怖も感じない。

(ガーリーは強いけれども、ヴァンダルはもっと上だ……)

鉄鎖の次王は、アリエスの平定戦のように、白兵で圧倒することを要求する。

これはアテナイスの近衛兵団を最優遇している理由だし、白兵で強ければ、騎乗する能力は初心者でいい。鬼神のようだというのは飾った言葉だけれども、ガーリーの兵団を地べたで対抗していた次王は、どんだけの竜の腱を斬ったか知れなかった。

白兵戦になれば、ヴァンダルの世界である。

「イオ、大丈夫か？ どうも勝ったようだ。宿営地へ戻ろう。今回はどうも油断したようだ。相手がガーリーであり、ブンダルスであったことを忘れていたようだ」

「だ、だいぶ痛みには慣れました……」

やっというと、血塗れの姿で微笑み、それからゆっくりと歩いて、イオの髪をごしゃごしゃと撫でる。

「おれより、真っ赤なのを見つけた」

21. 宿営地の兵站作り、第3軍の合流

次王は血を拭って、宿営地に戻ってくる。

「負けた。おれたちは負けた。ガーリーの陣を蹂躪するどころか、触れることもできなかった。次が欲しい。何か欲しいことを言え」

おそろしいほど端的だ。

一人が遠慮がちに言う。

「井戸」

「そうだな。カウノスに任せよう。できるか？」

「はい。ですが、だいぶ河面まで深くなりそうです。三日、もしかしたらもっとかかるかも知れません」

「では、夜半に給水部隊を出そう」

イオは次々と動いていく軍を感じて、せかしい気持ちになった。

カノウス族ではなく、自分の名前が呼ばれたかった。

そもそもイオにできることなんて限られているのに。

「あと、地図を。泉を探さないと、第1軍に包囲されていますから」

「それはヴァンダルでやろう。うっかり遭遇戦なんてことも、考えなければいけない。それに薪だ。枯れ切った倒木を探して集めろ」

それはわが部族がと次々に声が上がる。

「ロゴス族は食料調達だ。ヴァンダルがまず先行する。薪も同じだ。ヴァンダルが危険がないことを確認してから、それについてこい」

ヴァンダル族と次王の間には言葉さえ必要なさそうで、そもそも部族内の役割分担がそもそもできているのだろう。どうも次王の判断から察すると、第2軍における第2の戦闘部隊はロゴス族のようだった。そういえば確かにアイギス攻略戦の時も、左翼の別動隊を任せたのはロゴス族とヴァンダル族の混成部隊だった。

「イオ！ ヴァンダル族に紙を配れ。日暮れ前に終わらせないといけない。急げ」

イオはようやくと呼ばれた名にほっとし、すでに顔なじみのヴァンダルの部隊長に紙の束を配っていく。イオは伝令を統括する立場として紙を欠かさないのだが、それがみるみると減っていくのにぞっとしてしまった。ここは兄貴がいるアイギスから遠く離れ、そしてすでに指示書を送っているのだからアイギスに到着しているかもしれないリュディア族から遠く離れている。

「紙は行きわたったな？ よし、出発だ」

それでヴァンダル族はいくつかの部隊に分かれ、最も少ない部隊を次王が率いる。名前も、功績も知れない、少年兵といってもいい騎竜兵たち。それに次王が細かな指示を送っていく。少年たちは族長の前で緊張気味で、周囲に目を光らせながら、騎乗する次王のあとをついていく。それを振り返りながら見て、イオはこんなにも無防備な部隊を見たことはない、感慨深く思った。

まるで子連れの子だ。

おそらく、遭遇戦になれば、次王が命がけで守るのだろう。

結局のところ、次王は守られたことがない。血まみれになっても、リュディアを、ボルニアを、そして目の前の部下を守るのだろう。その中にはおそらくイオも含まれていた。強くあろうとしているのだ。それがイオには恐ろしいことのように思えて、震えが来てしまう。

(頼ってください……。あたし何かできるかもしれない……)

血塗られた剣を抜けば、何かを倒せるかもしれない。

助言を求められれば、なにか言えるかもしれない。

しかし、イオは分かっていないのだが、次王は十分にイオに守られており、それがなんなのかというのは難しいのだが、幾多の陰謀を打ち破ってきたのはイオであり、イオにはできないことは分かっているのだが、歴史上はイオがボルニア第4の王であったと、書くべきなのだ。

だから、次王がイオを見染めたときに、この王は十分にイオの素質を見抜き、悪口しか言っていないのだが、側にいてほしいと思っていた。側近としてのイオは選ばれている。

それは字が書けるからではない。

老王を暗殺しようとしていた、くそ度胸を買われているのである。

こいつは、もしおれが間違ったことをすれば、殺してくれるだろうと。それは次王にとっての病的な安全弁なのだ。

この王を理解するのに一番分かりやすいのは、虚無的に自分を見ているということである。もう事実上、死んでいると思っているところにある。どういう経緯をたどったかは知れない。でも次王本人は死んでいる。しんでいるから、自己犠牲はいとわないのだし、そもそも執着がほとんどない。

鬼だ、死霊だと、実態が分かればイオは言うだろう。

それでもこの青年のはつらつとした精気にイオは圧倒され、それこそ自分の鼓動を打つような人に見えてしまうのだ。

矛盾している。

だからそもそもイオはそのとっかかりさえ掴めない。

「よし、止まれ！ まずこのあたりを綿密に探れ。もし敵がいたら、叫べ。何があったかをイオに話すんだ」

それで少年兵たちは八方に散っていき、イオは即座にそのひとりひとりを覚えた。

(方角を言ってくれるとうれしいんだけど……)

その兵たちが戻って来た時を想像し、それで思い切って、次王に言う。

「あの……」

「なんだ」

躊躇をするが、躊躇が一番嫌いなことは分かっていた。

「出るときに、方角を確認して、報告の時に方角を告げてくれると嬉しいのですが」

次王は何を言っているのかを頭の中で確認し、ほうとつぶやく。

「それは気付かなかった。それもそうだ。地図を作っているんだしな。さすがリュディアの客分だ」

リュディアはほとんど関係ないのだが、うんうんと頷く次王を見ていると、そんな細かいところはどうでもよくなってしまふ。それがイオにはほんとうに心地よくて、安らかな心地になってくる。

この人には話が通じる。

それがおそらく、第2軍が次王に従っているほとんどの理由だろうし、この王はきわめて素直なのだ。それで、この王を失いたくないという個別具体的な理由になるし、そもそも次王の言っていることは、第2軍の総意なのだろうという信頼になる。

スポンジのようにあらゆるものを吸収する姿を見えれば、たぶん多彩な色に染まっていると想像できる。それがどんな色なのかは誰もが想像できない。だけど、この王は、非常に簡単な言葉で、決断を下す。

それがふしぎと心地いいのが、この王だった。

未熟な少年兵が戻ってくると、イオは忙しくなる。

「500メートル行きましたが下るだけで、特に何もありませんでした」

「方角は！」

次王の助け舟が出る。

「あ、えーと、南東です」

「倒木はなかったか？」

「あっと、いくつか見た気がします」

「次からは、数を覚えておけ！ よくやった！ 次！」

次王のことはひじょうに的確で、手に入れるべき泉、採集すべき倒木、狩るべき竜の情報を的確に集めていた。

それをイオは最大戦速で書き留めていき、次々と重要な情報が紙面に集まっていくことに充実感を感じていた。イオは書いているだけであり、そもそも書く以外の働きをしていないのだが、それがとても楽しいと感じ始めていた。

リュディアの子である。

そう言われると、たぶんイオは、滅ぼされた部族を思って抵抗するのだが、家族が殺されて、頼ったのはリュディアであるし、リュディアは家族だった。

(でも、あたしは歴史を書くんだ)

それだけが、イオのアイデンティティであり、そのための雑務は気にならないのだった。

(これは貴重な資料になる)

帳簿をちゃんとつけることが、イオにとっては大切なことであり、自分が生きている証明だった。最も信頼できる資料を自分が書いている。これ以上の資料はないし、資料を読んだだけの凡才には、この資料の意味は分からない。

それでイオは充実し、それ以外のことには意識が向かないのだ。

たとえば、このとき鉄鎖の次王が何を考えていたのかとか。

それはイオが幼いからであって、一切の罪はない。

それでも書き始めて気付く。

なんで、自分はこんなに幼いのだろうと。

ヴァンダル族の探索はほぼほぼ終わり、その一番の収穫は泉を見つけたことだった。

水を持ち帰ると、宿営地は歓声に包まれ、同じように獲物を狩ってきたロゴス族にも送られる。倒木は必要最低限は集められたようで、苔むした木に斧が振るわれる。

イオはおそろしく忙しくなり、ヴァンダルの部隊から集まった地理情報を全部集約しようとする。すべてに目を通し、整理しながら清書をしていく。一枚清書ができると、それを写していく。何枚も、何十枚も。

「あれが、リュディアの代理ですかい？」

酔っばらった兵が聞くのに、次王はしらふで言う。

「あれは王だ。不正をしたら、おれはあいつにいつでも殺せと命じる。あいつには、おれが間違っていれば殺せと言っている。それはボルニアのどの王にも同じ条件を課している。それがおまえであっても同じだ。おれは許可している」

それに、その兵は慌てふためいて、尻もちをつく。

「あああああ、そんな大それたことを！ 悪意はないんです！」

「人を刺す前に、誰もがそういうがな」

イオはそもそも状況が分かっていないのだが、次王に報告に来ただけで、尻もちをつく男を見て、首を傾げる。

「あれは何ですか？」

「気にしなくていい。それよりも見せてくれ」

素直に書面の一枚を渡すと、次王は熱心にそれを読んだ。

「これは行けるかもしれない。それは第1軍相手ならばという意味だ。この丘陵は案外豊かだった。ここ

を拠点とすれば、だいぶ持ちこたえることができる。その間に、エストの騎竜兵団が、間に合えば数で押せる」

そう、ならなかったのである。

※

第1軍の総攻撃の声に、怖がらないものはない。

夜が明けると総攻撃が始まり、迎撃すると罠が待っている。

陰湿であるというのは簡単であるが、とにかく勝てる状況を作ろうとしているのは分かっている、次王の直属部隊が出るのだが、とにかくあらゆるトラップを仕掛けてくる。

丘陵を駆け下りるだけの簡単な戦闘は、さまざまなトラップで困難になっていて、足を踏む場がどこなのかさえ分からなかった。

次王は、たぶん勘なのだが、それをすり抜けていき、油断していた第1軍の本陣に切り込んでいく。

たった一騎。

「ブンダルス！ おまえを斬る！ 名乗れ！」

目の前に一騎の騎竜兵が現れる。

「たしかに、おれはブンダルスだ。光栄だな。おれの名を呼んでもらえるとは」

「戯言はいい！」

次王が大剣を構えると、ブンダルスはせせら笑った。

「何がおかしい！」

「おまえは優秀だが、物事が見えていない」

ブンダルスは、銃を天に掲げ、青色弾を3発打ち上げた。

どこかから膨大な咆哮が聞こえた。

次王は即座に察知して、イオ、緑色弾だという。

「撤退ですか！？」

「第3軍が、第1軍についた。最悪の状況だ！ エストの騎士団に合流する。それから、アイギスで守りを固める」

次王の判断は早かった。イオはすばやく緑色弾を上げ、次王の騎竜兵たちは薄いアイギス方面に抜けていく。もし、このアイギス方面に分厚い陣を敷かれていたらどうなったのだろうかとは思っただけけれども、現実はそのまでは考えていなかったのである。

22. 第2軍の撤退戦、レトの次王の求婚

このとき第2軍に必要だったのは迅速な判断であり、せつかく築いた有利な地形を放棄することだった。軍神が言うのだからそうするしかなく、イオは様々に同情する。

(カノウスは井戸を掘りたかったに違いない。せつかく作った地図も、集めた倒木も全部破棄するしかない)

第2軍が強いのは、この理不尽に鉄鎖の次王に対する信仰から、放棄できるところにある。次王は最大戦速で大スカイ河の河面を水しぶきを飛ばして駆けて行き、風よりも早く下流に在るであろうエストの騎竜兵団に合流しようとしていた。

そもそも第2軍は機動兵団だ。

なによりも速力が重視される。

なので、イオは振り返っても見るのだが、大兵団が次王の早駆けにぴったりと付き添い、膨大な水しぶきを上げて、大スカイ河にはもやが漂っていた。

上空に翼竜を発見して、イオはびいと笛を吹く。

それで、翼竜はイオのもとに舞い降り、その伝令を渡してくれる。

「聖楯はスカイを制圧しました」

「そうだろう、そうでないと困る」

イオは素早くペンを走らせ、第3軍が第1軍についたことを知らせる。

それで翼竜の顎を撫でて、いけ！ と叫ぶ。

「なんて書いた？」

「第1軍に、第3軍がついたと」

「それでいい。具体的なことはおれが言う。アイギスを使うしかなくなった。2倍の兵だ。こもらないと撃退できない」

これはイオでも知っていて、籠城側を攻勢側が落とすには4倍の兵が必要というのが通説になっている。ボルニア全土を総動員しても、2000騎の第2軍に対して、8000騎の兵を招集することはできないと思われ、そもそも老王は全く人気がないのだ。

鉄鎖の次王がアイギスの忠誠を得た時点で、勝っていたのである。

千年侵略されることのなかった、難攻不落の湖都。

これから、なんの意味もない、無為な包囲戦が始まる。

「次王さま！ どうされたんですか？ ここは聖楯にまかせていただけるものとばかり」

「事情が変わった。伝令は出していたのだが」

エステバンは後ろを振り返り、エマ！ と大声で叫ぶ。

「す、すみません！ 届いたばかりなんです！ いま降りてきた翼竜が携えていたのがそれです！ 次王さまが速過ぎるんです！」

それを冷静に聞き、エステバンは疑って悪かった謝る。

「第1軍に、第3軍がつきました」

「最悪な状況だ。即座に第2軍と聖楯が合流する必要があった。第2軍は強さでは負けないが、数で押し切られる。無意味な死者も出る。それを避けるには、数を足すしかない。お前はこのエストを守る意志はあるのか」

この言葉は非常に複雑で、いろいろずるいのだが、そんなことを指摘するほどイオは無粋ではないし、次王の政治感覚を震撼するところではあるのだ。このシンプルさが厄介なのだ。

「アイギスで持久戦になると？」

「そうだ。攻めてくる相手は、そもそも第2軍とエストの同盟を敵対行為だと思っている。そしておれが言

うのが正しいと思うのだが、その防衛戦は総力戦になる。アテナイスと第2軍の同盟関係を崩そうとしてくる。あらゆる手段を使ってだ」

エステバンは次王に対して、何度、と考えるのが馬鹿らしいほどの反乱をする指揮官である。その度に次王は許すとさえ言わず、エストの中枢にいることを許し続けた。たぶんそのお決まりの反乱劇を、エストの市民は娯楽としてみていたのだろうが、それをエステバンがどう思っていたのかは謎である。しかしこの、長いアイギス攻防戦だけは鉄鎖の次王に忠誠を誓い、最後まで裏切ることはなかった。

次王の考えはシンプルで、多分致命傷でなければ息抜きは必要だぐらいの感覚しかなかったのではないかと思う。

この王が優れていたのは、ほとんど死んでいたことに理由がある気がする。

自我がないから、そもそも反対意見が出るはずもない。

だから、すべての意見を集約できる。

論理的に最善解しか考えないので、みにくい人間的な感情から自由であった。

それはなんと言ったらいいのだろう。

人間ではなかったになるのだろうか？

「アイギスに帰ろう。恋が食いたい。一番うまい鯉を食おう。鯉は嫌いかな？」

「いえ、いつも食べてましたから」

気づくとイオも、アイギスの淡水魚が恋しくて仕方なかった。

※

おなかが減るといふのはふしぎな現象で、自前の香辛料の瓶を握っていると、唾液が出てくる。それが恋でも、鯉でもいいのだ。あっさりした白身に、赤い香辛料をかけると、全身の汗がわく。

リュディアの子だなどとは思うのだが、長年染み付いた食習慣はどうしても覆せない。

外道とされる深海魚のはらわたにさえ、唐辛子をかけると、突然にリュディアの食事になる。

戦時はだれも酒を飲まないのだが、それでもスープをすすっていると、貝だとか、チーズだとかの関係で、自分のおいしいが理解できる。

アイギスの湖畔にある大要塞は、千年国が作り上げた最大のピンチを乗り切るためにあらゆる角度から計算されて作られており、おそらくザブンテ勢を想定して築かれたのだと思われるのだが、現在はボルニア勢に対する最大の防壁である。

三万人を収容可能な大要塞は、包囲をするのさえ困難で、ボルニアの第1軍と第3軍の騎竜兵を合わせてもたかだか4千騎、これを本気で包囲しようと思えば、白兵戦に長けた兵を数万単位で呼び寄せる必要があったが、そんな兵を老王が準備できるとは思えなかった。

鉄鎖の次王がまずこの大要塞を頼ったのは理にかなって、そこに第2軍が進駐した時点で、難攻不落になった。

包囲戦は数なのである。

「まず鯉を持ってこい。あとなにかあるか！ なにか必要な物はあるか！ 今だけがチャンスだ！」

「紙を！」

イオが叫ぶと、次王はうんうんと頷き、赤毛をなでた。

「リュディアの部隊は到着しているか！ もし来ているなら、その紙のすべてを譲ってもらおう」

それから奔放な必要な物が次々と告げられ、次王はそれを承認していく。

イオは忙しくなる。それはアイギスの湖上の都市に、次々と要求を出すのが忙しかったからだ。混成軍が来るまでの僅かな時間がチャンスだった。イオは減っていく紙の数を考えながら、多分ここに指示書が届けば、ここにも指示が伝わると思いながら、エストの命令系統を頭に描きながら書いていく。

おそらくイオは自分でそう思わないのだが、最強のリュディアの代役だった。文字を走らせ、それで動くだろうと確信していくのに、達成感を感じていた。こんなに楽しいことはなかった。

自分は書記だ。

だけど、この文章は王の言葉である、第2軍の必要なものである。没頭するには充分だし、もし、イオがいなければ、このアイギス攻防戦は果たして機能したのだろうかと考えるのは、そんなに悪いことだろうか。

実際に次王は満足し、どう思ったのかは謎なのが、イオを第四の王として認めたのは、ほぼ間違いがなかった。

「イオ！ レトに対する言葉がない！ あれが来ないと、何もできない。攻撃的に行くぞ。少し柔らかく書け！」

いつもどおりにむちゃくちゃなことを言う。

「今すぐ来い！ これは命令だ！ エストは存亡の危機にさらされている。金もないし、第2軍は敗退した。今はエストの要塞に籠もり、籠城戦をしようとしている。ここで、お前たちの調達力が必要だ。何が何でもアイギスに来い！」

イオは、その乱れた論理に震えた。

論理性はない。

でも従うのだろう。

ふとみると、カノウスの連中が次王を取り囲み、何やら直訴しているのが目に入った。

次王はしきりに頷き、それは理にかなっていると言うのが聞こえた。

「イオ！ アイギスへの要求が増えた！ 揃えてもらってくれ！」

次王が列挙するものを聞いて、意味がわからなくて困る。

それはほとんどが土木工事に使うものだった。

すでにこの大要塞には、数十本の井戸がある。

なので、井戸はもうあるのだけれども、それでもカノウスの連中が要求したのは、新たな井戸を作るための物資と道具に近かった。イオは不思議に思ったがその謎が解けるのは、暫く経った後である。そこまでは秘匿しておく必要があったのだ。

※

お金がないのは、次王が言ったとおりで、帳簿をつけているイオが真っ先に気づいたことだった。戦争をしている国にお金が入ってこないのはアタリマエのことなのだが、激減したことにショックを受ける。

これはさすがにリュディアとレトの資金力に頼りたくなる。

ボルニアには豊富な資金源がある。

だけれども、様々な局面で足元を見られる。

つまりやすく買い叩かれるのである。

これに気づいたイオは、いてもたってもいられなくなり、兄貴にどれだけ相談したかったかしれなかった。いや、違う、たぶん相談すべきなのは未だ面識のない、レトの次王なのだ。

最強の交渉人。

そう鉄鎖の次王が認めている3王の一人に相談すべきことなのだ。

(これは奇跡を求めている)

しかし、イオの危惧は最強とはどういうものかを知らしめるだけに終わり、レトが最強だと認めざるを得ない状況になる。狡猾辛いリアリストとは最大限の褒め言葉なのだと、イオは学ぶ。しかし、イオはレ

トのやり方に賛同できない。それはリュディアの子であり、極めて穏健である部族の文化に浸っているからである。

イオは第2軍が心地よかった。

そこに混乱をもたらすのはレトであり、その人と出会うのが、イオは怖かった。

それは、自分の価値観が覆されるだろうと、容易に認識できるからであって、この恐怖は後に大げさすぎたとわかる。

レトの次王は、噂にはそぐわない常識人であり、ソフトでマイルドでありながら、イオに求婚したのである。

23. 生意気な少年

続々と物資が届く中で、イオはその整理に追われた。

判を押し、いちいちその数量を確認していく。

だいたい数はあっている。それはエストという国がひじょうに秩序だった国であり、不正を許さないだけの統治機構を維持しているからだろう。

なぜだか、イオはリュディアがすべき業務を一手に引き受けているのだが、書類が実効性を伴って通って行くのを処理するのは楽しかった。

「イオ、ずいぶん頑張っているじゃないか」

のんきに声をかける兄貴を目の端に捉えて、それでも書類に記載していく。まったく迷惑だ。少しは手伝ってもらってもいいのに。

イオが兄貴を睨むと、ごめんごめんと謝る。

「リュディアから、出せないんですか？ リオや、レコン、エルを回してもらえると助かるんですけど」

これはイオがリュディアで有望と見ている面々である。

「悪いけどその面子は、本国で使っているんだ。優秀だからね。彼らの優秀さはイオの言うとおりで。あの連中は優秀だ。だからここにはいない。あっちにはぼくがいないんだ」

イオは腹が立ってきた。

「じゃあ、兄貴が手伝ってくださいよ！ 他にいるんですか！ こんなに優秀な人が！」

ブチ切れた途端、兄貴はああなるほどつぶやき、イオが扱っている書面を眺める。

その途端に起きたのは奇跡のようにしか見えなかった。

「ここに無駄がある。この手順は間違っている。書類の置き方はこう」

個別具体的に、作業手順を変えていく。

そもそも一瞬見ただけで意味を理解し、要点をイオに告げているのだ。その速度についていくのがやっとなりで、指示まで告げられるのに書くペンが遅かった。どんだけ速いのだろう。次々と処理されていく案件が、まるで問題などなかったかのように解決策のリストになる。イオはそれを筆記していただけだった。

疲れきったというのはおこがましい。

そもそもイオは書き写すことしかしていないのだ。

速いのだ。

それでも、あれほど山になっていた陳述書を処理し、大きな伸びをする兄貴に殺意さえ覚える。

「おわったかな？ じゃあ、ぼくは宿営地に戻るから」

「あ、ありがとうございます……」

やっとなりつぶやくには疲れすぎていて、自分はひょっとして、兄貴に余計な仕事をさせてしまったのではないかとさえ思う。兄貴の解決策は非常に単純で、単純仕事を効率的にこなす方法論だけだった。

それは、仕事を細かく分けて、判断の必要のない部分は自動的に処理するようにする。

とにかく、ちいさなレベルに仕事を分けて、そこは正確に仕事を解決していく。その手順を、細かく規定していく。

「あ、あの」

イオにはまったく考えがなかったのであるが、つい言葉を出していた。

「なんだい？」

言葉に困る。リュディアの次王を使ったことに罪悪感があつたのだ。

それも身震いするほど。

こんな単純作業をさせてしまったことに、恐れを感じた。

それは絶対に避けなければいけない。

「……、りゅ、リュディアの子が欲しいのですが……。読み書きと、計算ができればいいのです。もしくれば、役に立つようにしてみせます」

兄貴は苦笑いをし、イオがリュディアを率いればいいんだよと、むちゃくちゃなことを言う。それでも兄貴は考えをめぐらし、なるほどねと理解を示す。

「だけど、アイギスは一応戦地なんだ。もちろん、難攻不落であることはわかっているけど、そんなところに子連れで来るリュディア族はいるかな。もし、該当する子が、問題児であっても、イオはそれを受け入れるかい？」

イオはそもそもはじめっからめちゃくちゃな面子にしか囲まれていない。

判断は必要なかった。

「どんなのが来ても使います」

※

「おい、イオ。お前がイオか？ 赤毛だからすぐにわかると聞いた。族長の書簡を預かっている。おまえのところで仕事をしろと言われた」

声をかけられて振り返って見たのは、生意気そうな少年で、たったひとり。

年の頃は10をわずかに超えたぐらい。

そう思ったのはその声が声変わり前の高い声で、身体つきがひょろっとしていたからだ。

書簡を差し出すのを受け取る。

「こいつは問題があるが、こいつしかいなかったから紹介すると書いてある。親の了承もとっている」

受け取って読むとそのとおりだった。

「この仕事はリュディア族の命運を握っていて、キミが派遣されたのは、キミにはその能力があるからだと思うよ。兄貴はここで起こっていることはよく分かっていて、そこに適切で無い人を送らないから」

少年はフンと笑うが、その姿を見ていると幼い自分を見ているようで、冷や汗が出てくる。イオは用意しておいた、作業手順と実際に何をしているのかの具体的な書類を渡し、とりあえず今日はこれを読んでいて、という。

「なんだよこれ、もっと短くならないのかよ！」

たしかに、大切なことを書き出してみると数十ページになったのは確かだ。

「わからないことがあった聞いて。質問しないことは絶対悪だよ。質問しないと無能だと思うよ」

この挑発は効いた。

それで、なにがなんでも質問してやろうと少年は熱心に書類を読む。

イオはそれで安心して自分の仕事に戻るのだが、案外この子は優秀なのではないかと思い始めていた。だいたい不遜な子というのは、つねに成功し続けてきたから上位にあるものをばかにするのだし、攻撃的ということはこれまでに幾多の戦いを経験してきたということの意味する。

(これは、逸材をもらったのかも)

イオはそうやってのんきに考えるのだが、まあ、そんなことで収まるわけがないのである。

破天荒ということばの意味をよく理解するのは、もう少し先の話である。

「イオ、だいたい読んだ。けどわからないことがある。これはチェックに時間をかけ過ぎじゃないか？」

夕食の席で、少年はイオの隣に座り、魚介のスープを啜る。

イオはほうと頷き、そうだねという。

「けどね、一番早く仕事をする人がどういう人かわかる？ あたしは、リュディア族にいた経験が長いんだ。その中で、仕事が速い人に決まってある特徴があるの。早く書ける人じゃないよ？」

少年は考え、わからないと、ぼそっと呟く。

「どんなに遅くても一切のミスをしないう人。一つミスすると、それが累積的にあらゆる階層でやり直しになる。ミスしていたところを看過して次の工程に進んでしまうと、その後の作業が一切無駄になってしまう。これが絶対悪なの。確実に戻りがない人が一番早い。その一步一步がどんなに遅くても」

これはリュディアで見てきたことだ。

変態的な超人はいるけれども、イオはリュディアの族長になりたいと思ったことはないし、兄貴がそばにいと、安心しか感じない。

「イオは変な話ばかりするなあ」

子供に呼び捨てされながらも、この少年の指摘する問題点はだいたい高度で、質問の質も高かった。それはイオが慌てるほどで、たぶんイオがわかっていなかったのは、この少年がくそ度胸を持っていたことである。

鉄鎖の次王がイオを買っている理由とまったく同じ。

「イオ姉はこんなこともわかってなかったのかよ」

馬鹿にされるが、姉貴に昇格する。

そのひとつずつのステップは楽しかった。

目の前にいる少年が、少しずつ成長していくのを見るのが楽しかった。

いつの間にかイオが率いる、アイギスの防衛兵団の兵站は、極めて効率的に機能し始め、各兵団からくる要求を完全に満たしつつあった。

イオと少年のコンビネーションは、立派にリュディアの代役を果たしつつあった。

※

アイギスの籠城の準備が着々と整い始める頃、イオの目の前に明白な危機の姿が姿を現し始めていた。「次王さま！ お金がありません！ 資金がないんです！ リュディアに金を出せとは言えませんが、レトの収益を回収する必要があります！」

籠城戦でも、お金がかかる。

あらゆる物資を徴用するにしても、第2軍はその対価をエスト国民に払わなければならなかった。被占領国から奪うなど、絶対にあってはならないことなのだ。

そもそもこの戦いはボルニアの都合で起こった私戦である。

それを少年を連れて直訴しに行ったのは、この少年の有能さに気づき始めていたからであって、実際にイオが何をしているのかを全部見せておきたかったからだ。

鉄鎖の次王はエステバンと守備陣の配置について検討をしているところだった。

聖堂に置かれた広い卓に地図が広げられ、その上に軍団を示すのだろうと思われる木製の駒が置かれている。

「なんだ、イオ。準備は順当か？ エステバン、なにかイオに要求することはあるか？」

「いえ、なにもかも、順当に回っています。しかし、リュディア族の内政力はすごい。ボルニア1の大部族と聞いて納得します」

実際にはその大部族は、2人なのだ。イオと少年の。

しかし金がない。戦争には金がかかる。

帳簿上で金が足りないとわかっているのは、帳簿をつけている本人である。

「イオ、物資の徴用資金を後払いにすることはできないのか？」

少年が聞くのに、表情で怒りをぶつけると引き下がる。

「このままでは、資金が枯渇します！ 初期状況までは何とかあります。しかし、このまま外から資金が入

らなければ、ジリ貧になります！」

次王は顎に片手をあて、考える。

「状況は分かった。イオ、なんとかしろ」

その時、少年は永遠の味方になった。

これは援護射撃だったのかは不明なのだが、これを機に、このクソ生意気な少年はイオの仕事を理解して、聡明にもあらゆるムダの排除を提案するようになったのだ。

24. 連合軍の包囲完成と、カノウスの秘密の仕事

イオたちの兵站到、ほとんどの文句は出なかった。

それはリュディアがやっていることになっていて、そうであることに文句はない。

リュディア族は今頃、兄貴の指示のもとでアイギスの広大な書庫の写本をしているはずで、それはリュディアの仕事なのだ。

もっと重要で膨大な仕事を2人で問題なく回せるならば、それは省みる必要などなくて、リュディアは兄貴の指示する仕事をすればいい。それでも、ときどきいらっとするのは、兄貴が様子を見に来るときである。

「やあ、イオ、大活躍だね。どうも、このアイギスの兵站はリュディアがしていることになっているらしい。でもそれは違う。それをしているのはイオで、たった2人しかいない。これほど効率的なことがあるだろうか？ 誇らしいよ」

イオはおそらく幼くて、のちに振り返って兄貴は自分たちが困っていないか心配になって見に来ていたのだと気づく。それで何か問題があれば、自分が解決する。兄貴はそのつもりだった。兄貴はふわふわと浮いていて、致命傷になりそうなところを見つけたら集中的に注力しようとしてたのだ。

それがその時のイオには分からず、ブツリと切れそうになった。

「イオ姉。褒めてるんですよ」

振り返ると少年のほうが大人びている。

睨みつけると兄貴は、苦笑いをして困ったなあとつぶやく。

「イオが、リュディアを率いればいいんだよ」

またそれだ。

「族長、挑発はやめてください。イオ姉にも限界があります。要望通りの仕事しているんです。なんの不満があるんですか」

兄貴はきょとんとし、あれ、こんなに優秀な子だったかな、とつぶやく。

「リオン、君はいい子だね。ぼくにたいして遠慮がない、まあイオもそうだけど。なにかぼくにもう一人姉弟ができたようだ」

イオはぎょっとする。

うかつにもそれが、その少年の名前だと気づいたからだ。

(そういえば、名前聞いてなかった……)

あまりにも忙しすぎて、とにかく一秒でも早く仕事を覚えてもらおうとということしか考えていなかったのだ。

「リオン、っていうんだ……」

「あれ？ イオ姉は知らなかったけ？ そういえば呼ばれたことがないけど」

お互い名前なんて必要なかったのだ。

だって2人しか、いなかったのだから。

「音も似てるし、いい姉弟だよ」

人ごとのように兄貴がいう。

一体何をしに来たのだろうと、そのときのイオは思ったのだが、しばらく自分が名前を聞いていなかったことにショックを受け、そんなことはどうでもよくなってしまった。

※

湖岸の大要塞に次々と物資が運ばれ籠城体制ができるなか、ヴァンダル族の斥候から第1軍と第3軍の総計3000騎の大兵団が、アイギスの湖岸に近づきつつある報が届く。

そこまでもたついていたのはひとえに兵站を整えるのに時間が掛かったからで、ほとんど障害がないはずのスカイ河の河畔に輸送体制を取るのにも手間取った。これがリュディアと非リュディアの差である。

もっとも防衛側のリュディアは2人なのだが。

翼竜の伝令を受けたのはイオなので、鉄鎖の次王に伝えに行く。

たく、くそ忙しいというのに。

(エマは手伝ってくれないかな)

頼れそうなのはそのへんなのだが、エマはエマで、エステバンの無茶振りをこなすのがたぶん精一杯なのだと思うことにする。

「次王さま！ 斥候から報告がきました！ 敵方が包囲に入るのは夕刻。もうわずかしか時間はありません！」

次王はずいぶん遅かったなとつぶやき、でも間に合ったという。

一体何が間に合ったのだろう。

アイギスからの物資の輸送は、まだ半分ぐらいでとても間に合っている状況ではない。

「い、いえ、とても間に合っているとは」

「では聞こう。現状の物資でどの程度持ちこたえられる？」

イオは素早く計算する。

「3月が限界です」

「では余裕がありすぎた。カノウスは半月で貫通すると行っている」

一瞬意味がわからなかった。

それもそのはずだ、カノウス族が次王に提案していたのはあまりにも壮大過ぎて、まさかそれが可能だとは誰にも思えなかったのだ。もしそれがばれても、絵空事だで相手にさえされない話だったから、その存在に誰も気づけなかったのだ。

「半月で、遅くとも一月後にはアイギスとこの要塞の間の地下通路が完成する。だが油断なく物資は搬入しよう。いつそれが駄目になるかはわからない」

衝撃を受ける。

それは明かせない。

まさか、アイギスと要塞の間に補給路があるなどとは。

はたして、あのアイギスを抱く淡水湖の湖底より低く通路作ることできるのだろうか。

もちろん、アイギスには細やかな水深の情報があるだろう。それを入手したとして、カノウス族はこの高地にある要塞から、アイギスの群島まで通路を掘れるのだろうか。

そこまで考えて、イオはカノウスほどの部族がなんの確信もなく鉄鎖の次王に提案するはずがないと気付く。

(なんだろう、これは)

自分以外の部分が極めて有能に動いているのを肌で感じて、震えが来る。

イオは自分のことを棚に上げて考えるくせがあるのだが、他の部族から見れば驚異の象徴はイオ・リオン姉弟なのである。どの部族もあれには負けないようにしようと奮い立つ対象が、この2人だったのである。

※

包囲が始まると、イオは次王の護衛に立つ。

リオンには兄貴の補佐をするようにいい、それがあたしがしていたことだからと告げると、寂しそうにもっと働きたかったという。頭をなでて、じゃあ、兄貴に役に立つと思われることだね、兄貴は暇そうに見えるけど、あの人はあれはあれで忙しい人だから。のんきに見えるから、忙しそうに見えないだけで、とて

も助けるところはあるよ。それに兄貴の弟になる方が学ぶところが多いよ。兄貴は嫌がらないと思うし。

未練たっぷりな様子でしぶしぶ頷くのは、うれしくなる。

この子の可能性をあたしが縛ってはいけないし、もちろん側にいればいくらでも頼りにするけれども、護衛のシーンに必要だとは思わない。

「最後の別れの挨拶はしてきたか？」

「す、すごいことを言いますね……」

とまどうイオに次王は真顔でいう。

「ここからは戦場だ。無為に人が死ぬ。無差別に死ぬ。理由なく死ぬ。おれはどれほど殺したかわからない。一人も殺したくないが、誰かが死ぬ。それがイオであって欲しくないとは思いますが、死は無差別だ」

心の底から、つめたさが忍び寄ってきて、いたたまれなくなってくる。

(戦場なんだ)

戦場で生きている鬼とはどんな心地なのだろう。ときには冷酷な命令をしなくてはならないだろう。高い確率で死ぬところに突っ込むように指示することもあるのだろう。それよりもこの王は、まず自分が真っ先に死地に飛び込む。それはどうなんだとは思うのだけれども、たぶん、部下に死ねというよりも、自分が死に飛び込むほうが楽なのだろう。イオもその同じ竜に乗るのだけれども。

鉄鎖の次王は軽く頭を搔き、大要塞の塔楼から包囲陣を眺める。

めらめらと燃える松明の明かりを浴びながら、南門からでれるな、ひとつ夜襲を仕掛けてみよう、という。それからのヴァンダル族とロゴス族は大忙しで、最終的な目標は敵方の兵糧だと決まった。それを全部奪うというから、他部族も動員される。

奇襲というには綺麗すぎる形で、ヴァンダルが蹂躪して、ロゴスがそのおこぼれを回収する。ヴァンダル族の奇襲はそれが存在意義なのではと思うほどに鮮やかで、狂気的な騒乱を血飛沫と断末魔を上げる形で広めていき、敵陣に致命的な混乱を産んでいく。

イオは同乗していて、指揮系統を失っていく敵方を間近に見た。

これで、相手を無秩序に追い込めるのだ。

いちど指揮系統を失うと、あとは無差別殺戮である。

そして次王の号令一過で、その攻撃対象が兵站に向く。

鮮やかというよりは無慈悲であった。イオにはその王の目的がわかった。勝ったと思っている連合軍の戦意を削ぎたいのだ。そこに恐怖を植え付け、容易には勝てないと思わせる。そのために同じボルニアの民が失われるのを歯を噛んで我慢する。この王は矛盾しているのと同時に一貫している。最も少ない被害でこの内戦を終わらせたい。

「イオ！ 面白いことを思いついたぞ！」

いやな予感しかしない。

「3分おきに赤色弾！ 合図をしたら紫色弾だ！」

赤色弾は王の居場所を知らせる信号弾、紫色弾は全軍停止の指令。

何をしようというのだろう。

「赤色弾は今打ちますか！」

「うん、今打て！ それで全軍行くところがわかる」

イオは必死に弾を込め、それを夜空に放つ。それから、赤いほうの筒は夜気で冷やして、もう一丁の筒に紫色弾をつめる。その間にもぶつぶつとイオは秒数を数えていく。しかし、なかなか赤色弾の筒は冷えず、イオはいらいらする。

手袋がない。それぐらい用意しておくべきだった。

イオは衣服の一部を引き裂いて、それでなんとか赤色弾を込めて、放つ。

振り返ると、ヴァンダルの一団が次王にほとんどの遅れもなくついてきていた。

あとはロゴス族がついてきているかどうか。

血飛沫を上げて次王は突破をしていき、ようやく次王の意図に気づき始めた連合軍が、兵糧の前に集結し始める。いや、イオは次王が何を考えているのかわからなかったのだ。そもそも、要塞には十分な物資があり、次王の言っていることが正しければ、アイギスとの間に補給路ができるという。そうなれば、敵方の物資を奪う必要は一切ない。

それでも殺到した騎竜兵の数は膨大で、そもそもこの鉄鎖の次王が夜襲を掛けた理由が、連合軍の兵糧を奪い取ることであったとしか思えないのだ。

次王は、周囲をくまなく眺めて、ゆっくりと笑った。

悪魔のように、鬼神のように、陳腐な言葉が浮かぶが、この時の鉄鎖の次王の笑みを表現する言葉浮かばない。

「イオ、紫色弾発射！」

用意があるので速い。即座に打ち上げられ、それで第2軍の進軍が止まる。

その連合軍の兵糧集積地に円陣を組んで防衛網を敷き（敵陣のどまんなかである）、遅れてやってきたロゴス族が、その兵糧を積載していく。ヴァンダル族の無敵さは今さらいう必要もないが、連合軍はロゴス族が根こそぎ兵糧を奪っていくのをただ見ているしかなかった。

次王は、ほとんどの回収が終わったことを確認して、イオに言う。

「青色三発だ！ あとは突破する！」

ほとんど完全包囲されている状況から突破とはめちゃくちゃなのだが、その先頭は鉄鎖の次王である。そうすると、第2軍はそれについていくしなくなる。

戦術も何も無い。

この稀有な王に攻撃が集中する中で、そのおこぼれを拾えばいいだけで、徹底的に攻撃が集中する鉄鎖の次王を傘にして、残存を狩ればいいのだった。それは鉄鎖の次王が意図せずに確立した戦い方で、もっとも自分が死ぬ可能性が高いし、その全てを自分のコントロール下におけるので採用しているやり方だった。

この王は責任感が強すぎると、イオはしばしば思う。

部下が死ぬより、自分が死ぬほうが楽なのだ。

そこで失う多大な損失をイオは考えるのだが、鉄鎖の次王はそれには興味がなかった。

「突破しました！ エステバンです！ 防衛陣にたどり着きました！」

目の前の騎竜兵団が、友軍だとイオは初めて知る。

大要塞の守備を任されたのはエストの聖楯騎竜兵団で、そこに掲げていた大剣は、アイギスの聖刀だったと後に知る。

アイギスの守護聖人の祝福あれ。

エストの聖教に対する信仰心は全くなかったけれど、それぐらいの軽口は言いたい気分だった。

不意にエマの姿を見つけて、イオは涙もろくなる。

（エマ、生き残ったよ……、一緒に生き残ろう……）

聖楯騎竜兵団は大歓声で第2軍の帰還を祝福した。大剣を掲げる血塗れの次王に騎士団は熱狂し、騎士団長であるエステバンのところへ竜を向かわせる。

「上から戦況は見ていました。相変わらず、すべてがエレガントだな」

「お前がいるから、安心して攻められるのだ。聖楯ほどやっかいな守り手はない。それを貴公が統べる、理想的だ」

次王は一時的な勝利に沸く広場まで第2軍を引き連れ、各自騎乗したままで、次王は大声でこの夜襲を総括する。

「この夜戦の最大の功労者は、ロゴス族だ！ 反逆者の兵糧を奪い、この要塞の兵站を確かなものにした！ おれはまずそれを誇りたい！」

第1軍と第3軍の連合軍を反逆者と呼ぶのは、色々と問題があるのだが、こういった細々とした部分が、ヴァンダルの次王に対する反感になっていく。ただエストにおいては、アテナイスによって唯一のボルニアの王権は鉄鎖の次王にあるとされているので、極めて正しい発言になるのである。

次王はロゴス族の騎竜兵を呼び、その面々が要塞中の賞賛の渦中に置く。

ロゴスの騎竜兵たちは誇らしげで、剣を掲げてその賞賛を受け止めた。

考えるまでもないが、この夜襲の主力部隊はヴァンダル族である。

だがそれを、ロゴスに譲るぐらいの余裕はヴァンダルにはあったのである。

だれも、カノウスがしている仕事を知らないのだ。

25. アテナイスからの連絡と、イオの秘策

アテナイスからの連絡が届いたのは、誰もが忘れていた頃だった。

エマを介した翼竜の伝令で、書かれていたのは単刀直入で簡潔なことばかり。

それをなんと呼ぶのかはイオにはよく分からず、受け取ったイオはそれをどう伝えていいか悩む。それはイオならば、適切に伝えてくれるだろうという希望的観測に満ちていて、イオは次王のもとに歩きながら、これはそのまま伝えたほうがいいのではないかと思い始めていた。

「次王さま！ あてない、あ、野ばらの姫君から連絡がありました！」

「読め！」

そりゃそうだ。イオだって、この鉄鎖の次王の性格は知っている。

「第一に、トランの使者にはお帰りいただき、キュディアスの使者は望んだので、滞在をしていただいています」

次王は黙っている。

「これには付記がありまして、キュディアスはボルニアの内戦の行方が知りたいから残ったのだろうと」

「それは言葉を間違っている」

イオはぎよっとする。

彼女は次王の邪魔をしないように、控えめな言葉で伝えていることを忘れていたからだ。アテナイスは間違っていれば次王が訂正してくれることを期待して書いている。まるでそれが2人の関係であるともいうかのように。

「アテナイスが言っているのは、キュディアスの黒の兵团は、ボルニアの現状を克明に知りたくて残っているということだ。イオ、気づいたか？ 最強の駒はキュディアスだ。これはうまく使いたい」

怖いのはだいたいこういう状況である。

そもそもイオにその状況を理解していることが求められるのはおかしいはずなのに、平然とそれを無茶振りされる状況だ。それでもイオはだいたい辛抱強い。それ故に、無茶を投げ込まれるのであり、出世したいという意思は一切ないのだが、だいたいやってしまうので、無条件で重要性が上がってしまう。

勝手に周囲が重責を押し付けてくるのである。

もしイオが、正常にその状況を把握できていたのであれば、これはおかしいと言えただろう。

ただ、だいたい仕事と言うのは、できるから集まってくる。

あそこに投げておけばだいたい安心だから投げるのであって、その投げている本人たちは、まさか他の次王どころか、ありとあらゆるところから投げ込まれているとは、考えない。

さすがに限界だった。

「それはアテナイスさまに任せてください！ あたしがアテナイスさまより、外交に通じているんでしょうか！」

次王はぽかんとした。

「なるほど、だが、お前の意見が聞きたい。お前でなければダメなのだ。キュディアスはシド侵攻にどれほどの援助をしてくれるだろうか」

考えるが、言葉は決まっていた。

「蛮族を奴隷にするシドにいっさいの支持はありません！ キュディアスはボルニアがシドと開戦することを何よりも望んでいます！ どんな犠牲でも払うでしょう！」

次王は満足そうにうなずいた。

「では、虹翼はこの辺境の内輪争いに、どれだけの兵力を出せるだろうか？」

イオが言った言葉は鉄鎖の次王に染みたようで、うんうんとうなずき、その赤毛をなでた。この王に触

れられると、莫大な責任の一端を預かったようで、怖い。

「おまえがこのボルニアを統べればいいのだ」

また、これだ。

これは端的に、自分の重責をイオが肩代わりしてくれるのならば、いつでもこの仕事を辞めたい、と言っているのである。

※

その後、鉄鎖の次王はだいたい、イオの言ったとおりに状況をすすめる。

それはイオにとっては、恐ろしい状況であったのだが、選んだのは鉄鎖の次王であって、イオには一切の責任がないはずだった。アテナイスと連絡を取り、その稀代の外交官にイオの提案通りの指示を与える。

次々と届く報告書を読む度に、イオは背筋が震える思いがした。

なんの責任もないはずの自分の構想通りに動いているからだ。

イオは客観的に自分を見ることができないから分からないのだが、イオは大量の情報に触れていながら、私情で発言することがほとんど無い。それは周囲の偉大な人物たちを恐れ敬っているからで、従者のように自分を捨て、それでいて誰かに偏ることもない。

誰にでも反発する。

表現すれば、透明な反骨精神の結晶がイオなのである。

従わない無色だから、次王は意見を聞きたくなる。

アテナイスとイオの差は、アテナイスは次王の色に染まっていこうとし、イオはかたくなに染まろうとしないこと。

妻として側において心安らぐのはアテナイスであり、腹心として役に立つのはイオのほう。

次王は、間違っていたときに何のためらいもなく訂正をしてくれる人間としてイオを選んでいて、端的に間違っていれば刺せと背中を刺す許可まで与えている。ひりひりとするような緊張感の発生源としてイオを置いていて、その副官が誰にも染まらない性質であれば、重宝する。

だから、イオを信用する。

この構図をイオはわかっていなかった。

迷惑だと思っていたのである。

それは、こうってしまうのは恐ろしく残酷だが、幼かったのである。

※

アイギスと要塞間の地下通路の開通は、要塞にいる人達がアイギスに行けることを意味した。それには鉄鎖の次王も当たり前に含まれて、イオは護衛に駆りだされたというか、それしかしていない。

なんとといっても、敵対している第1軍、第3軍の連合軍に完全包囲されている。

水竜を主力とする聖楯騎竜兵団が、アイギスの在する淡水湖をパトロールするが、それでも夜陰に紛れれば侵入は可能だし、同じボルニア人同士、紛れてしまえば悪意ある者を見つけ出すのはほとんど不可能に近い。

レトの次王がいれば、なにか適切な判別方法を考えてくれるのではと期待するのだが、イオにはそんな提案を出来るだけの実力が無い。

だから常に、次王の側において、その背中を守ることに集中する。

カノウスの地下通路は、アイギス内の幾つもの地点に通じていた。

イオがランプをかざして、地上に出る扉を開くと、そこは静まり返った聖堂だった。

月光がしんとした沈黙に寒々と差し込み、その広大な空間をほそぼそと照らす灯りが心細く感じる。

次王は白い息を吐き、火がないと寒いな、という。

毛皮でも着ますか？ いや、おれにその趣味はない。それに、薪を燃えたぎらせている要塞の者たちが毛皮を着ていたら、おかしいと思うだろう。次王の言っていることは的確で、イオも顔かざるを得なかった。しかし、スカイ河の河口近くにあるアイギスの冷気は寒く、指先がかじかみ始めていた。

「急ぐぞ。早く暖を取りたい」

その夜の目的はアテナイスから直接状況を聞くことにあり、それで聖堂をでて、アテナイスの古城へと向かう。アイギスは寝静まり返っており、足音さえ大きく聞こえる。主島から橋を渡り、長いながい階段を登り始めるころには、深夜に差し掛かっていた。

イオはシド製の懐中時計に灯りをあてながら、約束の時間に間に合いそうだと思う。

だいたいこの階段を登るのにかかる時間は、事前に計っていたのだ。

冷たい風がときどき強く吹き、それで揺らめきそうになるのだが、2人とも十分に鍛錬を積んでいる戦士である。イオはその高台から不意に振り返り、アイギス全体の包囲の状況を見てしまった。

「壮观だろう？ これが戦う相手だ。目に焼き付けておくといい」

次王は簡単に言い、その目の前に広がる無数の灯火を晴れ晴れと眺める。

湖岸と要塞を包囲する大軍勢。

そのひとつひとつの灯の下に、第2軍に反抗する騎竜兵の人生があるのだと思うと、想像を絶していた。

「勝て、ます……、かね？」

「そんなことは知らん。おれは火の粉を振り払うことしかしてこなかった。リュディアに助けてほしいといわれた。それを助けた。おれはこうしたいと思ってしたことはほとんどない。ヴァンダル族はボルニアの諸部族に便利に使われているだけなのだ」

それは嘘だ。

この王は、ボルニアに正当な王権を打ち立てたいと思っている。それは誰から見てもなにひとつ文句のない形で成し遂げられ、ボルニアという国の規範となる、統一的なリーダーシップの形を、規範として具体的に見せてやりたい。

それがどれほど大きな夢であるかは、イオにさえも分かる。

——絶対に死ぬことだけは許さん。

そしてこの王は、戦場での死者は端的に自分の責任で生まれたと、心が蝕まれるほどに責任感を感じている。

「あの」

次王はふしぎそうな顔をする。

「なんだ？」

「あ、いえ、なんでしたっけ？ 今日は月がきれいですね」

次王はおかしそうに笑った。

「しらじらしいぞ。おまえはイオだろ。死んでから後悔するのか、言うてから後悔するのか。そんなのは、答えは出ている」

イオはためらうが、次王のいうことは正しいように思えた。

「次王さまは、背負いすぎているように見えます」

「だから、イオにもすこしは働けと言っている」

これは完全に予想外の逆襲で、イオはどうしようもない次王の腹心としての仕事を、突き進むしかなくなるのだが、これは次王流の権限移譲で、そもそもこの王は素直な性格で、真正面から受けると、どうやっても逸らしようがなくなってしまうのだ。

この王に魅了される人が多いのは、裏表がほとんどなく、だいたい言っていることは視点を変えてみる

と正しいことが多いからだ。

だいたいこの王が言っていることは、よく考えてみると、正しい。

それが錯覚的に、めちゃくちゃなことを言っているように見えるから、その落差が大きすぎて、よく考えると、ちゃんと考えているんだなと言う結論になってしまう。

それがもどかしい。

イオにとっての矛盾を感じる地点は、ぶっちゃけて言うと、イオよりも優れた理解力を持っている腹心が、イオが想定している階級の上位の人にはいないということだった。もちろん3王を別にしてであるが。

唯一の例外がリクトルなのである。

副王だというのは、血縁とは全く関係ないことがわかる。

触れていた時間が長いから理解できるのだろうとは言えるが、それは血縁がどうこうとは関係ない話で、幼い頃から触れている兄貴が抜群の理解力を示すのは、血の問題ではないと言うことはできる。

血縁が状況を作ったのは否定しないが、血縁がなくても同じ状況は作られたのである。

※

古城の扉の前まで来ると、さすがに安心を感じる。

連絡用の小窓を開いてイオが顔を見せると、門番が気安く声をかける。

「時間どおりですね。さすがリュディア族です」

イオはリュディア族ではないという些細な問題があるのだが、門番は扉を開いて、灯りと暖気の室内に招いてくれる。

「アイギスの夜気は冷えるな。凍えるかと思った」

「では、ブランデーはどうでしょう？ 身体があったまります」

「酒はだめなんだ。すぐに猛烈な吐き気に襲われる」

イオはその瞬間はっとし、そう言えばそんなことさえ把握してなかったと震撼する。

「茶をもらおう。温かい茶は用意できるかな？ さんにん分だ。ポットとカップを持ってきてくれ。あ、いや、ごにん分だ。凍えたふたりには二杯分が必要だ」

温かいお茶が届くと、そのカップに注いだあつあつのお茶に、イオはなごむ。

かじかんだ手が動くようになり、自分の気道に暖気が満ちるのにほっと息をつく。

「このアイギスの寒さは堪らないなあ。ボルニア兵は南方のジャングルの気候に慣れている。だからいつでも熱いお茶を飲めるようにしたいのだが」

突然の無茶振りに門番は困るのだが、助けを求められる視線に、あわててイオは提案する。

「こ、こうしてはどうでしょう。この件はアテナイスさまの近衛兵団に一任する。やり方は、近衛兵団に任せる。アイギスに常駐しているのは近衛兵団です。その任務の一つに暖かい茶の提供を加えるのです。指揮系統もあります。もちろん古城の衛兵はこの兵団の指示に従う義務があります。緊急時の代理として古城の方々を使うのもあります。ただ、全責任は近衛兵団が負う」

(エマ、ごめん！！ ごめんなさい！！)

次王は考える。

「城は従うか？」

門番は困る。

「わたしがそんなこと言えるはずないとわかっていると思うのですが」

「そのとおりだ。あれだ、野ばらの姫との婚姻を一手にしきっていた女性がいたな、あいつを呼んでこい」

「さすがに寝ていますよ！」

「叩き起こせ。ここは戦場だ。寝ているうちに殺されることもあるのが戦場だ。いま話しているのはエスト

の存亡に関わる話だ。おれが保証するし、機嫌が悪くても、お前に害がないようにする。すべての責任はおれが受ける。おれが命令した、でいい。これをしないと殺されるかもしれないと盛ってもいい」

かわいそうな門番は、階段を駆け上がって行き、イオは正直ぽかんとした。

「だ、大丈夫ですかね？」

「いや、大丈夫でない。たぶん最悪、職務放棄まで繋がるだろう。ただそれはリスクだ。リスクがない行動はない。しかし、そのリスクを恐れる行動こそリスクだ。なにもしないことは最大のリスクだ。怖いことはしないとなったら付け込まれる。この寒気で、兵が動けなくなることが一番怖い。ブランデーを飲んで戦えといえるか？」

これは誰に言っているのだろう。

目の前にある連合軍に言っているのか、それよりも目の前にあるシド侵攻に対して言っているのか。シド侵攻は目算が外れる結果になる。それは軍事的な指揮官がいないと思っていたのに、目の前にシド史上最強と謳われる屈指の指揮官の登場を、ボルニアが許してしまったことにある。

鉄鎖の次王とシドの死神リニーの戦いは壮絶で、戦史上屈指の名勝負と謳われる。

まさかこんなぽっと出の小娘が、シドの全権をクーデターで握って、独裁的な危機下の指揮に付するとは思っていなかったのである。

イオにとっては死神リニーはトラウマである。絶対的に負けたと思ったのはリニーが初めてだったし、明らかに切れすぎていた。

そして、イオは密かに、リニーに仕えたかった。

次王にしているのと同じように、全人生を掛けて、仕えたかった。

それが、敵対していた死神リニーだった。

26. キュディアスの謎と、アテナイスとの会談

キュディアスの政体がどうなっているのかを、正確に知るものはない。

一般にはボルニアのような族長に束ねられた蛮族たちの連合と知られるが、その蛮族間の意思をどのように調整しているのかが、まったく分かっていないのだ。

ボルニアの、全部族が参加しての王位継承戦争で決定するやり方は、単純明快で理解がしやすいが、それさえないキュディアスの連合はふしぎな規律に律されており、一種の宗教じみた狂信的な秩序さえある。

いっその事、各部族の長による投票によって連合の秩序が保たれているといわれたほうが、すんなりと理解できる。

普通に考えれば、キュディアスには統治機構はない。

ただ虹翼騎竜兵団という7翼の兵団と、諜報機関である黒の兵団の1翼の、計8翼からなる軍事組織を持ち、これが蛮族間の争いに制裁を加える恐怖の兵団として、広大な領域を統治している。

この8兵団は互いに独立しており、それぞれが兵団長を持ち、騎竜兵は各部族からの混成部隊となっている。

この8翼の兵団が、どのように意思決定をしているのか？

これが長い間の謎だと、イオは兄貴に聞いたことがある。

知らぬことなどないと思っていた兄貴にそう言われて、イオは戸惑ったのを覚えている。

たぶんイオも分かっていないのだが、重要な案件を扱うたびに、イオもそれは一体何なのだろう考え始めていて、それはきわめて優秀な副官としてぐんぐんと成長している最中の景色なのだ。

「アテナイスさまは聞きだしているかもしれません」

唐突に言うイオに、次王はふしぎそうに聞いた。

そもそも2人は、客人の様子がどうだったかを聞きに行くのだ。いまアテナイスのもとにいる重要な客人はキュディアスの黒の兵団の長しかいない。

「おまえが提案してくるのは久しぶりだ」

この王は平気で嘘をつく。

「そうでしょうか？」

「意味ある提案という意味だ。おれもキュディアスがどう考えているのかは気になっていた。アテナイスに会うのはそれ以外に理由はない。であれば、イオが言いたいことはそれしかない。それで間違いないか？」

この王は正解を言って、それから正解かと聞く。

こんなに聡明な王に誰が従わないのだろう？

耐え難いほどの気持ちが湧き上がり、つい正直なことをいってしまう。

「アテナイスさまにお申し付けください！ キュディアスの意思決定は誰がしているのか！ それを解き明かすのは、あなたの仕事だと！」

言ってしまったあとに、背筋に怖気が這い始めた。

それは、エマに重責を押し付けてしまった時に感じている、贖罪の気持ちとほとんど同じだ。そしてそう感じたのは正しかったとすぐに分かる。次王は軽く笑う。

「そんなに肩肘を張るな。責任は決定したものが負う。イオが背負う罪はない。おれには罪しかない。イオが知らない罪がおれには大量にある。どれだけ殺したかしのれない。眠るたびに悪夢を見るんだ。なんでおれは死んだんだという、仲間の絶叫だ。それが実際の光景として浮かび上がってきて、話すんだ。おれは死にたくなかったって。地獄だよ。イオ、お前もそこにたどり着きたいか？」

それは、ここに来るなという絶叫だった。

凄惨すぎて、息を呑む。

ただイオは、それが欲しかった。

耐え難い苦痛を、ともに味わうと言いたかった。

「あたしにはできません、だからできます。鉄鎖の次王が、あたしよりも耐えられないとは思いません」
爽快な爆笑が城内に響く。

背中を大袈裟に叩き、頼りにしてるよイオ、とつぶやくように言う。

リニーと鉄鎖の次王にもし差があったとすれば、それは次王には親友がいたことなのかもしれない。新生ボルニアの陣営は、王位継承戦争で試されていく重要幕僚の絆が、ひたすらに強固であったと総括ができるのがこののちの歴史だ。

この次王は目の前のちっぽけな赤毛の少女を、手首をつかんで捕獲し、ほんの数言でくどいた。そして、イオでさえも動揺するほどの権限を簡単に与え、自分の腹心にした。人心掌握術と言うとチープな気がしてしまう。そもそも掌握しようとしていないのだ。とても素直にお互いの状況を把握して、落としどころを考えて発言しているのだ。

イオは素のままの、荒れ狂う透明の反発分子としてその存在を大切にされ、アテナイスはこれまで通りの、誰とも敵対しない温和なホスト役として大事にされる。

考えてみると鉄鎖の次王は、この強烈すぎる異分子である2人を何の問題もなく3王+リクトルの体制に組み込んでいる。

このバランス感覚はなんなのだろう。

そう、イオは考えるべきだった。

※

アテナイスは静かに座った。

従事たちが茶を置き、それで喉を湿らすと、次王はいきをついた。

「しずかだな」

「眠る時間は過ぎていきますから」

「そうだな。すまなかった。こんな深夜に」

風音だけは、高所にある古城には響くのだが、強風だけが鳴っているわけではない。

アイギスを包囲しているのはボルニアの反乱軍であり、その反乱軍の不快な雑音はこの古城まで風に乗って届く。窓から覗けば湖水を包囲する篝火が見えるはずだった。

だけれども次王は落ち着いているというよりは、勝利を確信している。

「客人の様子を聞きに来た。分かっていると思うし、それはいつものことだったと思うのだが、客人は満足しているか？」

アテナイスはくすくすと笑う。

「それはわたしの仕事ではありません、城がやってくれます」

そもそも彼女が相続したのは、アテナイスの地位ではない。歴代がもてなしにつかってきた古城の優秀な人々を承継したのであって、実際のところ彼女本人がすることなんてほとんどないのだ。

絶対中立地帯であるアイギスが、北方の強国のサロンになっているのは、たんに政治的に中立な場所だからではない。そこが諸外国の利害対立の悩ましい問題から解放されて休養するには充分するぐらいには安らげる場所であり、城の全員が客人に快適に過ごしてもらいたいという熱意に満ち溢れ、最善を尽くしてもてなししているからなのだ。

アテナイスはうつくしいもてなし役と言うよりは、城の支配人だった。

「黒の兵団の兵団長は客だったよな？」

「ええ、お泊り頂き、とてもお褒め頂きました。もう何度もお泊りなのに」

「それで、聞いていないか？ キュディスの方針は誰が決めているのかと」

しばらく考える。

「聞いていません。それにそれは、アイギスの中立性に疑問を抱かれかねないことばです。アイギスが千年間生き延びたのは、絶対中立だからです。わたしはそれを捨てることなどできません。もしそれを望むのであれば、婚姻関係を破棄します」

それは、鉄鎖の次王を動揺させるには充分で、イオはこの王がここまで崩れるのをはじめて見た。恋だ。

これは正真正銘の恋だ。

理詰めで考えれば、次王は何でもできる。

それでも、最大限にこの王が恐れるのは、アテナイスを失うことなのだ。

この王は、アテナイスに本気惚れている。

動揺を悟られないように取り繕う姿がかわいと思うほどにイオは冷たかったのだが、そのあまり周囲には見せられないほどの取り乱しぶりだった。

次王はことばをまったく失った。

アテナイスはそれにはまったく気付かず、ふしぎそうな顔をしている。

そもそも彼女はこれまでアテナイスとしてしか人生を生きておらず、アイギスとその絶対中立の地位を失い、古城が周辺諸国のサロンの地位を捨てることは、彼女の人生の全否定につながりかねなかった。それは次王にとっても得策ではないはずだ。

「あ、あの」

イオが口を挟むと、両人の視線が向く。

ぎょっとして怖気づくのだが、そもそも自分は怖気づかないことが評価されてきたではないかと思う。

「お、お茶が冷えますから。冷めないうちに飲んでください」

アテナイスは微笑する。

しずかに茶を飲み、アテナイスはちいさくおいしいとつぶやく。

「このように寒い日には熱いお茶に限りますね？」

誰に言うでもなしに聞く。

その間の取り方がとても優雅で、しぐさが上品だからイオでさえも見とれてしまう。

ふと視線を向け、

「あなたさまはお酒を飲まれないのですね？ もちろん何かがあるかわからない状況ですし、騎士団に飲ませるわけにはいけないでしょうが」

「弱いのだ。生まれつき酒は飲めないのだ」

「それで」

アテナイスはゆっくりと頷く。

「聞きました、城のものに。なんでも要塞の騎士団がいつでも茶を飲めるようにしてくれと。こんなに寒ければ、お酒で体を温めたくになります。でもお酒を飲むことを禁止すると、あなたさまが飲めないからそんなことをいうのだと思われてしまいます。それで」

「そうだ。寒いからという理由がなくなれば、あとは飲む理由は酔いたいからしかなくなる。それがいけないことは、兵士であればわかる」

優雅にうなづく。

イオにはこの古城のサロンの主が、日々どのように訪問客をもてなしているかが手に取るようにわかった。そしてあらゆる客が、このうつくしく温和な主人の前に悩みを打ち明けているのだろうとも。であれ

ば、兄貴でさえ知らない、キュディアの政治体制も手に取るようにわかっているもおかしくはない。

しかし、それゆえに話せない。

アテナイスとの会話の場は、周辺諸国の誰もが共有する、俗世を離れた平穏な癒しの場なのだ。

それを独占してはならないとは、次王も言っていたではないか。

彼女はアイギスのために話せないのではなく、次王のために話せないのだ。

ふと口を開く。

「キュディアのお話は、ご本人に直接聞くのがよろしいでしょう。そうであれば、アイギスの中立性に嫌疑はかかりませんし、率直にお聞きになりたいことを聞くことができます。もしよろしければ、あなたさまが直接お話になりたいと、お取次ぎするのもやぶさかではありません」

次王は精悍な表情を引き締めて宙をにらみ、イオを見た。

「どう思う？ 希望を話すか？ おまえが考えた算段だ。おれもこれは飲むと思う。だが事前に漏れてしまうと、何の意味もなくなる。戦というのはそういうものだ」

イオはしばらく考えるが、アテナイスが驚いた表情をしているが気になって、考えがまとまらない。もっとも、目の前の女性からもれることがないことはわかりきっているのだが、問題は別にある。

「あ、あの、その算段を話して、都合を聞くのは、もう少し後でいいと思います」

「後というのは？」

イオはためらうが言う。

「レトの次王が合流してからで」

「やつがないとできないことは何だ？」

あまりにももっともな疑問だ。

「このアイギスはボルニアの反乱軍に包囲されています。お互いボルニア人。もし夜陰にまぎれて侵入でもされれば、敵味方の区別がつきません。目の前にいるものがスパイでないと保証できるような方法を何か考えないと、機密を漏らすわけにはいかないのです」

「なるほど。やつはそういうのが得意だ。毎日の商売でそういうことを鍛えているようなやつだからな」

満足そうにうなずき、ではやつが戻るまで待とうという。

それでイオはほっとして、肩の力をすこしだけ抜いた。

「そういうことだ。たぶん取り次いでもらうことになる。だけれども、それは少し先だ。忠告通り、直接聞くことにする。だから、怖いことを言わないでくれ。死ぬのは怖くないが、失うのはおそろしい。おれはだれも失いたくない」

いたずらっぽく、アテナイスは小首を傾げる。

「だれも？」

「おまえをだ、それでは不満足か？」

この姫は次王を手玉に取って、愛情を確かめている。赤面する若い青年を包み込もうとしている。イオから見ると年の差のある夫婦がじゃれあっているようにしか見えず、その見解はほとんど正しいのだが、視線のやり場に困るほどの相思相愛の熱愛ぶりが、気恥ずかしくて仕方なかった。

イオはもどかしくて言う。

「あ、あの、あたしは席を外しましょうか？」

アテナイスは冷静な表情に戻ってイオを見るが、次王はすこし考える。

「いや」

「だめです！ 次王さま！ あたしは外にいますから、なにかあったら呼んでください！ お二人の関係に水をさせません！ この部屋の警護はします。扉のすぐそこにいますから、なにかあったら呼びくだ

さい！」

次王はアテナイスを見るが、彼女はなにか言いたげな表情をした。

それで、身体が動いた。アテナイスの部屋を飛び出して、分厚い扉を閉める。

びっくりした衛兵がイオに、何かあったんですか？ と聞く。

イオは考えるが、よく説明しようとするほど、赤面してくる。

「はじまっちゃったんだよ」

※

その晩は、深夜から始まり、すぐに早朝になっていく。

分厚い木製の扉からはいっさいの音は漏れてこず、それよりも窓ガラスの外でなく、鳥の声がその部屋の前の空間を占めていた。

結局一睡もしなかったなとイオは思い、扉の向こうで何も起こっていない、いや起こっているのだが、少なくとも扉の外のものと呼ぶようなことは起こっておらず、たぶん平穏無事なんだろうと思うしかない。

そんなところに城の使用人が、香りを漂わせるポットを載せたワゴンを引いて、廊下をやって来る。

「アテナイスさまはお目覚めですか？」

イオは自分を指差して、空口で、あたしがいる意味を理解しろ、という。

「おっと……、そんなにプライベートだったとは……」

辿り着いたワゴンの茶を注いでもらい、衛兵と一緒にその香る茶で暖を取る。

「それ、朝食？」

「え、あ、はい、そうなりますね」

見ると、スコーンにジャム、卵を溶いたコンソメのスープ、魚の酢漬けに、キャベツの薄塩漬け。正直、イオは辛いものか、戦場食の味のないものしか食べていないので、ごちそうに見えた。

「衛兵向けはないの？」

期待を込めて聞くと、その使用人ではなく衛兵が答える。

「雑煮があります。あまった材料を混ぜたリゾットですが、旨いですよ。正直こっちのほうが出すべきなんではないかと思うほど」

空腹だった。

どうすれば食べられるのか知りたかった。

「それ、食べたいなあ」

使用人はイオの地位はわかっているので、慌てて厨房へと戻っていく。

もしかしたら、あたしは食いしん坊なのかもしれない。ほんとは小食な方だし、無理やり食べさせられれば苦しい。いくらでも食べたい人の精神状態がよくわからないのが、イオなのだが、朝食の時間にはおながすく。ましてや昨晩は寝ずの番で、立ちっぱなしだった。

チビで、痩せっぽち。

それでも剣を振るうには、十分な食事が必要だ。

しばらくすると、先ほどの使用人のワゴンを押す姿がみえ、雑煮というよりはまずさきに魚介の香りが漂った。ごくりと喉が鳴ってしまう。アイギスは地理的に淡水の幸と海水の幸に恵まれている。それが、ジャングル育ちのイオからしてみれば、極上のごちそうに思ってしまうのだ。

「いやー、ほんと、残り物なんですよ」

期待に目を輝かせるイオに、使用人は申し訳なさそうに笑う。

本来はこちらを出すべきだとは言いが、夕食の残りを使うものを正式なものとして出せないのはわかる。それでも、まかない飯というのは、だいたい料理人が同僚の料理人に食べさせるために作るものであるか

ら、旨くないはずがないというものだ。

不味かったら馬鹿にされる。

黒鉄の無骨な鍋から湯気が上がる。

数人分の陶器の取り皿が重ねられ、すぐそばに大きめの木製の匙がおいてある。

使用人はワゴンを止めて、鍋の蓋を外すと、むせるような貝の匂いがした。かちゃかちゃと椀のような取り皿に匙でとりわけ、その匙と一緒に渡す。

まずは、衛兵のふたり。

それでイオの番が来た。

取り分けられる時間でさえそわそわし、渡されて匙を突っ込んで、舌をやけどする。

「ほわ、ほ、ほ、ほふほふ、」

じわじわと染みこんでくる旨味が、やわらかな米に浸って甘みと複雑な味わいを感じさせる。散らされている小さなキノコがアクセントとなって、ふしぎな深みを演出している。

熱くて、噛みしめるのが辛かったが、噛みしめずにはいられなかった。

貝を噛み、魚を食べた。

この料理を包み込んでいる調味料がイオにはさっぱりわからなかったのであるが、使用人に聞くと嬉しそうに答える。

「魚醤です。ぜんぶ海のものなんです」

「キノコもあったよね？」

ニッコリと笑う。

「シメジは確かに山のものかもしれませんが、ですが、この辺で採れるんです。あの要塞から毎日のように届きますし。食べないものは採取しません。でも、ときどき採りすぎてしまうのです。それで、私達が食べることになる」

べつにそんなことに異論はないのだが、ただただおいしいことが驚きだった。

すくって食べると、空腹もあって幸せになる。

ふいに声が響く。

「おい、イオ。こんなところにいたか。探したんだぞ」

振り返るまでもなく、エマが赤服姿で歩いてくる。掲げた手には書状らしきものをひらひらさせる。イオは慌てて、自分を指さし、それからアテナイスの私室をさして、ぱくぱくと表情と身振りで分からせようとする。

エマは気づいて、

「おおっと、イオはそういうのは苦手なのか？ 夫婦なのだし、少し遅いぐらいだとしか」

「エマは平気なの？！ エストって北方の国でしょ？ あたしは兄貴から、そういうのにうるさいのが北方だと聞いたよ！」

「騒ぎすぎだよ、イオ。アテナイスさまはずっと、行き遅れだといわれて続けてきたし」

混乱してくる。

歴代のアテナイスは婚姻するものだったのか？

のちにエマの詳細な説明を聞くまでは分からないのだが、エストには独自の風習があるのだ。それを聞いた時に、イオはさらに混乱に陥るのだが、いま語っても意味がないし、もしかしたら将来的に語っても意味があるところがないのかもしれない。

そもそも、これ重要か？

重要な案件を思い出したのはエマで、イオに書状を見せて、今朝翼竜が運んできたという。封は切られ

ていなかった。

「イオ宛だ。イオ宛なんて初めてだよ。だから、慌ててきたんだ」

受け取り、丁寧に封を開ける。

本文を読むと衝撃が走った。あわてて、アテナイスの私室の分厚い扉に齧りつき、なんども激しくがんと叩いた。

「次王さま！ 急報が届きました！！ 書状にお目をお通してください！ 一刻を争います！ 一秒でも早く、お目をお通しを！！」

イオはこれでも仕事はちゃんとしているのである。

言うものがイオでなければ、鉄鎖の次王は扉を開かないのだ。

27. レト族からの書簡、イオ、アテナイスと黒の兵団長の元へ

鉄鎖の次王は、朝食前にもかかわらず正装で扉を開けた。

イオの尋常ではない様子を見て、しばらく考えていたが、端的にいう。

「なんだ」

「レト族から、いち早くアイギスに合流したいと！ 現在の所在地からの、工程表が書いてあります！」

次王は聞くよりも早くイオが手にしている書状を奪った。

それを一瞥して、顎を搔く。

「これは絵空事だ。あいつらは状況を理解していない。こんなにうまくいくはずがない」

それでも軍事を司る、鉄鎖の次王には想起することがあったようで、

「使えないことはないか」

とつぶやく。

神がかった戦上手とは、イオが言ったことばではない。

それでも、この鉄鎖の次王名付けられた、この青年が奇跡的な連勝を続けるのは、けっして説明ができないことではなかった。

節々のことばを丹念に拾っていけば、随所に予言されていたと思われる言葉の数々を見つけることができる。しかし、そもそもこれほど意のままに動く統率された兵団から忠誠を誓われていれば、それが次王でなくても連勝を続けられるような気もする。

そう、たとえばそれがリクトルであっても。

バーラルの会戦で主力部隊を率いたのは、次王が副王だと呼ぶリクトルだ。

いま、リクトルは次王の遊撃部隊を連れて、おそらく本国にいる。

それが実弟であるかどうかは関係ない、実際に瑕疵なく率いていたのだから。

その片腕を失っている次王はどのような心地なのだろう。

「野ばらの姫よ」

「はい」

急に現実に引き戻される。

そのやり取りやしぐさを見聞きするだけで、イオには扉が閉ざされていた間になにが起こっていたのかわかる。

「キュディアスの客人に会談を打診して欲しい。交易がしたい。レト族は交易部族だ。あらゆる困難を乗り越えて、ジャングルを横断して交易をする能力に長けている。あらゆるものを調達してくれるし、商談もハードだ。商売はあいつに任せることにしている。あいつが帰ってくる。であれば、キュディアスと商売がしたい」

「それは、キュディアスとの関係が崩れませんか？」

イオは聞いていて感心した。

アテナイスはそのやり手の商売人が、搾取的な条件を押し付けるのではないかと心配しているのだ。次王は笑う。

「ボルニアには三人の王がいる。まっさきに反対するのはリュディアだ。おれも反対するかもしれない。そうなればレトは持論を通そうとは思えなくなる。もちろんイオがレトの次王を刺してくれるという可能性がないわけではないが」

さらりと怖いこと言う。

イオはアテナイスを見るが、もうすでに彼女は昨夜見せていた妻の顔というよりは、本来のアテナイスの顔に戻っている。聡明なエストの統治者の顔。いや、すこし先走って言えば王妃の顔。それにイオがふ

しぎな安心を感じるのは、エスト中から慕われる重責を常に背負ってきたからなのだろう。

エマの言葉が心の底からわかる。

――アテナイスさまはそんなことをしない！

落ち着いてみると、あんが いい 布陣ができて いる こと に 気付く。

足りないのはわかりきっていた。

「次王さま！ お願いがあります！」

「そうか、いえ！」

つばを飲むぐらいの余裕はあった。

「リクトルさまを、副王殿をレト族に救出させてもらえないでしょうか！」

次王は考える。

「だめだ」

(だめ?! なんで? どうして? リクトルは救出する必要が無いの?!)

「不満そうだな、イオ。おまえはわかりやすい。だがこう考えてみたらどうだ? ただでさえリクトルはおれの実弟だから優遇されているとやっかまれている。そうでないことぐらいおまえもわかっているだろう? おれはあいつに最高の兵を与えた。であれば、レト族の助けなど借りなくても、帰ってこれる。この重厚な包囲陣を突き破って帰還する、これこそ副王にふさわしい、誰もが認めるだろう。レトに救出されるか、自力で突破するか。これが評価を分ける」

リクトルをほんとうの副王にしたいのだ。

身体が武者震いで震えてくるのがわかった。両手や喉が震えて、声を出すのが困難だった。あたしがやるんじゃない。でもリクトルはやるだろう。こんなところに自分がいるのが信じられなかった。

書きたい。

この歴史を書きたい。

――そう思うんだったら、おれより早く死ぬな。

うん、……うん、死ねない。

「は、はい、死ねません」

次王は怪訝そうに言った。

「おまえが救出に行くわけではない。そんなことは頼まない。そもそもおまえのプランからずれてるだろ。おれが考えているのは、北方最強の諜報部隊、黒の虹翼だ。虹に黒色はないけどもな」

「そんなに簡単に行きますか？」

真っ先に口を開いたのはアテナイスだった。次王は意外そうに見たが、おそらく次王の想定よりもアテナイスが優秀だと思えたからだろう。

「イオはどう思う? 考えたのはおまえだ」

こういう無茶振りはほんとうにやめて欲しい。

「アテナイスさまは、ご客人をどう思っていますか？」

「礼儀正しい方です。このアイギスでの休息を心底ご堪能いただいています。最近はお茶に凝っているようで、温かいものを出すと喜んでいただけます」

イオはこうなるだとわかって自分に振っている次王の考えがわかって、あたふたとする。

(それはあんたのもてなしの話じゃないか。いましているのは外交の話なんだ)

「具体的には、キュディスはどんだけやる気があるんだって話です！」

イオが切れると、アテナイスはああそうかと考えを巡らす。

「黒の虹翼は、諜報機関というように見られますが、本当はキュディスの貿易機関なのです。各地の価格情

報を集めるのが、彼らの本来の仕事なのです」

アテナイスがずれているのではないかと一瞬思って、イオは気づいた。

あたしたちがずれている。彼女は、黒の虹翼が実力行使をする兵团ではなく、情報を扱うことに長けた兵团だと言っているのだ。

「では、簡単だ」

次王の世界の捉え方は、とにかく誰にもわかりやすい方向に向く。

「交易とはお互いが得をするからするものだ。おれは毛皮がほしい。キュディスは紙がほしい。いまはアイギスが包囲されているから、十分な紙が出せないかもしれない。でもレト族が戻ってくれば、いくらでも紙は出せる。その時に、どれだけの覚悟をキュディスが見せられるかだ。わかるか？」

紙の生産元であるリュディア族はこの包囲を突破できるのかと考えるのは、たぶん無駄なのだが、レトならなんとかなるかもしれない。レトの戦士は実戦経験では最強かもしれない。

荷を背負って、ジャングルを踏破する部族である。

「商談には応じるでしょう」

にこりと笑うのは自分の夫がどうも話ができる人みたいだと再認識したからかもしれない。イオにはそのハイスピードの意思疎通についていくのがやっとで、もしかしたら細かなところではついていけないのかもしれないという疑念さえ浮かんだ。

そして一番重要なのかは分からないのだが、このボルニアのトップと、エストのトップのふたりは、いまはじめて外交交渉をして、お互いが信頼に足る存在だということを確認合っている。

では、この深夜から早朝まではなにをしていたのか、と考えるのは無粋である。

イオは自分に向けられたじっとりとした視線に気づいて、エマに視線で抗議する。

(イオって、ほんとうにこういうのって苦手なんだねえ)

けらけらと笑い出しそうである。

――なっ！

赤面するが、目端で次王が気づいたようなことを察して、直立する。

「・・・まあ、いい。商談を持ちかけてくれ。理由はレトの隊商が合流するめどが立ったからだ。アイギスへの合流前に、事前交渉をしてもらうよう提案してくれ。現在位置はわかっている。ただし、この合流にはリクトルに与えた最強の兵の助けが必要だ。だからその所在を調べて欲しい。まずレトとリクトルと直接連絡できる経路が必要だ。キュディスにはそれを担って欲しい。交易が始まった時に、数%バックする、それが原資だ」

イオは気づかなかったのだが、アテナイスは黙ってしまった。

「不満か？ これは飲まないか？」

「い、いえ。あなたさまの考えることは、いつも説明に困ります。それで怖気づいたのです。鬼神と呼ばれているあなたさまですから、考えていることを逐一説明することなんてできません。そのまま話してあの方が納得するか自信がありません」

次王はぼかんとした。

「わたしには、あなたさまのような存在感がないのです。できれば直接お話いただいたほうが」

しばらく考える。

顎をいじるのはいつもの癖だが、それから思いついたように言う。

「イオ、おまえが野ばらの姫について行って説明しろ。それから、えーと」

あまりのむちゃぶりに、イオは慌てる。そして、もうひとつのむちゃぶりが向かった先を見る。この場に他にいるのはひとりしかいない。

「エマです」

「ああ、そうエマ、おまえがおれを護衛しろ。なんなら稽古をつけてやってもいい。エステバンがうるさかった。エマにボルニア流の剣技のなにを教えた。どうもあいつはエマに学んで欲しいらしい。だから協力しよう」

あ、それは、と言いかけるが、エマがチラチラとこちらを見るのを見ると、おそらくイオが教えた受け流しを実践してみたのだろう。次王の精悍な肉体から放たれる一撃を、イオも受けたことはなかったが、細身のエマには巨体相手に戦うすべを学べるいい機会かもしれない。

不安そうなエマにイオはうんとうなずき、口の形で悪い話じゃないよ、とつぶやく。

「はい！ お願いします！ それにイオ！ アテナイスさまを危なくしたら絶対にゆるさないからな！」

指差すエマを見て、アテナイスは愉しそうに微笑する。

「お友達になったんですね？」

その瞬間、イオは野ばらの姫に触れたような気がして、エマが忠誠を誓う理由がわかったような気がした。まるであたしたちは子供だった。アテナイスの母性に包み込まれて、幸福な家に浸る。このアイギスという家が、次王の言うように自分たちの帰ってくる場所だった。

子供心が刺激される。

イオには凄惨な老王に蹂躪された家族を踏み潰される記憶しかない。

それで復讐を誓って試みたのだが、そもそもそんなに家族は暖かったか？ 考えるほどに、なにもわからなくなっていく。失った時間は、どこかで埋めなければならない。その失った時間が、子供の時間だったとすれば、それに執着してしまうのは自分でも理解できる。

(あーあ、ややこしい！ アテナイスは細かいところに干渉しすぎだ！)

「イオさん、そろそろ行きましょうか」

「ま、まって、待ってください！ なぜ、あたしが行かなければならないのかの説明がされていません！」

必死に抵抗するイオに、まあそれはそうだとのほほんとする。

「こう考えてみたらどうだ？ おれが兵団長と直接話すと、それはおれがキュディスにはそうして欲しいと考えていると思われてしまう。アテナイスがひとりで行けばエストは総意としておれに従うと決めたとおられてしまう」

なるほどと思う。

「だが交渉の主体がイオならば、その両方が避けられる。そもそもこの算段を考えたのはおまえだし、それにリクトルとの連携を主張したのはおまえだ。張本人が交渉に行つてなにかおかしいことがあるのか？」

ぐうの音も出ない。

アテナイスもその理屈がわかっていたのかと考えるが、愚問である。

北方のサロンの支配人である。

「もうだいじょうぶ？」

ほんとうにこの人は、いろいろなところ刺激しすぎて苦手だ。

「あ、はい……」

※

剣の鯉口を切つてかちやりと確かめると、アテナイスは慌てて言う。

「戦っている相手ではありません」

「あ、」

説明に困って、これはだれの護衛をするときでもする儀式のようなもので、戦いを想定しているものではありませんという。

「必ずするルーチンなんです。もし、剣が抜けない何らかの障害があったら致命傷です。あたしはアテナイスさまの護衛を命じられています。守れなかった時に、ボルニアに及ぶ混乱にだれが責任が取れるでしょう？ あたしは自害しなければならなくなるかもしれません。それが僅かな確認で回避できるのであればします」

アテナイスは微笑する。

「イオさんは、背負い過ぎなんです。わたしは乗っただけです、あの人に。鉄鎖の次王に将来の妻の姿を想像したのは否定しません。あのひとに包み込まれるのは幸せです。でもそれは道を外しているのではないかとは思いますが。でも、その幸せを享受してはいけないのでしょうか？」

こんなに突っ込んだ話をしてくるのに、イオはどぎまぎした。

一秒でも早く、お茶が飲みたかった。

言葉がだいぶ出てこなく、アテナイスをじっとみた。

「なんですか？」

「いや、もうちょっと早くお茶が来ないかなって」

くすくすと笑う。

「では、一秒でも早くお茶が飲めるように、早く交渉をする客室に向かいましょう」

28. 黒の兵団長との冷たい外交交渉

アテナイスが招き入れた客室では確かに温かいお茶にありつけたのだが、待っていたのはつめたい外交交渉だった。

「それで、きみはなんだね」

まずもって、目の前の正装の老人には、交渉相手と見られていない。

「イオ、と言います」

「ほう、そうか。イオくん、で、きみは何者なのだね？」

そういわれて、考える。

何者ってなんだ？ イオはリュディアの兄貴の妹分であるが、そんな内輪のことを言ってもわからないだろうし、鉄鎖の次王の腹心としてその護衛を頼まれると同時に、なにかあったら暗殺してくれと言われているだなんて、とても言えそうにない。

すこしでも時間がかかると怪しまれるだろう。

アテナイスをチラと見たくなるが、アテナイスが助け舟を出さないのは、それは自分でいわないと信じてもらえないと思っているからに違いない。

百戦錬磨の外交官、というよりは王妃。

イオは思い切った。

「て、提案を持ってきました……。それを検討して欲しいのです。あたしは提案者です」

「なるほど、きみは提案者か」

ほうとやわらかく頷くのに、背筋が冷える。どう考えても目の前の人物のくぐり抜けた修羅場の数には敵いそうにない。

「はい……。三分で構わないので耳を傾け、ご検討をしてください。鉄鎖の次王はこの提案を飲んでいますが、それを突っぱねるのは自由です。ですがあたしは、これがとても魅力的な提案であると、確信しています」

長の佇まいが、気のせいかわゆるんだ気がする。

「聞こう」

イオの提案はシンプルで、キュディスとボルニア間の交易をすぐさまはじめたいのがボルニアで、そのためにはレト族の帰還が必要なので、このレト族の帰還に必要なリクトルの搜索を黒の虹翼の兵団にお願いできないかということだった。

長はしばらく考える。

「ボルニアはなにを交易品として出すのかね？」

「え、えっと、紙かエメラルド、どちらがお好みかによります……」

「ふむ、それでボルニアはなにがほしいのかね？」

「毛皮、ですかね……。ジャングルの兵にはアイギスは寒すぎます。2千騎分の毛皮はとても膨大です」

長はちらりとアテナイスを見る。

「それで、交易品の輸送はエスト商人にしてもらえると嬉しいのかね？」

「反対する者はないでしょう。これまでキュディス交易を担ってきたアリエスは、先日の制圧戦で鉄鎖の次王の軍門に下りました。主が変わって、今までどおりの商売をするのになんの障害があるのでしょうか」

「それは、安心した」

商船を所有していても、荷が動かなければ運賃は取れない。さらに、毛皮の集積地がアリエスになれば、加工業が発展する。もともと反体制側の本拠地を懐柔するためには、交易が一番だ。

老人がちらりとイオを見る。

「たしかにきみの提案は魅力的だ。ただ、もう一つだけ確認しなければならないことがある。ボルニアはこ

のアイギスにある莫大な価値のある書庫を接收した」

「接收ではありません。アイギスの書庫はその主を探していたのです。ふさわしい主がやってきたのでお渡ししただけです」

アテナイスの抗議に、にんまりと頷く。

「でもそれを独占すれば接收だ。これをキュディアの民は全員が読んでいいことにはしてくれますな？」

「します」

イオが言うと、長は大げさに驚いた。おそらく諜報的な性格もある兵団を束ねる役職としての驚きもあるのだろう。

「なぜきみは、そう言い切れるのかね？」

説明に困るが、そうとしか思えないからだ。

「兄貴は、全員に読んで欲しいと言いました。そのためにリュディア族は 2000 人の写本部隊を送り込んでいますし、全員がサウス語を読めます。ただ、いま、兄貴があれなので、きちがいのような騒ぎになっているとは思っているのですが、それが落ち着けば、全部公開するでしょう」

長は黙った。

「イオ、ほんとうにきみはリュディアの次王の妹分で、鉄鎖の次王の腹心なんだな？」

はじめて真剣に名前を呼ばれた。

「はい。あたしはそうありたいと思っています」

「信じよう」

※

交渉と言うにはあっけらかんとした様子が続き、かいた冷や汗が突然に意味が無いものになったように感じた。

アテナイスはそばで見守って、細かいところは訂正してくれるのだが、だいたい主導権をイオに任せており、それはそれで心地いい時間ではあったのだ。この交渉を自分がまとめたのかと考えると複雑で、そもそもアテナイスがいないと成立しなかったのだ、それがなんなのかがイオにはわからない。

自分の能力を越えることをされると、それがなんなのかがまったくわからなくなる。

これがアテナイスなのだ。

さらりとさり気なくするので、ほんとうに困る。

「これは、評議に掛けなければならないな」

長が言った言葉に、イオは衝撃を受ける。

(評議が必要?)

キュディアの組織はトップダウンではないのだ。

多数決で決めると言っているのが、この言葉なのである。

しかし、この長はどこで評議をするのだろうか？

そう考えた時に衝撃を受けた。

このアイギスにいるのは、誰かを考えればわかる。

黒の兵団で評議をするのだ。

キュディアは 8 翼ある兵団の一の行動を、兵団の構成員の評議で決めるのだ。

意思決定機関がまったく見えなかったのは、それが意思決定機関に見えなかったからなのだ。

「そ、その」

「なんだ？」

イオは怖気づく。

「あ、あの……、その評議にはどれぐらいの時間がかかりますか？」

「うむ、一週間ぐらいだろう。総意はできるだけ早く取ろう。そこから本国に持ち帰って、本国の総意を聞く必要がある。一月は見てくれ」

震えが走るのがわかった。

それがイオが知りたかったことのすべてなのだ。

※

イオが戻って報告をすると、次王は冷たい視線でイオを見て、それから考えて、三歩歩いてイオを軽く抱きしめた。

「よくやった。きっと、イオはチビだから舐められると思ったんだ」

それは抗議をしなければならない言葉だ。

「だが、おまえは自分の評価が低すぎる。もう少し、ちゃんと仕事をしていることを誇ってもいい。おまえが謙虚すぎると、兵団で功績があったものが遠慮して誇れなくなる。それは問題だ。おまえよりも功績のあるやつが自粛したらどう思うか」

イオのノートに書かれるのは、次王の言葉よりも、抱きしめられた事実である。

それほどまでにイオは心酔しており、世界で起きていることの代いたいは、その主に褒められたかどうかなのだ。客観的に言えば、イオは腹心としての職務を放棄している。厳しく言えば、イオは中立の記述者ではないのだ。

そのイオが中立的な視点を取り戻すのに役に立ったのは、リュディアがしきりに送ってきたシドの実情に関するレポートである。簡単にいえば、政治上の指導者はいるが軍事上の指導者はおらず、政治上の指導者は国内の意見の集約に追われている。サウスの技術の再興でまとめようとしているが、ほとんどの人は信じていない。

ページを繰る度に、イオには兄貴の執着心がたどりついたアイギスの書庫の価値が、膨大なのではないかと思うようになった。それであれば、兄貴が書庫に入り浸りになっても文句が言えない。

——これは完全蒸気機関のすべてが記載されている。

そう兄貴が興奮していったのは脳裏に焼き付いているが、この完全蒸気機関というのは、兄貴の受け売りでは、考えられる限り最高のネツコウリツを達成した蒸気機関であるらしい。一体何を行っているのかわからないと思ってなにか問題があるのだろうか。

リュディアは紙を北方諸国に輸出している部族だから、諸国の知識人との交流が深い。

シドの技術者たちと商売をすれば、その人がなにをしているのかは聞くことはできる。そこでされた雑談が、このアイギスには集まってくる。

紙の独占的な商人は、その紙に乗る知識の独占的な情報収集組織になっていて、そのレポートがイオの手元にやって来る。

これはだれも想定していなかった、ボルニアの優位点だ。

イオにはシドの技術レベルがどの程度か、手に取るように分かった。

もちろんそのレポートは兄貴も読んでいたので、イオがもっともわかっている人ではなかったのではあるが、生の情報を読むのは楽しかった。貪るように読んだし、それで次王に対する進言も変わっていった。「それで、おまえはこの案には反対なのだな？ 理由はちゃんと用意していると思っているが、まずそれを聞かせよ」

息を呑む。

「まずもって、包囲軍を侮辱するべきではありません。彼らは一つの目標に向かっては、仲間です。彼らは仲間なのです。それを侮辱することになんの意味があるのでしょうか。さらに、殺傷するとは、戦力を損

失することにつながりかねません」

息を呑むのは次王の番だった。

「この敵対している相手を仲間と思えというのか！」

イオはなおも次王と対立しようとするが、アテナイスが止めた。

「イオさん、言い過ぎですよ。対立は、ほとんどなんの価値が無いんです」

アテナイスがすっと立つと、場が静まる。

「鉄鎖の次王の望みは何ですか？」

聡明な妻に見つめられて、次王は困る。

「ボルニアに公正な王権を、広めたい」

絞りだすように言うがアテナイスはうなずいて、わたしはそのあなたさまの公正さを心の底から愛しています。だから、あなたに身も心も捧げますが、それは誓っても、常に公正であると言えるのですか？ 疑うのではなく、誓いを求めているのです。

「おれが公正でない時があると？」

「あなたさまの相手が必ずしも公正でない時に、過剰反応して自分も公正でなくなる時があります」

イオは、アテナイスにしびれた。

これはどうしようもない。

次王は常に不利な条件で戦ってきたのだ。イオにしてみても、部族が滅ぼされるところから始まっている。不公正だ。不正しかなかったのだ。それに対して、公正しか許さないとはどういうことなんだろう。

ただ、イオにわかったのは、それができたら、この青年は歴史上最強の王になるであろうということだった。そのハードルを、アテナイスは自分の夫に要求しているのだ。

「わかった、面白い。アテナイス！ 夜は思う存分付き合ってもらおうぞ！ それぐらいの覚悟はあるな」

花が咲いたとは貧弱な表現だが、まばゆいばかりの笑顔が輝いて、イオの脳裏を刺した。

「はい！」

これほど幸福そうな表情があるのかと思えるほどの輝かしい笑顔で、そもそもアテナイスは選りすぐりの美人なので、話をするのが馬鹿らしいほど美しかった。

光彩の余韻が、いまでも残っているほどだ。

死神リニーが戦うのは、この化け物どもなのである。

29. 兄貴の元からリオンを戻し、次王とリオンの面談

キュディスとの貿易が始まるにあたって、イオが真っ先に考えたのは、その受け入れ体制をどうするかということだった。

次王はだいたいイオがするものだと思っているし、頼みのリュディア族は交易を司ってきた人たちを連れて来ていない。次王はイオがリュディア族のエージェントとして取図ってくれるものと思っているのだが、実際にはイオがお願いをしたい優秀な貿易関係の人たちは、リュディア族の本拠地にいる。

兄貴に相談して呼び寄せてもらえないかとも思ったが、そもそもリュディアの人々はからっきし戦はだめで、嚴重に包囲されたアイギスの封鎖を突破できるとはとても思えない。それに兄貴のいない本国というだけで大変なのに、そこからさらに優秀な人を回してもらうわけにはいけない。

しばらく立ち尽くして考えていたが、こういう時の原則は決まっている。

まず報告をして、判断してくれるかもしれない人の耳に入れておくのだ。

アイギスの書庫までくると、整然とした混乱とはこういうものかと、説明の難しい修羅場で、静かなはずの書庫に指示の大きな声が飛び交っている。

目録づくりは始まっていて、その中で書を分類し整理するために100人程度のグループに分かれて、それぞれに互いの状況を伝える伝令が行き交っている。

2000人の大部隊である。

性質は違うが、人数であれば第2軍の兵数に等しい。

その指示の声を掻き分けて、イオは兄貴のそばにまでたどり着く。

「イオ姉、どうしたの？」

「あ、」

リオンを横目に見ながら息を継ぐ。

「じ、次王さまが決断されました……。キュディスとの間に交易が始まります。そのためにキュディスの黒の兵団にリクトルさまの搜索願が出され、評議上で判断すると」

兄貴は鋭敏に反応する。

「ん……。たぶん、イオはぼくと同じことを考えていると思うけど、イオはどう思うかい？ 長年の謎が解けたと？」

「は、はい。キュディスは合議制です。虹翼の各兵団がそれぞれの行動を合議で決めています。そして各兵団の行動は兵団の長の8人による合議で決定されます。あ、いや、それぞれの兵団が取ろうと思う行動を告げて、他の7の兵団で許可すべきか決めるのです」

それは議院内閣制だった。

原始的であるが、きわめて合理的な意思決定制度。

兄貴は弾けたようにイオを抱きしめ、その赤毛を手荒いほどにぐしゃぐしゃにした。

まるでキスまでしそうなほどに熱烈な様子だったが、リオンが見ているのにイオが気付いてこほんという、慌てて離す。リオンを見ると、けらけらと笑っている。

「そういえばイオ姉は、族長の花嫁候補の筆頭だったんだってね」

ムツとするのだが、リオンは楽しんでいるのであって、悪意があるわけではない。

兄貴が赤面するということは、兄貴とリオンは親しい関係にある証拠だ。

しばらくため息をついて、兄貴はリオンを見る。

「リオン、よく働いてくれたと、とても感謝しているのだが、ぼくよりもイオのほうが大変そう。イオはきみを取り戻しに来たんだ。正直に言えば、きみを失うのはきつい。それはきみが優秀だからだ。でも、その優秀さは、イオが受けた仕事で発揮して欲しい」

リオンは直立した。

「それは大げさです。ぼくがだいたいやっているのはイオ姉に教わったことです。もちろん戻るのは嬉しいのですが、族長がイオ姉の師匠であることはよくわかりました。いつでも戻ってきたいです」

こんなに素直なやつだったかなというのは、イオの感想なのだが、イオが予測していないレベルでリオンが兄貴の凄さを肌で感じたのは、確かなようだった。

「イオ、リオンを手放すのは苦しいけど、おまえがそれにふさわしい仕事をしていることは認める。ぼくはそれしか言わないのだけど、」

いうことは分かっていた。

「やりたいことをやってから死ぬんだ、何もかも終わったら天国で会おう」

※

リオンを次王の前に連れて行くと、次王は苦笑した。

「これで全部こなせというのはめちゃくちゃだ」

それはもっともだ。それでも、リュディアが出せるのはこのふたりだけだし、残りの2000人はそれなりに重要な仕事をしている。余っている人なんていない。

「あたしはともかく、この子は優秀です」

「わかっている」

次王は、リオンを見て聞いた。

「もし、重要な同盟国であるキュディスが、他国との密約があって同盟を偽装していることが発覚したら、きみはどうするかね？」

凄まじすぎる問いでイオは絶句する。

リオンはしばらく考える。

「重要な同盟国であることに疑問を持ちます」

「教科書通りだな、悪くない。問題はどういうアクションを起こすかだ。疑問を持つことはアクションではない。おれは何をしたらいい？」

こんなことに答える必要があるのだろうか。

「超えろってことですよ」

「そうだ」

次王はそれを楽しんでいた。

それは表情を見ればわかるし、たかだか12才の子を育てようとしていた。

「キュディスに対して、安全通行料を請求します。交易ができているのは、ボルニアの覇権のお陰だとまず知らしめます。税を取るのは、覇権をよく分からせるのに役に立ちます。交易のたびにボルニアのおかげだとわかるのです」

次王は考える。

「それは弱いな」

「弱いですか？」

「ああ。リュディアの次王ならばなにを考える？」

あ、とイオは思った。

「あたしならば、アイギスを封鎖します。それでキュディスは北方の情報源から閉めだされる……」

言ってしまっただけで、アイギスの価値がまざまざと浮かび上がる。愕然とするのだが、それは書庫からも締め出されることを意味する。

「それだ。だからキュディスはボルニアを裏切れない」

次王は首を左右に、肩の筋肉を伸ばして、啞然とするリオンに言う。

「これはリュディアの入知恵だ。おれが考えたんじゃない。あいつはそこまで考えていた。イオがそれを読めたのは、もう子供心がついた頃からずっと一緒にいたからだ。おまえはまだ付き合っただけだ」

じっと見つめていたリオンがおもむろに口を開く。

「リオンです。ぼくはあなたに自分の名前を呼ばれたい、イオ姉のように。尊敬しているから認められたい。どうか、これをしろリオンと言ってください。子供なのはわかっています。できなかつたら謝ります。でもあなたの役に立ちたいんです」

次王は困ったようにイオを見るが、あれこれと口の中で言葉を作ろうとするが、こういう時に限って言葉が出てこない。

それから考えにふけて、次王は言った。

「わかった。では、この仕事をおまえひとりで、いや、イオなしでやれ、リオン」

愕然とするリオンを見て、あわててイオは言う。

「ま、待ってください、次王さま！ それはあんまりではないですか？！」

「イオ、言いたいことはわかる。おまえは責任感が強すぎるんだ。だから自分が巻き込んだリオンの世話をしてしまう。それにはいいこととわるいことがある」

次王は、リオンに真剣な眼差しを向け、いいか聞いてくれ、

「おれは、リオンのような年齢の時には、大人に頼らず狩りをしてきた。狩りというのは竜狩りだ。そのとき必ずついてきたやつがいたのだが、それが誰だかわかるか？」

リオンはしばらく考えるが、

「族長ですか？」

「そうだ。あいつは狩りをする度胸なんてない。だから見ているだけだったが、それでもいつでも一緒に狩りに出かけていった。それでなにも役に立たない自分に気づいた。しかし、あいつは頭が良かった。それでありとあらゆる書物を読み、すこしでも役に立とうとした。おれもあいつがいう話の内容を理解したくて、あいつが読んでいる本を読んだりもした」

イオにとっても次王の口から直接聞くのははじめての、幼少時代だ。

次王が書物を読みまくるのは、兄貴に置いて行かれなくなかったからなのだ。

原石同士が磨き合っただけで、エメラルドになる。

大スカイ河上流域の河砂に宝石が交じるのは、上流域で砕けた岩の中の鉱物が、流れの中でもみあって、互いを磨き合うからだと聞く。

「レトの次王は、あいつは旅がちだからたまにしか会えなかったが、それでもおまえの族長が呼び止めて、話をせがんだ。ジャングルの外の世界を知りたかったんだ。おれもそれを聞いたし、レトの次王もおれたちがみやげ話を楽しみにしているのをわかって、帰る度に会いに来てくれるようになった。ワクワクしたよ。ジャングルの外の世界なんて知らなかったから、そんなものがあるとは知らなかったんだ」

わかるか？ と次王が聞くとリオンは考えこむ。

「ともだちが大切だってことですか？」

「違うな。こいつにだったら命を預けてもいいと思う友を見つけろということだ」

言っていることはわかるが、あまりにも課しているハードルが高すぎる。現在の第2軍の中枢と同じことをしろと言っているのだ。

「次王さま！」

「イオ、おまえの気持ちはわかるが、それはリオンが大きくなるチャンスの芽を摘んでいることに気づけ。リオン、だからこれは忠告だ。イオに頼るな。この仕事はおまえに任せる。仲間はおまえが選べ。できる

だけ同年代のやつがいいな。そうでないとライバル意識は生まれえない。もうすぐするとレト族も帰ってくる。その中にも頼れる奴はいるだろう。イオ、レトの収容はおまえの仕事だ。リクトルに預けた兵はボルニア中の精鋭が集まっている。それに聞けば、育てたいやつがいるかもしれない。それと腹を割って話せ。おまえは現状有名人だ、話に乗る奴も入るだろう。もし望むなら、おれがリオンに全権を与えたと保証することしよう。不満か？」

少年はがくがくと震えていた。

「な、な、な、な」

言葉が出ない。

「なぜですか？ じゃないの？ あたしもそう思ったから」

「な、な、な、なぜですか！ なぜ、こんなに良くしてくれるんですか？！ ぼくはなにもしていないのに！」

次王は不機嫌そうな表情をする。

「イオもそうだが、リュディアはいつでもいろいろ取り違っている。リオンは立派な仕事をしたし、いまの会話でリュディアの代わりをしようとした。確かにあいつの知識狂には追いつかないかもしれないが、勝とうとしたことが重要なんだ。一度勝とうとした奴は常に勝とうとする。何度も負けるうちに、悔しさを重ねるうちに勝つ方法を必死に考え始める。そしていつか勝ち方がわかってくる。数十年かかっても、おれは待つ。それは不満か？」

「いえ……、壮大過ぎて実感がわきません……」

12才の天才軍師の出発の瞬間だった。

※

大げさに、物騒な騒ぎを持ち込んでエマが入ってくる。

「次王さま！ 騎士団が侵入者を捕らえました！ アイギスの地に土足で踏み込むなどどういう心づもりでしょう！ ここが絶対中立の地であるということをわかっていないのです。これほどの無作法を許しておいてよいのか、……、あれ？ イオ、何してるの？」

ぼかんとするのは充分だが、そもそも第2軍と反乱軍は戦っているし、その第2軍の本拠地がアイギスであることは、だれも否定出来ない。

「えっと、うーん……、説明がしづらいかな……」

「お金の算段？ このまえわたしに交易ができないと資金が出て行くばかりで辛いって言っていたじゃない」

「まあ、ちょっと違うけど、作戦会議？ たぶん……。それよりもエマは、大丈夫なの？ あたしは心配なんだ。変に騎士団長に推薦しちゃったから、責任感じてるんだよ」

エマはケラケラと笑う。

「エステバン殿は剣技さえ合格点ならば、いっさい文句を言わないんだ。だから心配の必要はないよ。イオに教わった剣技が役に立っている。感謝しているよ」

次王はたいていこういうのは放置する。

イオもエマもそれを理解しているので、なんのためらいもなく話す。

だがそれを一番気にしていたのは、リオンだった。

イオの袖を引っ張って、

(エマさまと仲がいいの？)

とささやくように聞く。

(まあね。あ、あれだよ。次王さまの言う、命を預けられるともだち)

(あのさ……、紹介してくれないかな……)

たしかに、リオンは何回もエマとは対面している。リオンは南方生まれだから浅黒い顔立ちをしているが、エマは北方の美少女とも言えないこともない。リオンがエキゾチックな魅力を感じるはわからないでもなかった。

「なに？ イオ、こそこそばなし？」

「あ、いやさ、この子が」

「リオン」

「あ、そう、リオンがエマとふたりきりで話をしたいって」

エマは聞く。

「きみはだれ？」

「リオンだって、イオ姉が言った」

しばらく気まずい時間が過ぎるが、次王が呆れたように言う。

「リオンは、リュディアの次王の後継者だと、おれは思っている。もちろん、イオにもその資格があるが、イオにはもっと重要な仕事がある。幼いからといって馬鹿にするな。おれはリオンを買っている」

「は一、うん、リオンくん。それでなに？」

リオンはもじもじするが、イオからみても絶妙な口実を生み出す。

「次王さまに、イオ姉の仕事を肩代わりしろと言われていて、それで、エストの同じような年齢の子に仕事をできる子がいれば紹介して欲しいんです……。手伝ってくれる子がいると」

エマはわかっているのかわかっていないのか、しばらく考えるが、

「あ、じゃあ、すぐに紹介するよ。仕事しろってことだよな？」

「いえ、ぜひエマさまがその子たちを、どう思っているかをとてもたくさん聞きたくて」

「え？ なんで？」

非常に難しい質問である。

30. 騎士団での選抜と、パントの参戦

エマが案内したのは騎士団の詰め所で、エステバンの規律が行き届いていることがありありとわかる緊張感に満ちていた。そこに足を踏み入れるリオンは緊張していて、イオが心配してしまうほどに取り乱していた。

パンパンとエマが手を叩くと、その誰もがエマに視線を向け、赤服の中で直立した。それから現れた次王の姿に向く。

エマは、それがこの親友の取り柄なのだろうが、なんでもないように軽く言う。

「あ、ごめん、ごめん、たいしたことじゃないよ？ 次王さまのお考えがあるんだ。わたしたち近衛兵団の使命はアテナイスさまの護衛だ。だけれどもそれを果たすために、次王さまの要求を満たす必要が出てきた。現状、アイギスは包囲されている。これを崩すお考えがあるんだ」

ちらちらと見られるのを我慢して、次王はアイギスの近衛兵団の面々の表情を眺めた。

それからイオに、エマの武装とおまへの武装の差を見せてやれ、という。

イオとエマはぱちくりと戸惑い合うが、

「まず剣だ。ふたりとも、剣を抜け」

仕方なく抜くが、一見ただけではその違いはわからない。

「イオの持っている剣は鋼鉄製だ、鍛えぬいた鉄だ。それに対してエマの剣は銑鉄製だ、ただ鑄型に流しただけの剣、まったく鍛えていない。ぶつけてみる、イオ、遠慮はいらん、エマと剣をぶつけてみる」

抜いたままの剣を構えて、エマに受け流しできるよね？ と聞く。神妙に頷くのに、おもいきり斬りかかった。教えた通りの見事な受け流しに態勢を崩すが、赤服たちがどよめいたのはエマの剣で散った火花のせいである。

「エマ、見事だ。だが、その剣を見ろ。刃こぼれしている」

赤服たちはぞろぞろと寄ってきて、その傷ついた剣を目の当たりにする。それから、イオから鋼鉄製の剣を借り受けて、まったく傷ついていないのに驚嘆する。

「おれは、近衛兵団すべてに鋼鉄製の剣を配りたい。アイギスのために命をかけるものに銑鉄の剣は持たせられない。これはいのちを守る帷子も同じだ。シドの軽量帷子を調達しよう。約束する、おれは世界で一番お前たちに死んでほしくない」

たぶん、この言葉はほんとう過ぎて誰にもわからない。

この人は、自分の責任で誰かが傷つく度に、耐え難いほどに心を病むのだ。

しかし、それに気付けるだけ注意深い、関係が深い人間は、この王にはそれほど多くなかった。その人々はボルニアの中枢を固めていて、絶対的な忠誠心で支え続けようとするのだが、誰もが側近中の側近に挙げるイオでさえ、あらためてそうなのか問われると、まさかと答えるのである。

だから、まだ話をろくにしたこともない近衛兵団にそれを求めるのは酷だ。

北方最強の名をほしいままにし、史上最強の王と称される鉄鎖の次王の姿は、びみょうなバランスの上にある。ふしぎなカリスマ性を、ガラス細工のような繊細さだと考えるほどの細やかさはイオにはない。

もしかすると、その理解をできているたった一人は、いるのかもしれない。

その人物は、湖上の中立都市を道連れに、たぶん妻となった。

エマは武装の違いを見せつけられて、気をとりなしたように困る。

まず、直属の上司である、エステバンやレイに報告しなければならないことである。しかし主力兵団の武装の刷新となると、兵団の責任者のレベルで話をつける問題ではなく、国家の責任者同士がする外交上の問題だ。

実際に次王が言っていることは途方もないはなしだし、ほんとうはアテナイスも臨席していないと決め

られないたぐいの内容だ。莫大な額の決済になる。ボルニアには3人の王にそれぞれその程度の額を決めてしまうだけの権限がある。

しかし、エストはどうなんだろう？ たぶんエストを構成する、フィヨルドの交易都市ひとつでは扱いきれない額の話になる。太守のような人間もいるだろうし、そのひとりひとりの合意を取っていたらとんでもない時間がかかる。

そういうときにエストがふしぎなのは、アイギスに全権を一任する風習があることにある。ようはアテナイス様のご意向に従うというもので、アテナイスは軍事には口を挟まないの、主力兵団の双方に話がつけられるのは、エマしかいなくなるという奇妙な状況になる。

(なんでこんな紙風船に権限が集まっているのだろう？)

そして、そこには、ボルニアの中枢と親友であるという事も加わってくる。

繰り返すようであるが、イオは自分のことを平気で棚に上げるし、のちにレトの次王がわざわざイオに干渉しようと求婚するのは、イオに異様なほどにボルニアの権限が集まっているからなのである。

わかっているのか、わかっていないのか、イオはしかたなく言う。

「それでさ、調達しなければいけないんだ、エマ。あたしたちは戦争中だし、アイギスは包囲されてる、そうでしょ？」

「あ？ うん？ え？ ああ？ うん、それで、何の話だっけ？」

少し考えて、持ち上げてみることにする。

「次王さまは、この調達をリオンに一任するといったのは聞いたよね？」

ぼかんとする。

「こ、子供だよな？」

「この年齢のボルニア人は一人前だよ！ ボルニアはエストじゃないんだよ。……、リオン、次王さまがなんて言ったかを教えてやりなよ！」

イオがけしかけると、リオンはもじもじと戸惑って口を開かないのにイライラとする。

「リオン！ エマは、おまえはガキだから興味が無いと言ってるんだ！」

これは効いた。度胸というのは、受け継がれる。それがどんなに身勝手な、個人的な恋愛感情から生まれていても、いっさいの文句は言わないと、決め込むことにする。

わかっているよ、ぼくだってリュディア族の男だ。

ごくりとつばを飲み込んで、所在なさげにする小柄な少女の氷河のような瞳を、栗色の眼差しで覗き込む。

たぶんリオンはその色素の薄さにやられている。

眼の色なんて、単なる色でしかないのに。

(この綿帽子のどこがいいのだろう？ リオンのほうがよほど一人前なのに)

「エマ。さっきも言ったとおり、近衛兵から人を紹介して欲しい。次王さまは仲間を見つけるといったんだ。おれはおまえの歳には、いまの友達と一緒にいたって。だから、おまえも仲間を見つける歳だと。エマはイオ姉に出会ったんだよね？ そう聞いたよ？」

エマは困ったようにイオに、そうなの？ と聞くのだが、イオが嫌なの？ と厭味ったらしく聞くと、うんうんと頷き、そうだねえ、リオンが言うのは正しいと納得する。

この盟友はどこまで本気なのかさっぱりわからないのが玉に瑕だが、心配になるほどの無邪気さはイオがエマを好いている理由の大半だった。

次王はだいたい辛抱強い。

何時間でも話がつくまで待とうとするし、無駄話なんてものはないのだとたぶん思っている。それで、ひ

たすらに理解しようとする。揚げ足なんて、イカの足の炒めモノだと思っている。唐辛子を掛けて食べるもので、旨いか不味いかしか興味が無い。そもそも大量のスパイスをかけるとイカの味などなくなるのだが。黙っている次王が顕著に怖いのは、なにげに細かいことを覚えていることにある。

聞いていないふりをして、細かな方針を立てている。口を開き、話し始めると、明確なビジョンに圧倒されて、いったい自分はなにをしていたのだろうと自己嫌悪に陥る。

それでも、この王は最後まで自分のビジョンを話さない。

それは、あたしたちの意見を聞きたいのだ、たぶん、たぶん、たぶん、たぶん、でもそうじゃなかったら、あたしはなんのためにいるの？ リオンは肩を掴みそうになる。

「エマ、お金がかかるんだ。鋼鉄の剣だよ。貿易をしなければいけないのはわかる？ アリ、アリア、えーと」

「アリエス、かな？」

助け舟にリオンは頷く。

「うん。アリエスには船はあるよね。近衛兵団もアリエスに働きかけて欲しいよ。船を遊ばせていても仕方ないよね？ アイギスには荷が来るし、その運ぶ先はこれまでどおりキュディス。アイギスから紙を運んで、キュディスから毛皮を運ぶんだ」

ぱちくりとするエマに、

「問題がありましたか？」

「あ、いやさ、きみさ、」

「リオン」

「そうそう、リオン、きみ、ずいぶんイオに似てるね。身体の隅々まで、イオそっくりだよ。イオに一挙手一投足教わったみたいで……」

「りゅ、リュディア族の男は、族長から、これぐらいのことは教わります！」

その必死の抵抗はかわいいのであるが、問題はエマがどう思うかであって、色恋沙汰に疎いイオはどうしていいのか戸惑ってしまう。

「あ、あのさ、やりやすいってだけで……、イオとはずっとやってたから」

「リオンは、イオの弟なんだ。家族だ、だから似る」

そっけなく言う次王に、イオは感心してしまう。

エマはにやにやと笑う。

「じゃあ、もらっちゃおうかな？ リオンくん、わたしと仕事する？ イオには悪いけど、この子欲しくなっちゃった。わたしと一緒にやろうよ！」

ただひたすらに怖くなる。

こんなことが出来るのはアテナイスだけだと思っていた。

しかしよく考えて見れば、イオは見事に次王の腹心中の腹心になっているのだし、新生ボルニアの3人の王も、本人は別としても鉄鎖の次王を中心にまとまっている。

そっけなく言う。

「貸すだけだ。リオンはボルニアに無くてはならない男だ。イオを手伝わなければならない時が必ずやってくる。だけれども今はエマ、おまえの仕事のほうが重要だ。だから、せっかく貸すのだから、無駄に扱ったらゆるさない。リオン、出来るな？」

次王が言っているのは、リオンが失敗したらエマに被害が及ぶということ。

ブルリと震えるのは、責任がわかっている証拠だ。

「失敗できないねえ？ 怖いのか？」

「武者震いです……。イオ姉だって、仕事があるでしょ？ 怖いと思ったことはないの？ なにか酷いことをしたら、誰かが傷つくって考えてさ」

しばらく考えてみたが、よくよく考えてみるとイオの責任は、すべて鉄鎖の次王が負っている。それを気楽に考えたこともないし、むしろ意外だったのであるが、あらゆる方面を駆使して、いっさいイオに責任が生まれないように用意周到に網の目が張り巡らされている。

(なんだ、これ……?)

たぶんと考えるのはおそろしいことなのだが、ボルニアで起こることのすべては鉄鎖の次王の責任で起こるように作り上げられている。

「リオン、あたしはないよ。だって、いつもなんとかするのはあたしじゃないから。兄貴も、次王さまも、なにかあったら尻拭いをしてくれる。そうじゃないよ！ それに甘えちゃいけないんだ！ でもさ、次王さまが任せるといったんだ。だったら、大げさに失敗しろということだよ！ あたしは失敗しかしてないよ？ それをなんて言えばいいの？」

アテナイスは、度量だという。

それぐらいはわかった。

リオンが神妙に聞いているのは、イオが次王の最上の側近と認められているし、一緒に仕事をするうちに、イオが自分の功績をまったくわかっていないことを理解したからだ。

※

沈黙を破ったのは、ひとりの赤服だった。

「副官どの、これは立候補してもいいのかい？ どうも面白そうだ」

全身をフェルトの衣装に身を包んでいるので、体格はわかりにくかったが、背丈は大きいし、たぶん剣を抜けば迫力があるだろう。リオンは、あ、とつぶやくが、その前まで、すたすたと歩き、フードの奥から睨みつける。

エマは慌てて紹介する。

「リオン、パントは一番隊の筆頭だよ」

近衛兵の組織体系などわかるはずもないのだが、多分一番腕の立つやつなんだろうなあと、少年は思う。その迫力に押されて怖気づくのだが、思い切って言う。

「きみ、出身はどこだい？」

これは不意打ちだった。しかし、その青年は首を傾げながら簡単に答える。

「アイギスだ。なんか問題があるか？」

あとから知るのだが、アイギス出身の近衛兵はエリートである。一番隊の筆頭であれば当然にアイギス出身なのである。幼少から剣を学び、みっちり訓練を受けている。まず間違いなく強いのである。リオンは思い切って言う。

「アリエスの出身者がほしい。剣が弱くてもいい。剣が強いのはきみで充分だ。きみは間違いなく強いんだらう？ そうさっき聞いた。ぼくは強い人がほしいわけではない。ほしいのはアリエスと話ができる人だ」

青年はしばらく考えるが、困ったようにいう。

「あ、うん、あー、そう、ひとりだけいるけどな……。おまえ、副官どのが好きなんだろ？ あれのどこがいいのかわからないのだけど」

真っ赤になるが、多分ほとんどの人が信じられないと思うのだが、これは鉄鎖の次王の眼前で行われた会話である。慌ててイオは言う。

「それはあんまり関係ないよね。でもきみはいいやつだ、意見が合う。あたしもエマはどうかと思う。でも、きみはそのアリエスの女の子が好きなんだよね？ 公私混同はどうかと思うけど、リオンはエマが好

きで、パントはアリエスの子が好き。だったら、全然問題無いじゃん」

困り切ったのはエマで、リオンのひそひそとそうなの、と聞く。

(迷惑ですか……?)

(告白ぐらい、自主的にして欲しかったかなあ……)

それから割り切るのがエマのすごいところだ。

(ボルニア料理は禁止だからね、ちゃんとわたしも食べられる料理でもてなしてほしい。それで話を聞くのは、一応仕事上は、普通かな)

たぶんエマはわかっていないようで、わかっている。

恋人とは思わないが、頻繁に会う人として適切と思っているのだ。

次王が一息入れる。

「返してもらう時はくるのは理解しているな？ イオの仕事にはリオンが必要な場面がくる。それまでは貸すが、それよりもリオンの重責を手伝ってやってほしい。アイギスがする仕事はおそろしく重要だ。あとは全部リオンとエマに任す」

イオはしばらく黙っていたが、だれも気づかないので、口添えする。

「アリエスで、毛皮をコートにしてもいいんだよ？ そうすればアリエス商人は船賃だけでなく、加工代を儲けられる。エマ、ちゃんとしなよ。お姉さんなんだから」

リオンは上気した頬のあかさを見せてイオを見上げる。

「あたしがいないとダメだなんて言うんじゃないよ？ リオンは一人前の男だと次王さまも言っているんだよ。リオンを頼っている人がたくさんいるんだよ？」

「姉ちゃん、イオ姉。姉貴って言っちゃダメ？ ぼく、兄弟がいないんだ。イオ姉がはじめての姉貴だった。もっと一緒にいたかった。こんど、辛い料理を食べに来てもいい？ 翼竜の腸の唐辛子漬けなんてリュディアでしか食べれないと思うから。ひりひりする料理が食べたくなるよ」

「エマに嫌われるよ」

背中を叩くと、姉弟だったとしか思えなくなった。

31. シャーロットとアテナイスの交渉

可憐な女の子というのは、内気というよりも守らなければ消えてしまうような、儂さを纏っている。アイギスの商港についた少女をパントがまず気遣ったのは、その少女が父を失ったばかりだったからだったし、無骨な普段からは想像もつかないほどに繊細に、波に揺れる渡し板を降りてくる少女の手を取り、心配そうに表情を伺った。

「久しぶりだね、シャーロット。アテナイスさまに会うかい？」

小さく頷くのを手を引き、それからパントはエマを見た。

エマが頷くと安心したようで、ゆっくりと古城に向かって行く。

「イオ、イオ。あの子は大変なんだ。だからちょっと城に伝令を送って欲しい。次王さまはイオの伝令しか信じないし、」

「なに？　なんかあるの？」

イオがぼかんとすると、エマは苛立たしように迷って小声で言った。

「あの子はアリエスの太守の地位にあるんだ、意味わかる？」

いや、あんな小さな子が？　なんで？

「父親が元太守だったからだよ、そしてその太守は」

「そ、そんなのを呼んだの？！　このアイギスに？！　だってそれって」

親の敵ってことじゃない！　言うまでもなくこれまでアリエスを治めていたのは海竜の貴公子で、それは次王に殺されたばかりだ。その娘が、アイギスにくるなんて！　でも確かにアリエスを治められるのはあの子しかいない。それは確かに間違いないのであるが、いくらなんでも、である。

「幸いあの子はアテナイスさまを信奉している。むしろ父親の所業を疑問視していた。だから、アテナイスさまと話すのは問題ない、だけれどもその場に次王さまがいたらさ、」

イオは無言でうなづく。

「それは、あんまりだよな……」

あわててペンを取り、さらさらと書き出すと、エマがそれを覗き込む。

「なに？　なんて書くの？」

「シャーロットは、海竜の貴公子の娘だから、目の前に立つな！」

「わ、わかりやすいね……」

「あの人、回りくどいこと嫌いだから」

「イオも大変だねえ」

その仕事を出したのは誰だと言いたくはなるのだが、紙風船の美点は、なんにも考えずにふわふわ浮いているだけなことが、気が楽というか、ふしぎだった。これでも一応、エストの騎士団と近衛兵団の武装の権限を握っているはずだ。

翼竜を飛ばすと、肩の荷が下りる。

あとは見守るだけ。

「行くんでしょ？　エマ、一応アテナイスさまを守るのが兵団の任務だし」

「あ、そうだった。そうか、でもさ、イオも来てくれない？　わたし、シャーロットがなにか問題を起こしたら治められる自信がないよ。イオのほうかそういうの慣れてるし」

わかっているのか、わかっていないのか、さらっと本質を言う。

どのみち、ボルニアサイドを調整できるのはイオしかいないのだ。

「お茶を用意しておいたほうがいいかな、アテナイスさまは、温かいお茶を使って間を作るのがうまいんだよ。城まで間に合う？」

エマは慌てて指示書を書いて、最大戦速で飛ばす。

「なんか、似たことばかりしてるね、わたしたち」

それが任務だろと思うのは、イオが官僚的なリュディア族の出身だからだ。

エマのいい加減さに頭を抱えそうになる。

これは頼ってもいいのだろうか？

※

古城への石垣沿いの斜路を走るのはだいぶ慣れた。

風の強さも、行き交う荷を避けることも、半分ぐらいで息が切れるのも、北国で汗だくになるのも、門までたどり着くと祝福のお茶が待っていることも、慣れた。

「パントに追いつかなかったねえ」

あくまで近衛兵団を問題にするのはプライドなのだろう。

城の門番はイオとエマのふたりをおかしなふたりぐらいに捉えていて、なにかあるとくっくと楽しそうに笑みを浮かべる。もちろんふたりはそのやり取りを面白がられているとは思っていないのであるが、このふたりが来ても誰も緊張しないという、ふしぎな現象になっている。

だいたい赤毛とプラチナブロンドというだけでおそろしく目立つ。

南方出身のイオと、北方出身のエマ。

これが仲良くというか、くだらないことでもめているのは、気がはれるのである。

「お茶呑んだら行くよ、エマ。急がなくちゃ」

「えー、まだ飲み終わってないよ。なんでイオは寒くないの？ わたしは、もうぶるぶるだよ。火にあたりたいな」

「何いってんの。いまこの時にアテナイスさまの部屋で凶事が起こっていたらどうするの？ キミ、近衛兵団の副団長なんでしょ？」

しびしびという様子でエマは茶碗を従事に返し、古城のアテナイスの間に向かう。

「イオは口うるさいよな。こんな日はなんにも起こらないんだよ。だいたい警戒している日ほどなにも起きない。油断していると、何もかもが起こる。そうじゃない？」

正直に言うとイオには経験がない。

しかし、次王に手首を掴まれた最悪にして、最上の日を思い出してみると、これはよかったのではないかと思えるのだ。イオは暗殺者として老王を狙っていたときに、それを防ごうとする次王の気配をずっと感じられなかった。最悪の失敗であり、次王の幕僚に採用された最高の日。

「エマの言う通りにする」

「素直だね？」

「あたしだって、少しは学ぶよ」

エマはご機嫌で、鼻歌を歌いながら階段を登っていく。

それは危ないんじゃないかと思うほどで、アテナイスの部屋にたどり着くと、衛兵に遅れたけれども護衛に入るよと気軽に言う。赤服の効果はやはり絶大というかそもそもエマなので、紙風船はissippiの疑いを持たれない。

「アテナイスさま！ ちょっと遅れましたが、護衛に来ました！」

会談中の場に土足で踏み込んでいく。

アリエスの姫君はびくりと怯えたが、シャーロット、わたしだよエマ、と言うと、驚きながらも、その顔形を確かめて、ああ、エマだ、ごめんねと謝る。

案外この紙風船は信望が厚いのだ。

「パントはアリエスの民をどう栄えさせようと考えているよ。パントは男気のある奴だ。夫にするには一番だと思っけどなあ」

すさまじいところまで突っ込む。

たぶん、自分の関係ない色恋沙汰はほとんど興味ないのだろう。

それでもこのエマは、周囲に対して好意的で友好的なのだ。

アテナイスはたぶんだいぶ慣れていて、エマに柔らかく頷く。

ちらりと見ると当たり前のように、パントも臨席している。それでもエマの暴言に動じないのは思いのほか、大人なのかもしれない。よくこんな紙風船についていくものだと思うのだが、それは後に、エマが信望を集めている理由を知って理解するのだ。

邪気がないのだ。

正しく生きようとしているわけではなく、天性の無邪気なのである。

「船は出してくれますね？ アリエスの商船団は現在空いているはずですよ。敵地に向かえというわけではありません。キュディスとアリエスはずっと交易で結ばれていたと思っています。それに、これは重荷かも知れませんが、毛皮を加工する仕事がアリエスにもたらされるはずですよ」

これは次王の、というか兄貴の、というかイオの受け売りだった。それでも、シャーロットは頷き、心もとなさそうに、視線を泳がせる。いきなり継がされた太守の地位である。イオは助け舟を出そうとするが、ここはアテナイスの寝室だ。

「パントを頼りなさい。近衛兵団でも腕のたつ、立派な騎士です。あなたのナイトとして、きっと仕えてくれるはずですよ。そうですね、パント？ シャーロットに従うのは不満ですか？」

「め、め、め、め、めっそうもない！」

野太い声だが、声にまで責任を持ってというのはめちゃくちゃだ。

相変わらずアテナイスの政断にはため息をつくしか無いのだが、天性の外交官に心酔しているシャーロットには、パントが自分が尊敬する姫君から贈られた宝物のようにはしか見えないのだ。

シャーロットは、パントの側まで歩き、その手を握り、おどおどといった。

「ふつつかものですが、どうぞよろしくおねがいします……」

それはプロポーズにしか聞こえなかった。

32. エマとイオの、アリエス船団の受け入れ準備

「あいつってさあ、信用できるの？」

次王に付き従っての散策中、イオはこっそりとエマに聞いてみる。リオンはパントに紹介されながらのリクルート活動に忙しく、近衛兵団を縦横に歩き回っていた。

(あいつ、子供だって馬鹿にされるだろうなあ)

そうすると首を持ち上げてくるのが、親心ならぬ姉心で、イオでさえそれは大変だろうなと思うのだ。正直エマの紹介があったからといって、自分の友だちを探せるとは思えないのだ。

「なに、だれ？ リオンを紹介したのはイオじゃん」

「ちがうちがう、パントの方。あたし、近衛兵団ってレイとエマしか知らないし、エマって一応、兵団の副官なのだよな？」

エマはうげーとあからさまに嫌そうな顔をして、がっくしと肩を落とす。

「名前が偉そうなだけだよ。兵団の序列は剣技の腕で決まる。わたしは他になにもできないから雑用をしているだけで、たまたまそれに副官って名前が付いているだけ。そりゃあ、レイと交渉するには役に立つかもしれないよ？ でも、それだけ」

パントがついていれば、兵団中は信用するよ。あいつは近衛兵団でもかなり上位の使い手だからね。そのパントがリオンにおそろしく協力的になったのは、シャーロットのせいだ。色恋沙汰とはふしぎなものである。

イオは、どれほどこの親友を頼りにしているかを言いたくて仕方なかった。

エマは剣技で劣ることにおそろしいほどのコンプレックスを抱いていて、それはリュディアではいっさいの価値が認められないものだという事を言いたくて仕方なかった。

「イオ、エマ！ ここは整理がついた！ 次に行くぞ！」

次王が無造作に書類の束を投げる。

見ると、アリエスの船団をアイギスの船着場で受け入れるのに必要な物資と人材がリストアップされていて、呆れるほど細かなところまで詳細が詰まっている。リュディア出身と言っていいイオからみても見事な官僚的な書面で、精査が必要なのだろうかと思えるほど、隅々まで配慮がされている。

アリエスの大船団をアイギスで受け入れるには、それなりの準備が必要で、大体は実働部隊の調達と、受け入れる時の手続きの整備になるのが、船着場で活発に人が行き来している様子は、対岸の連合軍からも見えるはずだった。イオが恐れおののくのは、そのコストである。

この王はほんとうによく働く。

まるで、すべてに納得しないと我慢できないというように。書類を読んで、短く指示を飛ばし、実際に行われていることを確認するまで信じない。そうになると、イオたちも次王に負けられなくなる。そもそもこの仕事をしなければならないのはイオなのだ。

本当に優秀な王は簡単に部下たちのプライドに火を灯す。

おそらく三人の次王は、対等な幼なじみという立場を守りながら、互いに競い合うように刺激を与え合っている。たとえばヴァンダルの次王はリュディアの次王に置いて行かれないように、おそろしいほどの本を読み始めた。自分がやるべきことではないなどとは絶対に考えない。

レトの次王は見えていないので分からないのだが、おそらく自分は商売だけやっていたらいいなどとは思っていない。もし軍事をヴァンダル族に任せるのであれば、自分たちの隊商の護衛を頼むだろうし、そうっていないということは、自前の護衛を持っているということになる。ジャングルを横断する実戦豊富な、騎竜兵をレトは持っている。

互いの部族の特殊性は尊重する。

完全な分業をしないのは、三人の次王のライバル意識もあるだろうけど、専門化してしまうと意見を言い合えなくなってしまう。磨き合ってこそ輝きが生まれるものなのだと、ボルニアの故事にはある。

イオは、この文化の恩恵を存分に享受している人物だった。

消滅させられた部族など、誰も顧みない。それでもイオは物怖じせずに鉄鎖の次王に食って掛かり、嘘つきだ、薄情者だと罵倒し続ける。これを受け入れる次王の懐の深さもあるのだが、そもそもイオの立場は、次王が腹心と認めている、ということ以外には支えはないのだ。

それでも、鉄鎖の次王はイオを対等のカナリアとして重宝している。

これがきわめて奇妙で、だいたい次王がイオを重用する理由は、自分のマイナス面を伝えてくれるという部分にだいたい集約している。考えに穴があったらうるさい。重箱の隅というのはあるのだけど、次王とイオの立場の差を見れば、その隅は見逃そうといえ、イオは頷くしかない。

炭鉱のカナリアなのだ。

ピーチクパーチクさわぐことが仕事なのだ。

おそろしく冷たい見方だけれども、なぜこれが機能しているのかと無機質的に考えればそうなる。

「それでさあ、イオはなんで、パントをそんなに気にするの？」

不意をつかれて、ことばに困る。

「だってさ、なんというんだろ、あの子、アテナイスさまと一緒にじゃない？ シャーロット。かわいそうだよ。あたしだって、アリエス戦には参加していたし、目の前で、海竜の貴公子が、えーと、その、なんというのかな、あー、えーと」

困っているとエマは気付いたように言う。

「殺される所を見た」

「ううん、違う。無力化される所を見た、それどころか手伝ったんだよ！」

当たり前の話なのだが、この会話は、張本人である鉄鎖の次王には筒抜けである。

それでもいっさいなにも言わないのが、この王の凄さなのだが、それはだいぶ慣れたというか、まったく気づいていなかった。

「それを、申し訳なく思ってるの？ シャーロットはそもそも父親の方針に反対だったんだよ。アテナイスさまに逆らうとか考えられないと。あの子はアテナイスさまの信奉者だから。その信仰がどこから生まれたかはわからないよ？ でも、あの子のアテナイスさまに対する、絶対的な忠誠を誓っていた。それは、アテナイスさまがする外交でこの北方の平和が守られていると思っていたから。ボルニアの妻になることでどうなるかはわからないけれども」

正直言うと、ボルニアはエストに、王位継承権争いという私戦を持ち込んでいる。

これはエストからするとたいへんな迷惑だ。

それでもエストがこの戦いを飲まなければならないのは、アテナイスが鉄鎖の次王と、王位にあるものではないものと婚姻関係を結んでしまったから。鉄鎖の次王が王位継承戦争に勝てる確証はない。勝たないと困るのだ。

アテナイスの慧眼に頼るしか無いのが、エストだ。

脈々と継がれてきた千年のアテナイスの系譜の最先端にいるのが、野ばらの姫。

たぶんはじめて名付けられた、アテナイス。

華奢な姿にその重責を負わせるのは、苦しさしか感じないのだけれども。複雑さを理解して言えば、なぜアテナイスはその身を鉄鎖の次王に捧げたのであろう？ 色恋沙汰とは複雑である。

アテナイスは、確かに鉄鎖の次王に名付けた上に、王権さえ確保していないのに、夫とした。あまりにも理解の領域を超えているのだ。

(はじめて、アテナイスが選んだ、自由なのかもしれない)

そう考えるのは、おそろしい飛躍だと感じる。それも希望観測的な。

鉄鎖の次王は確かに魅力的な夫だ。

自分に惚れぬいている以上に、その政治的価値を正確に理解してくれる。交わす言葉も正確で、齟齬が生じ得ない。そしてなにより聡明だ。

一生話していたい。

そんな話し相手が常に側にいるのは、どれほど自分にとって嬉しいことだろう。アテナイスは孤独な存在である。

その孤独な古城をノックする次王が、ついに現れたのだ。

※

高い音の笛はエマが吹いた。

イオは見逃していたほどで、それで伝令の翼竜が降りてくる。

かたわらを見ると油断してたなという、エマのくやしいにやつき、気付かなかったのは事実なので、それを甘受する。この翼竜はどこに飛ばした竜だったかと、翼の模様から考えるのだが、しばらく考えて、自前の翼竜ではないと気付く。

「黒の兵団が、連絡をよこしました」

端的に自分が理解していることを、側にいる鉄鎖の次王に伝える。

「キュディスがこれを知っているの？ わたしたちが翼竜で連絡してるって」

「もう、ばれてるじゃん」

エマの理解力に驚いた。

「そうだね。なにが書いてあるのかな。黒の部隊からののはじめての伝令だよ」

その書状を開けるには勇気がいった。それはこの書状が全部を変える気がしたからだ。

一一リクトルの位置が把握できた。今後、望むならば、書簡のやり取りを請け負おう。

おそろしく簡素な書面である。

イオはそれに震えてしまい、しばらくのあいだあまりの凄さに、震えが止まらなかった。

次王の側近が、味方のあまりの凄さに数日間、行動不能になったのである。

もちろん書簡は届けたのであるが、イオがあてられて動けないとなると、次王は不自由さを感じる。

一応護衛はしているのだけれども、とぼとぼとついていくのがやっとなる。

イオはたぶん、このボルニアの諜報部門の全責任を負っている気持ちになっていた。しかし、圧倒的な精鋭部隊が次王には付いていることに気付いて、ショックを受けているのだ。そもそもその交渉をしたのはイオだ。だからそれはイオの功績なのだが、とつぜん自分の仕事を失ってしまった気持ちなるのはわかりやすい。

次王は朗報に高揚しながらも、ちらちらとイオを見て、エマに言う。

「近衛兵団と騎士団に伝えてきてくれ。一戦ある。出陣するのはボルニア兵だが、守るにも準備が必要だ」

頷く姿にも風格が漂い始めたエマだが、走って行くと、これでだいたいエスト方面は大丈夫だろうと思うふしぎさがあった。

「イオ」

「は、はい？」

見下ろす視線にただならないものを感じた。

「風呂に入りたい。だいぶ長い間入っていなかったようだ。アイギスには身体を清める施設がある。大スカイで泳ぐようには行かないが、温かいと聞く」

イオは知らないがそれは温泉であり、アイギスの市民は誰もが甘受する公共浴場になっている。もちろん、古城にも専用の浴場があるわけで、次王が言っているのはそれなのである。

「は、はあ」

イオがわからないのは仕方ない。次王は自分が入りたいわけではない。

とぼとぼと古城への坂道を登り、門番と話をする。

「風呂に入りたい」

「は、」

「誰か使っているか？」

「いえ」

「では、しばらく専有させてくれ。出るまで、誰も入れるな。侍従もだ」

要求は端的で具体的だった。

豪華な湯船に身を沈めて、次王は息をつく。

その中でイオは武装してその姿に背を向けている。浴室でふたりきり。広い石造りの浴室に声が響く。

「イオはどう思っているか？ このタイミングというのがとても怪しい。おれだったらこのタイミングで仕掛たい。おびき出すには絶好の材料だ」

次王は、黒の兵団からの書簡を疑っているのだ。これは罠ではないかと。

「書簡は真正なものです」

「連合軍と通じている可能性もある」

それで怖くなって、イオはありとあらゆる老王の手管を思い返してみる。こんな方法をとったことがあっただろうか。その中である事件が思い浮かび、確信に至る。

「もっと直接的な方法を取るはずです。老王が好むのは、リクトルを捕らえたから、アイギスは開城せよという内容のはずです。結論に必ず直結するやり方をします。そもそも黒の兵団の長はこのアイギスにいるではないですか。直接交渉すれば、真偽が判明します。そんな危険を犯すだけの度胸はないでしょう」

次王は、クックと笑った。

イオは一番の拾い物だよ、とお宝を褒めるように言った。

湯船から上がり、ガウンを着て、イオに身体を清めるように言う。

「しばらく、休みがなくてすまなかった。この浴室はおれが護衛するので、十分に休め。こんなものしかなくて申し訳ないのだが」

鎧を脱いで、湯に浸かると、気がだいぶ晴れた。

そもそも、次王が湯に入りたいと言い出したのはこれが目的ではないかと思うほどで、気を失うほど心地よい時間で、言葉を失った。次王からのことばはなかった。

33. リクトルの帰還への準備

「評議の結果、黒の兵団はイオ殿の提案を受けることにした」

客室に呼び出されて受けたことばは、端的にそれだった。

「ほう」

「ただし理解してほしいのだが、黒の兵団の評議はキュディアスの承諾ではない。そもそも、黒の兵団がボルニアの戦争行為の協力をする許可を得ておらず、全体の評議で許諾されないかぎり、戦争には関われない、それは理解して欲しい」

「リクトルの帰還戦には関われないと？」

「独断で、勝手に黒の兵団が判断してしまったということになってしまう」

次王はひげをいじり、なるほどと頷く。

「では、その位置を教えてください。自前で伝令を飛ばす」

それはイオが慌てる番だった。

「じ、次王さま、翼竜に言葉が通じるとでもお思いですか？ 翼竜は自分が覚えた場所に飛ぶだけなんです。キュディアスの騎竜兵は、翼竜に乗れますから、位置を指示できますが、ボルニアとエストの翼竜にはそれを教えることはできません」

「お前が乗っていけばいいんだ。小さいし軽い。翼竜に不満はないだろう」

めちゃくちゃなことを言う。

「ボルニアの翼竜は人を載せるような大型な翼竜ではありません。頭はいいのですが、キュディアスで鍛えられている翼竜とは違います」

次王の電撃戦を支えているのは、この翼竜たちの頭の良さなのである。

伝令を伝えるべき騎竜兵を覚えさせると、それを常に覚えていてどんな乱戦の中でもその伝えるべき相手を識別して、メッセージを伝える。

黒の兵団長は様子見を続けていて、それは不気味だったのだが、たぶん自分たちの知らない方法で翼竜を活用するイオたちを知りたかったのだろう。そもそもこれはリュディアの伝統的な連絡方法で、イオはそれを教わっただけなのだが、へんに面倒くさい方向になっている。

「連絡することもいけないの？」

エマのことばに、兵団長は答える。

「書簡を送るのはしよう。それはやるが、戦には参加できない。その前に評議がある。キュディアスの首都に全兵団が集まり、評議をする。虹翼のすべてが集まる。それは黒の兵団もそう。なので、この時期は小さいの兵がいなくなる」

理解するのにしばらく時間がかかった。

「兵団長だけ集まるんじゃないの？」

にやりとするのはこの兵団長の癖だが、ふしぎと嫌味は感じなかった。

「総意とはどういう意味だろう？ 兵団長の意見がおかしかったら、文句をいう権利を与えられていることじゃないか？ 虹翼の兵団はあらゆる部族から集まってきている混成部隊だ。常に兵団長が兵団のすべて者達の監視下にあることは、健全だと思うが？」

イオはあてられるというよりも、この人物が苦手だ。

いちいちもっともすぎるし、ボルニアが後進国であることを、常に突きつけられる。

キュディアスと戦ってはならないと、心の底に刻まされるのだ。

千年国であるエストと婚姻しても、お前らは二流国だと突きつけられる。

北方最強国が、キュディアスとトランであることは否定しない。

ただ、その最強国の実態を知るにつれて、なぜ最強なのかを知るにつれて、勝てるはずがないとわかってくる。誰も知らなかった、ジャングルに人が住んでるとは思われていなかったボルニアが、ひとりの王によって、世界を席卷しようとしているのに。

次王というか兄貴の南進政策は、キュディス・トランと戦わないというメッセージ以上に、ボルニアが北方大陸全体の地理をよく理解しているということを意味する。

それが意図を持って、大兵団を編成し、侵略戦争をする。

適切な地図もコンパスも持った精鋭大兵団、というのが怖いのだ。

もっとも、キュディスの七翼からしてみれば、難攻不落のアイギスを制圧することなど造作も無いことだろう。それよりもインパクトがあるのは、北方の緩衝地帯であるエストをボルニアが抑え、その全土から信奉されるアテナイスを妻に娶ることであつたりする。

そのアイギスが、リュディア族のというよりも、イオとリオンの二人によって見事に整然と回っていることのほうが脅威なのだ。

さらに鉄鎖の次王には、リュディアの次王の膨大な知識がある。

宰相というか、天才軍師が一番わかり易いのだが、兄貴の知識量を超える人はたぶんこの世の中には存在しない。

(これは、あたしには不相応なんじゃないかな?)

「イオ、これはお前に一任する」

(は? はい? なに言ってるんだろ? この薄情者で、嘘つきで、ろくでなしの王は、一体何が楽しくて、そう言ってるんだろ?)

「は、はい。そうであれば承ります……」

そういう以外ない。イオは気づいていないのであるが、次王は面倒なので、イオに投げたのだ。イオが解決できるとは思っていない。ただ、面倒なので振る先がイオだったのだ。

「では、あなたが出せる兵数と、その期限を個別具体的に提示してください。そこから作戦は考えます」

あたし、なに言ってるんだろ。

黒の兵団長が提示した期限はだいぶ近くて、おそらくリクトル帰還戦が開始される頃には、黒の兵団はこのアイギスからいなくなる。また、レト族とリクトルとは合流しておらず、まずそれが目指すべき第一の目標だった。

レト族の位置はリクトルにも把握しやすいレト族の中継拠点で、ざっとアイギスまで一週間ぐらいの距離。まずそこへの合流で3日、そこから一週で、10日後には帰還戦を行うことが出来る。

単騎でアイギスの大要塞から出て、合流すれば翼竜による連絡をつけられないこともないが、それは単純に次王を危険に晒すことになる。それに、リクトルを迎えるときに、要塞側からも陽動をしなければならず、この指揮官は次王以外にありえなかった。その次王が帰還側においては、非常に困るのである。

これは手に余ると思うと、素直に諦めるのはイオの美点である。

イオは要点を書類にまとめ、それを何度も点検したのちに、兄貴のところへ持っていく。

「なんだイオ、どうしたんだ? なにかあったのか?」

アイギスの書庫は相変わらず騒々しく、写本部隊が働く工場のような感じだった。

無言で書類を渡すと、兄貴はそれをざっと読み、しばらく考えたのちに、端的に言った。

「これはちょっと問題がある」

はい?

「よく考えて見るんだ。黒の兵団は道具じゃない。協力してくれているんだ。兵団の総意が評議に影響するのだから? そもそもイオが黒の兵団を指揮するなんておかしいじゃないか。イオは黒の兵団長よりも偉

いのかい？」

そんなふうに書いていたっけ、と愕然とする。書面を見るとたしかにそう書いてあって、愕然として震えが来る。

(なにさまのつもりなんだろう……)

兄貴はふっと笑う。

「こんなのをイオに押し付けるなんて、兄者もいい加減すぎるなあ。イオ、気にしなくていいよ、こんなのを押し付けた兄者のほうが悪いんだから」

この兄貴の側が自分の家だと思ってしまうのは、この優しさにある。常にリュディア族の間で、なぜ兄貴はイオを娶らないのか、という話が立ち上がるのは、外見上どう見ても、このふたりが相思相愛にしか見えないからだったりする。

イオからしてみると、兄貴は兄貴なので、その関係を壊したくないだけなのだが、外野というのはだいたい無責任なのである。

「黒の兵団はどういう協力ならしてくれるのでしょうか？」

兄貴はふっと笑う。

「それは裏返すと、イオはどういう協力をしたいか、なんだ。分かるかい？ 協力してもらうためには、こちらから協力するものを提示する。お互いの協力なければ達成できないものは何なのだろう？」

禅問答のような難しい問いに、この厳しい教師に鍛え上げられた日々が思い浮かぶ。イオは、自分はこの王に鍛え上げられてきたのだと、自分はリュディアの子なんだという認識を新たにする。

よくよく考えてみると、これはキュディスにとって迷惑でしか無い。

ボルニアが提案して飲まれた案は、兄貴が提案した南進政策しかない。しかし、リクトルの合流がどう役に立つのだろう。ボルニア内部の情勢を無視した場合である。

「リクトルさまを、副王に任じます。そう約束します」

兄貴の眼の色が変わる。

「これは、どうなるんだろうなあ、あ、イオ、悪いと言っているわけじゃないよ、あまりにもいい案すぎて、どうなるかまったくわからないんだ。そうかなるほど。キュディスの心配は鉄鎖の次王が倒れた時なのか。だけれども、同じような統率力がある後釜があると思えば、そのリスクは半分に減る。うんうん、イオ、いいところをついている」

この人にほめられるのは怖い。

それは、ここは投げてでも良さそうだと勝手に責任を負わされそうだから。

正直、兄貴は尊敬しているが、子供のあたしに投げるのはやめて欲しい。

イオは自分を過小評価しているし、それは三人の次王がその責任を投げようとしていることからわかりやすい。それでも、イオは次王たちに相談するしかなく、そこで、意見を聞かれる度にする発言で、こいつに任せようと思われるのだ。

責任と権限だけが上がっていくデス・スパイラルで、それはイオの望みではないのだ。

イオの望みは、この歴史を書くこと。

どんな方法を使っても死守したいのは、あたしがこの歴史を書くんだということなのだ。

美しい欲望ではある。

しかし、イオにとって誤算だったのは、その歴史の当事者になってしまっていることなのである。それも、かなり高位の実力者として。

34. 副王の帰還を待ちながらの、黒の兵団長との会談

イオが提示した案は、ボルニア中で賛意され、リクトル合流に対する士気がおそろしいほど高まった。まるで王の帰還を待ちわびる兵団のよう。言うまでもなく第2軍は鉄鎖の次王の軍であるが、誰もが鉄鎖の次王の無謀さが怖かったのだ。

それがいつでも、代わりに立てる人がいるというのは、安心に繋がる。

イオは兵団を勇気づけながら大要塞を触れ回る次王の後ろにつき、あらためてこの王の兵の心を掴むすべを理解したような気がした。確かに第2軍はリクトルの帰還を待ちわび始めた。しかしそれはレト族に警護されながらの帰還ではなく、むしろレト族を警護しながらの帰還なのだ。

「イオ、よくそんなところに気付いたな」

「い、い、い、いえ……、リクトルさまが守られて帰還しても意味が無いと言ったのは次王さまじゃないですか……」

次王はたしかにそんなことを言ったかもしれないとご機嫌で、士気がみなぎり始めた軍を満足気に声をかけながら歩きまわる。

包囲され、兵団中に漂っていた閉塞感の一つの目標を得て回復しつつあった。

ひととおり部族をめぐったのちに、次王はアイギスの城へと向かう。

地下通路を通して、湖底の下を抜け、古城に一番近い出口からでる。

目的はわかっていた。黒の兵団長に決定とその感触を伝えに行くのだ。長い階段のさなかに立ち止まって風に吹かれていると、遠方に船団が見えた。アリエスからの船団だと思うと心が弾む。キュディスとの貿易が始まろうとしており、アイギス側の商品はレト族が合流しないと運ぶことができない。

「次王さま」

「なんだ？」

だいぶ離されたのを駆け寄って、その側で聞いた。

「この戦、報奨金を出しましょう。リクトルさまの帰還を誰もが祝うべきです」

次王はしばらく考えたが、簡潔に切り返した。

「いくらまでなら出せる？」

「え、えーと、年給の半分ぐらいが適当かと」

次王はびっくりして振り返る。

「それは莫大な額だ。イオがそれぐらいわかっていることは知っているが、そんな金はアイギスにはないと書いていただろ、お前が」

「だから、後払いにします。レト族とアリエスを通したキュディスとの取引の収益の何割かを、年給の半分に達するまで払い続けるという契約をするのです」

これは簡単言うと、配当の上限付きの株券を配布するという意味だ。

次王はしばらく考えていたが、これはあいつに聞いたほうがいいな、と言う。あいつとはレト族の次王であることは疑う余地はない。イオはそれでまだ見ぬ経済の貴公子の姿を夢見つつ、思いのほかバランスの良いボルニアの中枢部に感嘆する。

(レトの次王ってどんな人なんだろう?)

黒の兵団長は次王を迎えて、ゆったりとした姿をした。

「その、弟君を副王に立てるといのは確かなんですね？」

「もともとそういうつもりで鍛えてきた。もし疑問があるのであれば、実戦を観戦してもらってもいい。その戦いで、不満があるならば言うて欲しい。第2軍の評判はすこぶるいい。リクトルが副王になるのは実弟だからじゃないかという声さえ聞こえないほどだ。だれもがこの作戦が成功するならば、リクトルを副

王として認めるだろう」

兵団長はしばらく考えて、

「これは副官殿の発案ですね？」

「そうだ」

「わたしは、ボルニアを見くびっていたようだ。この国は鉄鎖の次王だけの国ではない。3王が並び立つ国で、しかも、油断できない重要人物が大量にいる。こんな国に勝てる国があるのだろうか。ジャングルからとつぜん現れた国ではない」

正確な把握が一番怖いのである。

そもそもキュディスは、どのようにでもボルニアを攻められる。

「ボルニアが、キュディスにとって危険でない国にしてみましよう」

なんだこいつ、外交出来るじゃないかとは失礼な言葉なのだが、アテナイスが必要ないのではと思えるほど、戦場の外交感覚は優れていた。それで兵団長はにやりと、癖のように笑う。

「条件がある」

これは唐突だった。

「リュディアの次王に会いたい。まず彼と話したい」

戦場と化しているリュディアの工場を見せるのは、若干の抵抗がある。それは、秩序だった光景ではなく、兄貴に余裕があるとは思えないからだ。それでも、次王はそれを承諾し、古城の地階にある書庫に案内するのは、この稀代の軍師と黒の兵団長の会話が聞いたかったからかもしれない。

「兄貴！ ごめん、忙しくて！ キュディスの人が話したいって！」

大声で叫ばなければ届かない。

イオの赤髪は次王よりも目立つので、それで兄貴は仕事の手を止める。

「キュディスが、兄貴に会って話さないと、いろいろ信頼出来ないって！」

兄貴は手を止め、時間を掛けて黒の兵団長の側まで、歩いてきた。

「話はしますが、どれをお望みですか？」

「勝算について」

それはおそろしく難しい疑問のはずだったが、リュディアの次王はそれを答えきり、詳細に至るまで、あらゆる計算をしてみせる。人知を超えていると書くのは簡単で、おそろしいほど意味が無い。

「実際に兄者とリクトルがどのような作戦を取るかによりますが、奇襲戦法になることは間違いありません。こちらは2千騎の騎竜兵を一点に集中できるのに加え、わずか130騎と数百騎とはいえ背後に後詰を用意しています。それに誰もがリクトル帰還に対して士気が上がっている。しかも今聞いたところによれば、報奨金が出るらしいじゃないですか」

「その間、キュディスの助けが一切ないことはさっき言ったな」

「むしろ頼り切るほうが失礼です。この同盟はお互いを利するものでなければなりません。考えたのはイオですが、リクトルを鉄鎖の次王のまさかの時のために用意しておくことは、なかなかの考えです。正直、聞いた時にあまりにも良い案すぎでどう言ってもいいかわからなくなったほどです」

黒の兵団長はそれで事情がわかったと、軽く頷く。

イオは越権行為をしたような気がしてはらはらするのだが、兵団長は言う。

「よく育てられるものだ。ボルニアの恐ろしさは緊密な血の繋がりによる師弟関係で、よくわからない粘り濃い絆が生まれているところだ。この娘を育てたのは君なのだろう？」

「血は繋がってないんですけどね」

それで兵団長の言葉があからさまに止まる。

「イオは孤児なんです。イオの部族は老王、つまり現在の王により滅ぼされました。もともとその部族とリュディアは仲がよく、イオは小さな頃からリュディアに勉強に来ていたのです。それで、僕が読み書きからなにも手ほどきをした。孤児になってから、リュディアが保護することになり、僕が兄役となった。だけれども、イオは部族を滅ぼされた恨みが忘れられず、老王の暗殺を試みるようになっていた。それを止めて、副官に据えたのが鉄鎖の次王なのです」

すらすらと機密になっていることを平然と兄貴は話す。

聞いているのは、そんなことは知っているリュディア族だけなので遠慮がない。

「なんで、僕がイオを娶らないのかと言う話もありましたよ。でも僕はイオを妻として育てるのではなく、妹として育てたのです。その妹が貴方さまの役に立ったのであれば、少しはいいことをしたのだなと、誇りに思います」

「キュディスを交渉だけで、交渉の場に立たせた娘だぞ？ わかっているのか？」

「イオは、鉄鎖の次王のすべての情報に通じているという意味で特別ですが、もし気に入られて副官に立てば、同じことをする人材はリュディアにはいますし、育ててきたつもりです」

イオには何人もの顔が浮かび、それに頷くのだが、まさか老王を暗殺しようとしていたというただ一点の理由で選ばれていることにびっくりするのだ。

「君はいちいち信頼ができるようだ。何か疑問があれば聞きに来てもいいか？」

兄貴は次王をちらりと見るが、次王はどんな仕草もしない。

そんなことはわかってるだろう。

「ええ、もちろん。忙しい時もありますが、出来るだけ疑問を解消するようにしますよ」

「イオ君、君が一番厄介だ。いつでも新しい提案をするのは君だ。それでも、その提案はすべては、鉄鎖の次王と、リュディアの次王の承諾を得ている状況で提案してくれるかね？ いちいち、それが上まで通っているのかどうかを確認するのが面倒なのだ」

イオの身体に震えが来る。

なんでこんな権限があたしに与えられているのだろうか？

そもそも、イオはアテナイスとろくに話したこともないのだ。アテナイスは明確な意図がなく、それでいて明確に禁則事項とされるポリシーがある。絶対中立を掲げながらも、エストにはエストなりの美学がある。おそろしく面倒くさい千年国である。

「あ、あ、あ、あたしにはそんな権限はありません！」

「それは君の視点だ。だが、ボルニアの同盟国として君に言わなければならない。理解できないと協力できないのだ。まず理解をするためのあらゆる援助をして欲しい」

(あれ、同盟国といった？)

「イオ、これは命じていいのかな？ お前が窓口になるんだ。兵団長どの簡単な質問はお前が答えるんだ。もちろん、手に余ったら僕に投げてくれ。だけれども、出来るだけ少なく」

こうやって、無責任にも責任が増えていくのである。

「こういう話はアテナイスさまを通したほうがいいのではないのでしょうか？」

「野ばらの姫だ」

「あ、」

こういうところは次王は義理堅い。

恋をしているから執拗に守っているというよりは、アテナイスと称号で呼ばれることが嫌なのだという配慮から言っている。この青年の美点であり、イオもそのような配慮を何処かでされているのだろうと勘ぐってしまう丁寧さなのだ。

「野ばらの姫にはいちいち言う必要はないだろう。あれは想像以上に賢い。正直おれにも測りきれない賢さだ。リュディアの次王がいないと相手が務まる人間がない状況だ。だから、あいつにもっと相手してやれとっている」

兄貴がいないと対応できない賢さとはどんなものなのだろう。

それでいて次王はボルニア中を探しても、2番なのだ。1番と2番。それが幼なじみなのは興味深いと、イオは自分を棚に上げて思う。どう考えてもその間に割って入っているのはイオなのだが、イオはそう考えることが一切できない。

「では、こうしましょう。パーティー、いや、お祭りを要塞でするのです。口実はありません。要塞の士気を揚げましょう。攻め気を高めるのです」

「それはリクトル帰還戦を悟らせることにならないか？」

次王はもっともなことを言う。

「相手の不意を打つことと、味方の士気が高いことのどちらが有効ですか？」

「士気だ。だが余計な士気は不要だ。コントロールされた士気がいい。暴走した兵ほど手に負えないものはない」

振り返ってみると、このとき次王は適切な指摘をしていたのである。

「でも副王として迎えられるために、絶賛とともに迎えられるのが相応しいと思います」

これが余計だった。

史上最悪だとイオでさえ思う災厄が訪れるのは、これが遠い原因だった。

35. 祝宴から、連合軍が突如の開戦

要塞での祝宴は、古城の面々に手伝ってもらっただけあって、海の幸、湖の幸、山の幸に満ち溢れた質素ながらも充分なもので、特別に酒類さえ振る舞われた。

次王がそれを許したのは、息詰まりがちな籠城の、息抜きの意味もあったのだろう。

「リクトルさまは帰還なさりますな？ しかも、交易の民を携えて」

「そうなる手はずになっている」

面識のある者たちに呼び止められるたびに、そう答える。第2軍の兵が次王を知っているのは当たり前なのだが、次王が気安く会話する相手の数を、数えるほうが大変だった。たりないのは、それを迎えるのはお前たちだということばなのだが、このお祭り騒ぎに次王は口を挟むつもりはないらしい。

「イオ、あんまり大げさにしないでくれよ」

そういいながら兄貴は果汁を飲み、義理堅く次王に合わせて酒は飲まないつもりらしかった。兄貴が飲まない状況ではあたりまえであるが、次王の判断の助けにならなければならないイオも同様だ。

ただ、それは限られた者たちが背負えばいいはずで、一兵卒に至るまでこのようなお祭りで飲むなどというのはめちゃくちゃとっていい。責任があるものだけが飲まなければ、それで足りるのだ。

「はい、牡蠣が茹で上がりましたよ」

鍋が運ばれてくると、数多くの取り皿が寄ってくる。

魚醤の瓶が次々と飛び回り、柑橘類の取り皿が次に回る。

次王はそれをはたで見ている、おれも牡蠣を食いたいなあ、とつぶやく。

「次王さま、食べればいいじゃないですか！」

イオが言うと、しばらく困る。

「牡蠣を食って死んだ奴もいる。イオはおれが死んでもいいのか？」

「め、めっそうもない……。ですが……。えーと、あの」

兄貴が口を出す。

「確信はないけれども、茹でた牡蠣を食べて死んだ人は聞いたことがないよ、それに兄者だってむかしは生で食べてたじゃないか、だから」

「そんな可能性に賭ける意味があるのか？ 牡蠣を食べるためだけに？」

あまりにももっともすぎてだまってしまう。

この王はやはりストイックすぎる。

あまりにも緩みのない引き絞られた弓弦すぎて、いつか切れてしまうのではないかと心配するのは、無理もないことだった。

宴会の最高潮は、アテナイスの言葉だった。

「わたしは、この国に婚姻を認められて、幸せを手に入れました。みなさんが、ともに生きようとしてくださったことに、感謝の言葉しかありません」

アテナイスは次王をちらりと見るが、イオが見る限り、なんの合図もなかった。

「エストとボルニアは婚姻しました。それはともに生きるということです。協力関係にあるということです」

それはイオからしてみればつまらない言葉だったが、エストとボルニアの兵が相集う要塞では、これが必要なんだということはなんとなくわかった。エスト中に慕われる姫君の、あまりにも清らかな姿に、自分が薄汚い呪われた反逆者のようで、イオは辛くなる。

透明な反骨精神の結晶がイオなのだ。

そんなとき、イオはアテナイスに反対したくなる。

「野ばらの姫に祝福を！」

(次王さままで……)

それに応える歓声を、イオは悶絶するような苦痛の中で聞いた。

※

「おい、みろ！ やつら、船を用意してるぞ！」

リクトルの帰還を誓う決起集会というか、大宴会から数日後、物見の方から大きな声が上がった。声を聞いて駆け寄ったのは次王で、それに付き従ったイオは遅かった。

大要塞の塔上では、アイギスの湖岸に連合軍の船が用意されつつあるのを見て、騒ぎになっていた。

「やつら、アイギスを直接制圧するつもりだ！」

これで騒がない兵はいない。口々に騒ぎ出す兵たちをかき分けて湖岸を眺め、次王はあごひげをいじりながら、つぶやく。

「厄介だな。アイギスには近衛兵以外の兵はない。市街戦なら戦えるが、湖上で迎撃するには騎士団を運ばなければならない」

「地下通路を通れば！」

「馬鹿言うな、あれは最後までとっておく秘密だ。ただ、どうだろう。やつら、気付いたのかな。アリエスからの補給が要塞に繋がっていると考えれば、さすがに水路を抑えようとするだろう。だが、要塞から騎士団を陸路を運んだらどうだ？ あるかもと思っていた地下通路がないことになる。これは陽動だ。おれたちの反応を見て、実際どう連絡するのかを見ているんだ」

これがよどみなく出てくる。

圧倒的すぎて、助言のしようがない。

次王が即座に提案したのは、アイギスの湖面を守る騎士団を第2軍の鞍に乗せて、湖面まで運んだのちに、第2軍は奇襲攻撃をするという案だった。すぐそばに仕えていたエステバンは即座に理解し、近衛兵団が水竜を湖岸まで調達する方法を、事細かに説明し、そのためにしてほしいことを告げていた。

この次王に接するとき問題なのは、あまりにも思考速度が速すぎて、その検証がおいつかないことである。つまり、エラーチェックができないのである。そして側近の誰もがその速度に合わせて次々と話を進めていくので、追いつくのが大変なのだ。

それでもイオは自分の仕事を思い出し、信号弾はなにを詰めますか？ と聞く。

これで振り向いてくれた。

しばらく次王は考えて、3本用意しろ。緑色弾、赤色弾、青色弾。これを用意しろ。

撤退弾、王の位置を示す弾、総攻撃弾である。

3本の鉄筒を用意するのは容易である。

次王の指示は個別具体的で、つつい側にいる人たちはその具体的な指示を求める癖がついてくる。それであまり重要でない重箱の隅をつつくような内容を聞くと、端的に怒られる。それはおれが考えることではない、と。

提案をしろ、それをおれが了承する。

気付いてみると、この次王の側においてイオはおそろしいほどに鍛え上げられていた。

リュディアの兄貴もそうだ。忙しい時はいつも、書面にして持ってきてくれという。そうすると、その書面を叩き台にしてお互いの認識を擦り合わせる事が容易になるからだ。

キュディアスの黒の兵団長が恐れたのは、このボルニアなのだ。

老王の暴政のもとで絶望を感じ、自分たちの統治はもっとより良いものにしようと誓い合った3人の少年を中心とした、血よりも濃い絆のネットワークで形成される強力な軍事国家。

その姿に気づいてみると、実は老王さえも功労者なのではないかとさえ思えてくる。

(老王はあたしを殺し損ねた。それが失敗だった)

復讐心に燃える自分の姿を見るたびに、あまりにも血塗れすぎて嫌になってくるのだ。それでもこの王は、老王が間違っていたことを、きっと証明してくれる。残酷で、私利欲望にまみれ、諭しではなく死で黙らせようとする。そんな治世がいかに暴虐であったかを証明するには、公正な治世は可能なのだと証明すれば充分なはずだ。

ふと、イオは気付いた。

(でもさ、その前のボルニアって、どうなっていたんだろ？ 老王以前のボルニアって)

そう考えたたん、自分の人生の周りだけが切り取られた孤独な空間が虚空に浮いていて、全身を恐怖による震えが走った。

知らないのだ。

まるで漂流するようにボルニアは一人ぼっちだった。

未来がまったく見えなかった。

ほんの小さな領地の周りには莫大な闇が広がっていた。

イオは老王を恨む念が強いぶん、それ以外がまったく見えなくなっていた。

(あ、兄貴に聞けばいいのかな……、いや、違う)

思ったのは勉強しないとなにもわからないんだ、ということで、それよりも重要だったかもしれないのは、リクトルとレト族という後詰を確認しないままに、奇襲に出てもいいのかな、ということだった。

※

第2軍のマイナス点は、鉄鎖の次王の指示であれば無条件に従うことである。

この王の言うことは常に正しくて、異論を挟むのはよくないという空気である。

それはどう考えても次王は望んでいなくて、それは側に、どう考えても小うるさいし、とんでもないことでさえもたまに言う赤毛のチビ娘がいることでも明らかだった。正確には次王は自分の監視役としてイオを置いているのだが、その緊張関係を理解する人はほとんどいない。

それでも、第2軍の士気は高い。

次王の言うとおりに騎士団を鞍に寄せ、奇襲する気まんまんで、竜庭に名だたる騎竜兵たちが居並ぶ。次王はそれを満足気に眺め、大声で叫んだ。

「目標はアイギスの湖岸である。そこで騎士団を降ろして、それから一斉突撃する！」

歓声は抑えられた。

奇襲がばれるからである。

粛々と突撃に開かれる門の前に集まり、時間を待つ。

予定時刻などない。

次王は隊列が整ったのを見て、いけ、と言った。

それで極力静かに獣脚竜が突進し、それは地鳴を呼ぶのだが、静かなはずの作戦が始まる。要塞から湖面までは短い。その先陣をヴァンダル族が受けていれば、連合軍にとっての警告音はきわめて短い絶命の声にとどまる。

連合軍が反応する時間は与えられなかった。

薄い包囲陣が容易に破られ、次々と騎士団の騎士たちを安全なところに降ろしていく。

抜刀した騎士たちは連合軍の騎竜兵を血祭りに挙げて牽制し、湖岸に重武装の隊列を作る。鉄の要塞ができていく。近衛兵団が得意とする白兵戦術である。

甲高い笛の音がした。

それで、次第に湖面に波が立ち始め、水竜たちが次々と水面から姿を現し始めた。

「近衛兵団は手際が良いな」

そうイオは聞くが、あっという間にその声から遠ざかっていく。鉄鎖の次王が突撃を始めたからだ。目の前を見ると、慌てふためく連合軍の上陸部隊。それを蹴散らすのは、葦の原を薙ぐようだった。しかし、目の前に重厚な陣を整えた膨大な騎竜兵。

振り返ると湖上は圧勝なのだが、気付くと第2軍は湖面から離されたバーラルの野にいる。どれほど前から準備したのかわからないほど用意周到な防御陣というよりは要塞で、バーラルを見下ろす丘に堀を幾重にも掘っていた。

「これは無謀です！」

「わかってる！」

次王のいらだちはもっともで、そもそもボルニアの本軍相手に油断していたことに苛立っているのだ。

「イオ！ 緑色弾！」

「は？ 撤退ですか！？」

「言葉を繰り返すな！」

イオの美点は、それを素直にすることである。緑色弾を発すると、周囲がざわめいた。

(こんなの、責任取れないぞ)

「赤色弾！」

これは手順である。王を守れという意味だ。

それを飛ばす。

すると呼応する赤色弾があった。見間違えかと正直思った。明らかにおかしい。赤色弾に呼応する弾があるはずがない。

(はい?)

方角は、敵陣の後方。そこからボルニアの信号弾が飛ぶとは思えない地点だ。

続いて飛ぶのは、その敵陣後方からの一斉突撃を意味する青色弾三発。

敵陣の後方から一斉突撃が始まる。

イオはぼかんとしていたが、次王は素早く言う。

「青色三発！ 一斉突撃！」

なにがなんだかわからないのだが、素早く打つ。

「リクトルだ！ 副王が来た！ 全力で助けよ！ お前たちを助けようといま来たんだ！ お前たちの副王だ！」

完全な挟撃だった。こんな偶然があっただろうか。偶然なんだろうかとはいちよびつとは考えるけれども、ほぼ偶然だろうと思う。奇跡と言われるものがたぶん始まった。

そして、鉄鎖の次王は、その奇跡というやつをいっさい手放そうとしなかった。

怒号は敵陣の背後から起こった。

それで、次王は敗勢だった軍を率いて、真っ先に敵陣に突っ込んでいく。生死さえも厭わない突進に、誰もがついてくしかない。それで敗勢だった第2軍は士気を取り戻したのだし、その先にリクトルがいると信じているのは、次王ただ一人だった。

混乱した兵を挟み撃ちにするほど、効率的な戦はない。

連合軍は混乱の極みで、その間を通過するだけでいい。

たまに暇があれば殺してもいい。

「殺すな！ 絶対に殺すな！ 第2軍は大声で言う！ 仲間を殺すな！ おれたちは老王とは違う！ 殺し

て役に立つよりも、生きていて役に立つやつが欲しい！ お前たちが相手にしているのは将来の仲間だ！
絶対に殺すな！ おれはそれを絶対に許さない！」
次王は大剣さえ振るわずに、大声で連合軍を大量殺戮していった。
イオは身震いがして、世界がわからなくなった。
いったい、この王はなにをしようとしているのだろう。
たぶん大激震をもたらそうとしている。
ただ、世界は複雑で、自分たちが考える理性的な世界が実現するのは難しいと思っている。
世界がそれをちゃんとできるのには、どうしたらいいのだろう？
それは、イオが背負った十字架だった。
世界を書くとき誓った者だけが、背負う責任だった。
たかだか20を超えたぐらいの小娘が、それを一手に引き受けたのである。

36. 連合軍を説き伏せる次王に、リクトル重態の報

鉄鎖の次王が理解したのは、目の前の兵が自分の兵ではないということだった。

だから、ひたすらに武装解除を訴える。

殺すなと叫び続け、敵対する兵にさえ親しげに話しかける。

「お前は、いい太刀筋をしている。だから欲しい。お前が欲しいと言ってはいけないのか？」

斬りつけてくる相手に、無防備にさういう。

大剣を抜けば一瞬に黙らせられる相手である。鉄鎖の次王が危険ということはイオも危険ということだ。イオはもはやこの王の無謀さに慣れすぎていて、それが自分の危険だとは思えなくなっていた。

獣脚竜同士が衝突する。

激しい振動にイオは自分を見失いそうになるが、次王ははっきりといった。

「なぜ、相手を殺そうと思うのか。お前には、おれを殺した時に得られる褒章があるのか？ そうだったとしても、それよりも多い額を払うとおれが言ったらどうなる？ 裏切れとは言わない。得ではなかったことを理解すればいいのだ。おれが約束するのは莫大な未来だ」

第2軍は圧勝であったが、その勝利を妨げているのは、次王の殺すなという希望だった。おそらく声が届いていない後詰はそこまで意思統一できていない。それで、食い違う二つの挟撃に信用しかねている。

「あ、あ、あなたは、なぜ剣を抜かないですか？」

「おれが欲しいのは死体になったお前ではなく、生きているお前だからだ。ボルニアは味方同士で争ってはいけない。征服すべき国がある。第2軍も、第1軍も、第3軍も本来戦うべき敵があるんだ」

別動であったリクトルの軍はそこまでわかっていないが、第2軍の連中には共通認識になっていることなのだが、連合軍とは話をできていなかった。それをこの王は、この戦いの中で周知させようとしているのだ。

(めちゃくちゃすぎるんだ、この王は……)

戦いながらの外交交渉とかありえない。しかし、連合軍の兵に実際に話す機会はこれ以外にないのは事実。

「理解できません。本来戦うべき相手とはどこなんですか？」

「シドだ」

だいぶ長い時間を持って、それから次王は畳み掛けるように言う。

「シドはキュディアスの民を奴隷として売買している。キュディアスの民を商品として売っているんだ。第2軍はキュディアスと外交交渉をしている。頻繁に翼竜が飛んでいるのを見ているだろう。キュディアスとトランの重臣は、ボルニアの南進政策を支持している。キュディアスはシド商人たちの商売を問題視している。おれも同じだ、いつお前が奴隷になってシド商人たちに売買されるかわからない。おまえは奴隷になりたいのか？ おれはボルニアの民を守りたい。それはキュディアスもトランも同じだ」

これがおそろしいほどの政治的な問題になることが、シドの奴隷商人には愚かにもわからない。人身売買を国として看過することが、当事者でないとしても犯罪になることをわかっていないのだ。

リニーが端的に、

——滅ぼすものが現れるから滅ぼされる訳ではない、滅ぼすべきだからこそ滅ぼすものが現れるんだ！

と叫んだ内容と同一。

「いえ……。理解する時間をください」

「退却するんだ。第2軍はお前を殺さない。だれひとり殺していないだろう？ 周囲を見てくれ。いや、後詰には伝わってなかった。それは申し訳ない。いまから連絡を飛ばそう。それが遅れたことは謝る」

イオは、その凄さに震えてくる。

次王は殺したかもしれないことを謝ったのだ。

第2軍の次王傘下の統率できている誰もが、ひとりも殺していないのだ。

これは戦争なのだろうか？

だいたい、名将というのは、自軍の損害を徹底的に抑える将のことをいうのだ。

そしてこの王にとっての自軍とは、連合軍の兵も含んでいた。

※

「リクトルさま、重体！ アイギスの救援を望みます！ 繰り返します！ リクトルさま、重体！ アイギスから、一刻も早い助けを！」

連絡が血相変えて本陣にやってくる。

「イオ！」

「は、はい！」

素早く翼竜を呼び寄せ、なんと書こうかと迷う。

(重体では、どんな状況なのかわからないじゃないか！)

最大級で問題無いだろうと考えて、待機しているはずの医療班に翼竜を飛ばす。ヴァンダル族は最大の支援をすることを添えて伝える。ヴァンダル族はだいたいオートマチックで動く、言う前に動く。

飛ばすと気が楽になって、

「行きましょう」

「当たり前だ！」

次王の竜が、先導を伴って戦場を横切って行く。

リクトルが傷ついたのは、丘が切れるあたりで、よくここで生きていたと思うような、激戦地らしい地点に近かった。倒れる何体もの兵を見ながら、リクトルの腹部に深くえぐられた血を見て、イオは翼竜を飛ばす。

血が足りない。

一秒でも早くここにこい！

アイギスの医療班はきわめて優秀で、たどりつくなり、携わえていたウィスキーを傷口に口で吹きかける。リクトルは激痛に呻くが、容赦なくなんどもなんども、ウィスキーを吹きかける。

「竜で運ぶことはできません。第2軍は守ってくれますね？ 人の手で運びます」

簡潔に言うし、担架で運ぶということなのだが、次王は殊勝にも頷いた。

「消毒はつらいと思うのです。ですが、これはいのちを守るために大切なんです。つらいことをたびたびします。その痛みは大丈夫になるまで耐えてください」

すぐ側で護衛していた過去に次王直属だった騎竜兵たちが集まってくる。

「……す、すみません、お、おれたちがついていながら……」

「いや、リクトルのことは全部わかっている。足手まといを守ろうとでもしたのだろう。お前たちに落ち度はない。レト族にもない」

(あれ?)

イオは鋭敏にも精鋭たちの主語が部族名ではなくなっていることに気付く。

「ご、ご、ご……」

傷ついたリクトルから離れようとしないう少年兵が佇み、何かを言おうとするが、青ざめて震えるだけで言葉にはならなかった。鉄鎖の次王はその近くまで寄って行き、レト族のものか？ と端的に聞くと震えながらも頷いた。遠巻きにするレト族の騎竜兵たちの方を向き、この少年は鉄鎖の次王が預かる、どのみちショックで動けないだろう。

「イオ、お前に預ける。安心させてやれ、お前の仕事だ」

突然降って湧いた仕事にイオは動揺するが、次王はリオンが欲しがると、あいつの仲間にしてやれ、いや気が合うかどうかは実際会って見ないとわからんが。

もはや、次王はイオを少年を育てるスペシャリストだと思っている。

仕方なく、竜が寄せられたのを利用して、少年を自分の鞍に載せた。

触ってみると高価なぶかぶかの鎖帷子をまとった痩せぎすの少年で、もしかしたらリオンより若いのかもしれなかった。

「大丈夫？ きみのせいじゃないよ？」

ぎゅっと抱きしめると線の細い身体ががくがくと震えていて、しばらくしてイオの髪に気付いて、あ、イオなの？ あなたがイオ？

「そう、そうだから、あたしが保証する。次王さまはきみのせいだと思っていない。なんにも怖いことはないよ。リクトルさまはきみを守ろうとただけなんだ。そんなことは誰でもする。だけれども、今回したのがリクトルさまで、助けようとしたのがきみだけなんだ。だから怖くない、わかる？ 怖いことは何ひとつもない」

おそろおそろ頷く少年に聞く。

「きみ、いくつ？」

「13」

リオンより上か。そして、イオはさすがに同じ失敗を繰り返さなかった。

「きみの名前は？」

「……セスク」

「いい名前だね、セスク」

のちに、リクトルの右腕になる使い手であり、パントの弟分としてアイギスでの名声を競い合う若手2強になる少年である。その始まりは、こんなに弱々しかった。

※

止血を終えて要塞に運ばれたリクトルは、控えていた医師たちに傷口を縫われていく。その度にされる消毒に苦しそうなうめき声が響き、かたわらの次王は青ざめた表情で立ち尽くしていた。

医師たちはサウスの医学に従って、リクトルを治癒していく。足りなくなった血を輸血し、要塞にいる兵たちに血の提供を求めた。

「おれの血では駄目なのか」

「残念ながら次王さま、血の型が違います。イオさん、あなたの血は合ってます。血の提供を」

イオは寝台に横になり、言われるままに血を提供する。誰もが忙しく駆けまわっており、たった一人の副王を助けようと懸命になっていた。もしこれがエストの医師でなければ、リクトルは助からなかったかもしれない。

血相を変えてアテナイスが治療室にやってくる。

「首尾は、どうなっていますか？」

アテナイスがやってくるだけで戦場に花が咲いたようになる。

「命に別状はないでしょう。ですがけっこう深く内蔵が損傷していて、何らかの後遺症が残るかもしれません」

それに短く頷き、イオにしがみついている少年の髪をなでた。

「あなたは勇敢な子ですね。ほんとうならこの場に立つことでさえできないはずなのに、それでもあなたは自分の責任を噛み締めている」

そんなこと……、と消え入りそうな声でいうのに、言った。

「いえ、あなたは勇敢です。あなたはいい子です。自分で自分を否定してはいけません」

華やかな笑顔を向けられると、少年はぼーっと見惚れてしまう。

それで、イオに頼めますかと聞くのがアテナイスで、これを否定する方法をイオは知らない。アテナイスは次王の側に静かに付き添って、その額を抱いた。

「命は助かると聞きました」

長く、痛々しい沈黙が続く。

アテナイスはその髪を失礼に当たらないように撫で、その胸で嗚咽させた。

「……、そう、か……」

彼女は一緒に泣く。

イオには絶対にできないことだった。そもそもアテナイスほど成熟していない。若く反発するだけができるだけの魂の塊なのだ。

「君がイオでいいんだな？ 噂だけは散々に聞いている」

不意に精悍な男性に声をかけられる。

見るとよく出来た優男で、少なくとも鉄鎖の次王に心酔しているイオからしてみると、足蹴に掛けたくなるようなキザな人間に見えた。

「それがなにか？」

「おいおい、冷たいなあ。オレのこと聞いてないの？ こっちはイオの話ばかりを聞かされて、すっかり知り合いのつもりだったんだけど」

警戒するというよりは、意味がわからなくて困ったのではある。

「族長！ イオさんは知らないんです！ 族長は赤毛を見て分かった気になっているだけなんです」

セスクがそういうのに、仰天した。セスクのレト族の族長、じゃないか！

「3人目の次王……」

イオが絶句するのに、そのキザな男はためらいがち言う。

「一応3人目と認められているのか……。オレなんて、たいしたことはないんだけどさ、どうかな、イオ？ オレの妻にならないか？」

37. レトの次王と話すイオ、パントが押し付けられたセスクの相談

イオがまず反射的にしたのは拒絶だった。

いつもそうしている。

鉄鎖の次王に見初められた時も、放心状態の中に拒絶はしたし、ひたすらに孤独な自分に踏み入ってくる人はいないと決め込んでいた。だから、次王が手首を掴んだ時も犯罪者として裁かれるのだと思っただけで、実際にイオがしようとしていたことはボルニアにおいては犯罪だった。

それでも次王の話を聞いたのは、自分と同じような孤独をその青年に感じたからであって、それはその青年の身分とは関係なかった。そんなことまでは意識が向かなかった。たしかに鉄鎖の次王だと伝えられてはいたのだが、それがどんなものなのか知らなかったし、自分を捕まえに来た衛視ぐらいの意識しかなかったのだ。

正直にイオが困るのは、自分の周りの3王の誰もがイオトコであることである。

鉄鎖の次王、リュディアの次王、レトの次王。

だれもが野生の気高さを持っていて、古いボルニアなんてぶっ壊して新しい世界を作ろうとする気概がある。独立風紀の清新さがあるのだ。そして孤独であって、イオにそばに居て欲しいと思っている。

なので、レトの次王の言葉はそんなにめっちゃくちゃなことではなかった。

考えてみると贅沢な話なのだが、イオには日常茶飯事なのだ。

それで、慣れて言う。

「条件があります」

レトの次王は興味深そうにした。

「ほう？」

考えが読まれそうで怖い。

それをなんとかかいくぐり、端的にいう。

「アイギスはボルニアの包囲陣とボルニアの守備陣の対立になっています。もし、包囲側がアイギスに侵入したら、同じボルニア人なので、区別が付きません。これを区別する方法を考えてください」

レトの次王はすぐに口を開く。

「そんな簡単でいいのか？ そんなのは容易だ。そんなので妻になるとはちょっと油断が大きすぎる」

こいつはスペシャリストだと納得する。

「話を聞く条件です。あらゆる抵抗はします」

「なるほど、イオ。たしかに兄者たちが気に入るはずだ。きみはオレに物怖じしない。ますます気に入った。ぜひきみにこそ聞いてもらいたい」

聞き捨てならないことをさり気なく言っているのだが、そこには気づかない。

レトの次王が言ったことは端的に、通貨の管理をボルニアとエストの間で厳しくする、ということだった。

「ボルニアの貨幣とエストの通貨は違う。具体的にはボルニアは紙幣であり、エストは金貨だ。ボルニアは紙幣で経済が回っており、エストは金貨で経済が回っている。それで今後、エスト国内ではエスト金貨以外の通貨の流通は禁止する」

それが直感的に正攻法だと気付いて、イオは震える。

考えてみるとこの発想ができるのは、レトの次王以外にはないだろう。

商業が世の中を回しているのだという認識がなければ、通貨の統制なんて考え付きもしない。ただ、あまりにも冷酷で、実利しか見ていない。そしておそろしいほど世界が見えている。

そのすさまじいシャープさに震えた。

「そ、それは、金貨を持っていない者は敵だとみなすと？」

「イオ、オレはきみに求婚している。きみはお互いが十分な条件を満たしていないと思うかもしれないが、その質問は充分にその資格を満たしているとオレは思った」

くやしいことと言っているのは変なのだが、レトの次王の言葉に反論をしようがない。

まるで、言いくるめられそうで怖かった。

誠実さのほとんどない、冷酷対冷酷の、サドン・デス・マッチのように思えてきた。

「では、その通貨管理はレト族でもらえるのですね？」

「このアイギスでの物資の管理はきみがしていると思っていたが？」

「物資は通貨ではありません。物資だけで手一杯です。たった2人で回しているのです。リュディアがバックについているわけではまったくありません」

その青年はぱちくりとまばたきをして、しばらく黙った。

「う、噂は信じがたかったが、正真正銘のほんとなんだな？」

「まったくもって事実です。なので、あんたにも少しは役に立ってもらわないと困るんです！ 兄貴は本狂いだし、鉄鎖の次王にはこんなことはできない！ あんたが働かないと、このボルニアは破綻するんです！

求婚云々はその後です！」

イオがヒステリックに言うと、レトの次王はしばらく考えて頷く。

「夫たる資格を見せよということか」

この王はほんとにひとことが余計なのである。

※

レトの次王はだいたい通貨関係は統率してくれそうで、それでイオの荷が降りる。

実行しそうなことはだいたい以下のとおりだった。

まず、エスト国内でのエスト金貨以外の貨幣の流通を禁止する。

そして、エスト国内でボルニア紙幣を持っている者達は、限られた窓口からエスト金貨に両替する。これは第2軍の部隊ごとに請負、軍属であることを確認してそれを換金する。そして、他国通貨たとえばキュディスの銀貨は、黒の兵団を窓口にして換金する。エスト人は受け取ったボルニア紙幣を換金できるが、それを近衛兵団が管理する。

要するに軍事組織を通さないと換金できないようにするのである。

個別具体的なやり方を話すうちに、それがきわめて合理的なやり方で、イオはレトの次王を冷血の貴公子と思いたくなったほどだ。もちろん、だからといって求婚を受けなくなったわけではない。きわめて優秀な伶俐な次王だと思っただけだ。

エストの金貨は、北へ流れる大スカイ河流域のエスト・ザブンテ、そして南に流れるクローナ河流域のシドでしか流通していない。南北を貫く大スカイ・クローナ流域圏でしか流通していないのである。

ボルニアの諸民族は交易の民であるレト族でさえそのメインストリームから無視され、存在しているとさえ思われていなかった。だから第2軍のザブンテ侵攻、エスト制圧はその大動脈の北側である大スカイを勢力圏に置くことに意味があった。

存在していることを証明する。

そのためには、制圧するのが分かりやすい。

そして次は南のメインストリームであるクローナ流域というのは合理性がある。

ザブンテは第2軍に制圧され、紙幣による経済を強要された。

ここで、エスト国内を金貨による経済以外を禁止されると、第2軍以外のボルニアは金貨を入手する方法がなくなるのだ。

(これがレト族か)

それを「そんな簡単でいいのか？」というのである。

しばらく震えたのちに、イオは鉄鎖の次王を見に行く。

居場所はわかっている、リクトルの病室だ。城の中を歩きながら、慌てふためいている侍従たちの様子を眺める。ワゴンに乗って追い越していく医療器具を見ながら、血の気が下がっていくのを感じながら、それでもなんとか、病室までたどり着く。

その中に入っていきるのが大変で、吐きそうになりながら、針を刺されたりしている管だらけのリクトルを見て、思わず吐いてしまう。

「イオさま！ これは必要な治療なんです！」

気を失いそうになるのをこらえつつ、ようやく我慢して、針が人の身体に刺さっているのをやっと見た。サウスの医療は、施術している本人たちがどうしてこれでいいのかわかっていないだけあって、不気味な信仰のように見える。

それでも実際に書物に書かれている通りの結果になるので、それが続いているのであるが、ボルニアから出てきたばかりのイオには厳しい精神的苦痛であった。それは鉄鎖の次王も同様。

同じように吐きそうになっている次王にはアテナイスが付き添っていて、しきりに胸に抱いて、しきりに声を掛けていた。

イオははじめて孤独になった。

これまで、鉄鎖の次王に手首を握られた記憶が自分の孤独を和らげたことに気付く。

あるとき自分は同志に引き上げられていたのだ。

部族を滅ぼされて復讐心にかかれていた時に、手首を握られたことに自分がどれほどすがっていたのかを理解する。そこで語られた素朴なことばに、イオはこいつと心の中しようと思ったのだと思う。

誰なのかよくわからなかったけれども、同じように孤独だった。

その素直な姿が、イオの心に染み込んだのだ。

しかし、それでもこの血の匂いのする病室はなんだろう。

「よう、イオ。大丈夫か？」

吐き気をこらえて顔を上げるとパントが立っていた。

「あ、あ、いや、ごめん。慣れていないんだよ、ボルニア人は。リクトルさまがああ傷から復帰できるなんて信じられないし、これは褒めているんだよ？ エストの医療は凄い」

それでかと、パントはひとりごちる。

「リオンがなにもしてくれなくて困ってるんだ。震えてばかりの子を押し付けてきりで」

急に現実に戻される。

「セスク？」

「そうそう、それだ。セスクだったか。あいつはやれるのか？」

イオはしばらく考える。小柄で痩せぎすだ。筋骨隆々としたパントからしてみると不安だろう。イオはふとこの状況から逃れる口実を思いついて、言った。

「あたしが鍛えて、数日でパントと互角にやれるぐらいに育てていい？」

パントは考えたが、ふと気付いて言う。

「あれか。あの副官どのが覚えたやつか」

「そうそう、受け流し。あれだけは使えるようにしとく。あたしがチビだってことはわかってるだろう？ だったらあのチビも足手まといにならないぐらいには使えるようになるって、信じてくれるかい？」

イオは気づいていなかったのだが、粗野だけど気さくなパントと話しているのは、実は気が楽なのであった。

「イオがやってくれるなら、お願いしたいかな」

こうして仕事が増えるのである。

38. セスクとの訓練、レトの次王の陰謀を知り対決

セスクと向き合ってみると、ぶかぶかの鎖帷子を着ていたから分からなかったのであるが、実は十分に出来上がった身体をしていたし、帯剣する姿は近衛兵にいてもおかしくないほど立派だった。

エストの近衛兵は、騎士団には劣るけれども、白兵戦では随一のエリートである。

「今日は泣かないんだね」

「リオンから聞きました。イオ姉が目の前に立っているということは、ぼくが役に立つかどうかを知りたいのでしょ？」

このネットワークはどうなっているのか知りたいのではあるのではあるのだが、余計な言葉は不要な気がした。すらりと剣を抜くと、同じように剣を抜く。

セスクは怖い構えをする。

お互いが必死になる構えだ。どちらかが死ぬ構え。

それで、イオは剣を下ろした。

「だめだよ、きみを失いたくないし、あたしも死にたくない。きみの勝ちだよ。あたしはきみに殺されたくないし、きみを失うことは耐えられない。その構えで戦うのなら、続けられない。それはいけない戦い方だ」

セスクは神妙に聞いた。

「よくそんな構えを知っているね？ まず腕前が合格なのは言うておくよ、でもそれではパントは納得しないかもしれない。パントはきみの上司になるかもしれない人だ。このアイギスの近衛兵団で一番の剣の使い手だ。そのために十分な勝負でなく、訓練をしよう」

イオはそう言いながら、13才の子に通じるわけ無いだろうと思っていたのだが、この少年はおそろしく聡明だった。

「イオは下手くそだから、そうやって逃げるんだろ？」

事前にリオンとのやり取りがあったことをどんだけありがたがったかは知れない。反抗期の少年の心理状態を、リオンで事前に体験したのだ。それでイオは、熱帯雨林のタワール材による模擬戦を提唱し、それは受け入れられた。タワール材はだいたい模擬戦に使われる生死はほとんど関わることのない擬似剣であり、あちこちの部族の訓練に使われる。つまり腕前を試すのによく使われる木材なのである。

「軽すぎない？ みんなそう言うんだ」

「イオ姉にはちょうどいい重さじゃない？」

楽しくなるほどに生意気だ。

鉄鎖の次王はイオの特異な才能として、チビでひよろひよろした娘だから、相手に簡単に舐められること挙げる。それで相手は油断してくれるという。十才近く齢の離れた少年に舐められることは果たしていいことなんだろうかという問題にはなるのだが、立場の割には、気安く付き合ってくれるのは、確かに少年団を率いるイオにとっては、いいことなのか？ と考えこんでしまうことではある。

練習用の剣を構えると、セスクの腕前がわかった。

いきなり切りかかってくるので、それを受け流す。

それで、態勢が崩れたところに切り込むと、うまく受け流されてしまう。セスクの剣はきれいな円弧を描き、教科書のようなうつくしきでイオの態勢を崩す。

「きみ、それをどこで覚えたの!？」

愚問であった。

イオが覚えている剣技は、リュディアの剣技である。それをレト族が習得していないとは、考えるのは愚かである。だいたい動きの速さはわかっていたので、その機先について、体力の続く限り、相手の隙にな

りそうなところに、剣を最速で差し込んでいく。

それでもセスクは地道に耐え続け、肩で息をし始める。それで両手で剣を持ち、力でねじ伏せにかかった。イオは次王の戦い方を思い出し、体重を全力でその少年にかけた。それでセスクは膝をついて剣を下ろした。

なるほど体力はあたしに及ばない。

イオも肩で息をしながら、ため息をつく。男女の差はあるが成長期を迎える前の少年と、剣士としては十分な年齢に達しているイオの差がでた。

「……、ごめん、……、きみが強すぎて、ひどいことをした……」

嫌悪感に駆られて声をかけると、聞こえてきたのは啜り泣きだった。

イオは慌ててセスクの側に寄り、その肩を抱いて耳元で聞く。

「きみは充分強かったじゃない、くやしがるようなことじゃないよ。いまあたし、きみが強すぎたって言ったよね?! こんなことをしないと勝てなかったんだよ!」

それでも少年は泣くことをやめず、どうしていいのかわからなくなった。

鼻をすすり、えんえんと泣き、感情を爆発させた。

「……、ぼく……が、ぼくがレト族の、みらい、だったんだ……」

意味がわからなくて混乱する。

イオは賢明にも状況を把握しようと、頭をフル回転させる。

(誰が言ったんだろう?)

「それは、えーと、レトじゃないや、族長に言われたの?」

顔く少年を見ていると、だいたいなにが起こっているのかが分かってきた。

たぶんこの子はイオに認められることを最重要課題として課せられていて、それはレト族の未来を一手に引き受けていると言い含められている。イオは素早く計算するが、レトの次王がなにを考えているかまではわからない。

そう考えているうちにもう一つの疑問が湧く。

「きみは白兵戦が強い。それでレト族の帰還戦に選ばれたと思っていい? でもなんで騎乗していたの?」

セスクはぐずぐずと泣く。

「族長が言ったから。はじめてだったけど、戦場は怖くて、なにもできなくて、気付いたらヴァンダル族が守ろうとしていた……」

頭がおかしくなりそうになる。

(初陣だって?! なんでこんな子を竜に乗せた!?)

イオが気付いたのは、初陣だろうがこの局面で送り出したかった逸材だったということなのだ。アテナイスが言っている通り、この子はおそろしく芯が強く、失敗をしても自分の責任として噛みしめるだけの覚悟がある。つまり、次世代の次王候補に対する要求に合格するだけの強靭さがある。

(リクトルさまが重症を負ったのは計算済みなの!?)

ふつつつと湧き上がってくる怒りを抑えるのが大変で、それを抑えるようにセスクの頭を撫で続け、抱いているとだいぶ落ち着いてくる。

「大丈夫、きみをエストの近衛兵団の中樞に推薦する。リクトルさま付きの護衛でもいいかもしれない。きみの腕は充分だし、誰からも文句が出ない水準だよ。だから安心して。あたしのこと知ってる? この髪を見て」

「イオ、……、だよね」

励ますように大げさに頷く。

「そう、あたしはイオ。あたしが必ずきみを近衛兵団に推薦する。みんないいやつだよ。すぐ仲良くなれる。きみの受け流しを見せてやるんだ。きっとみんな尻もちついてきみの腕前にびっくりするよ」

「でもイオ姉には通用しなかった……」

「そ、そんなの、あたしはきみにこれを教えようとしていたんだよ！？ でもきみは教えるまでもなく自在に使っていた。この剣技はエストではあまり多くの人は知らないんだ。だから間違いなく、びっくりする」

実のところイオ自身も、このリュディア流の剣技がどこから来ているのかを知らないのではあった。これは正確にはシスティア流の流れをくむ剣技で、システィアは遥か南方の海洋国家である。南方の交易の大動脈は、シドとサウスの後継者を自認する帝国を結ぶ海路であるが、その狭間にあって、シドと帝国の間を潤滑油のように存在する海洋冒険者民族がシスティア人なのである。

彼らの生業は海上にあるので、重武装ができず自然とかわす剣技が発展した。もっともシスティア人が受け流しで時間を稼ぐのは、その間に相手を「口説く」時間を稼ぐためだとされ、敵国のお姫さまとの一戦ののち無事にお姫さまのこころを射抜き、一国の王になったという伝説がもっともらしく語られるのだがシスティアなのである。

そんな口説きの剣技がリュディアになぜ伝わったのか、というのはふしぎではあるのだが、そもそもリュディアの上客は大量の紙を必要とする、北方諸国最大の文明国であるシドであり、シドとシスティアは婚姻関係にあると言われるほど仲が良い。そもそもリュディア族は重武装を好まないし、軽装の剣技として普及したのかもしれない。重武装のヴァンダル族の戦い方とは違うのは当然といえば当然だった。

幸いにも、エストは重武装の文化圏だ。

ぴかぴかの騎士鎧の国がエストであって、近衛兵でさえ高価な鎖帷子を着ている。

「ちょっと待ってて、話をつけてきたら、きみにいろいろ剣技を教えるから」

セスクは不安そうに頷いた。

イオはこの子がレトの次王が押し付けてきた、無限の価値のある財宝であることを理解し始めていた。

※

イオが返す踵で向かったのは、レト族の宿営地だった。

3万の騎竜兵を収容可能なアイギス近傍の大要塞は、第2軍、合流したリクトルの兵団、レト族の兵団を吸収しても、すかさずと言っていいほど広がった。そもそもエストがこれほどの兵力を持てることさえ考えず設計されたことは明らかで、総数6千騎を数えるボルニア全軍を収容しても広すぎるのである。

イオはその広大な要塞を歩くが、その燃えるような赤毛が自然にパスポートになっていて、誰も咎めない。

夕刻の要塞はちょうど夕食の準備中で、あちこちでいいにおいがするのであるが、兵たちが心の慰みに奏でる音楽があちこちで鳴り響いている。

レト族の宿営地にたどり着くと、きわめて保守的な香辛料の匂いがした。

これはリュディアも同様だが、だいたいジャングルの民というのは、美味しい肉がつねに手に入っていないのである。だから新鮮でない肉をおいしく食べるために香辛料に頼る。イオからしてみると、懐かしい香りでぐっと来てしまう。

「レトの次王はどこにいる？」

怒りがたぎっていた。

その迫力にレト族は怯えてしまい、慌てながらその想像上のいるだろうと思われる場所を示す。イオは歩いて行く。それがたとえ辿りつけない場所だったとしても、レトの次王に罵声を浴びせたかった。

イオがやっとたどり着いたのは大要塞の櫓で、そこにはレト族と思われる騎竜兵が詰めていた。まっすぐに怒りを向けると、そのやさ男は適当にごまかす。

「よくここがわかったな。オレの妻として充分だ」

「話があってきました。エスクから話は聞きました」

ほうとつぶやくが、しばらく考えてその櫓から人払いをした。

端的に機密に関する話になると思っていることになる。

「オレもちゃんとイオには真正面から話しておかなければならないと思っていた」

イオはふつつつと怒りが湧いてきた。

「あなたは！ あなたは！ セスクを初陣にもかかわらず、この厳しい戦場に送り出しましたよね！ おそらく周囲の反対を振りきって！」

「そうだ」

「その中でセスクが足手まといになることぐらいわかっていましたよね！ ひょっとしたらヴァンダル族が助けに入らなくなるぐらいには！ ヴァンダルに迷惑をかけることぐらいはわかっていましたよね！」

「そうだ」

「そうなれば、セスクの周囲で波乱が起きると思っていたし、それでセスクに注目が集まるのであればそれでいいと思っていましたよね！」

「そうだ」

奇妙なことなのだが、イオはこの次王はどうも会話が通じるらしいと思い始めていた。

それは逆に言うと、レトの次王も同様なのだが、レトの次王は少し先を考えていた。

「それで、イオはどうした？」

「どうもこうも、セスクの剣技は十分な実力です。たぶんあなたの望みなのかもしれませんが、近衛兵団の中枢に推薦すると約束しました」

「それでいい」

暖簾に腕押しとはまさにこのことで、この次王は得体が知れなすぎる。

「セスクを大切に育てやってくれ。あれは、レトの未来だ。新生ボルニアは、ヴァンダル族、リュディア族、レト族の同盟で構成されている。アイギス攻略戦では諸部族から鉄鎖の次王の直属部隊に入るための競争があった。誰もが勝ち馬に乗りたいのだ。だからひとりでも有力な騎竜兵を送り込もうとしていた」

冷静になると、この眼の前のキザ男の言っていることが理解出来始めていた。

「ボルニア中が、そこに入りたいと競争している？」

「そうだ」

あんがいこの男は冷静なのではないかとさえ思えてくる。

「レトは、ボルニア中の鼻つまみ者だ。そのレト族でさえオレは掌握しているとは言いがたい。オレは幼いころ、ヴァンダル族の少年とリュディア族の少年がつるんでいるのを見た。ボルニア最強の武力と、ボルニア最大の部族だ。その有力な二人がつるんでいれば、なにが起こるかは容易にわかる。この二人を中心に次のボルニアは作られる。そこに何としても入りたかった。それで、彼らが外部の情報を欲しがっていることを理解して、それを提供することで仲間に入れてもらった。こうもしないと、レトは主流になれないんだ」

イオは息を呑む。

「そして聞こえてきたのは、イオ、きみが作っている若い世代の絆だ。イオ、エマ、リオン、パント、たぶんこれにはリクトルも含まれるのだろうし、ヴァンダルにはいくらでも新しい世代の腕利きがいる。ここに何としてもセスクを突っ込みたかった。セスクは有能だ。セスクはレトの未来だ。それはやってはいけないことだったのか？」

「い、いえ……」

ことばに困る。

著しい矛盾は、それをこんな子に課していいのだろうかということだったが、イオもボルニア流の獅子の子を谷に叩き落とす文化に慣れ親しんでいるので、それを自分に課するのは構わなくても、幼い少年に課していいのだろうかと考えこんでしまうのだ。

ぐずぐすと泣く少年の肩を抱いてしまうと、余計にその念が強くなってしまう。

イオは意を決した。

「パントはご存知なんですか？ 彼はエストでは随一の腕利きです。もし彼に勝てば、エスト中がセスクを認めるでしょう。御前試合をしましょう。アテナイスさま、鉄鎖の次王さまの御前で、真剣勝負をします。それで勝てば誰もが認めます。ライバル関係になれば深い絆になります。あたしが必ず吞ませます」

口実さえ聞かずに、次王は戸惑った。

「勝てるのか？」

「勝てるようになるまで鍛えます」

39. セスクが次王と面会、次王はリクトルの副官にする

セスクを連れて行ったのは次王のいる場所で、そこには自然にリクトルとアテナイスがいる、リクトルの病室だった。

震えるセスクを見ながら、あたしもこうだったなと思い起こし、怖いことはなにもないよ、みんなきみの味方なんだと告げる。

病室はたしかに大げさに見えるし、本人たちにとっては日常なのでおかしいことはなにもないのだが、針で刺されている姿を見ると、なれない人には残酷な光景に見えるかもしれない。おそろおそろという様子で病室に入るセスクを見ながら、これは厳しすぎたかもしれないと思う。

真っ先に立ち上がったのはアテナイスだった。

「おびえないで。怖いことは何もないの。ここはあなたを歓迎しているの」

セスクは言葉が出ない。それで、アテナイスはその顔を包み込んで、優しく額にキスをした。それで、はじめてセスクは慈愛に満ちたアテナイスの美貌を見る。

「あ、あ、あ、アテナイスさま、そんな」

「あなたは勇敢な戦士です。そんな方に城を守る姫が祝福のキスをするのは当然です」

イオはいろいろ言いたいことがあったが、だいたいはアテナイスはずるいという話になるので控えておいた。

「落ち着いたか？」

次王はセスクに聞く。

「落ち着くとはなにを意味しているのでしょうか？」

「うん。おまえはリクトルが重症を負ったのは自分のせいだと思っていて、それに対して膨大な罪の意識を感じていた。自殺しそうな勢いだった、それを聞いている」

「たぶん、落ち着きました」

「それはよかった」

そのやり取りを聞くだけで、セスクが十分に次王の合格ラインに達しているだろうと理解できる。イオには出世競争の概念はないのだが、その無欲さがイオが無害だろうと思われている要因の一つだったし、イオに少年団の編成を求められるほとんど唯一の理由だった。

イオがほしいのは歴史家の地位である。

そんなものを欲しがるとはいなかった。

「イオ、それで、セスクは使えるのか？」

急に現実に戻される。

「えっと、それは、アテナイ、あいえ、野ばらの姫君にお聞きください」

優しい視線がアテナイスに向く。

「イオさんは言って欲しいのですよね？ もちろん言いますが、その子は芯の通った、素直ないい子です、わたしは戦いのことはわかりませんが、それだけはわかります」

次王は静かに頷く。

「まああいつが、わざわざ無理して送り込んできただけはあるか」

それでびっくりするのだが、この人はレトの考えなどお見通しなのだ。

「それで、イオ。腕前はどうか。腕試しぐらいは、お前ならしたんだろ？」

率直過ぎて震えが来る。

「あ、あ、身体はできてません」

「そんなのは見れば分かる」

いちいち厳しいのが鉄鎖の次王だ。それはだいぶ慣れた。

「た、ただ、腕は良いです。あたしでも勝てる気がしませんでした」

剣はイオ以上かと、次王はつぶやく。

「セスク」

言葉が出ない。

「セスク、お前のことだ。おまえは合格だ。言葉を使え、おまえは最大限の評価を得ている。だから自信を持って、自分はセスクだといえ。おまえはセスクだ。おれにはそんな権限はないかもしれないが、おれはおまえがセスクだと認めただ」

しばらくの沈黙があって、次王は唐突にいう。

「セスク、お前をリクトル付きの副官に任命する」

それは暴力的な、権限の行使だった。

「ちょっとまってくれよ、兄貴！ おれがいつ副官を欲しいといった？ これは必要なのか？ 厄介事を持ち込むだけじゃないか？」

イオは冷静に考えるが、リクトルの発言を支持する立場だった。

過去形だ。

「イオ、あいつが考えていたことはこんなところだったんだろ？ もちろんお前が激昂して直談判に言っただろうとは思っている」

的確過ぎて困る。

「おまえは預かった少年を無下にはできない。それはリオンを見ていて思った。よくあの跳ね返りを、戦力にした。リュディアに聞いたらものすごい迷惑ものだったらしい。おまえの功績だ。誰も認めないかもしれないが、おれだけは認める」

正直に言うときらいだったはずの暴君を好きになっていく。

自分がやっていることを無視して、それを次王がやっている気分になる。

「おれは、イオを見ていて思った」

あたし！？

「イオは優れているかもしれないが、一番優れているのはリュディア族のだれとも通じていることだ。イオと話すと、だいたいリュディア族と話していることになる。イオはリュディア族の常識を教えてくれる。イオはだいたいリュディアなのだ」

たぶんそれは難しい発想で、たしかにイオは兄貴がなにをいいそうなのかを考えて進言してはいたのだが、それがさすがにリュディアと話していたつもりだったとは、理解が難しかった。

「ヴァンダルで固まるのはよくない。もちろんリクトルの副官を考えた時に、ヴァンダルの有望な人間も考えた。ルキウスなら充分だろうと思っていた時もあった。ただルキウスはヴァンダル族だ。リクトル、お前と同じ考え方しかできない。欲しいのはレトの考え方だ」

「ルキウスはどうするんだよ！」

リクトルのことばに、次王は落ち着いて答える。

「ルキウスは、セスクの師匠だ。セスクの年はいくつだ？」

「13です」

「では、永久に追いつけないだろう。常にセスクの師匠はルキウスになる。話はおれからする。おまえがヴァンダルの副王を守る剣技を叩きこめと言えれば問題ないか？」

だいたい言っていることはめちゃくちゃなのだが、これは鉄鎖の次王が、北方諸国の征服を考えていて、それは醜い身内争いから隔離されているからだった。そもそもボルニアは自分の手にあると思っている。

「セスクはレトの期待の星だ。レトは文句を言わないだろうし、もちろん族長の承諾は必要だが、本人がやる気がなければどうしようもない」

リクトルはなおも反論する。

「いまのままでも充分なのに、なんで」

「リクトル、おまえはいま、このアイギスに帰還してきて、副王の帰還だと大絶賛されている。その理由がわかるか」

「い、いえ」

「イオが裏で煽ったのはあるのだが、そもそも第2軍は不安を抱えていた。それはもし重傷を負ったのがおまえではなくおれだったらどうなっていたのか、ということだ。指揮官を失った軍は脆い。おれだって、不意を討たれる事はあるだろうし、病に倒れることもある。そうなった時に身動きできないでは困る。おまえは期待されている副王だ。それは認めろ」

リクトルはしばらくためらった。

「兄貴の代わりなんてできないよ」

「なんでですか！」

おもわずイオは叫んだ。

「このろくでなしは！ バーラルでたった150騎しか率いていなかったんですよ！ 実際に第2軍を率いていたのはリクトルさまじゃないですか！ あの戦勝は、リクトルさまの戦勝です！ このろくでなしに、遠慮する必要なんてないですよ！ いっさい！」

リクトルは閉口する。

「い、イオ……。いくらなんでもひどくないか？ 仮にも兄者は」

「リクトル、それでいいんだ。イオが遠慮なしに言うからリュディアはイオを信用する。つまりそれで、おれはリュディアから信用される。セスク、分かるか？ これはいいことなんだ。おまえがリクトルを困らせれば困らせるほど、レトはリクトルを信用する。だからリクトルに言いたいのは、この面倒な副官を受け入れろということだ」

あまりにも高尚すぎて、イオには判断が難しくなる。

鉄鎖の次王はその少年を真正面から見つめた。

「ただし、翼竜による連絡は覚える。これはイオに聞けばいい。正直今回はリクトルと連絡が全く取れなくて、それがたいへんな障害になった。リクトル、戦場での密な連絡は必須だ。これがボルニアが強い理由なんだ」

次王はセスクの肩を叩く。

「おまえはレトの未来だ。ボルニアが欲しているのは、いつでもおれの代わりができる副王であり、それはイオがいるおれであり、セスクがいるリクトルなんだ」

しばらく安心していただけだったセスクは突然に慟哭を始めた。

ぐずぐずと泣き始め、顔をぐしゃぐしゃにして、わんわんと泣き始める。

長い時間、セスクは泣き続けた。

たった13才である。

アテナイスは心配そうに見ていたが、次王が首を振ると慰めようとするのをやめた。

「あのさ、なんで、そんなに良くしてくれるのですか、だよな？」

イオはたまらず言ったが、それが許されるのはイオが少年団の団長と目されているからだった。

「アテナイスさま、あ、いや、えーっと、みんなが認めているじゃない。きみはよくできる強い子なんだよ。あたしだって、約束通り推薦したじゃない」

間近まで顔を寄せて、その頬を撫でる。

「イオ姉は、ぼくを守ってくれるの？」

「うん。そうしなかった時があった？」

セスクは呆然とした。

抱きしめると暖かかった。小刻みに震える身体が小動物のようで、それが愛おしくなった。きみはひとりじゃない。誰もが守ってくれるよ、そう言いたかった。

「それで、セスク。聞きたいことがある」

次王の声は唐突で、いきなりだった。

「重大な役職だが、それをやり切る覚悟はあるのか？ リクトルの副官だ」

セスクは我に返って、しばらく考える。

それから、鉄鎖の次王を睨み返した。

「ぼくはセスクです。それは誰にも否定しようがない。あなたはそう言いました。ぼくはセスクです。だからやります」

次王はゆっくりと笑った。

「ようこそ。歓迎する。ここが新生ボルニアだ。きみの参加は嬉しい」

それを聞いて、少年は感情が切れたように泣き始めた。

40. セスクとルキウスの訓練、レトの次王との会談

セスクが落ち着くと、次王はイオを伴って、ヴァンダルの宿営地へと向かった。

不安そうについてくる少年を振り返りもせず、大きな背中で次王は言う。

「おまえの剣の師匠に会わせてやる。ヴァンダル族でも一目置かれている猛者で、もしおまえがいなければ、そいつをリクトルの副官にするつもりでいた」

セスクはしばらく考える。

「ルキウス、ですよ」

「そうだ。歳は3つ上だ。おまえは剣の腕は十分かもしれないが、年齢による体格差はどうしようもない。ルキウスだって常に強くなるだろうし、3才の差は膨大だ。一生ルキウスには追いつくことはできないだろう。だからおまえの師匠にルキウスを選んだ。あいつに学べ。そしてあいつに追いついてやると思え。そうすればあいつは負けられないと、もっと強くなろうとする。おれはそれを望んでいる」

まさにボルニア流というよりは、ヴァンダル流の戦士の育て方だった。

このレト族の少年をヴァンダルの流儀で鍛え上げようと言うのだ。

「怖気づいたか？」

しばらく黙ったセスクを挑発するように、次王が聞く。

「つよく……、どんな方法を使ってでも強くしなければならぬんですね？」

次王はおや？ と振り返って、その武者震いする少年を頼もしげに見つめて頷く。

「そのとおりだ」

宿営地は次王の来訪を受けて蜂の巣を叩いたようになった。

暇つぶしに訓練をしていた面々が慌てて汗を拭い（そういう部族なのである）、支給され始めたばかりの毛皮を羽織って、続々と次王の前に集まってくる。

「リクトルさまは、副王は無事ですか？」

「ああ、命に別状はないと聞いている。正直エストにこれほどの高度な治療法があるとは思わなかった。知っていたか？ 刀傷が膿むのを防ぐのには、ウィスキーを吹きかけるのがいいらしい。ただ、これは想像を絶するほど苦痛をもたらす。あのリクトルが子供のように呻いていたよ。それをしつこいぐらいに永遠に続けるんだ。エストの連中はそれを消毒と呼んでいる」

それはほっとするというよりは、慣れないボルニア人には異教徒のしわざのように感じるのだが、具体的に何をしているのかが分かるのは、少しは心の足しになる。足がかりになるからだ。

「エストの治療団に任せておけば、おれが倒れても、きっと元通りにしてくれるだろう」

「冗談はやめてください」

そう直言したのは、イオにも顔なじみのルキウスで、イオよりだいぶ若い真っ直ぐな性格の好青年である。イオが次王の副官に選ばれた時に一番傷ついたはずなのだが、イオには非常に協力的な姿勢を示し、むしろ反対するヴァンダル族を説き伏せて回った。

イオの立場を作ったのはこの青年だ。

それはイオと次王とただならぬ呪われた関係を察知したからだろう。

おそらくルキウスには、厄介事を次王とリクトルに押し付けている自分たちの姿が見えていたのだろう。イオからしてみれば理解力のある同僚だった。

「ルキウス、ついさっきリクトルの副官が決まった。元々ルキウスにしようと思っていたが、考えを変えた。こいつにする。このチビだ」

セスクが紹介されると、ヴァンダル族の面々は口々に言う。

「レト族のガキじゃないですか！」

「こいつは、リクトルさまの重傷の原因になったんです！」

「こんな線の細い子供にリクトルさまの護衛なんてできない！」

怒号のように叫ばれる非難を、ルキウスは黙って耐えた。

次王はそれを涼やかに見ていて、ルキウスはその次王の考えていることが、たぶんわかった。

「こんなチビだと、お前たちは言う。それは正しい。こんなチビでは、話しにならないのは明らかだ。だがこいつは目の前で自分のせいでリクトルが重症を負った時に、常に責任を感じて、いっさいの言い訳もせずに、いっさい逃げようとしなかった。13だぞ。こんな重大なことをしでかして責任を取ろうとするやつがいるか？」

それで黙る。

しばらく沈黙が続いたがルキウスが答えた。

「おれもそうした」

「そうだルキウス、おまえもそうだ。こいつはおまえと同じだけの責任感がある。だが、こいつはリクトルに対して一生かけて償わなければならない借りがある。こいつはリクトルを命を投げ出しても守ろうとするだろう。こいつは呪われているんだ」

イオは自分と次王の関係を考えざるを得なかったが、呪われているから上手く使われているのだろうかと考えてしまう。

「それにルキウス、おまえは前線にいて欲しい。イオのようにおれの背中にしがみついているのではなく、隣にいて前を見て戦友として共に戦って欲しい。おまえは若いがヴァンダルでも一二を争う猛者だと思っている。陣で隣に並んで欲しい、不満か？」

ルキウスは言葉を失った。

しばらく困ったように言葉を探し、やっと言う。

「い、いえ、そこまで認めてもらっていたとは……」

「ただ、こいつが足手まといのままでは困る。おれも困るし、リクトルも困るし、ヴァンダルも困る。ルキウス、おまえは馬鹿にしているかもしれないが、こいつはイオより剣技は上らしい。リュディア流の剣技を叩きこまれている。だから送り込まれた。こいつを鍛えあげてやってくれ。ヴァンダル流の何たるかを叩き込んでくれ。それができるのはおまえだけだ」

震えるセスクが訓練用の剣を握ると、ルキウスは同じように木刀を握って、軽く息をついた。

次王やヴァンダル族はそれを賑やかに取り巻いて、地べたに座り、くつろいだ様子で果たし合いを見守る。おそらくこれはヴァンダル族の文化なのだろうとイオは思うのだが、たぶんこのような訓練の光景を娯楽として楽しんでいるのだ。くちぐちに下馬評を語り合うのは、剣術に対する評価に対する見識を高めるのに役に立つだろうし、それが評判になると分かれば、お互いに手が抜けなくなる。

「まず、おまえの剣技を見る。それからどこまでその身体でやれるか試す」

ルキウスは宣言し、非常に一般的な構えをする。

それに対して、セスクはすぐに防御一辺倒の構えをして、備える。

どちらが動くというでもなく、二人の剣が合い始め、ルキウスが剣を叩き込むが、それを奇怪な剣技で受け流すという展開が続く。

「リュディア流だ、しかもかなり上手い」

どこからともなくつぶやきが漏れる。

なんとルキウスが打ち込んでも、セスクは巧妙に受け流し、それで相手の態勢を崩してわずかな息をつく。もちろん、セスクからの攻撃はない。速い太刀筋を受けるのに精一杯なのだ。

「どちらも強いな……」

だれかが呟く声に、木刀が打ち合う音が響く。

業を煮やしたのはルキウスだった。その胸に炎が灯るのがイオには見える気がした。

イオがやったように力勝負に持ち込み始め、相手の体力を削ろうとしていく。強靱な筋力に裏打ちされた強打を浴びせられ、それが支えられなくなる。揺らいだところに、ルキウスは体当たりをした。

おそろしく泥臭い。

それで重心を崩したセスクの脚を払い、転んだところに剣を突きつける。

肩で息をしていた。

「おまえは強い。それは認める。だが、おまえは身体ができていない。そんなのは、誰もひと目で分かる。だが、いまから急激に大きくなることは無理だ。だからおまえの仮想敵は常におまえとの体格差で勝負してくる。その時にどんな手を使ってくるかを知り尽くせ。その対策をとれ。正直リュディア流と戦うのは楽しい。たっぷり付き合ってもらおうぞ。どんな手で来るのかを理解し尽くすまで、付き合え」

イオはふと思い出し、次王に言う。

「そういえば、レトの次王と約束しました」

「なんだ」

「セスクをパントと御前試合で戦わせて、勝たせると」

次王はしばらく考えていたのだが、諦めたように言う。

「それはあいつの承諾が必要だ。あいつと話に行こう。レトの次王と話すのは久々だ」

※

次王は一応毛皮をまとっていく。

それが礼儀なのかはイオにはわからなかったが、もしかしたら寒かったからなのかもしれない。

雪がちらつく大要塞を歩きながら、白い息を吐く。

各部族の宿営地に立ち寄り、いちいち地方色豊かな鍋に匙を伸ばし、それを食べて美味しいという。イオはつまみ食いをする次王について行っていいのかさえわからず、申し訳程度に、匙を伸ばして、味見をする。

「レトの次王との直談判するんではなかったのではないですか？」

「わるい。ちょっと我慢してくれ、おれはなににも知らないんだ」

その弁明は、食欲を満たすのは許せと言っているようで、聞いたこともない部族の料理に感心しきっている姿とは、変なミスマッチに思えた。

次王は味見をしながら、ボルニアの諸部族と食べ物話をしている。

それは盛り上がる時もあつたし、次王の口にあわない時もあつた。

もちろん、理解できないのはイオの未熟さではあるのだが、正確にいうと、この王はボルニアを知りたかつたのだ。

それで食べる。

これは、おそろしく効率的な方法で、食べることでこの王は簡単にボルニアを理解した。

ジャングルの部族たちはなにを食べていて、どんな食卓を囲んでいるのか。

これは辛すぎないか？ ロゴス族では、子供もこんなものを食べるのか？ いえいえ、子供にはつらいので、この香辛料を掛けるのは大人だけです。もうちょっと温かいものとか、芋のたぐいが殆どです。でもこのキノコは入れるんだろ？ ええ、これがいい味になるんです。

イオはそれがおそろしく豊穡な情報であることに気づき始めた。

これは食べることを通して、その部族の家族の日常を聞いているのだ。

外交上すぐれた情報収集をしているとイオが思ってしまうのは、官僚部族であるリュディアの考え方にイオが染まっているからだ。次王は素直な好奇心の発露として、ボルニアの諸部族を知りたいと思っている。

それを次王は心の底から楽しく満喫している。

「イオ、すまん、次が最後だ」

もう、何回告げられたかわからない言葉だ。

それでも次王は部族の食事のはしごを続け、ようやくやめようと思ったのは昼食の時間が終わり始めた頃になってからだった。

鉄鎖の次王が現れると、レトの宿営地は騒然とし、慌てるレト族の面々を見ながら、

「いい話を持ってきた。族長はいるか？」

と端的に聞く。

するとレトの重臣らしきものが前に立ち、おそろおそろ次王の顔を伺う。

「いい話だといった。おれが嘘を言ったことがあるか？」

「いえ、ありませんでした。どうも毫碌するといろいろ大切なことを忘れます」

「貴公はレト族に忠実なだけだ。警戒するのもわかるが、おれとレトの次王は盟友だ。幼児の頃からの親友だ。あいつは交易から帰ってくる度におれたちに外の世界の話をずっとしてくれた。おれたちはそれで外の世界を知った。おまえたちは族長を軽視しているのではないか？」

ちくりというのは、レトが割れているからだ。

「めっそうもない」

「では、早くレトの次王に朗報を伝えたい」

イオは3王の相変わらずのやり口に感心してしまうのだが、結局のところ鉄鎖の次王の權威の行使が部族を動かしているのは、どうしようもない。

レトの重臣は次王のもとまで案内し、その顔を見るなり、ヴァンダルの青年は歩み寄って肩を抱いた。

「いいのを送り込んでくれたな。セスクだ。あいつは使える。リクトルの副官にすることにした。あいつにレトとの連絡は任せることにする」

「喜んでもらえらと思いましたよ」

とうとつに次王の表情が怒気をはらむ。しばらく沈黙したのちに言う。

「へりくだった言い方はやめろ。おまえはレトの次王だ。新しいボルニアは3王が等しく並立する国だ。リュディア、ヴァンダル、レトが共に同じ立場にあって協力する国だ。ヴァンダルに責任を押し付けるな。それに不満があるか？ おれに責任を押し付けたいか？」

軽口が出てこないことを確認して、イオはあんがいの夫立候補者は良く出来たやつなのかも知れないと思い始めた。

「イオに求婚したそうだな」

とうとつに次王は言う。

「たしかにおれも気が合うかもしれないと思う。ただ、リュディアとレトが同盟を結んだと思われると、ヴァンダルがざわつく。ヴァンダルを統治するものとしては、余計な厄介事を持ち込んでほしくないのだが」

しばらくレトの次王は考えて言う。

「だが、これは本気だ。話すうちに、ますます惚れ込んでいく。はじめはそうだ、打算だった。レトがリュディアとヴァンダルの同盟に食い込むためには、その情報の中枢であるイオに常に接触できる口実がほしいとは思っていた。だが話してみると、想像を絶するほど魅力的だった」

あまりにも正直すぎる発言にイオが戸惑ってしまう。

イオの周りにはあまりにも魅力的な人物がいる。それらに好かれるのは、ただ単に、イオがなんの遠慮もなしに暴力的な発言をするからであるのだが、それが地位的に上位の人達に響くのは、それが珍しい現

象だからなのかも知れない。

「イオ、リュディアに似たような跳ねっ返りがいるだろ？ 紹介してはどうだ？」

これは不意であり、かつ、ところがキュンとする言葉だった。

はじめて、鉄鎖の次王が嫉妬を見せた。

それはイオの勘違いだったのだけど、ところが乱れた。

「あ、あ、あ、リュディアはいまは写本で忙しいですし……、優秀なのは本国にいます……。あっちは兄貴がないから大変で、出せる人物がいないのです……」

イオが慌てて言うと、次王はにやりと笑う。

「この役をセスクに任せたい。ヴァンダルとレトの橋渡しになる副官だ。おまえが送り込んだあいつはなるほど、それに適任だ。まず族長としての許可がほしい」

優男はしばらく考えていたが、端的に許可しますという。

「ちがう、ちがう、ちがう！」

次王が大声で叫ぶのに、レト族がびくりとした。

「おれが求めているのはそれじゃない！ キュディアの政治体制はそうっていない。各騎竜兵団の投票で許可するかしないかを定める。ボルニアの3王が等しい投票権を持っていて、多数を持ってその行動を許可するかどうか決める、分かるか？」

たぶんレトの次王はびっくりしていて、完全に平等な票を3王は持っていると言っていることに、言葉にするのが難しくなっていた。レトは差別を受ける下等部族としてあつかわれている思っていたのだ。

「レトは……、レトはなにを差し出せばいいのでしょうか？」

「セスクだ。あいつはレトの未来だ。おまえがそういった。おれもそう思う。あいつはイオに預けた。イオは預かった少年をむげにはできない。どんな手を使っても、セスクを大切に守ろうとする。おまえのところに殴りこんだらう？」

色男はイオをチラと見て、ため息をつく。

「イオが、アンタッチャブルになってしまう方がいいのか？」

41. 次王とレトの次王の会話、から試合前の会話

「おれはそもそも、イオがボルニアの支配者であってもいいと思っていた」

問い詰めるようなレトの次王の目の前に、おそろしく刺激的な言葉を放り投げた。

義兄弟の本心に触れて、呆然とする。

背筋まで冷えたというよう。

「い、いま、なん、て？」

聞いたとおりだとつぶやき、なにか重要なことを考えるように虚空をにらむ。

「それは、為政者の慢心から一番離れているからだ。……わかるか？」

い、いやと弱々しく首を振る。

「たしかにおれたち3王は新しいボルニアを作るかもしれない。だがそれをチェックする『誰か』は必要だ。おれたちが間違ったら正す奴が必要だ。イオにはあらゆる権限がない。だが、わかっている通り、3王に等しく接触して、あらゆる物事を動かしている。その現状認識に異論はないな。おれたちが個々では知らないことも、イオはぜんぶ知っている」

レトの次王はしばらく考える。

「……たしかに」

「イオの出自は知っていると思う。老王に滅ぼされた部族の出身だ。現在の王政におそろしく恨みを持っている人間だ。おれとイオの馴れ初めを聞くか？」

「知ってますが、改めて聞きたいです」

次王は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「へりくだるなといっただろう。おれはおまえの意見を聞きたい。遠慮なく話せないようであれば、おまえを3王の一人と認めなくするが、それでもいいか？」

イオは自分に求婚した男をじっと見た。

気づかないうちに、レトの次王が気になり始めている。

「イオはなんで副官になったのですか？」

直球の質問に次王は頷き、それだとつぶやく。

「イオは、老王を暗殺しようとしていた。重罪である。おれは、老王の様子を探っていたが、常に前にいてじゃまをしていたのはこいつだった。イオはおれよりも老王の陰謀を熟知していたし、まっさきに殺したいと思っていた。それは、迷惑だった。それはわかるだろう？ いまだれかの手で殺させるわけにはいかなかったんだ。しかし、イオはおれよりも優秀で、しつこかった」

しばらく長い間、レトの次王は考えていたが、言っていることの意味が分かり始めてはっとする。

「暗殺者として優秀だから、副官にしたのですか？ 何かあれば自分を暗殺してくれるとでも！？」

「そうだ」

それで息をついて次王はいう。

「これは、リュディアでは既知だ。イオはそういうやつだと思われている。レトがどう取るかはおれが決められないが、これは一般的に広まるものだと思って対処してくれ」

自分のことのはずなのにそれが掴みよのない速度と権限で流れていく。

「おれは、イオにはもしおれが間違ったことしたら遠慮なくその背中を刺せと言っている。これもリュディアは知っている。おれは怖いのだ。いつおれも愚かな人間になるかわからない。おれは復讐に燃えるイオに出会った時、このちっぽけな赤毛のチビに、生きるに値する未来があるのだと、見せてやりたいと思った。それが老王の暴政を防げなかったおれたちのせめてもの贖罪だと思った。だから老王と同じだと思ったら殺せと命じた。おまえは老王のような暴政をする王に自分が成り下がる恐怖に耐えられるか？」

この王は、常に同じことしか言わない。

正直であろうとしているというよりも、根が素直なのだ。

しばらく呆然としているレトの次王に、鉄鎖の次王は言う。

「おまえを引き入れた時」

「え、あ、いつですか？」

「おまえが旅の話をしてくれるのを拒まなかった時だ。正直、ボルニアが南進政策をとれるのはおまえがもたらしてくれた話のおかげだ」

あ、あのときかと呟き、その視線が次王に向く。

「おれは、リュディアとヴァンダルではいつか破滅すると思っていた」

神妙にレトの次王は頷く。

「仲が良すぎるし、お互い考え方が似すぎている。だからおまえの接触は助け舟のように思えた。そもそも乗り気だったのはリュディアの次王だし、おれはそれに反対しないだけですんだ。感謝しているんだ。それが結果的にレト族だったが、そんなのはどうでもよかったんだ。おまえは簡潔で、下手に恩を売ったりしない。ドライで、外からやって来る旅人だ。商人だ。それがたぶんよかったんだ」

イオは手元に紙がない事に悔しさを感じた。

一言一句書き留めたい。

「リュディアもおまえを認めている」

「紙を……、」

イオは思わず言っけし、それからぼかんとする2人に冷や汗が滝のように流れる。

「あ、あ、あ、あ、す、すみません……、」

「ああ、そうか、イオ、そういえばアリエスと通じた交易に必要な紙がアイギスにはないんだったな」

違うけど、合ってる。

「レト族はリュディアの紙をこのアイギスまで運べるか？ べつにエメラルドでもいいのだが、安定した交易品は紙だ。その隊商を組めるか？ この包囲下だ。そんなことができるのはレト族しかいない」

色男は考える。

「アイギスに運ぶのでいいのか？ 海運ならばシドの辺境の商人につてがある」

「それでいい」

これは独立気風の強い、シド北限商人の事を言っているのだが、この連中は北方の交易路の中枢であるアイギスに頻りに船を送っている。クローナ河貿易圏の主流派からはずれた商人で、シド主流派ではない。

これは単純に荷を、北方大陸の北西端のシド領から、船を出してそこからアイギスに運ぶと言っている。レト族が大陸を陸路で縦断できるから言えることである。

(レト族はどれだけ交易に長けているのだろうか？)

地図が頭に入っていないイオには、なにが起こっているのかさえわからなかった。

※

イオにとって分からなかったのは、それがセスクとどう関係するかということだった。

そう考えるうちに、セスクとパントの御前試合が盛り上がりを見せ、そもそもイオが企んだにも関わらず、歓声を上げる客席を地べたから見ると、おそろしい光景に見えてしまう。

格好の娯楽なのだ。

包囲されて自由がないアイギスで許される唯一の娯楽。

それがエスト対ボルニアであれば盛り上がる。

罵声がいくつも飛ぶ。

その空気の中、セスクは武者震いをした。

「もし、もし、もし、勝てなかったらどうしたらいいんでしょう？」

イオは笑った。

「キミが勝ったら奇跡だ。そんなことはだれも想定していない。キミはリュディア流を見せればいいんだ。つまり磨き上げた剣技を見せればいいんだ。手合わせする？ それで落ち着けばいいのだけど」

「イオ姉は弱いから、練習にならないよ」

思わず笑ってしまう。

「それでいい。あたしより強いというのは参考にならない？ あたしは鉄鎖の次王の副官をしているんだ。キミはもっと自信を持っていい」

セスクは、何回も素振りをする。見た感じ必殺の剣で、あまりお勧めできないものだったが、言っても聞きそうになかった。

「ようセスク、今日の調子はどうだ？ 残念だがこの戦いはおまえの戦いだ、おれは手を貸せない」

にこにことしたようすでルキウスが励ましに訪れ、型通りの素振りをするセスクを見て苦笑いする。ルキウスは訓練用の木刀を握って、イオに放る。

「ほら、稽古つけてやってくれよ。すぐに忘れそうだ。リュディア流を思い出さないと勝ち目はなし。おれはリュディア流は使えない。イオ、頼まれてくれないか？」

「あ、あ、えと、疲れませんか？」

「一日中でも戦場で戦い続けるだけの体力はつけさせた。こいつはもう戦場では失敗できないんだ」

なるほどと片手で木刀を構えると、セスクの空気が変わる。

(す、隙がない)

泰然とした鷹揚なリュディア流の構えで、無防備に見えるがこの構えが一番怖いことはリュディア流を知り尽くしていればよく分かる。

(なに、なに、なに、なににしたの!? ルキウス、なににしたの?)

まったく勝てる気がしない。

それで、イオは木刀をおろして、つぶやく。

「もう君には教えることが、ただの一つもない。勝てる気がしないよ」

セスクはムスツとしたが、ルキウスが慌ててとりなす。

「セスク、叩きのめすことがいいことではない。相手が降参したら、もう追い詰めてはいけない。ヴァンダルが闇雲に戦っているわけではないことは話したろう？ 勇猛であることと、相手を殺した数とは違う。族長は相手の命を奪うことを望まない。流した血の量を誇るのはいさよ。ヴァンダルが信用されるのは、恨みを買わないからだ」

考えてみれば、セスクをルキウスに預けたのは、ルキウスが真にリクトルの副官に相応しいだけの人格者だったからなのかもしれない。

「おいおい、イオ、ここにいたのか。なんだセスクもいるじゃないか」

そうのんきな声をかけたのはパントで、横柄な感じで気安く話す。

「そうか、セスクはヴァンダルの特訓を受けているのか。これは手強いな、しかし、これはちょっと反則じゃないか？」

「なに言ってんだよ。こんなにチビなんだよ？ あたしよりも小さいし、13才だよ。これぐらい許してよ。それにこの訓練は果たし合いのためにしてるんじゃないよ？ リクトルさまを守れるだけの力をつけるためだよ？」

イオが抗弁するのに、パントは困ったように苦笑いをする。

「こっちだって近衛兵団のプライドを背負っているんだ。負けたらレイが首になるかもしれない。おれはあの人の下にいることに満足しているんだ。あの子はああ見えても、自由にやらせてくれるんだ。エマが口うるさいのもあるんだけど」

その名前が出てくると、イオはどうしても微笑んでしまう。

(あの紙風船、役に立ってるんだ)

ああ、エマと他愛もない話をしたいなあと、思えてきてしまって困る。

42. パントとセスクの御前試合、レトが反旗を翻す

大きな銅鑼の音が響くと、木刀を構えたセスクとパントが進み出て、観兵所の大観衆の前で一度切っ先を合わせた。

大柄なパントは長い木刀を選び、セスクは小回りの効く短いものを持つ。

イオはセスクの構えを見て、脇に踏み込むつもりだと理解する。ルキウスがなにを教えたかは知らないのだが、同じリュディア流の使い手として、セスクが想定している一連の型と流れが理解し過ぎるほどにわかった。

受け流して、接近戦に持ち込む。

リーチがなければパワーファイターは強みを発揮しづらい。

どれだけルキウスは近い間合いでの戦いを叩き込んだのかとってしまうのだが、そもそもルキウスは近い間合いが得意な剣士ではないのを思い出す。こんな接近した剣の型が存在するのはリュディア流ぐらいだ。だからこれはセスクがルキウスとの稽古の中で独自に編み出した戦い方なのだ。

身体と身体が接するぐらいの距離でセスクは素早く剣を合わせて、パントが見舞う体当たりやら、足払いを交わしていく。ぴょんぴょんと軽業のようなステップを踏んで、その身体にまとわりついて剣を叩き込むが、それは容易に跳ね返されてしまう。

(パントってこんなに強かったんだ……)

セスクが豊富な手数で圧倒的な不利に追い込んでいるにもかかわらず、押し切れる気配がない。

両者の攻防はもう永遠と思えるような時間まで続き、お互いが肩で息をし始めた。

一時間は経っている。

次王が立ち上がった。

「双方やめ！ この勝負はおれが預かる！」

それで、静寂を保っていた大観衆がさわぐ。もっと見せてくれ！ もっと見ていたんだ！ 次王は観兵所の土まで降りていき、荒い息をするパントとセスクに、声を掛ける。

「どっちも強かった。お互い強い。だけれどもこれ以上続けると、怪我をする。おれにはどっちも大切だ。だからこれ以上お互い強いことを証明する必要はないと思う」

観客席は騒然としているが、次王はそれを清々しく見上げて、

「ここにいる皆の士気が高いことはわかった。ただ、どっちが優れているか優劣をつけることには意味が無いんだ。だいたい互角である、それで不満か？ もしもっと見たいならば、次は団体戦にしよう。近衛兵団とボルニアから5人ずつ代表を出して、1本1時間、5本勝負にする。どっちが優れているかをたった一人に負わせるわけにはいかない」

観兵所は騒然とするが、聞こえてくるのは誰を出すのかという前向きな声で、それでイオはほっとする。

「鉄鎖の次王よ！ 騎士団から出してはいけないのか！」

聖楯の面々が固まっている付近から声が飛ぶ。

「われこそはと思うものを出せ！ それはボルニアも同じだ！ ログス、レト、ヴァンダル、部族は問わない！ 今回はたまたま近衛兵団とレトだったが、所属は問わない！ レイ！ エステバン！ エストの人选を頼む！ リクトル、おまえがボルニアから5人を選べ！」

イオは次王の数万人の人々の心を掴む術に感心し、次王がセスクの側に歩いて行くのを見ていた。

「パント、よくやった。これほど強いとは思わなかった」

肩で息をするパントは汗だくで、いいえとつぶやく。

「こ、こんなに強いとは、おもい、ませんでした……。これが、ボルニア流ですか？」

「いや、リュディア族に伝わる剣技だ。イオもそれを使うが、イオによればセスクのほうが強いらしい。お

れにはちんぷんかんぷんだ」

パントの目の前で顔を覗き込む。

「どうだ？ ルキウスと稽古してみないか？ あいつは強すぎてヴァンダルに相手になるやつがない。それで、不満を持っている。正直に言うと、エストにも強者がいる。エステバンが相手になってもらえれば、それはいいが、あいつは重職だ。騎士団長に稽古をつけてくれなんて言えない。お互い腕を上げるいい機会になると思うのだが」

パントはふっと笑う。

「あなたはそうやって部族を鍛え上げてきたのですね？ 悪い話ではないと思いますので、レイの許可を取ります」

「そうしてくれ。それから、セスクの近衛兵団への面通しも頼む」

「わかりました」

そうやって、次王はもろもろの手続きを終えると、セスクの肩をたたいた。

「誰もがおまえが強いと認めている。顔を上げろ」

今にも泣き出しそうなセスクの背中を叩いた。

「おまえは強かった。負けなかった。誰も予想もしていなかったことだ。それにはおれも含まれる」

それがきっかけでセスクは堰が切れたように号泣し始める。

「ぼ、ぼ、ぼくは勝てなかったんです！ ルキウスにあんなに時間を割いてもらったにも関わらず！ ぼくがレトを背負わなければいけないのに！」

正直この子は、真剣に背負い込みすぎる。

それで次王はセスクを担ぎ上げ、肩車して、その小柄な姿を大観衆の面前に見せる。

「セスクは、近衛兵団筆頭のパント相手に一步も引かなかった！ レトの勇者だ！ こんなチビがここまでやれると思った奴がいたなら、いま声を上げよ！ 優劣はつけがたい勝負だが、お互い強かった！ それはセスクも強かったということだ！ おれはセスクを近衛兵団にも紹介するし、リクトルの副官として、ボルニアの重職につける！」

それはレト族にとって、素晴らしいことのはずだった。

「ヴァンダルの次王よ！ 異議がある！」

その声がした方向を見て、レトの次王は苦虫を噛み締めた。

「言ってみろ！ おれはだれの発言も拒まない！」

「それは人質じゃないのか！ セスクは次の族長を任せるだけの逸材！ なぜそれをヴァンダルの下につける？ セスクはレトのものだ。なぜおまえが決める？」

すぐ近くに座っている色男が届かない声で、すみませんと呟く。

レトは割れている。

そのレトの次王の対抗候補として、この御前試合はセスクを浮き上がらせてしまったのだ。そもそもセスクは色男にどっぷりなので、本人が話せば、反対派の目論見がまったく意味が無いことがわかるのだが、セスクは13才だ。

ふいにレトの次王を見ると、怒りで溢れかえらんばかりだった。それが自分に対する怒りなのか、部族に対する怒りなのか分からないのではあったが、おそらくその両方だろう。

あまりにもその怒りが痛々しくて、イオは同情する。

(ここまでの好条件を取るまでどれほどの苦勞をしたと思っているんだ！)

そんな声が聞こえてくるようで、その心の震えにイオは圧倒される。

それでもその怒りに必死に堪える姿にイオは、不覚にも心に響いた。

だれもが必死に新生ボルニアを作ろうとするイオトコなのだ。

「おまえの責任ではない！」

鉄鎖の次王が誰に言ったのか分かるのはイオとレトの次王ぐらいだが、それで、鉄鎖の次王にころが戻る。

「イオ！ あいつを呼んでこい！ まだ書庫に籠ってるだろう。おれはレトには信望がないが、あいつには信望がある。レトもリュディア抜きにはまともな交易を出来まい。リュディアがレトへの支援を打ち切るといえば、レトはなんにもできなくなる」

こんな攻撃的なことを言ってもいいのかと思うのだが、イオは仕方なく、古城へと向かった。

※

古城に向かう前にイオは習慣的に状況を書面にまとめた。

兄貴に強制された習慣で、それが理に適っていることは、イオも理解していた。そして朱の文字で「紙の在庫がなくなります！」と書いたところに二重丸を引く。

レト族が賛成出来ないとすると、当然に交易をボイコットすることになる。駆け足で古城に向かいながら何度もその書面を読み、確かに伝えたい事が書いてあることを確認する。

地下書庫に行くと、そこにはエマがいた。

「なに、してるの？」

「あ、イオ。それはこっちの台詞だよ、なにしに来たの？」

「なにって、あたしは、次王さまの伝令があって」

「あ、そうか！ オヤカタさま！ イオですよ！ イオが会いに来ました！」

けったいな呼び名で兄貴を呼ぶエマを尻目に、

「ひまなの？」

「いやねえ、どうもさこの書庫の書籍がアイギスの中でもとっても重要らしくてさあ、しらなかったんだよ、近衛兵のくせに。それでさあ、わたしも勉強しているんだ、サウス語とかをさあ」

にわかには信じられなかったが、実のところ、将来この書庫を利用したいとおもう人を助ける役にエマがなることは、イオも想定していなかった。

「なんで、果たし合いを見てなかったのさ」

「あんなのどうしようもないじゃない？ どっちが勝つかなんて興味が無い。パントが勝った？ いちおう同じ近衛兵団だし」

「いや、引き分け」

「引き分けってなに！ 最後までやらなかったの？」

「やらなかった」

むくれた表情をするエマを見ていると、ころが落ち着いてくる。

「イオじゃないか、なにがあった？」

慌てた兄貴に書面を渡すと、それを素早く読んで、朱い所で苦笑いをする。

「どうしたら良いと思う？」

イオはしばらく我慢した。

「宰相はあなたです」

「おっと、そうだった。これは代替できる組織を見つけないといけないね。レトの代わりなんていないし。レトは何割が次王に従うだろう？」

「さあ」

「通貨の管理は近衛兵団でやれるだろう。それはレイに掛けあってみる」

この人は本狂いさえなければ、おそろしく有能なのに、なぜか本の山を目の前にすると、それ以外のことに目が行かなくなってしまう。

兄貴は観兵所までの道すがら、イオに丁々発止の議論というかレクチャーをふっかける。

「レトはそもそも、中継点とそこから伸びる交易路で構成されている。つまり、実際に運んでいる者たちが重要なのではなくて、中継点がどれほど優秀であるかで、隊商の成否が左右される。主役は交易路なんだ。もし誰であっても安全に運べる交易路が整備されていれば、運ぶものは誰でも良くなるだろう？ だからレトとリュディアは協力して、交易路、とくに中継点の整備に注力している」

「ではレト族は重要ではないのですか？」

「それは違う。なぜならば、交易路はまだ十分に安全なほどには整備されておらず、交易するものは危険を犯すことになるからだ。中継点は安全で、そこにいることは誰にでもできると思われる。しかし実際にはそうではなくて、中継点こそが危険なんだ。富が集まる地点ほど危険なんだよ。それはわかるかい？」

イオはしばらく考えるが、危険なのは分かりますとつぶやく。

「だから要害とする。アイギスを見ていてわかったよ。あ、いや、エストかな。エストは難攻不落のフィヨルドにある城塞都市を航路で繋いだ連合国家だ。もしレトが利用する交易路が、この要害の連続で構成されていれば、レトは常に要害にさえたどり着ければ安全であるという認識で交易ができる。ただ、こんな要害を作るには人手が必要だ。いまの第2軍を総動員しても造り切れるものではない。国を挙げた事業になる。だからそれは正規の王になってからの仕事なんだ」

この人はなにがしたいのだろうとイオが思ってしまったのは仕方ない。

リュディアの次王であり新生ボルニアの宰相を自認する兄貴は、あまりにも大きな将来のビジョンを語っていた、つまり宰相の仕事をしていたのである。

あまりにもはつらつと自由に語り、そのグランドデザインをしていく姿に、イオはわからないながらも思慕の念が湧く。それでもあわてて首を横に振る。

「いえいえいえ、そうじゃないんです。紙です。紙が尽きます！ なにか考えてください！」

イオはそう言ってしまったあとに、ずいぶん勝手なことを言ってしまったものだなと思ってしまった。

リュディアの次王が観兵所に姿を現すと、騒然としていた場が静まった。

兄貴が右手に握る錫杖が、誰の目にも明らかだったからだ。

イミテーションの宝石を散りばめた模造の杖であるが、それが何故か兄貴がボルニアのエメラルドの流通を管理している象徴として見られている。つまりボルニアの富の管理者である象徴として、そのまがい物の杖は見られていた。

兄貴はイオを伴って、観兵所の真ん中まで歩いて行き、万座の市民やら、兵やらを見上げた。

「イオから報告は聞いた！」

びっくりするほど通る声だった。

「レトに問う。セスクを重職につけることは人質に等しいのか！ わたしはイオを鉄鎖の次王の副官につけるのを承諾したが、イオが人質だと思ったことはなかった。それどころかイオはヴァンダルとリュディアの関係をとりもつ＜かすがい＞になった。イオを通せば大体の意見は鉄鎖の次王に通る。これは便利だ」

簡潔極まりない。

「あなたはレトをいのように使うつもりじゃないのか！」

そこで叫ばれたのはレト族の劣等意識である。たしかに武力のヴァンダルと、知力のリュディアをも前にすると、レト族が霞むように見える。毅然と答える。

「リュディアが一度でもレト族を侮蔑したことがあったか！ ヴァンダルも同様だ！ 鉄鎖の次王がいつレトの次王を軽視した！ 一生変わることのない友情が3王の間にはある！ あなた達はそれが信じられな

いのか！」

正直言うと、それはレトの次王でも信じきれなかったことではある。

だから、族長でないものにそれを求めるのは酷なのだが、この時の兄貴は神がかった。徹底的な敗北をたたきつけられない程度に論点を突っ込んでいき、再考を促すような話し方をした。

しばらくしていると、兄貴の目論見どおり（たぶん）、話し合いが膠着状態になる。

「あなたの話には、考えるべきところがあることが分かりました」

兄貴は頷いて、冷静に話し相手を見る。

「もう一つ考えてほしいことがある。それは紙の輸送だ。リュディアの集落から運べるのは現時点ではレト族しかいない、運ぶ方法はレトの次王に確認している。これがなくなると、いっさいのリュディアのできることは止まる。つまり紙がないとリュディアは仕事ができない。それにはレトの交易のサポートも含まれている。もしレトがこの仕事をサボタージュしない条件があるならば即刻教えてほしい。リュディアが止まってしまう」

しばらく考えて、レトから出てきた言葉は驚く内容だった。

「この包囲から、アイギスを解放して見せてください。それでレトは従うべき王と認めます」

43. 近衛兵団の反乱、それからの作戦会議

それから真っ先に起こったのは、アイギスの近衛兵団の反乱だった。

一部の近衛兵が、アテナイスを拉致して、古城に立て籠もる。

「近衛兵が反乱しました！」

この速報はアイギス中を駆け巡って市街を混乱に叩き落とし、イオは次王について古城へと向かう。

「やつらは、いったい何がしたいんだ！」

「それを聞きに行くのでしょうか？」

イオが冷たく答えると、次王はとたんに冷めて、イオを見る。そのまじまじと見る視線が、おまえは冷静だな、と聞く。

「そのとおりで」

(その為に置いているんじゃないのですか?)

次王は言葉に困る。

たぶんイオと次王の間に超えられない境界が、どこかにあるのだ。

次王は情に厚く、冷酷にはなりきれない。

部族を、家族を滅ぼされたイオには、そもそも温情なんて考えるような余地はなかったけど、この王には暖かさが残っている。それはイオが退避したシェルターだったし、この王がいなければイオはどんな暴挙に出たか知れない。

手首に残った体温は、ついあっち側に行きそうになるイオを引き止めている。

「アテナイスさまはどうしますか、見捨てますか？」

イオはいたって冷静なつもりだが、ついアテナイスはいらないものだと思ってしまう。

次王がしばらく睨みつけるのを見て、イオは理解する。この人はアテナイスを自分の人生に取り込んでいて、それなしでは生きていけない。

「そうすると難しくなります。奪還しなければいけないのですから。作戦が一つ増えます」

「おまえはもっと冷静だと思っていた」

「冷静なつもりです」

取り繕うが、次王はしばらくだまり、激しい怒りをイオに向ける。

そうさ、あたしは冷酷さ！

アテナイスなんて、殺されてしまえばいいんだ！

なんで、あたしが次王さまのそばに居て、それを支えてはいけないんだ！

何もかもをしてあげたじゃないか！

キュディアの調略も、次世代のボルニアの陣容も、リクトルさまも副王にしたし、エストの次世代たちとも関係を作った。これ以上なにを望むんだ！

客観的に見ると、これはイオに権限が集中したために生まれた弊害で、イオの主張も正しく、それでいてボルニアの指揮系統と外れているので、極めて厄介なのだが、レトの次王が賢明にも危ないと指摘していたのはこれなのである。

次王はしばらく考えて、古城の城門の前でレイを捕まえた。

「おい、どうなっている？ 近衛兵団がおまえの指揮に従っていない。重大な規律違反だぞ」

次王の慌てぶりに、レイはきょとんとする。

「何かあったのかい？」

「すみません、あたしが悪いんです。次王さまはアテナイスさまが絡むとどうもこうなっちゃうのをつい忘れてしまうのです」

それでレイはなんとか理解して、苦笑いをする。

「イオ、すまんね、これは近衛兵団の不祥事なのに。エマ！ 仕事をしろよ！ イオぐらいにはなれ！」

側に控えている親友を見て、イオは申し訳なくなってくる。

「わたしさあ、次王さまのこととかわからないし、イオがやっていることは、とても難しいことに思うんだよね。だからさ、わたしはイオにはなれないよ」

それが、断絶の言葉のように、イオには思えてしまった。

イオはおそらく孤独だった。

「なんで、そんなこと言うの？ あたしはエマを親友だと思っているのに！ エマ！ 書庫の管理をするんでしょ。兄貴にとってもたくさん教わるんでしょ。たくさん言葉を覚えるんでしょ。なんで、エマはあたしと一緒にいたくないというの？」

ぼろぼろと涙が出てきたが、それはイオの自分勝手だ。

それでもエマには響くところがあったようで、沈黙が続いた。

「わたし、コンプレックスなんだ、学がないの。貧乏だったからさ、基本教育も受けてないんだよ。学費が払えなくて。でも近衛兵は志願すれば、それだけで学べるだけのお金をもらえる。お金をもらって、それで親に仕送りして、それで学べる。だからわたし近衛兵になったの」

「でも、それで勉強したんでしょ？」

「そう、そうかも、でも、違うかな。お金がないと本が買えないの。学ぶべき本が買えないの」

簡単に言うと、イオには信じられないことだがエストには図書館という概念がない。

つまりイオが潤沢に使ってきたリュデュアの学ぶ環境がないのだ。

エストではお金持ちしか学ぶ環境がない。

これをアイギスに整えつつあるのは、エマがオヤカタと呼ぶリュディアの次王で、たぶんイオにしたようにエマに文字の読み方を教えたのだろう。それで、エマはこのオヤカタさまを救世主のように感じている。

変則的な経歴を経るのだが、エマはこのアイギスの書庫の主、そして代役のアテナイスの最良の相談役になるのである。

――シドとエストは友好国である。

これがまず真っ先につきつけられた言葉だった。

次王が古城の城壁までの長い階段を登って、結局降ってきたのは、この言葉。

「レイ！ これは近衛兵団の総意か！」

「いえ、2割もないでしょう。正確な数は把握していません！」

次王はしばらく考えたが、アテナイスを人質に取られていることがこの王の判断を鈍らせた。イオはふと城壁の上に見知った顔を見つけて驚愕する。

「パント！ パント！ あんた、なんでここにいるの!？」

申し訳なさそうに顔を背けるが、パントはそれでもイオを見る。

「現状が分かるか、イオ？ エストはここ数百年巻き込まれたことのなかった戦争に巻き込まれている。シドとエストはシド建国以来の友好国だし、そもそもこれはボルニアの私戦じゃないか！ なんてそんなものにエストが巻き込まれなければいけないんだ！」

あまりにも的確な指摘にイオはぐうの音も出なくなる。

ボルニアの南進政策はキュディス・トランと事を構えないための政策ではあるのだが、それよりもボルニア内の内輪もめを帳消しにするために取られている政策であることは否定しきれない。

「シャーロットか？ そうだな、それは理解する。だが、ボルニアが荒れれば、おれよりもひどい暴君が侵略してくる。それをおれが防ごうとしているというのは理由にはならんか？ おれがエストにしてきたこ

とは非道だったか？」

次王が絞りだすように聞くと、パントは答える。

「い、いえ、そのような、こと、決して。鉄鎖の次王は常に公正であり、アテナイスさまの信頼も厚く」
「それは永久に変わらないと、約す。もし、公正でないとおまえが思ったのなら、遠慮なくおれを刺せ。許可する。そうすればおれはおまえに会うたびに自分を戒めなければならないことを思い出す。おれは愚かになりたくはない。それを一番怖がっているのはおれだ」

次王は片手を上げて、ありがとうと呟き、古城の前から立ち去っていく。

イオはそれに付き従うしかなかった。

※

次王は聖堂まで帰ってくると、どっかと床に腰を下ろし、盛大にため息をついた。

付き従ってきた者達はそれに続いて車座になって石の床に座り、しばらくしてリュディアの次王とレトの次王が加わった。レイ、エステバンが苦々しい表情をして、その双方をエマが心配そうに眺め、イオはそわそわという。

「あの、リクトルさまは」

「そうだな、リクトルも呼べ。至急だ。あいつはもう十分に動ける状態になっていたよな？」

「あ、はい。もう医師たちは治療するところはないと」

それで、聖堂の外まで走って行き、街路に出て竜笛を吹く。翼竜が上空から舞い降りて、イオが結びつけた文を携えて高く舞い上がっていく。

(セスク、初仕事だよ)

イオはこの小柄な少年に教え込んだ日々を思い出す。大丈夫、きっとできるはず。

ちょっとした有名人のイオはアイギスの市民に遠巻きにされるが、しばらくして返信の翼竜がやってきて、その文章を読む。

「リクトルさま、向かってます。どうも要塞にいたようですが、時間がかかります」

聖堂の面々に向かって言うと、エステバンがまず口を開いた。

「とても申し訳ないことをした。我らがありながら、近衛兵団の離反を許してしまうとは。自分への怒りしか浮かんでできません」

「エステバンさま、これはわたしたちの不祥事です。罪を負うのはこのエマです。なぜ、エステバンさまが謝らなければならないのでしょうか？」

それを聞いて、この紙風船は、あんがい苦勞をしたのかもしれないと思ってしまう。

考えてみれば、近衛兵団と騎士団という相反する組織の連絡役をしているのである。いつものふわふわしたい加減さでは捌けないこともあるだろう。

「エマ、いまはどっちが悪いかを競うときではない。どうすれば解決できるかを話し合う時だ。それはわかるな？」

次王が仲裁すると、兄貴が口を開いた。

「忘れてならないのは、近衛兵団が野ばらの姫君を開放する条件として挙げたのが、このアイギスの包囲を解けたらということだということです」

「それは、飲めない。そんなことはおまえも分かっているのだろう？」

次王の言葉に兄貴は頭を垂れる。兄貴が口を開かないので、次王は苛立たしげに言う。

「ボルニア同士で戦えば必ず兵が減る。もちろん連合軍には勝てるかもしれない。だがそれは連合軍の膨大な犠牲を看過すればの話だ。ボルニアはシド侵攻を予定している。そうなれば、兵を失い、恨みを互いに生む直接対決は絶対に避けたい。おれたちに求められているのは、いっさい交戦することなくこの包囲を

解くことなのだ」

次王はしばらく黙って、それから言った。

「そうだ、これは私戦だ。エストには関係ない。だからこの戦いにエストの兵団を動員することはしない。近衛兵団と騎士団にはこのアイギスの留守を守ることにしか命じない」

「イオ姉！」

少年の甲高い声が響くと、車座になった場はだいぶ和んだ。

「リクトル、来たか。座れ、いま軍議をしている。おまえは第2軍の総司令官代理をすることが予定されている。心して聞け」

リクトルはいそいそと石畳の上に座り、それでどうなりました、と聞く。

「何も決まっていない。ただこうなったらイオの案しかないかもしれないなあ」

「なんですかそれは？」

次王はちらりとイオを見るが、ため息をついて、話せない、と呟く。

「兄者、そのキュディスとの密約だけが謎なんです。なんでキュディスの黒の兵団はボルニアの南進政策を支持したのですか？ いえ、キュディスはボルニアが南に向かったほうが嬉しいに決まっている。だけど、なんでそんなに簡単にキュディスは呑んだのでしょうか。なにを呑んだのですか？」

兄貴の言葉に、次王は黙る。兄貴の視線はイオにも向くが、話せることはなかった。

「レットは、レット族は、もしこのシドとの全面戦争が勃発したら、全勢力をこの戦いに投じることはできるか？」

怖いのだ。

この王は、火蓋を切ってしまうことを恐れている。

レットの次王はしばらく考える。

「レットが全て従うことは約束できませんが、わたしは従います」

次王はしばらく頷いて、それで充分だと呟いた。

44. キュディスの否決、古城の近衛兵団との交渉

きっかけを作ったのは、黒衣の兵団長だった。

いつの間にか影のように聖堂に入ってきたその男は、冷静沈着に言葉を発した。

「否決された。それで帰ってきた」

誰もがその姿に驚いて振り返り、まったく忘れていたことにびっくりする。

「キュディスの結論は否決だ。だが、喜んで欲しい」

「否決ってなんですか！ あなたが行っておきながらなぜそうなるんですか！」

「イオ、落ち着け。キュディスの総意だ、それは飲もう」

このとき誰も冷静ではなかったのは確かだ。

それは次王も装ってはいても冷静でなかったことは、否定しがたい。

それでもイオには自分の案が拒否されたという悔しさが、判断を致命的に狂わせていた。

(次王さまが、もうこの案しかないと言ってたじゃないか！)

兵団長は落ち着き払って、場の面々を眺めた。

「……うむ。言いたいことは分かる。だが、もう少し話を聞かないか。否決はされたが「我々は」勝手に行動することを許された。つまり少なくとも黒の兵団はなにをしてもいいということだ。それは戦闘に関わってもいいということだ。これはおそろしいほどの譲歩だ。破格の譲歩だ」

つまり黒の兵団は使える、あ、いや違う。黒の兵団と交渉は出来るということだ。

果たして黒の兵団はどんな役に立つのだろう、あ、いや違う、どんな提案ができるのだろうか？

未熟な策士はどうしても視野が狭くなる。

それを拡張してくれるのは兄貴なのだが、兄貴は別件でいっぱいだった。

「そういえば、リュディア族で脱出できたのはおまえだけなのか？ 他の姿は見ない」

「え、ああ、たまたま、紙の補給をする手はずを整えている最中で、たまたま城外にいたのですよ。ですが、古城内の者が、リュディア族を人質に取るとは考えにくいのですが」

「そうだな」

ボルニア国内では最大のプレゼンスを誇るリュディア族ではあるが、アイギスにおいては地下に籠ってなにかをやっている人々にすぎない。そもそもやっていることは写本といういたって無害なことで、それを進めてくれればアイギスの価値が上がるので、エスト側から止める理由は一切ない。

ただ、族長である兄貴がリュディア族をそのままにしておくことはできないので困る。

ボルニア唯一の宰相が別件に掛かりっきりになってしまうのである。

「やっかいだな」

次王が危惧する。

「やっかいですね」

兄貴が、救出しなければならぬ大人数を思って言う。

「やっかいです、なんとかならないんですか！」

これはイオだが、兄貴の助けが得られなそうである。

「いちばんやっかいなのは、あなただ、黒の兵団長。わたしの見立てが正しければ、あなたは知っていることの全てを話していない。そうではありませんか？」

これは後に正しかったことが分かる。

レトの次王が睨みつけると、兵団長は睨み返した。

「なんだ、おまえはキュディスを道具に使うつもりか！ 協力はするといっているのに！ 一切の約束を即座に反故にしてもいいのだぞ！」

しばらくにらみ合いが続き、レトの次王はだいぶ経って降りた。

「失礼しました、失礼であることに気づきませんでした。無礼をお許し下さい」

だいたいボルニアの中枢は大混乱に陥っていたのである。そのタイミングを見計らってさり気なく、重要な事を重要なことを隠して告げた。もうこの時点で負けている。

兵団長の表情がふっと緩む。

「わたしもこの立場をそろそろ後進に引き継がなければならない年齢だ。年を取ると頑固になって困る、それは謝ろう」

結局のところ、この問題は無難に丸められてしまい、振り返ってみると、老兵のしたたかな交渉術の凄みだけがひかるのだが、北方最強のキュディアスの諜報機関の長である。ぽっと出の蛮族の3王がいかに優れた才能の持ち主であったとしても、すぐに敵うようになるものではないのだ。

これが生きてくるのは、シドという最強の文明国にぶつかってから。

ボルニアはシドとぶつかる前に、キュディアスという最強国との外交交渉でぞんぶんに鍛えられていたことになる。

どんな英雄であっても始まりはこのようなものだ。実績のある連中とのやり取りの中で鍛え上げられていく。

「そうだ、分かったよ。イオが何を提案したのか」

唐突に兄貴が言う。

イオは何を言いたいのかしばらく困っていたが、兄貴がなんのヒントもなしにイオがキュディアスに提案した考えに気付いたのかもしれないと思ってびっくりする。

「それはいい手だね。というかそれしかない。イオ、よく思いついたね」

黒の兵団長がぎょっと兄貴を見るけど、兄貴はにこにここと笑う。

「これは話せないよね」

「なに、なんだよ兄者？ オレだけ、のけものじゃないか」

兄貴はふふと笑い、

「気付けないことがいいことなんだ。逆に言うと気づかれるとまずいんだよ」

おそらくこの兄貴はだいたい読み通している。

だいたいこの人はにこにこしている時が一番怖いのだ。

レトの次王はその笑顔を不満気に睨むが、結局一番冷静だったのはこの男だった。意味ありげな兄貴の笑みを頭から振り払い、静かに現在置かれている状況を考えはじめる。

「まずはこれは、アテナイスの意思ではないと考えていいか？ 望んで捕らわれているのではないと？ 考えても見ろ、もともとエストにはシドと親しい商人たちがいた。ボルニアの南進に反対する連中がいることぐらいわかっていたはずだ。あの得体の知れないお姫さまのことだ、仲裁を買って出ているなんてことも考えられる」

「アテナイスさまは絶対中立なお方です！ そんなことがあるはずが！」

レイの言葉に優男は静かにうなづく。どうもこの男は自分の理解の範疇外にあるものに疑いを持つ性質のよう。おそらくそれはしたたかな商人として必要な素質で、イオが無邪気すぎると思ってしまうボルニア中枢にいてもらわなければならない存在なのだが、こうやって端から端まで疑ってかかられると、角が立つ。

レト族が嫌われるのもそういった理由だし、この次王は族長でありながらレト族に嫌われているのだから、折り紙つきの疑り深い性格なのだろう。

「ではそれをアテナイスさまから直に言ってもらう必要があります。そのためには」

「古城を包囲するしかないな」

優男の視線を受けて次王がつぶやく。

「ただ、ボルニアの兵はエストと事を構えるわけにはいかん。レイ、さっき八割がたの兵が近衛兵団に残っているとっていたな？ それで包囲することはできるか？ 戦う必要はない。逃げ道がないことをわからせればいい。そしてアイギス市民にどちらが正当であるかを理解させる。そうなれば野ばらの姫を出さざるを得なくなる」

次王が視線を向けると優男は頷く。

この非凡な王を通すとすべてがシンプルになる。

「もしレトの言うとおりにアテナイスが仲裁を買って出たのならば、必ずシドと戦うことを取り上げてアイギス市民の総意を聞く。エストが駄目だといえど駄目だ。南進は諦める。もしそうでないようであれば奪還作戦を敢行する」

「第2軍はどうする、兄者？ 兵を遊ばせておくわけにはいかない」

リクトルの言葉にしばらく考え、

「不測の事態も考えられる、要塞に戻って、いつでも出陣できるように。それと、リュディア族の奪還の手はずは整っているか？ レイとよく話せ」

「はあ、ここまでずっと順調だったのになあ……。でもまあ、取り戻せない遅れじゃないかな、書庫を燃やすなんて暴挙に出ない限り」

「兵団長！ ここはわたしにやらせてください！」

とうとつなエマの言葉にレイはびっくりとした。

「な、なんだ、エマ唐突に？」

「書庫を！ 書庫を守らなければ！」

レイはきょとんとするが、思い至る所があつて、呟く。

「そういえば、おまえは奨学生だったな……。ぶっちぎりの優等生だとは聞いていたので、どんな面倒くさい奴が来るのかと思っていたら、来たのは……、」

紙風船だった。イオはどうしてもおかしくて、微笑んでしまう。

「あー、イオ、また馬鹿にしたな！ 言ったじゃないか！ お金がなければ、勉強する本が買えないんだよ！ あの書庫は誰もが無料で好きなだけ勉強することが出来るんだよ！ なんてそれを大切に思っているの？！」

イオが誤解していたのは、この親友はおそろしく覚えが速いのではなくて、学ぶべきことにひたすらに飢えていたということだ。

おそろしいほどに学びたいと思っているのだ。

「エマ、あの書庫は大切なんだ。この北方大陸どころか、帝国にさえもない書物を所蔵している。だから写本しているのだし、それをエマが手伝ってくれるのをうれしく思っているよ。そのエマが近衛兵団と交渉してくれるのは嬉しい」

「オヤカタさま！」

だから、その呼称はやめろ、とイオは思ってしまうのだが、温和な兄貴はそんなことは気にも掛けない。イオは兄貴が取られたように感じてしまい不機嫌になるのだが、これはイオも含めたりュディアの子どもたちが受けてきた恩恵だ。あの子たちが来てくれると助かるんだけどなあと思う顔がいくつも浮かび、スクールに入校したてではしゃぐエマをイオは懐かしく思う。

(あたしもあんなだったなあ……)

アテナイスは外の軍靴の音を聞いていて、どうも何かが起こったと気付いた。

自分のプライベートルームの前を前を守っていた衛兵が、足早に階下に下って行き、想像はしがたいのだが軟禁状態を保っていた兵がいなくなっているように思える。

(なにが起こったの？ 重大な規律違反じゃない)

アテナイスはまずは広い部屋を歩いてランタンを探した。それから、フリルのワンピースを脱いで厚手のズボンに着替える。護身用のナイフは必要かなと考えて、やはり先代から渡されたナイフを持っていく。

(あのひと、子供のようにわたしを失うことを怖れるから)

アテナイスの心中にあったのは、鉄鎖の次王が取り乱すのではないかということだった。

いちおう歴代アテナイスの訓練の中には護身術というものが含まれている。正式の兵としての訓練を受けたものに敵うものではないが、野盗や無法者から身を守るには十分な訓練だ。これから向かう先にそれがあるとは思えないのだが、それでも用心は必要だ。

それでランタンに灯りをともすと、暖炉の底床を持ち上げて、地下通路の梯子に足を掛け、発見を遅くするために底床を元に戻す。

それで、永遠の闇が迎える。

乏しい明かりで照らして、蜘蛛の巣だらけの狭い通路をひたすらに下っていく。

この通路は歴代アテナイスにしか伝えられていないもので、アテナイス自体この先がどうなっているかはまったく知らない。それでも、先代に注意深く教えられたときには、少女ながら、ふしぎなものがあるものだと思った。まさか、そんなものを使う機会が来るとは思っていなかったし、梯子をずっと降りるのは、体力的につらい。

しばらくして地下水路にたどり着き、石造りの構造と匂いを考慮すると、下水道だろうと思う地点にやってくる。

ランタンを照らすときらりと反射する石が見える。

それに従って行くと、大河かと錯覚するような大下水道にたどり着く。

(これは湖から引いているのかな。この流量はそうとしか思えないし、とすると、これが湖面の高さだよ)

古城から主島に至る道は、どうしても湖底を通る。

そうなる、通路が湖水に埋まっていることを想像してしまうのだが、どうしてそれが避けられるのだろうか？ アテナイスにはまったくわからなかったのだが、サウスの流れを引くエストの土木工事は彼女の理解の範疇の外だった。

長い橋を渡り、対岸につくと下っていく階段がある。

(また、階段)

まわりつくワンピースを脱いできてよかった。

(あの人は喜んでくれないかもしれないけれど)

背に腹は代えられなかった。

(そもそも髪まで蜘蛛の巣だらけだし)

※

鉄鎖の次王が近衛兵団を率いて聖堂を出ると、心配げな市民が遠巻きに見守った。

重装の騎士団はだいぶ前の連合軍との湖水をめぐる戦いからアイギスの制湖権(へんな言葉だ)の確保が至上命題になっている。どのみちエスト各都市からの交易船が行き交いをし、アイギスを中継地点として交易をしている。つまりのアイギスの航行の自由が侵されることは、エストにとって致命的な事態であり、騎士団が湖面にと言うか、いつでも出動できるように湖岸に張り付いているのは分かりやすいことだった。

赤服の縦隊が次王に付き従って、古城のある島へと向かう石橋を渡っていく。

「しかし兵団長、面倒なことになりましたね？ 何かお考えがあるのですか？」

レイは縦隊の先頭でエマを睨みつけて、

「この作戦はおまえが指揮するんだろ」

「あ、ああ、そうでした……、どうしましょう……」

「するか、おれもこんなことはやりたくないんだ」

もしレイよりもエマが優れたところがあるとすれば、それはイオが築いた若手の人脈網にフリーアクセス出来ることだ。そもそもパントとエマはツーカーの仲だし、パント相手だったら友達感覚で相談に乗れる。

たぶん、エマは気付いていないのだが、事実上はシド派の武力部門に完全にフリーアクセスになっている。ようはパントが否とえばシド派は武力行使できないし、パントがシャーロットの安全が脅かされそうになって追い詰められれば、武力行使を敢行すると思われるのである。

だいたいパントはシャーロットのことしか考えてないので、考えが読みやすいのだ。

「あ、ああ、イオに相談しないと……」

ちがうだろ。

次王のそばに居て、この人はもっと取り乱すかと思ったらあんがい冷静だと、イオは思う。そもそもあれほどのアテナイスに対する執着心を見せられると、アテナイスが捕らわれている状況に落ち着いているのが異常に思えてくるのだ。

これは奇しくもアテナイスとまったく同じ見解で、アテナイスはだから帰ろうとし、イオはだからアテナイスを取り戻そうとしていた。

(この人が正常でないといかに困る)

鉄鎖の次王は、あろうことか恋をしてしまった。

この不安定な土地で、敵だらけの状況で、レトが反旗を翻し、エストのシド派が反旗を翻し、頼みの綱のキュディスが助けられないと言ってきた。あと頼れるのはなんだろう。

ヴァンダルは割れていないとして、リュディアは囚われていて、レトは半分が役に立たない。

ルキウスがここにいてくれればどれだけ心強いだらう。

ただその猛者はリクトル麾下で、第2軍の主力を担う。ここにいてくれというのは贅沢だ。第2軍はここにいるわけにはいかないのだ。

「イオ、どうする？ 近衛兵団は包囲はするけど、戦えないよ？」

軽いなあ……、と思いつつ、その親友が声をかけてくれたことに感謝する。

「次王さまがたぶん交渉するから、心配する必要ないよ。数が揃っていることだけ分かればいいから、赤服を相手から見えるように並べればいいんじゃないの？」

「そうか！」

それでいいのか、とおもうのはイオの勝手だが、着実にエマはそのとおりにしていき、それは実際にはイオの責任になることを看過していたことにイオは慌てる。

(いや、あんなに並べたら、弩兵の的だろ！)

慌てると次王が止めた。

「近衛兵にはリーズデルの軽量鎖帷子が行き渡っている。北方大陸の弩では射抜けない。デモンストレーションするいい機会だ。兜を深くかぶるように言え」

イオはそれをエマに伝え、鉄鎖の次王がほとんど無防備に見える姿で古城の城門に近づいていくのに、完全防備で付き従った。

鉄鎖の次王は一切の装備らしい装備もなしに古城の門の前に立った。

「アテナイスの城に閉じこもる者達に告げる！ この城は完全に包囲した！ だが、お前たちにも主張した

いことがあるだろう！ それをおれは聞きに来た！ おれは決して罰しない！ 武力制圧はしない。おれはお前たちがアイギス市民の同意を得られるかどうかどかを見ています！ おれはエストの総意に従う！」

しばらくして、城門の上に代表者と思われる男が立った。

「エストとシドの間の取引の量は膨大だ！ これが失われれば、アイギスの商人は膨大な損失を受ける！ ボルニアはシドの貿易量を甘く見ているのではないか！ 富の源泉だ！ それを敵に回すなど考えられない！ それが我々の主張だ！」

しごく良識的な見解である。

それに鉄鎖の次王は噛み付いた。

「なるほど、エストは海の航路と、大河の航路の国家だ、それは分かる。だがボルニアは陸の航路の国だ。ボルニアの主産物はエメラルドと紙だ。これはシドにも届いている。シドの書物のほとんどはボルニアの紙に依存している。シドで紙を見たらそれはボルニア産だ。これをアイギスを中継地としてシドに運んで欲しい。おそろしく儲かるはずだ」

城門に立った男は困る。

「戦端を開いて、どうして交易が出来るのでしょうか？」

次王は笑う。

「では、紙がなくてシドは成り立つのか？ 紙止をしたらいくら払うのだろう？ 莫大な額になる。いくらでも値を吊り上げられる。それはエストの商人が享受している恩恵だ。紙がなければシドは存続できない」この辺は頭の体操だ。

生存を脅かされるピンチに陥ったときにいくらまでは払えるのかと言う問題で、シドが本当に強い国であれば、代用品を簡単に生み出して何もなかったようにするのだが、このときのシドはそんなに強くなかった。その供給を絞るから暴利を貪れと言っているのだ。

「つい最近、近衛兵には軽量鎖帷子を配った。お前たちは受け取っていないかもしれないが、これはリーズデルの職人が作ったものだ。リーズデルからボルニアの首都までは2000キロ。これを運んだのはレト族の功績である。このおそろしく遠い航路をシドは持っているか？ たかだかラスペと帝都の間のみみっちい交易だろう。大スカイから、クローナ河までの距離も1000キロもない。そんなものに意味があると思うのがおかしい」

この王が怖いのは、平然と相手が把握していない地理情報を正確に把握していることなのである。

「ど、どうしろと？」

「シドとの取引がなくてもエストの商人が干上がることはない。ボルニア内の豊かな富を運ぶだけで充分これまで以上に儲かる。貴公らがボルニアを未開のジャングルだと思っていることは致し方無い。だが、ジャングルにも富はあるのだ」

しばらくして、城門の上に立つ者たちが話し合いを始め、聞こえはしないが激論を交わし始める。なかなか話し合いに結論が出ないようで、次王は笑った。

「では、アテナイスの裁定を市民に聞かせてくれ。それがアイギス市民が望んでいることだ」

よく通る声はシド派の近衛兵団には通ったようで、騒がしくなるが、しばらくして城門の上が騒然としてくる。

「どうした？」

交渉をしていた男が苦々しい顔をする。

「おれはそもそもおまえを信用していなかった。ジャングルの蛮族どもだ。お前らはあらゆる手をつくしてこのエストを貶めるのだろう。ならば、全滅してもこの古城を守りぬくまでだ。アテナイスさまを守るのが我らが使命。絶対にこの門は死守する」

それに次王はあぜんとして、イオをぼかんと見る。

「あ、いつらはなにを言ってるのだ？」

「さ、さあ」

次王はレイに包囲を続けろと言い、古城をあとにしようとする。

「ど、どうするんですか？ 指揮官はあなたです！」

「知らん！ これから考える。まず包囲を続けろ、おれは要塞のリクトルに相談に行く。指示があればエマに翼竜を飛ばす」

このとき、だれもアテナイスがまさか古城を抜けだして次王に会いに来ようとしていたとは知らなかったのである。

45. すべての状況の帰結

算を乱したように二人で聖堂に戻って来るなり、次王は怒りに任せてその大扉を閉じた。

通常であれば数人の衛兵で閉ざす扉もこの男の怪力にかかれれば一瞬である。すがんと鳴り響いた大扉の向こうで近衛兵が怯えていないか、イオには気がかりだったが、次王の怒りは無思慮なシド派に向いていた。

「あいつら、何も考えずに野ばらの姫を拉致している！」

確かに次王に対して交渉さえしなかったのだから、次王の妻として、アテナイスとして拘束したと言うよりは数合わせの人質に近いものであった可能性が高い。それが無性に腹が立つようで、おそらく自分の妻の尊厳を踏みにじったように感じているのだろう。

「どうするんですか？ カードは少ないですが」

「さあな、レト族はセスクを立てて現在の族長には従えないと言う。もし従わせなければこの包囲を解けと」指折るように次王は言う。

「近衛兵は説得できるかと思ったが、わけの分からないことを言い始めた」

このなぜシド派が硬化したのかが第2軍の当事者には最後までわからないのだ。

「そして、キュディスは否決だ。なぜ否決になったのかの説明もない。おれはイオの案は誰もが納得できる盲点を突いた案だと思う。それがなぜ否決されたのか」

なぜ理由がないのか、と言うのが実は重要な部分なのだが、このときのボルニアに分かるはずもなかった。「なにかないのか」

次王の言葉はもっともだが、もしこれほどまでに複雑な状況で助言をできるのであれば、イオは立派な副官であるはずだ。いや、イオは副官じゃないのか？

次王は床にどっかと座り、懐から取り出した絵図を広げた。それをイオも覗き込む。明らかに野戦をしようとしている。

「みろ、ここが第2軍の要塞、そしてここが連合軍の陣地だ。連合軍は要塞も包囲しているがほとんどの包囲兵をアイギスの湖の包囲にまわしている」

簡単な模式図の中にイオにも現在の布陣の様子が手に取るように分かった。

「そして、この要塞の裏門からは、谷伝いに連合軍の背後に出る間道が伸びている。この経路は手薄だ」

理路整然と説明する次王の姿にいやな予感がしてくる。

「突破できる。100騎もあれば足りる」

「馬鹿なことはやめてください！ そんなの犬死じゃないですか！」

「バーラルでは上手くいった」

「それは相手がエストだからです！ しかも不意打ちだったじゃないですか！ あの時だってリクトルさまの後詰がなければ正直厳しかったと思います！」

「今回も後詰は出せる」

イオは頭を抱えて悩む。おそらくイオは軍神に唯一意見ができる人間なのだ。しかしこれは、明らかに過去の再現を狙っており、もうすでにそういう手があることはばれているのだから、成功する可能性の少ないものだった。

明らかに鉄鎖の次王は冷静さを失っていた。それを指摘したかったが、指摘すればするほど追い詰めてしまうようで、イオはなんとも言いがたかった。

「イオは止める気なんだな？ それはなぜだ？」

しばらく考える。

「将を失った兵は弱いと、あなたが言いました」

「それはお前が解決してくれたじゃないか。おれが死んでも、副王のリクトルが率いる」

なにやってるんだろ、あたし。

「リクトルさまはあなたほどの将ではありません！」

「では、またバーラルの野の再現ができるはずだ」

なんだろう、何を言ってもどんどんと悪い方向へと向かっていく。次王がさせるのはアテナイスが捕らわれているからなのだが、こんなにも冷静さを失うとは思わない。

「あたしは、あたしは……」

「なんだ？」

頭が混乱してくる。

「あたしは、まだ死にたくありません！」

「ならば、おれ独りで行こう。選ぶのは勝手知ったる兵だ。少し話せば死地にだっていつでも飛び込む猛者が揃っている。ウルギリス、ルキウス、ニジェール」

指折り数える姿が狂っているように見えた。

名だたる将に私欲のために死ねと叫ぶのだ。

バーラルの時にはあった翼竜の連絡さえいらないといい、すでに使い古された奇襲作戦でエストとは段違いに精鋭の連合軍と戦おうと言うのだ。

あのくだらない女のために死ねと叫んでいるのだ。

ここまでこの次王を追い詰めている狂気の姿がかいまさえ見えず、手を尽くすたびに目の前の扉が閉ざされ、狂気に燃え上がっていくのが見えるような気がした。

だめ！ そっちはだめ！

それは一度イオが堕ちかけた狂気で、そこから救い上げてくれたのはあなただったのではないのですか？！ あなたがたった一つのすがるわらしべだったのに！ 燃え上がるようなイオの瞳を見て、次王が吐き捨てるようにいう。

あまりにも雑に、あまりにも愚かに。

「妻の無事を願って何が悪い！ どうしても止めたかったら、おれを刺せ！」

次王は背を向けるが、イオは血相を変えた。

その手があった……。

出陣できない程度に傷つければ馬鹿な出陣はできない。

震える手で剣の柄に手を当て、鳴り響く心音を聞く。あぶら汗だけが全身を伝い、呼吸さえも苦しくなる。一瞬よぎったのは、手が主君の血で濡れる気持ち悪さであり、それはどう贖罪しても晴れることのない罪だった。手が震えて、どうしようもなくなってくる。

それでも次王はイオがそれをするとはいま一つ思っていない。

次王にはイオがそこまでして止めたい理由が分からない。

(あなたは狂気にまみれていたあたしを捕まえて、すがるべき手を与え、あたしの人生をすばらしいものにしてくれた！ 妻とは言わなくても副官と言う贅沢すぎる場所であなたと一生を過ごしたいと思って何がいけないんですか！)

抜かれた剣は、驚くほどスムーズに次王の背に刺さっていった。手ごたえはなかった。ぽたぽたと流れ落ちる血を見ながら、イオはわれに帰って、つぶやく。

「ふかく、入ってしまった……」

「イオ、……なんで……？」

剣を床に放り、がっくりとひざを床につく。

「ちょうはつに、のってしまった……」

出会いからの時間が流れていき、怒鳴りあった日々が思い起こされる。

——イオ、何とかしろ！

——それは隙だらけだ、そんなのでは勝てない！

——もう少しお考えください、この案で乗り切れます！

——甘いと言っているのだ、これではリュディアは了承しない。

思えば、常にイオは次王とけんか腰で遣り合っていた。この王をぎゃふんと言わせてやりたいとつねに思い続け、何とか出し抜いてやりたいと思っていた。そんなイオを次王は侮辱に当たらないように挑発し、もっとかかって来いと、不遜ながらもおそらく家族として扱ってくれていた。リクトルと次王が殴りあったのがイオには印象的で、兄弟げんかというのをイオははじめてみた。兄貴との兄妹関係ではありえないことだったので。だけれども、次王の望んだものは違った。

自分を刺し殺す妹だった。

どんな無茶も投げる代わりに、どんな無茶も聞いてくれた。あたしなんて、たんなるちっぽけな子供なのに。

あたしが、やっていたことなんかあるか？ あたしは何をした？ 思い上がりもいい加減にしろ！ 資格なんて、あったのか？ この血を、流れた血をあたしの血であがなうことなんてできない。

王が描こうとしていた、未来の地図がおぼろげに浮かんできて、それを完全には再現できない自分に吐き気がする。この血は確実なみらいを描いていたのに。

ぼるにあを墮した、このおごりはなんだろう。

(ちがう！ 次王さまがやさしすぎるんだ！)

次王は確かに言った。

——お前のように老王の暴政に絶望したものに未来を見せたい。

と。

あたしじゃないか！ あたしに新しい世界を見せたかったんじゃないか！

それはいったいどんなものだったのだろうと見たくて渴望する自分がいて、夢を必死に語ろうとしていた青年の姿がまぶしく思いだせた。

征服したはずのエストにも公正な治世を敷き、パントにもしお前がおれが不公正だと思ったのであればいつでも殺せと言ったじゃないか！

涙がぼろぼろとこぼれた。

流れ始めるととまらなかった。

それは嗚咽として聖堂を満たし始め、散々な泣き声が響き渡った。

消え行くかもしれないのちを思った。

(あたし、あたし、このろくでなしとずっと一緒にいたかったんだ……。たまらなく幸せだったんだ……。このくそろくでなしの描く未来が見たかったんだ！)

そう思うと、嗚咽が心のそこから沸きあがってきた。

声が自分でも戸惑うほどに溢れて来た。それは悲嘆以外の何物でもなく、決して戻ることのない過去に対する悔恨だった。

恨めしかった。

なぜ、こんなにもあたしは愚かなのだろう。

その熱さは止められそうになかった。

アテナイスは聖堂までやってくると、子供のような泣き声に気づいた。

(だれ?　なんで泣いているの?)

もともとアイギスの母親のようなアテナイスである。その声に惹かれるように無人の聖堂をかけていき、礼拝堂で天井を見上げて号泣するイオを見つけて駆け寄った。すぐそばに血まみれで横たわっている夫を見て、アテナイスはぎよっとする。

「イオさん!　何が起こったの?!　お願い、話して!　泣いていては何も分からない!　泣いていても何も分からないの!」

イオの肩を揺さぶるが、埒が明かないと次王の脈を取る。

息がある。耳元に口を寄せる。

「正確なことはわかりませんが、まだ助かります。リクトルさまより傷が浅い」

小さくうなずくのに、血がつくのもかまわずにゆっくりと身体を支えると、次王はぐっと息をついた。

「何が起こったのです?　お話ください」

次王はゆっくりとまぶたをかすかに開いて、愛しの妻の姿をうっすらと見る。

「……、い、イオは悪くない……、イオは、おれを守ろうとしたんだ……」

それでアテナイスはすべてを悟る。

それから数秒かけてため息をつき、その胸に手を当てる。

「あなたは優しすぎるんです。わたしが遅すぎたから、イオさんをこんなことに」

「……まってくれ、おれが野ばらの姫、お前を信じられなかったから……、おれが、イオを追い込んでしまった……」

アテナイスは毅然としていった。

「助けを呼びます。アイギスの医療班はあなたを治癒するでしょう。ですが、呼びにいったらしばらくの間お会いできなくなります」

「どういう?」

「わたしは下手人を匿って逃亡します。イオさんの剣に血糊がついていますから、下手人は手負いです。それを匿っているのはわたしです」

アテナイスの言葉に、次王の口が「なぜ?」と動く。

「いまのボルニアから、イオさんを失うわけには行きません。エストとボルニアの友好関係の中枢にいて、どの世代とも意思疎通できるのはイオさんしかいません。だから少なくともエストはイオさんを失うわけには行かないのです」

その理路整然としたアテナイスの言葉に次王はがっくりとするが、アテナイスはその頬に手を置いてほのかな野ばらのように微笑む。

「この一生はつまらないなと思ってたときにあなたはやってきて、わたしをとりこにしたんですよ?　あなたはわたしの心をつかんで、いまこのエストとボルニアを夫婦で統治しているのです。これまでの日々は楽しかったし、これからの日々も楽しいものです。わたしたちは共犯です。だから必ず戻ってきます」

次王は傷口に障るのではないかと思うぐらいに嗚咽し、アテナイスはやさしく頭を抱えて、やわらかいキスをした。それから太陽のように笑って見せて、いたずらっぽく舌を出す。

「実はしばらく外の世界と言うものも見てみたかったです」

次王はきょとんとしていたが、とうとつにくくと笑い出した。

「それはいいな。好きなだけ見てくるといい。気が回らなかった。すまなかった」

「はい」

アテナイスは血まみれになりながら、花のような笑顔を次王に向けて、そっとその背を床につける。

「助けを呼んできます」

「ま、まで」

「はい」

次王はしばらく言いよどむ。

「もういちどだけキスを」

アテナイスはそれをゆっくりと交わす。

「野ばらの姫よ、帰ってきてくれ。生涯の妻はおまえだけだ」

「はい、では行きます。帰ってきます」

アテナイスは数年の別れを簡単に済まして、次王の未練を消した。

※

彼女が呼んだのはアイギスの精鋭医療班であって、それに近衛兵が付き従って迅速な応急処置が始まる。アテナイスが正しければ、リクトルよりはひどくない状況らしく、まず止血がされ、それから消毒がされる。この消毒がおなじみのウィスキーによる消毒で、激痛を伴う。

それで、鉄鎖の次王がうめき続けると言う珍しい光景が見れたのだが、それでも止血、消毒、縫合と手順が進むと、だいぶ落ち着く。

そこに遅れて兄貴がやってきて、血だらけの現場に息を呑むが、次王のそばによって耳打ちをした。

(イオ、ですか?)

(そ、そうだ。イオはおれの暴走を止めようとした)

医療班を払って、兄貴は考え込む。

兄貴にしてみれば、イオがわんわん泣き喚いている時点で、それが次王を救い損ねたことではなく、自分の犯した罪の重さに押し潰されているのは明白だった。

(野ばらの姫は助かるといっていた)

(なるほど、アテナイスさまが。で、どうなっているんです?)

(野ばらの姫が下手人を匿っていることになっている)

兄貴は恐ろしく思考が速い。

(アテナイスさまがすべての罪を負うと? それはアテナイスさまのご意思ですか?)

(そうだ)

兄貴は天井を見上げて息を吐いた。

(それは王妃さまが決断し、王が承認した。そうなりますね?)

(そうなる)

(では、リュディアは王妃さまを全面的に支援します。リュディアがエストにもボルニアにもとやかく言われることには一切ありません。王妃さまはリュディアが支援します)

(そうしてくれるか? 助かる)

(はい)

「なんだ、密談か? 極秘の話はキュディスにも通してもらえないと困る」

びっくりして顔を上げると、黒の兵団長が次王の様子を見に来ているところだった。次王はよろよろと身体を起こし、苦しげに聞いた。

「これを待っていたのだから? お前のやり方は汚い」

兵団長は薄く笑う。

「そうだ。話を聞きにきた。ボルニアはこの状況でもシドへの南進を決断するのか。このずいぶんなありさままでできるとは思っていない。ここから南進を決意すれば死だ。それでも約束を守るのか、それが知りた

かった」

兄貴はしばらく考えて、言葉を練る。

「イオの案はまったくの推測なのですが、普段ではありえない数の兵団の賛同を期待できるものだと推測しています。あなたは否決したといいましたが、それには3対4で否決された可能性も含まれます。黒の兵団が賛成し、さらに3軍が賛成している可能性があるのです」

黒の兵団長は苦笑した。

「そうだな、君は頭がよすぎるんだ。そんな君を警戒してはいけないのか？」

「話して、約してください。ボルニアも南進を約します」

兵団長は仕方なく話す。

「赤、黄、緑が賛同した」

たぶんその言葉を聴いて衝撃を受けたのは兄貴だけだ。北方最強と言われるキュディアスの虹翼騎竜兵団は強いほうから赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七翼に黒の一翼だ。3翼飛べばトランが滅びると謳われる虹翼騎竜兵団である。赤黄緑黒で征服できない国はない。シドはおろか帝国だって征服できるかもしれない。

「あなたはそれを隠していた。こんなプレゼンスがあったら何だってできる……」

「だから言いたくなかったのだ」

次王は兄貴の肩を借りて起き上がり、苦笑気味に言う。

「レトの次王の言い分はつねに正しかった。だが、約したとおり南進する。盟約どおりわれらを助けよ。キュディアスの助けが必要だ。いまこのときも、これからもずっと」

黒の兵団長は不気味に笑った。

「いつでも黒の兵団がその盟約を監視していると覚悟せよ。南進をやめた時が、キュディアスが盟約は反故にされたと判断する時だ」

「リクトルの元へ向かう。肩を貸せ」

次王は兄貴に支えられ、遠巻きにする医療班の不安げな視線を受けながらも、激痛に顔をゆがめ、遠慮がちな医療班が駆け寄って、痛み止めを打ちましようといって、手際よく注射する薬剤を準備する。

「大丈夫なのか？」

と聞く兄貴に、局所麻酔ですからとことなげに医師は言って数本の注射を準備した。本数が多いですが、痛む箇所ごとに痛みを止める必要があるからです、という次王はうんと頷いた。それから医師が注射を打ったたびに次王の表情のゆがみが和らいでいき、すべての注射を打ち終わると、次王はようやく一心地着いた。

「戦場でもこれを打ってくれると助かるのだが」

「局所とはいえ麻酔は危険です。痛みは身体の異常を告げるシグナルなのです。それがなくなると死ぬまで無理します、そうしたら待っているのは死です」

必死になって言う医師に次王はほっと笑い、ありがとうと肩をたたいた。

それでも次王は負傷者の姿から王の威厳を取り戻し、兄貴に支えられながら地下通路を大要塞へと向かった。

要塞にやってくると、第2軍の出陣を整えているリクトルの兵団に迎えられる。兄貴は真っ先にセスクに話しに行き、イオの案の全貌を話す。セスクの絶句は素通りして、宰相は第2軍がとるべき行動を指示していく。

「この作戦は、第2軍がどれだけ動じず、本気なれるかが肝だ」

セスクはイオがいないことに不安を覚えたが、兄貴がイオの代理であることは理解して、なぜこの場にイオ姉がいないのですかとはい聞かなかった。次王はリクトルと面会し、鎮痛剤で何とか保っている身体で、

端的に言った。

「キュディスがついた。第2軍の背後にはキュディスがいる。これは面倒だ。いつ裏切られるか分からない。だが、南進では同意している。われらが南進している限り裏切られない」

「それって」

リクトルの言いたいことは次王には痛いほど分かった。

「潰しあえてことだ、高みの見物をしていてやるからその間に。虹翼は常に高いところを飛んでいるしな」
次王はリクトルの表情を見る。

「ボルニア国内で潰しあうのと、シドを交えて潰しあうのはどっちがいい？」

「納得できませんが、シドが少なくとも身内ではないことは認めます」

「エストにはそうは思っていない勢力がいることが明らかになった」

リクトルは遠慮がちに言う。

「リュディアを交えないと」

「おれが聞いているのは、宰相ではなく副王だ。兵を指揮する王に迷いがあれば兵は従わない。もしその王が宰相の言うことがないと判断できないといたらどうだ？ 命を預けるか？」

リクトルはしばらく黙って、ため息をついた。

「兄者はいつも唐突なんだ。いつのまにぼくが第2軍の副王になってしまったんだ？」

「文句はイオに言え。出陣の準備はできているな。出陣と同時にキュディスが蜂起する」

セスクを通して詳細な手順は伝わっているはずで、リクトルは半信半疑ながら手元のメモ書きを見て頷いた。

※

「われわれは、この広大なジャングルを走破して、大スカイ河流域を制圧し、キュディス、トランという北方諸国二強の国家に出会って、ついに相容れることのできない国家が存在することを知った」

大要塞の巨大な城門の上、次王は朗々とした声で連合軍と、城門が開かれれば戦端を開くことになる第2軍の兵に告げる。

「それはキュディスでもトランでもないし、同胞である連合軍でもない。老王でさえもない。暴虐無人を誇った老王もキュディスにとっては取るに足らない無害な存在でしかなかった。キュディスのものたちは訴えてくる。あの暴虐を何とかできないものか。それほどにキュディスは困り果て、第2軍はその折衝に多大な時間を割いた」

次王は熱弁をふるう。

「果たしてこの北方諸国を戦乱の渦に巻き込んでいるのはどの国だろう！ これははっきりとしている。キュディスにはアドレルと言うその国家の衛星都市がある。そこでその都市の商人たちは、キュディスの諸部族に争いをもたらすために策略をめぐらし、武器を無料で配っている。すべては敗戦者を奴隷として本国に売るためだ。キュディスはボルニアと同じ、諸部族の連合国家である。それを互いに反目させ、敗者を奴隷として売る商売をしている。その魔の手がボルニアには入ってこないと確約できる者はいるか？」

次王の目配せで、黒の兵団長が壇上に立った。

「キュディスはこの国を滅ぼしたい」

あまりにも端的で、聴衆は絶句した。

次王はそれを受けて、大要塞の両側の兵に訴えた。

「その国はシド。北方大陸南岸のクローナ河の畔に繁栄する国家だ。ボルニアはシドを滅ぼす。キュディスはそれに協力する。それはだれもが奴隷として売られないためだ。連合軍もこれに従ってくれると信じている」

次王が合図をすると、第2軍が出陣を始めた。

そして続くように、空にキュディスの大軍勢が上空に姿を現し始める。圧倒的な大軍勢だった。

赤の装束、黄の装束、緑の装束。

赤の虹翼などほとんど伝説の存在と思われている精鋭中の精鋭だ。それが500騎も。

それにかすむのがおかしいほどの名声を誇る黄の兵団と緑の兵団がそれに並走し、黒の兵団が影のように背後を埋め尽くす。まるで、第2軍、連合軍を合わせた6000騎などいつでも滅ぼしてやるぞといういでたちで。それが協力するのは第2軍なのだ、

「南進を開始する！ 第2軍は進軍を開始せよ！」

次王の声に第2軍の誰もが従い、千々に乱れる連合軍の間を南進していく。リクトルを筆頭に、ヴァンダル族、ロゴス族の精鋭が続き、レト族もそれに従った。膨大な奔流を呆然と見つめる連合軍から声が上がった。

「第2軍に続く！ 連合軍はヴァンダルの次王に従え！」

ついに大南進が始まる。

※

「始まりましたね。いいんですか、ほんとにイオの案を呑んでしまって」

進軍する軍列を見ながらそばに寄ってきた兄貴の顔を見て、次王は疲れた表情を見せた。

「他に何があった。ボルニアは内輪争いばかりの劣等国だ。一つのことを示さなければ、また血みどろの争いに逆戻りする」

「おいおい、兄者、なんだあれは？」

ふと振り返るとレトの次王が二人の兄貴のそばまで歩いてくる。

「なにがだって？」

優男は上空を埋める翼竜の軍勢を指さす。

「あれさ、あれ。あれははりぼてだ。あの虹翼はどうせ戦いはしない約束なんだろう？ つまり一時的なこけおどしにはなってくれるが、それは南進を開始するための呼び水に使うだけって腹なんだろう？ そうじゃなきゃ協力しない」

次王はくっくとわらう。

「おまえはいつも正確だなあ、おまえの見立てはいつも正しかった、おれたちもそれを今回は思い知らされた」

「いつものけ者にしておいてこれだよ」

次王はおかしくなって心の底から笑いだした。

「本気で言っているんだ。頼りにしてるぜ、兄弟」

兄貴とレトの次王の肩に強引に腕を回し、次王は清々しく笑った。それにつられるように次王たちは笑いはじめ、やがて笑いの輪を周囲の近衛兵たちや騎士団たちが遠巻きに見守る。

「あ、あの？」

遠慮がちに次王に聞くに振り返る。レイだった。

「古城の包囲はいかがしましょう？ まだアテナイスさまを拉致した者たちは開城するつもりはありません」

次王はしばらくかんがえ、もっともだと頷く。

「野ばらの姫はあそこにはいない。おれを刺した下手人を匿って逃亡した。なぜ匿うのかは知らない。だがいつでも伝えてほしい。おれは野ばらの姫を得難い妻だと思っているし、帰って来れば罪などなかったものと許す。それはシド派の近衛兵も同様だ。罪を問うつもりはない。もしシド派の近衛兵が妻を探してく

れるというのであれば、ぜひ探してほしい。それには騎士団の中からもシドと戦いたくない者を加えてもいい。それらの者がこのアイギスを守るという任務を離れてもいいと思っている」

怒涛のように語られて、レイはしばらく考える。

「あ、えーと？」

「あの城は、いやアイギスは野ばらの姫の都市であり、エストは妻の国だ。それを取り戻したいと思うものを妨げるつもりはない。古城の近衛兵団と話をつけてきてくれるか？」

レイはしばらく迷ったのちに、わかりません、と呟いた。

「どうしてお許しになるのですか？」

「みな、一生懸命何とかしようとしただけだ。その理由に貴賤はないし、だれもの意思をおれは尊重する。レイ、おまえはこの騒ぎの中で誰か一人でも悪意を持って何かをしようと思ったやつがいたと思うか？ おれはそんなやつを見つけることができなかった」

やってくれるか、と聞くと深く一礼をして、レイはエステバンの方へ歩いていく。

ふたりは口論を始め、ため息をついてお互いに動き始める。

結局この次王が許したシド派を中心とする混成兵団は、アテナイスを捜索する「さまよえる騎士団」として数々の英雄譚に謳われることになる。ボルニアの鉄鎖躁竜法をマスターした精鋭騎竜兵団でありながら、主であるアテナイスを探してさまよっている。

そんな彼らが活躍するのも、また別の話だ。

※

次王はさまざまな雑務をこなして、夜も更けたころに疲労困憊で聖堂へとやってくる。

広大なまっくらな空間をランプの灯だけで歩き、ようやくと本日の寝床にたどり着く。

泣きはらして眠ってしまったイオのそばにどっかと座り、疲れたなあとつぶやく。もしかするともう少しで麻酔が解けるかもしれない。それでも、床に置いたランプのひかりにともされるイオの頬を眺め、その真っ赤な赤毛を撫でてやる。

羽織っていた毛皮をイオにかけてやり、自分はそのすぐそばの石の床に横になった。

「イオ、寂しかったか？ ごめんなあ」

明かりがあるだけでだいぶ暖かい。

「また、ふたりっきりになっちまったなあ……」

了